

平福御殿屋敷跡

佐用郡佐用町

平福御殿屋敷跡

—(二)千種川水系佐用川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



兵庫県文化財調査報告

第
463
冊

兵庫県教育委員会

平成26(2014)年3月

兵庫県教育委員会

佐用郡佐用町

平福御殿屋敷跡

—（二）千種川水系佐用川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 26（2014）年 3 月

兵庫県教育委員会

卷頭図版 1 遺跡遠景



東から



南から

卷頭図版 2 調査区全景



東から



南東から



真上から

巻頭図版 4 石垣



石垣・堀（南東から）



石垣1（南から）近景



備前焼花生・唐津焼鉢・志野焼向付



瓦集合写真

例　　言

- 1 本書は、佐用郡佐用町に所在する平福御殿屋敷跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査は、(二)千種川水系佐用川河川災害復旧助成事業に伴うもので、兵庫県光都土本事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。

3 調査の推移

(1) 発掘調査

確認調査（佐用川工区）

平成24年2月16日～平成24年3月1日

実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2011295）

平成24年7月27日～平成24年8月1日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター（遺跡調査番号2012013）

工事請負：株式会社古川組

空中写真測量（庵川工区）

平成23年2月23日

実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2010256）

本発掘調査（庵川工区）

平成23年10月26日・平成23年11月7日

実施機関：兵庫県立考古博物館（遺跡調査番号2011256）

本発掘調査（佐用川工区）

平成24年7月25日～平成24年12月6日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター（遺跡調査番号2012003）

工事請負：株式会社古川組

(2) 出土品整理作業

平成24年11月1日～平成25年3月31日

平成25年4月1日～平成26年3月28日

実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター

- 4 本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　山上雅弘・甲斐昭光・垣内拓郎・田村唯史が担当した。なお編集に際しては、栗山美奈・佐々木智子の協力を得た。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。
- 6 写真測量は、以下のとおり作業委託を行い実施した。
 - 庵川工区（航空測量）：株式会社オオバ
 - 佐用川工区（確認調査）：株式会社リオプラン
 - 佐用川工区（本発掘調査）：株式会社かんこう

- 7 遺物写真撮影は、平成24年度株式会社タニグチフォト・平成25年度株式会社クレアチオに委託して実施した。
- 8 調査成果の測量には、2級基準点S2 No.31・同32及びこれを既地点として新設した3級基準点を使用した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。なお、本書に用いた方位は座標北を示し、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 9 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、関係各機関をはじめ、以下の方々から御協力や御教示をいただいた。御芳名を記して深謝の意を表する。

東 信男（丸亀市教育委員会）・荒木幸治（赤穂市教育委員会）・井上 煙（平福地区延吉集落自治会長）・五十川伸也（橘女子大学）・大谷彰宏（平福地区庵集落自治会長）・北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所長）・工藤茂博（姫路市城郭研究所）・黒川恵準氏（平福文化と観光の会副会長）・児玉雅善（平福地区下町集落自治会長）・五名 勇（平福地区上町集落自治会長）・庄 元広（平福地区南新町集落自治会長）・友本良輝（平福地区北新町集落自治会長）・中村剛彰（佐用町教育委員会）・梶岡 実（岡山市教育委員会）・萩原英雄（平福地区中町集落自治会長）・原田 昇（平福文化と観光の会会長）・藤木 透（佐用町教育委員会）・細田博隆（鳥取市教育委員会）・堀田 浩之（兵庫県立歴史博物館）・森岡秀人（芦屋市教育委員会）・八木雅夫（国立明石工業高等専門学校建築学科教授）・高田徹・多田暢久・堀口建式・山下晃智・宮田逸民・依藤保（城郭談話会）・木内内則（城郭研究家）

以上敬称略・五十音順・括弧内は当時の所属

凡　　例

- 1 遺物には通し番号を付けている。ただし木製品、石製品、金属製品、鋳型及び瓦には、その頭にそれぞれLW、S、M、C、Tをつけて、土器と区別している。
- 2 土器の実測図は、種別ごとに以下のように断面の表現を区別している。
土師器・弥生土器：白抜き / 須恵器・陶器：黒塗り / 磁器：濃い網掛け /
瓦器・瓦：薄い網掛け
- 3 遺構の名称は、その種別を問わず、地区（1区・2A区・2B区・3区）ごとに通し番号を付し、その頭に遺構の種類を表記した。ただし、掘立柱建物は、これと別に地区ごとに通し番号をつけた。
- 4 土層等の色調については、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』1992年版を使用した。
- 5 土層注記の際、便宜的に以下のように略記した箇所もある。
V C S = 極粗粗砂、C S = 粗粒砂、M S = 中粒砂、F S = 細粒砂、V F S = 極細粒砂、B = ブロック

引用文献

本書では各項において「利神城古図」を引用するが、これは平福の庄屋田住家に伝来した古図である。製作は古図には慶安年間と記されるが実際には後代のものといわれている。

本文目次

第1章 遺跡の位置	(田村唯史) 1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 遺跡の歴史的環境	1
第2章 調査の経過	(甲斐昭光・山上雅弘) 5
第1節 調査に至る経緯	5
(1) 佐用川工区の調査	6
(2) 鷹川工区の調査	8
第2節 調査の体制	8
第3章 本発掘調査の結果	11
第1節 調査区の概観	(垣内拓郎) 11
(1) 調査区の位置	11
(2) 基本層序	12
第2節 調査の成果	16
(1) 1区	(山上) 16
(2) 2A区	(山上) 16
(3) 2B区	(山上) 26
(4) 3区	(垣内) 27
第4章 出土遺物	31
第1節 土器・陶磁器	(山上) 31
第2節 その他の遺物	(山上・甲斐) 36
第3節 瓦	(垣内) 40
第5章 鷹川・佐用川左岸の護岸石垣の調査	57
第1節 調査経緯、調査方法、調査位置	(垣内) 57
第2節 鷹川地区・佐用川地区護岸石垣の調査	57
(1) 鷹川地区的調査	(長濱誠司) 57
(2) 佐用川地区的調査	(多賀茂治) 58
第3節 小結—護岸石垣の時期的位置づけ—	(垣内) 59
第6章 まとめ	(山上) 61
付 章 平福御殿屋敷跡における樹種同定	68

卷頭図版目次

卷頭図版1 遺跡遠景

卷頭図版2 調査区全

卷頭図版3 全景

卷頭図版4 石垣

卷頭図版5 出土遺物

卷頭図版6 出土遺物

挿図目次

第1図 平福御殿屋敷跡位置図

第2図 周辺の遺跡

第3図 調査地位置図

第4図 確認調査 トレント位置図

第5図 調査区割図

第6図 調査前の現況

第7図 現地説明会

第8図 瓦取り上げ

第9図 石垣・堀清掃作業（南から）

第10図 重機掘削

第11図 人力掘削風景

第12図 石垣解体風景

第13図 土木勉強会

第14図 調査地と利神城跡の位置

第15図 調査区位置図

第16図 平福御殿屋敷跡の土壘堆積プロセス模式図

第17図 石垣石材番号

第18図 矢穴石材（1）

第19図 矢穴石材（2）

第20図 SK 160・161 平・断面図

第21図 軒丸瓦型式分類図

第22図 軒平瓦型式分類図

第23図 瓦の各部位名称

第24図 庫川地区・佐用川地区護岸石垣調査区位置図

第25図 利神城跡と平福御殿屋敷

第26図 佐用川から利神城を望む（西から）

第27図 利神城天守郭石垣南面（南から）

第28図 利神城山頂曲輪群

第29図 利神城山頂隅角部石垣

第30図 うわがみ門（西から）

第31図 農道

第32図 平福陣屋（東から）

第33図 別所構土塁（西から）

第34図 護岸石垣隅角部

第35図 石垣1の石材

第36図 護岸石垣（石垣3背面）

第37図 佐用川に並んだ護岸石垣の石材

第38図 護岸石垣に残る矢穴

第39図 護岸石垣の矢穴細部

第40図 護岸石垣の修景工事

第41図 平福駅に設置された石垣石材（石1-4・石3-2）

第42図 西山の石垣（東から）

第43図 西山の石切り場（東から）

第44図 西山に残る矢穴（南東から）

第45図 天満神社（東から）

第46図 平福御殿屋敷跡の木材 I

第47図 平福御殿屋敷跡の木材 II

第48図 平福御殿屋敷跡の木材 III

第49図 平福御殿屋敷跡の木材 IV

第50図 平福御殿屋敷跡の木材 V

表目次

第1表 地名表一覧	3
第2表 基本順序一覧	14
第3表 平福御殿屋敷跡石垣石材寸法表	21
第4表 木製品観察表	38
第5表 平福御殿屋敷跡出土軒瓦の地点別出土点数表	49
第6表 粘土板切離紙別重量計画表	51
第7表 平福御殿屋敷跡出土軒丸瓦型式分類表	54
第8表 平福御殿屋敷跡出土軒平瓦型式分類表	54
第9表 平福御殿屋敷跡における樹種同定結果	69
第10表 遺物観察表1	77
第11表 遺物観察表2	78
第12表 遺物観察表3	79

第13表 遺物観察表4	80	第18表 平瓦観察表	88
第14表 遺物観察表5	81	第19表 面戸瓦観察表	88
第15表 軒丸瓦観察表	82	第20表 その他の道具瓦観察表	90
第16表 軒平瓦観察表	84	第21表 鬼瓦観察表	90
第17表 丸瓦観察表	88	第22表 利神城跡表採瓦観察表	90

図版目次

図版1 調査区全景		図版32 2B区 a 区画 遺構平・断面図	
図版2 調査区割図		図版33 2B区 a・c・d 区画 遺構平・断面図	
図版3 調査区基本層序模式図		図版34 3区 a 区画 平面図	
図版4 1区・2区東側土層断面図(1)〈A～D間〉		図版35 3区 b・c 区画 平面図	
図版5 2区東側土層断面図(2)〈E～G間〉		図版36 3区 d・e・f 区画 平面図	
図版6 2区東側土層断面図(3)〈H～J間〉		図版37 3区 a・b 区画 遺構平・断面図	
図版7 2区東側土層断面図(4)〈J～L間〉		図版38 3区 a・d 区画 遺構平・断面図	
図版8 3区東側土層断面図(1)〈M～O間〉		図版39 3区 a・b 区画 遺構平・断面図	
図版9 3区東側土層断面図(2)〈O～Q間〉		図版40 3区 c・f 区画 遺構平・断面図	
図版10 1・2A区 a 区画 平面図		図版41 庵用地区護岸石垣 平面・立面・断面図	
図版11 2A区 a 区画 遺構平・断面図		図版42 佐用川地区護岸石垣 立面・断面図	
図版12 2A区 a・c・e 区画 遺構平・断面図		図版43 出土土器(1)	
図版13 2A区 a 区画 遺構平・断面図		図版44 出土土器(2)	
図版14 2A区 a 区画 遺構平・断面図		図版45 出土土器(3)	
図版15 2A区 c・d・e 区画 平面図		図版46 出土土器(4)	
図版16 2A区 c 区画 遺構平・断面図		図版47 出土土器(5)	
図版17 2A区 e・f 区画 平面図		図版48 出土土器(6)	
図版18 2A区 f 区画 平面図		図版49 出土土器(7)	
図版19 2A区 g・h 区画 遺構平・断面図		図版50 出土石製品	
図版20 2A区 g・h 区画 遺構平面図		図版51 出土金属製品(1)	
図版21 2A区 h 区画 石垣1平・立面図		図版52 出土金属製品(2)	
図版22 2A区 h 区画 石垣2平・立面図		図版53 出土金属製品(3)	
図版23 2A区 h 区画 石垣3平・立面図		図版54 出土鋳型(1)	
図版24 2A区 h 区画 石垣1断面図		図版55 出土鋳型(2)	
図版25 2A区 h 区画 石垣2断面図		図版56 出土鋳型(3)	
図版26 2A区 h 区画 石垣3断面図		図版57 出土鋳型(4)	
図版27 2A区 g 区画 土層断面図		図版58 出土木製品(1)	
図版28 2A区 g 区画 土層断面図		図版59 出土木製品(2)	
図版29 2B区 a・b 区画 平面図		図版60 出土軒丸瓦 NM1(1)	
図版30 2B区 a 区画 遺構平面図		図版61 出土軒丸瓦 NM1(2)	
図版31 2B区 c・d 区画 平面図		図版62 出土軒丸瓦 NM2(1)	

- | | |
|---------------------------------------|-------------------------------|
| 図版 63 出土軒丸瓦 NM2(2)・NM3(1) | 図版 82 出土軒平瓦 NH2(2)・NH3・NH4(1) |
| 図版 64 出土軒丸瓦 NM3(2) | 図版 83 出土軒平瓦 NH4(2)・NH5・不明軒平瓦 |
| 図版 65 出土軒丸瓦 NM3(3) | 図版 84 出土丸瓦(1) |
| 図版 66 出土軒丸瓦 NM3(4) | 図版 85 出土丸瓦(2) |
| 図版 67 出土軒丸瓦 NM3(5) | 図版 86 出土丸瓦(3) |
| 図版 68 出土軒丸瓦 NM4a・4b | 図版 87 出土丸瓦(4)・平瓦(1) |
| 図版 69 出土軒丸瓦 NM5(1) | 図版 88 出土平瓦(2) |
| 図版 70 出土軒丸瓦 NM5(2)・NM6 | 図版 89 出土平瓦(3) |
| 図版 71 出土軒丸瓦 NM7・NM8・NM9・NM10(1) | 図版 90 出土平瓦(4) |
| 図版 72 出土軒丸瓦 NM10(2)・NM11(1) | 図版 91 出土平瓦(5) |
| 図版 73 出土軒丸瓦 NM11(2)・NM12(1) | 図版 92 出土平瓦(6)・出土刺印平瓦 |
| 図版 74 出土軒丸瓦 NM12(2) | 図版 93 出土面戸瓦(1) |
| 図版 75 出土軒丸瓦 NM12(3)・NM13・NM14 | 図版 94 出土面戸瓦(2) |
| 図版 76 出土軒丸瓦 NH1A(1) | 図版 95 出土面戸瓦(3)・熨斗瓦・隅軒丸瓦・鳥糞 |
| 図版 77 出土軒丸瓦 NH1A(2)・NH1B | 図版 96 出土鬼瓦(1) |
| 図版 78 出土軒丸瓦 NH1C(1) | 図版 97 出土鬼瓦(2) |
| 図版 79 出土軒平瓦 NH1C(2)・NH1D・NH1E・NH1Z(1) | 図版 98 出土鬼瓦(3) |
| 図版 80 出土軒平瓦 NH1Z(2) | 図版 99 利神城跡を探る |
| 図版 81 出土軒平瓦 NH1Z(3)・NH2(1) | |

写真図版目次

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 写真図版 1 遺跡遠景 | 写真図版 18 2A区g・h区画 石垣背面 |
| 写真図版 2 遺跡全景 | 写真図版 19 2A区h区画 石垣1 |
| 写真図版 3 全景 | 写真図版 20 2A区h区画 石垣1 |
| 写真図版 4 2A区 全景 | 写真図版 21 2A区h区画 石垣1 |
| 写真図版 5 2B区・3区 全景 | 写真図版 22 2A区h区画 石垣2 |
| 写真図版 6 2A区 土層断面 | 写真図版 23 2A区h区画 石垣2 |
| 写真図版 7 2A区 土層断面 | 写真図版 24 2A区h区画 石垣3 |
| 写真図版 8 2B区・3区 土層断面 | 写真図版 25 2A区h区画 石垣3 |
| 写真図版 9 1区・2A区a区画 | 写真図版 26 2A区h区画 石垣背面 |
| 写真図版 10 2A区a区画 | 写真図版 27 2A区h区画 石垣背面・断面 |
| 写真図版 11 2A区a区画 | 写真図版 28 2B区 全景・遺構 |
| 写真図版 12 2A区a区画 SD 68 | 写真図版 29 2B区b～d区画 全景・遺構 |
| 写真図版 13 2A区a区画 SD 68 | 写真図版 30 2B区d区画 全景 |
| 写真図版 14 2A区c区画 SD 69・SK 74 | 写真図版 31 2B区d区画 |
| 写真図版 15 2A区d～f区画 SD 79・斬状遺構 | 写真図版 32 2B区d区画 柱穴断面 |
| 写真図版 16 2A区 f区画 SD 79 | 写真図版 33 2B区d区画 柱穴断面 |
| 写真図版 17 2A区h区画 石垣1～3上面 | 写真図版 34 2B区d区画 柱穴断面 |

写真図版 35 3区全景	写真図版 67 出土木製品（1）
写真図版 36 3区	写真図版 68 出土木製品（2）
写真図版 37 3区 遺構	写真図版 69 出土軒丸瓦（1）
写真図版 38 3区 柱穴断面	写真図版 70 出土軒丸瓦（2）
写真図版 39 3区 d～f区画 遺構	写真図版 71 出土軒丸瓦（3）
写真図版 40 塚川 護岸石垣・護岸石垣	写真図版 72 出土軒丸瓦（4）
写真図版 41 塚川 護岸石垣	写真図版 73 出土軒丸瓦（5）
写真図版 42 佐用川 護岸石垣（1）	写真図版 74 出土軒丸瓦（6）
写真図版 43 佐用川 護岸石垣（2）	写真図版 75 出土軒丸瓦（7）
写真図版 44 佐用川 護岸石垣断ち割り	写真図版 76 出土軒丸瓦（8）
写真図版 45 作業風景	写真図版 77 出土軒丸瓦（9）
写真図版 46 出土土器（1）	写真図版 78 出土軒丸瓦（10）
写真図版 47 出土土器（2）	写真図版 79 出土軒丸瓦（11）
写真図版 48 出土土器（3）	写真図版 80 出土軒丸瓦（12）
写真図版 49 出土土器（4）	写真図版 81 出土軒平瓦（1）
写真図版 50 出土土器（5）	写真図版 82 出土軒平瓦（2）
写真図版 51 出土土器（6）	写真図版 83 出土軒平瓦（3）
写真図版 52 出土土器（7）	写真図版 84 出土軒平瓦（4）
写真図版 53 出土土器（8）	写真図版 85 出土軒平瓦（5）
写真図版 54 出土土器（9）	写真図版 86 出土軒平瓦（6）
写真図版 55 出土土器（10）	写真図版 87 出土軒平瓦（7）
写真図版 56 出土土器（11）	写真図版 88 出土軒平瓦（8）・丸瓦（1）
写真図版 57 出土土器（12）	写真図版 89 出土丸瓦（2）
写真図版 58 出土土器（13）	写真図版 90 出土丸瓦（3）
写真図版 59 出土土器（14）	写真図版 91 出土平瓦（1）
写真図版 60 出土土器（15）	写真図版 92 出土平瓦（2）
写真図版 61 出土土器（16）・石製品	写真図版 93 出土平瓦（3）・刻印平瓦
写真図版 62 出土金属製品（1）	写真図版 94 出土面戸瓦（1）
写真図版 63 出土金属製品（2）・鉢型（1）	写真図版 95 出土面戸瓦（2）・熨斗瓦・隅軒丸瓦
写真図版 64 出土鉢型（2）	写真図版 96 出土鳥食・鬼瓦（1）
写真図版 65 出土鉢型（3）	写真図版 97 出土鬼瓦（2）
写真図版 66 出土鉢型（4）	写真図版 98 出土鬼瓦（3）・利神城跡表採瓦

付属 CD 内容

＜本発掘調査デジタル図版＞（図版 21・22・23 ※本書図版目次と同一）

＜佐用川地区護岸石垣デジタル図版＞（図版 100～109）

＜塚川地区・佐用川地区護岸石垣デジタルオルソ写真＞（写真図版 99～118）



第1図 平福御殿屋敷跡位置図

第1章 遺跡の位置

第1節 遺跡の位置

佐用町の地理と地形

平福御殿屋敷跡の所在する佐用郡佐用町は兵庫県の南西部に位置し西は岡山県備前市、美作市に隣接している。平成17年に佐用町、上月町、南光町、三日月町が合併し現在の佐用町となったが、平福御殿屋敷跡は旧佐用町域に位置している。

旧佐用町は佐用川中流域に位置し、今回の調査は佐用川右岸の南北530mについて実施した。南部の佐用川中流域では佐用盆地が広がり、北部では横坂より北側に延びる佐用川流域およびその支流に沿う谷筋が伸びている。佐用町は美作道、因幡道が通る佐用盆地を中心にして、川筋沿って延びる谷筋を伝う交通路が四方八方に延び、古くから交通の要衝である。ルートの移動はあるものの美作道、因幡道は官道として古代まで遡るものである。近世には佐用を分岐とし美作、出雲方面へは出雲街道、鳥取方面へは因幡街道が通る。現代においては佐用町を東西に通る中国縦貫自動車道の佐用ICが設けられ、ここから鳥取方面に北上する国道373号線と竜野方面に向かう国道179号線につながっている。またその東の佐用JCから鳥取自動車道が開通しており鳥取方面につながっている。

平福御殿屋敷跡は佐用盆地の北側に延びる谷筋の佐用盆地の北側約3kmに位置している。因幡街道の宿場町として栄えた平福宿の東側に位置し、背後（西側）には利神城跡が頂上に位置する利神山がある。調査区の北側では庵川と佐用川合流し、盆地にむかって流れれる。佐用盆地の北側から平福御殿屋敷跡（1）を経由し、佐用川沿いの延吉遺跡の北側までは幅500m以下の平地がほぼ連続して延び、以北は狭窄部が多くなり、平野が断続的になるとともに幅が減少していく。また庵川沿いも蛇行する谷筋に沿って川筋が伸び平野が断続的になりながら幅も減少する。佐用郡では丘陵、段丘といった地形が存在しているが低地が少なく人間は主に比高の大きな段丘の平坦面を利用して水田や畑を営んできた。

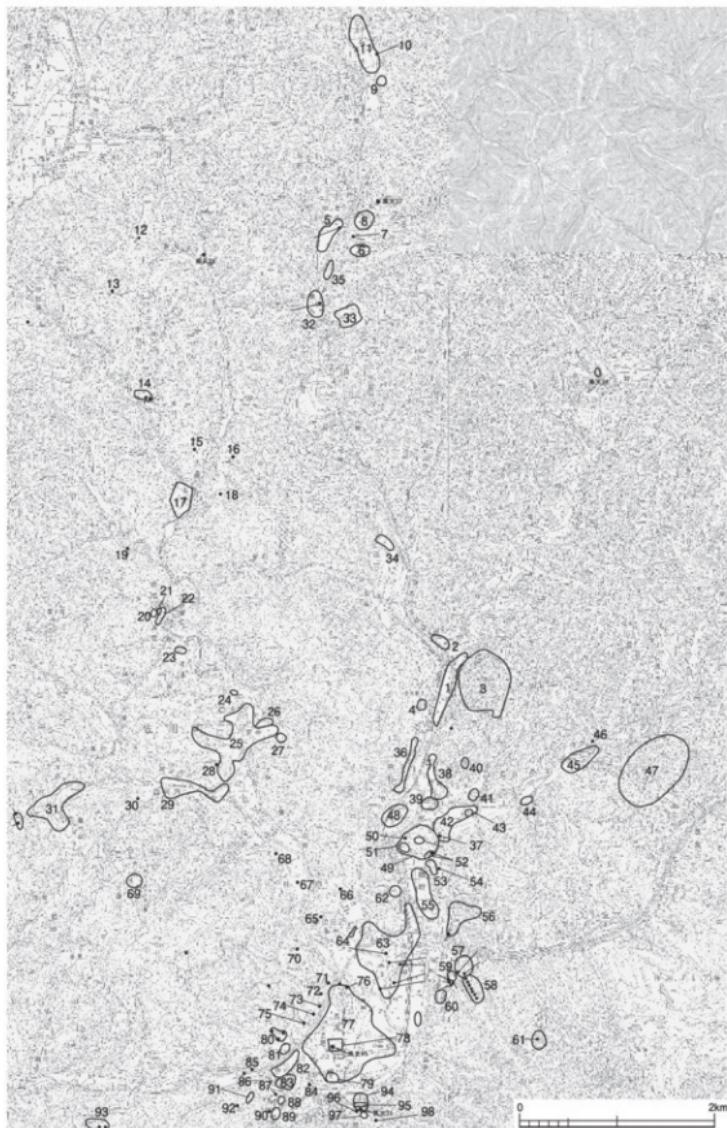
第2節 遺跡の歴史的環境

平福御殿屋敷跡は慶長5～10年（1600～1605）にかけて築城された利神城の山麓居館であると考えられる。利神城は播磨國主となった池田輝政の支城として、甥の池田由之が築いた。麓の御殿屋敷は南北を石垣で区切り、西側は佐用川の河川を堀に見立て、護岸に石垣を築いて防御したといわれる。利神城は寛永8年（1631）頃に廃城になったといわれ、御殿屋敷はその後から畠などの開墾が始まったとみられる。

旧佐用町の遺跡は南部の佐用盆地の平野部とその周囲において比較的多くの遺跡が分布している。また佐用盆地は美作道と因幡街道が通じる交通の要所である。美作道に隣接する本位田遺跡（63）や長尾・沖田遺跡（77）が佐用郡の中心地であり、旧石器時代から歴史時代にわたっている。佐用郡内には沖積地が非常に少なく、遺跡は丘陵山麓・台地・自然堤防上の高地に立地している。

旧石器時代

旧佐用町域では旧石器時代の明瞭な遺跡は知られていない。長尾・沖田遺跡（77）で後期旧石器時代の資料である黒曜石製のナイフ形石器が採集され、本位田遺跡（63）ではサスカイト製の削器採集されている。旧南光町域の漆野段遺跡ではチャート製の石器、旧三日月町の植木遺跡ではナイフ形石器が採集されて



第2図 周辺の道路

第1表 地名表一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	平福御殿屋敷跡	26	仁方神庭社製鉄遺跡	51	堀石遺跡	76	長尾古墳1号墳
2	平福遺跡	27	仁方安井製鉄遺跡	52	横坂古墳群	77	長尾・沖田遺跡
3	利神城跡	28	向山古墳	53	神田遺跡	78	長心庵寺
4	平福陣屋跡	29	西河内遺跡	54	横坂経塚	79	佐用盆地の段跡
5	中の原遺跡	30	西河内古墳	55	横板遺跡	80	水谷製鉄遺跡
6	旧大船寺跡	31	大木谷遺跡	56	高山城跡・西ノ土居墳墓	81	長高山城跡
7	トサラエ製鉄遺跡	32	中土居小野遺跡	57	平の上古墳群	82	西山遺跡
8	大船寺跡	33	中土居三山遺跡	58	円応寺古墳群	83	西山泰師道跡
9	構の段遺跡	34	延吉遺跡	59	円応寺山城跡	84	山王タラエ製鉄遺跡
10	上石井古墳	35	大獅子遺跡	60	円応寺跡	85	吉満古墳
11	上石井遺跡	36	井谷遺跡	61	普谷古墳	86	吉見土古墳
12	釜坂古墳	37	夏村製鉄遺跡	62	水谷古墳群	87	たんぐ谷製鉄遺跡
13	小中山製鉄遺跡	38	中尾遺跡	63	本位田遺跡・本位田古墳群	88	大成古墳群1号墳
14	末包古墳群	39	別所構跡	64	池の堤製鉄遺跡	89	吉福遺跡
15	上野殿古墳	40	口長谷製鉄B遺跡	65	塙田古墳	90	上吉福製鉄遺跡
16	成友古墳	41	長谷陣屋跡	66	高田古墳	91	かんだに製鉄遺跡
17	大島遺跡	42	口長谷遺跡	67	本村遺跡	92	吉福古墳
18	大島古墳	43	口長谷製鉄A遺跡	68	福沢古墳	93	京谷古墳群
19	平谷古墳	44	口長谷岡田遺跡	69	治田屋敷遺跡	94	万願寺跡
20	豊福構跡	45	横尾遺跡	70	玉落台古墳	95	吉用陣屋跡
21	豊福遺跡	46	穴の尾古墳	71	玉落古墳	96	上町製鉄遺跡
22	豊福古墳群A	47	長谷寺旧伽藍	72	長尾森谷製鉄遺跡	97	山の元遺跡
23	豊福古墳群B	48	宗行遺跡	73	長尾岡の平遺跡	98	佐用坂製鉄遺跡
24	尾崎遺跡	49	横坂丘陵遺跡	74	長尾古墳2号墳	99	鍛冶屋敷遺跡
25	仁方遺跡	50	堀石古墳	75	福地製鉄遺跡		

いるが遺構等にもなったものではない。

縄文時代

本位田遺跡(63)では縄文時代早期の高山寺式の土器が出土している。縄文時代の遺跡が急増する時期は縄文時代後期であり、本位田遺跡、長尾・沖田遺跡(77)、中の原遺跡で竪穴式住居が多く検出され、延吉遺跡では埋設土器、配石土坑、土坑等の埋葬にかかる遺構と遺物が検出されている。そのほか本位田遺跡(63)では後・晩期の石製耳飾、勾玉、平福遺跡(2)では石棒が出土している。

弥生時代

縄文時代晩期から遺跡の数が減少傾向となり、弥生時代中期前半まで続く。弥生時代前期では本位田遺跡(63)、上石井遺跡(11)で土器が出土している。口長谷遺跡(42)、横坂丘陵遺跡(49)で中期後半の住居跡が検出されている。横坂丘陵遺跡(49)は佐用盆地の北側に位置し、遺跡からは中期後半から終末期にかけての住居跡約20棟や段状遺構などが検出されている。弥生時代の後期になると遺跡の数は飛躍的に増大する。延吉遺跡(34)、別所構跡(39)、横坂丘陵遺跡(49)、本位田遺跡(63)、福地製鉄遺跡(75)、長尾・沖田遺跡(77)、仁方遺跡(25)などで住居跡が検出されている。また本位田遺跡(63)、口長谷遺跡(42)では中期後半の木棺墓が検出され、以後、本位田遺跡(63)や長尾・沖田遺跡(77)では古墳時代初頭まで副葬品をもつものは少ないものの木棺墓が数多く確認されている。西ノ土居墳墓(56)や横坂丘陵遺跡(49)では丘陵上に墳墓が造られている。西ノ土居墳墓(56)では後期の竪穴式石室2基、小墓坑(墓壙)1基が検出され、竪穴式石室からは銅鏡、刀子状鉄製品、管玉が出土している。横坂丘陵遺跡(49)では丘陵頂部で石棺を埋葬主体とする墳丘墓が検出されている。

古墳時代

古墳時代になると集落の様相は不明瞭になる。本位田遺跡(63)と延吉遺跡(34)で古墳時代前期の竪穴

住居跡が検出されているのみで全体として判然としない。墳墓については佐用盆地周辺の丘陵部に多く分布し、また江川流域などに点々とその存在が知られているが内容の明らかなものは少ない。長尾・沖田遺跡(77)では弥生時代後期から引き続き木棺墓が造られている。また吉福遺跡(89)では古墳時代前期のものとみられる石棺墓と木棺墓が13基検出されている。古墳時代後期には円応寺古墳群(58)、横坂古墳群(52)、本位田古墳群(63)等がある。横坂1号墳は佐用郡内唯一の前方後円墳の可能性があり、円応寺5号墳で珠文鏡、本位田2号墳で單鳳式環頭大刀、高畠2号墳で双龍式環頭大刀が出土している。

本位田古墳群内からは龍鳳環頭大刀柄頭が出土している。本位田椎現谷B遺跡や本位田高田遺跡では円墳、横坂丘陵遺跡では横穴式石室2基が検出された。

古代

佐用郡佐用町は旧国名では播磨国にあたり、その西北部にあたる。長尾・沖田遺跡八反地区(63)では大型の掘立柱建物跡や区画溝などが検出され、都衙の関連施設と考えられている。その北側には長尾庵寺が佐用町等により継続的に調査されている。本位田遺跡(63)や長尾・沖田遺跡(77)内の各所で掘立柱建物跡などが検出され、他にも横坂遺跡(55)、仁方遺跡(25)、中土居三山遺跡(33)、大獅子遺跡(35)、中の原遺跡(5)等で掘立柱建物跡などが検出されている。また『播磨國風土記』の產鉄記事でもみられるように佐用郡においても製鉄遺構を含む遺跡が数多く存在している。本位田遺跡(63)では製鉄遺構が検出され、佐用盆地西側の大撫山周辺に位置する水谷製鉄遺跡(80)、盆地北側の横坂丘陵遺跡(49)、佐用郡北端の日名倉山南麓の澗谷製鉄遺跡では製鉄が検出されている。さらに本位田遺跡(63)内には長尾庵寺に用いられた瓦の生産窯である可能性が指摘されているものもある。墳墓については横坂丘陵遺跡(49)では火葬墓群が検出されている。

中世・近世

鎌倉時代以降、佐用郡の多くの部分は九条家領佐用莊に含まれ、南北朝期以降にじゃ赤松氏の支配下に入ったようである。古代から引き続き本位田遺跡(63)や、長尾・沖田遺跡(77)では各所に掘立柱建物跡などが検出され、横坂遺跡(55)、仁方遺跡(25)、中土居三山遺跡(33)や中の原遺跡(5)、延吉遺跡(34)では室町時代の遺物が出土している。播磨国守護の赤松氏に属する別所氏の居館として考えられる別所構跡(39)では15世紀後半から16世紀にかけての土塁・堀・掘立柱建物跡が検出されている。利神城跡(3)は赤松氏から北方の防備を命じられた別所教範が貞和5年(1349)佐用郡に入り、比良橋利神山に砦を築き、口長谷に館を構えて移り住んだといわれるが、確実な記録は見当たらない。天正年間の佐用郡では上月合戦によって織田方と毛利方が攻防を繰り広げた。このときは佐用町福原の福原城(佐用城)や上月町の上月城が攻防の舞台となっている。その後、関ヶ原の合戦によって播磨国主となった池田輝政は播磨国内の三木城、明石(船上)城、高砂城、龍野城、利神城、赤穂城の6か所に支城を築いて領国を經營した。利神城は甥の池田由之が城主となるが平福御殿屋敷跡(1)はその際の居館跡であると考えられる。

参考文献

- 佐用町教育委員会 2004 『平成6年度埋蔵文化財調査年報』
- 佐用町教育委員会 2006 『平成4年度埋蔵文化財調査年報』
- 佐用町教育委員会 2007 『平成3年度埋蔵文化財調査年報』
- 兵庫県教育委員会 1991 『長尾・沖田遺跡(1)』
- 兵庫県教育委員会 1998 『八反田遺跡』
- 兵庫県教育委員会 2009 『上三河遺跡』
- 兵庫県教育委員会 2010 『延吉遺跡』

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成21年8月9日21時に熱帯低気圧から急激に発達して台風9号が発生した。この台風は兵庫県に上陸後に台風となったが、それ以前の7時ころから記録的な豪雨を伴って兵庫県南西部を襲っていた。結果的に10日にかけて、兵庫県播磨南西部から但馬南部にかけて記録的な豪雨をもたらし、この地域に未曾有の被害をもたらした。光都土木事務所管内では、千種川本支流の越水・破堤により、死者18名、行方不明者2名、家屋の全壊166戸等の被害が発生した。前後のマスコミ報道を見ると、台風が当初低気圧であったことも影響して、11日前後までは低調に推移するが、被害の全貌が知られるようになった12日から活発になる。情報発信が迅速でないことが、いかに地域の被害が甚大であったかを教えてくれる。

同年12月、兵庫県災害復興室は「平成21年台風第9号災害の復旧・復興計画」を策定し、被害状況、応急対策状況、復旧・復興の内容と工程を示した。これに基づき、同年度から河川災害復旧助成事業が開始された。今回の発掘調査にかかる庵川は延長7,000m、佐用川は延長17,910mにわたる築堤・護岸工等が計画された。なお、災害復旧助成事業で実施する当地域の護岸等の外観・構造については、地域住民の参画と有識者の指導のもとに周辺景観との調和を検討することになっている。

兵庫県教育委員会では、この計画に伴って佐用川・庵川両工区における埋蔵文化財の分布調査を平成22年3月および6月に行ったところ、周知の埋蔵文化財包蔵地である平福御殿屋敷跡等が含まれることが判明した。このため、兵庫県光都土木事務所からの依頼により、庵川工区では記録作成のための測量調査等を行い、佐用川工区では遺跡の有無等の詳細を確認するための確認調査を実施することとなった。



第3図 調査位置図

(1) 佐用川工区の調査

確認調査(第4図参照)

確認調査は平成 23 年度と平成 24 年度の 2 回実施している。平成 23 年度は佐用川工区の庵川との合流点から天神橋の手前までの間で 2 m × 10 m のトレンチを 11 本設定した。

この結果、平福御殿屋敷の郭内及び城下には広く当該期の埋蔵文化財が存在することが確認されている。

平成 24 年度の確認調査は天神橋の北側から城下の南端までである。1 m × 10 m の 4 本のトレンチを設定した。この調査は平成 24 年度の本発掘調査と同一事業で実施したもので、調査の結果を受けて、埋蔵文化財が確認された場合は本発掘調査の工期内で対応することとされていた。

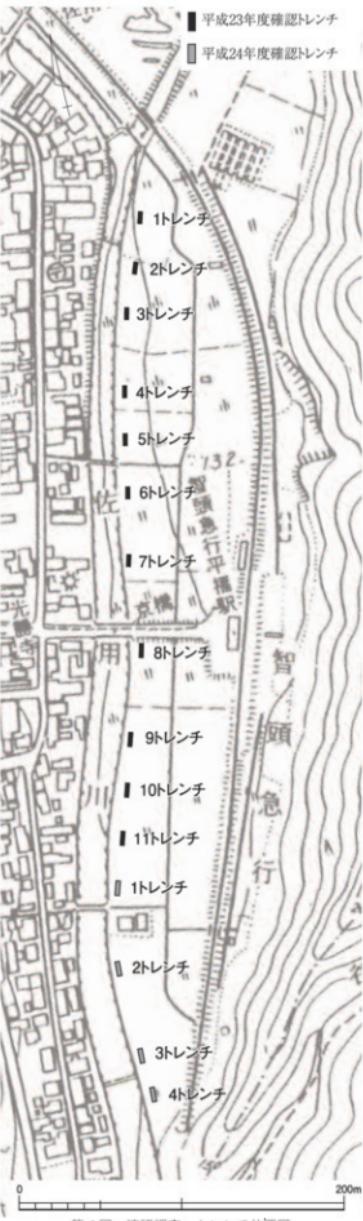
特に城下の南端には「利神城古図」に「えんしょう」と記され、簡易な役所施設の記載があることから何らかの遺構の検出が期待された。しかし、調査範囲には佐用川の氾濫によって堆積した土砂が確認されたのみで、埋蔵文化財の痕跡を確認することはできなかった。

本発掘調査

本発掘調査は平成 23 年度の確認調査の結果を踏まえて、天神橋の手前まで、第 15 図の範囲について実施した。

ただし、調査にあたって光都土木事務所と協議の結果、佐用川が渇水期に入る平成 24 年末から本体工事に着手する関係から、この時期を目途に調査完了をすることになった。また、護岸周辺は降雨期の 4 ~ 11 月の期間、掘削を伴う作業が河川法によって制約を受けることから、本発掘調査の範囲は護岸(約 3 m)を除外して行うこととなった。このため、改めて護岸石垣については工事立会を後述のとおり実施した。

本発掘調査は前掲のとおり 7 月末から開始し、12 月 6 日に終了している。石垣などの時間を要する遺構や、残土処理などで複雑な工程の処理が必要となつたが、おむね予定通りに調査を終了すること



第4図 確認調査 トレンチ位置図

ができた。

今回検出された大規模な城郭石垣の調査は現況測量の後に解体・石材調査・断面検出などの工程を繰り返しながら写真撮影・実測をその都度実施するもので、通常の掘削・検出写真・実測という単純工程とは別種の作業手順でおこなった。光都土木事務所の協力も得て、石垣調査に関してはこれらの工程を踏まえて可能な限り実施したが、今後の反省点も残された。

さらに、今回検出された石垣・堀については光都土木事務所と協議を行い、掘削を伴わない管理道路(幅3m前後)建設部分について現地保存の措置を講じられた。この結果、石垣1・2のうちの一部を現地保存とした。(第17図参照)また、石垣の修景事業に伴って石垣構築について検討することを目的に平成24年12月6日に光都土木事務所・本体工事業者(播磨組)・施工管理担当者((公財)兵庫県まちづくり技術センター播磨事務所)・発掘調査担当((公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部)が現地で検討会を実施している。さらに、平成25年1月30日には積み上がった石垣についての検討会を実施した。(第13図)

この他、石垣石材の内、石1-4、石3-2については佐用町教育委員会の要望によって、智頭急行線平福の駅前に野外展示をしている。(第41図)

なお、調査中に専門的見地からご指導をいただきため学識経験者を招聘した。城郭石垣については石川県金沢城調査研究所所長(現名譽所長)の北垣聰一郎氏に9月24日・11月14日の両日、建物遺構等については国立明石工業高等専門学校副校長の八木雅夫氏に10月16日に現地に来訪していただき指導を受けた。

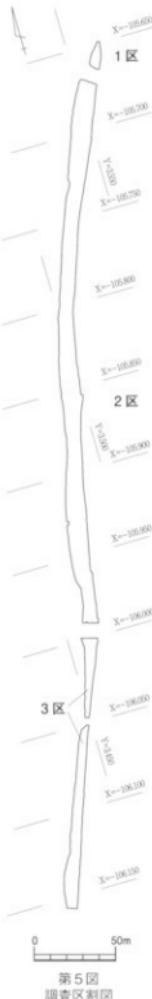
さらに、平成24年10月13日(土)に現地説明会を実施し303名の参加を得た。また、現地説明会に並行して「平福文化と観光の会」の原田昇会長や黒川恵準氏の協力を得て、平福の町屋「瓜生原家」や街並みの見学を併せて実施している。さらに、11月14日(水)に光都土木事務所河川復興室の見学会を行い35名の参加をえた。このほか、調査期間中にも周辺地域の方々の来訪が随時あり、城跡への関心の高さが示された。

今回の調査は佐用川左岸の南北約530mについて実施した。現場の作業方法は表土および現代層を重機で掘削し、包含層以下の検出及び精査については人力で行った。掘削残土については1・2A区、および2B区の北側については隣接地に運搬し、そのほかは基本的に残土処分した。

遺構検出後、個別遺構については写真・図面を作成した。一方、石垣の解体に当たっては石材に個別番号を付し、法量・矢穴・調整痕跡などを計測した。このほか全体会は航空測量を9月12日・10月16日・10月31日の3回実施し、1/50縮尺の図を作成した。このほか、石垣などの個別遺構の測量を目的にボール写真測量を9月19日・10月15・16日・11月9日の4回実施している。

工事立会

本発掘調査終了後、湯水期に入り河川掘削が可能となったので、本発掘調査終了後に護岸石垣の断ち割りを主目的として工事立会を実施した。この調査では護岸石垣の構築年代や構築技法について具体的



第5図
調査区割図

な調査がおこなわれた。

(2)庵川工区の調査

兵庫県西播磨県民局光都土木事務所が計画する千種用水系佐用川河川災害復旧助成事業における工事に伴い、庵川に面する北土塁を除く護岸石垣が撤去されることになっている。そのため、現存する護岸石垣の測量と発掘調査を行い、記録保存を実施した。

庵川工区に面して存在する北土塁を中心に戸塚石垣の測量調査を実施した。さらに測量調査実施後、護岸工事によって消滅する石垣箇所については、断ち割り調査を実施した。(第4章参照)なお、北石垣の庵川に面した部分については下半部分の前面に新たな石垣が構築されて埋没することになるが、破壊は免れたため断削を実施しなかった。

第2節 調査の体制

(1)現場の体制

平成24年度本発掘調査・確認調査の調査体制は以下のとおりである。

【本発掘調査】

(公財)兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

職 員 調査第1課 副課長 山上雅弘・副課長 甲斐昭光・技術職員 堀内拓郎

臨時の専門職員 田中政之・田村唯史

調査補助員 小谷義男

現場事務員 友本八重子 整理作業員 船曳芳子

【佐用川工区工事立会】

(公財)兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

職 員 企画調整課 主査 多賀茂治

【庵川工区工事立会】

兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部

職 員 調査2課 主査 長濱誠司



第6図 調査前の現況



第7図 現地説明会

(2) 整理作業の体制

整理作業は調査原因である事業が激甚災害事業であり、平成25年度で終了することから、本発掘調査に並行して平成24年度から整理作業を実施し、平成25年度に報告書を刊行するというスケジュールの下、水洗い・接合・保存処理・遺物実測・トレースが行われ、報告書刊行に至った。

整理作業の体制

整理作業の体制は以下のとおりである。

平成24年度

(公財)兵庫県まちづくり技術センター

調査第1課 副課長	山上雅弘・副課長 甲斐昭光・技術職員 埼内拓郎・臨時の専門職員
田村唯史	
非常勤嘱託員	
(水洗い・ネーミング)	今村直子・小野潤子・藤尾祐子・前田恵梨子
(接合補強)	荻野麻衣・藤池かづさ・上田沙耶香
(金属器保存処理)	桂 昭子・浜脇多規子
(実測)	栗山美奈

平成25年度

(公財)兵庫県まちづくり技術センター

調査第1課 副課長	山上雅弘・技術職員 埼内拓郎・臨時の専門職員 田村唯史
非常勤嘱託員	
(復元)	荻野麻衣・島村順子・佐々木愛・皆生真理子・藤池かづさ・吉村あけみ・上田沙耶香
(木製品保存処理)	今村直子・小野潤子・藤尾祐子・前田恵梨子
(実測)	栗山美奈・森本貴子・八木和子・榎真菜美・佐々木誓子
(トレース・写真・編集)	栗山美奈・佐々木誓子・古谷章子・有田遙香・板東知奈



第8図 瓦取り上げ



第9図 石垣・堀清操作業(南から)



第10図 重機掘削



第11図 人力掘削風景



第12図 石垣解体風景



第13図 土木勉強会

第8図はS D 79南北部分の側壁に転用された鬼瓦T 130の取り上げ風景である。第9図は石垣1～3、堀1の写真撮影のための清掃風景である。第10図は3区の重機掘削の様子である。第11図は2A区の調査風景、第12図は石垣1の解体作業である。第13図は平成25年1月30日の光都土木事務所主催の石垣1の検討会の様子である。

第3章 本発掘調査の結果

第1節 調査区の概観

(1) 調査区の位置

今回の調査は、平福御殿屋敷跡の西端を縦断する形で実施した。調査区は、佐用川及び庵川に面する左岸域に位置するが、北から1～3区を設定した(図版14・15図)。1区は庵川と南東から南へ流れる佐用川との合流部分に面し、北側は智頭急行線に、南側は町道横坂平福線に挟まれた部分に位置する。2区は、南流する佐用川に面し、町道横坂平福線より南側で、京橋より北側にあたる部分である。さらに2区は、後に報告する石垣2の裏込め部分を境として、北側を2A区、南側を2B区に区分した(図版2)。3区は、佐用川に面し、京橋の南側から、天神橋北側に隣接する一筆分の土地よりさらに北側にあたる部分である。また、2区及び3区については、遺構や遺物の出土地の整理・把握を目的に、検出遺構を主な基準として小区画を設定した(図版2)。2区は、2A区をa～hの8区画、2B区をa～dの4区画に、3区は、a～fの6区画に細分した。

なお、調査区のうち1区・2A区は、平福御殿屋敷跡の郭内にあたり、2B区・3区は郭外、つまり城下にあたる。

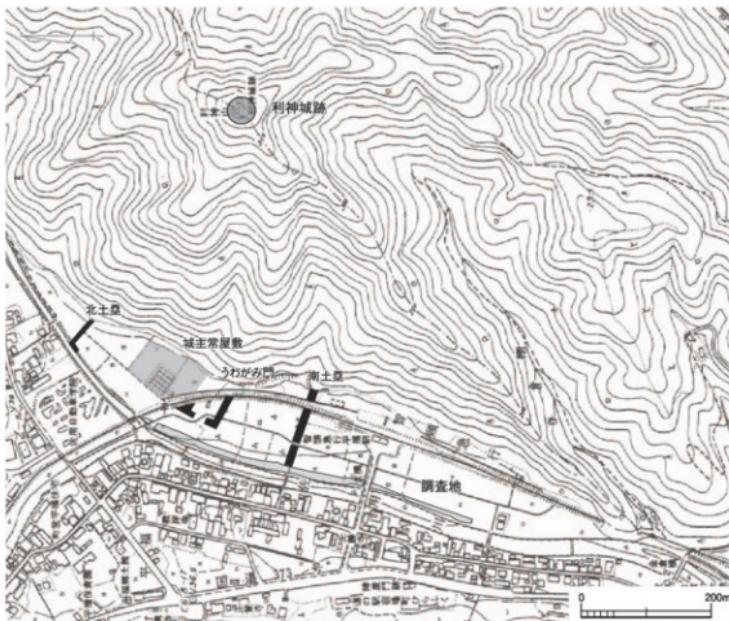


図14 図 調査地と利神城跡の位置



第15図 調査区位置図

(2) 基本層序

当調査区の基本層序は、第1層～第17層に区分でき、そのうちの複数層はさらに細分できた(図版3)。

基本層序(第2表)

当調査区の基本層序については、第2表に土色・土質をまとめ、ここでは各層について報告する。

第1層 平成21年に発生した水害時の佐用川氾濫堆積物層である。主に1区・2区北半の第2層を覆う。

第2層 現代耕土層である。その一部分には、第1層の砂を耕土とともに擁擠する層も認められた。

第3層 現代の土地区画や田畠の用水路のために築かれた石垣(石塀)畦畔とその裏込め層である。

第4層 現代盛土層である。特に現代耕土の畦畔部分の直下に認められ、現代の田畠を整備するために旧表土とみられる土壤層I(第11層)が傾斜する部分の上部に盛土し、平坦地・畦畔を造成する。

第5層 現代耕土直下に位置する床土層である。

第6層 堀の埋め立て土層である。平坦地を造成するために近代頃に埋め立てられたとみられる。

第7層 振乱層である。現代耕土・盛土層の直下にあり、近現代の人为的作用により下層の層序を崩す。

第8層 盛土層Iである。近代以降に盛土をし、平坦地を造成する。特に石垣1の北側に顕著である。

第9層 第11層の上面に形成される遺構埋土層で、第9-1層と第9-2層がある。第9-1層は、遺構Iで、遺構埋土層である。第9-2層は遺構I-2で、第9-1層の形成後、その上部が第11層とともに土壤化した層である。石垣1北側の一部分のみで確認できる。

第10層 堀の機能時堆積層である。堀の埋め立てまでに堆積した層で、ラミナが認められことから、堀内に水が湛えられていたとみられる。ただし、堀の開削直後から連続して堆積したものか不明である。

第11層 土壤層Iである。盛土が土壤化したもので、一部、第12層の上部が土壤化したものも含む。旧表土の可能性があり、2区・3区に認められる。

第12層 盛土層IIである。平福御殿屋敷廃絶後の盛り土で、石垣1・2の裏側造成部の背後に見える。

第13層 平福御殿屋敷廃絶段階に形成された造成土層で、

第13-1層と第13-2層がある。第13-1層は造構Ⅱで、廃絶段階の片付けに伴う造構の埋土層である。第13-2層は盛土層Ⅲで、廃絶段階の片付け時に埋め立てなどのために土を盛った造成土層である。

第14層 平福御殿屋敷造成段階に形成された造成土層で、第14-1層～第14-5層がある。第14-1層は盛土層Ⅳで、第14-2層は盛土層Ⅴである。盛土層Ⅳは、山地や丘陵などに由来する亜角礫を多量に含む盛土層であるのに対し、盛土層Ⅴは河成堆積物由来の砂礫を主体とする盛土層である。盛土層Ⅳは2A区DG間に見え、盛土層Ⅴは2A区のFG間に見られる。第14-3層は造構Ⅲで、盛土層Ⅳと同時に形成されたSD68に見える造構築土層である。第14-4層は石垣1北側盛土・裏込層、第14-5層は石垣2南側盛土・裏込層で、いずれも石垣の構築時の造成土層である。

第15層 平福御殿屋敷の造成および機能段階に形成された層で、第15-1層と第15-2層がある。第15-1層は土壤層Ⅱで、第15-2層は造構Ⅳである。第15層の母材は河成堆積物で、御殿屋敷が成立するよりも古い時期にすでに堆積し、土壤化していたとみられる。それが、御殿屋敷が造成され機能していく過程で土壤化が進んで形成されたのが土壤層Ⅱであり、それと併行して形成された造構埋土層が造構Ⅳである。そのため造成と機能の段階の区別は困難である。

第16層 土壤層Ⅲである。地山層直上の土壤層で、母材の河成堆積物は御殿屋敷成立よりも古い。第16層上面が今回の主な造構検出面である。この層は南へ向けて傾斜し、調査区のはば全体で確認できる。

第17層 地山層で、第17-1層と第17-2層がある。第17-1層は地山層Ⅰで、佐用川に由来する河成堆積物である。下部に大礫～細礫が、上部に極粗粒砂～中粒砂が堆積する級化構造を示す。第17-2層は地山層Ⅱで、岩盤である。堀底でのみ確認しており、佐用川河床の岩盤と連続するものである。

基本層序と土層堆積過程(第16図)

当調査区の堆積状況を、中心となる平福御殿屋敷の成立を軸に、Ⅰ期=平福御殿屋敷成立前、Ⅱ期=平福御殿屋敷段階、Ⅲ期=平福御殿屋敷廃絶後に分けて整理し、第16図に堆積過程の模式図を作成した。

Ⅰ期は、御殿屋敷造成までの自然堆積とその土壤化が進行する時期である。岩盤上に佐用川が運ぶ砂礫が堆積する第17層の上部に、第16層・第15層の母材となる砂層が堆積し、それが土壤化する。Ⅱ期は、平福御殿屋敷が造成されて廃絶するまでの時期である。時間的にも非常に限られ、造成段階が1600～1605(慶長5～10)年に、廃絶段階は利神城の廃城時期と同時期で1631(寛永8)年が想定される。そして、造成と廃絶までの期間が、御殿屋敷として機能する時期に相当する。造成段階には、御殿屋敷としての石垣や堀などの諸施設が造成・整備される。造成に連して堆積するのが第14層である。そして、造成時から機能時にかけて土壤化が進行し、造構が形成されていく段階に成立するのが第15層である。さらに、御殿屋敷廃絶時には諸施設は破却され、瓦礫などが撤去される。これに間連して成立するのが第13層である。一方、堀の開削は、造成時に実施されたとみられるが、堀底には堀が埋め立てられるまで機能時堆積層が形成される。Ⅲ期は、平福御殿屋敷の廃絶後に土地造成が行われる時期である。1631年より後から現代までがてはまる。この時期には、4段階にわたる廃絶後の造成が行われたとみられ、実施が想定される時期から、近世頃の造成①・造成②、近代頃の造成③、現代頃の造成④が挙げられる。造成①は、石垣の造成土を利用して石垣1北側や石垣2の南側へ盛土する第12層である。造成②は、部分的に盛土し、その上部が一部土壤化する第11層と、その上面に形成される造構の埋土、第9層である。第11層の上部は暗色化が顕著で、旧の表土であった可能性がある。造成③は、盛土をして平坦地をつくる第8層である。石垣1北側や2B区KL間に見られる。特に後者は、階段状の土地の造成を意図すると考えられる。また、この造成時に堀の埋め立て、第6層が形成されたと見られる。造成④は、現代

第2表 基本層序一覧

層番号	土層名	土色	土質
1	平成21年の洪水砂層	2.5Y4/3 にぶい黄褐色	粗粒砂～中粒砂
2	現代耕土層	2.5Y4/2 暗灰黄色	中纏(φ1～3cm)～極細粒砂混じり中粒砂
3	現代石垣畔・裏込層	10YR4/3 にぶい黄褐色	中纏～大纏(φ5～10cm)混じり極粗粒砂～粗粒砂
4	現代盛土層	10YR4/2 灰黄褐色	中纏～大纏(φ5～10cm)混じり極細粒砂質細粒砂
5	床土層	10YR4/2 灰黄褐色	極粗粒砂混じり粗粒砂(斑駁あり)
6	堀埋め立て土層	—	—
7	搅乱層	—	—
8	盛土層I	2.5Y4/4 にぶい褐色	シルト混じり極細粒砂
9-1	道構I	—	—
9-2	道構I-2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト混じり極細粒砂(φ2cm円纏含む)
10	堀機能時堆積層	5YR5/1 褐灰色	極細粒砂～シルト(ラミナあり)
11	土壤層I	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	極粗粒砂混じり粗粒砂質細粒砂
12	盛土層II	10YR3/4 暗褐色	中～細纏混じる極細粒砂質細粒砂
13-1	道構II	—	—
13-2	盛土層III	10YR4/4 褐色	極粗粒砂～粗粒砂混じりシルト質極細粒砂
14-1	盛土層IV	10YR5/3 にぶい黄褐色	中纏(φ1cm亜角纏)混じり極粗粒砂～細粒砂
14-2	盛土層V	10YR4/3 にぶい黄褐色	中纏～大纏(φ1～10cm)混じり極粗粒砂～細粒砂
14-3	道構III	—	—
14-4	石垣1北側盛土・裏込層	—	—
14-5	石垣2南側盛土・裏込層	—	—
15-1	土壤層II	2.5Y4/4 オリーブ褐色	中纏(φ1～3cm)混じり中粒砂～細粒砂
15-2	道構IV	—	—
16	土壤層III	2.5Y4/4 オリーブ褐色	粗粒砂～細粒砂(炭化物含む)
17-1	地山層I(砂礫)	10YR4/3 にぶい黄褐色	上部：極粗粒砂～中粒砂、下部：大纏～細纏(φ1～20cm)
17-2	地山層II(岩盤)	—	岩盤

第16図 平福御殿屋敷跡の土層堆積プロセス模式図



耕土に見られる田畠が整備される。一部に搅乱の第7層が見られるが、基本的に盛土の第4層、石垣畔等の第3層、床土の第5層が形成され、現代耕土の第2層が、順次形成される。

最後にみられる堆積は、現代耕土層上部に、平成21年に水害に起因する氾濫堆積物である。

各調査区の土層（図版4～9）（写真図版6～8）

ここでは、各調査区の土層について概観する。その際、各調査区の代表的な区間を取り上げて図示した（図版4～9）。区間については北から順に図版3の基本層序図に対応するアルファベットを付した。

（1区）（図版4） 1区（A B間）は上から洪水砂層、現代耕土層・搅乱層、床土層、土壤層Ⅲが堆積する。搅乱層を除き、ほぼ水平に堆積する。標高は現地表が135.5m、遺構検出面が135.3mである。

（2区）（図版4～7） 2区は、上から洪水砂層、現代耕土層、現代石垣畔裏込層、現代盛土層、盛土層Ⅰ・堀埋め立て土層、遺構Ⅰ・土壤層Ⅰ、盛土層Ⅱ、遺構Ⅱ・盛土層Ⅲ、盛土層Ⅳ・盛土層Ⅴ・遺構Ⅲ・石垣Ⅰ北側盛土裏込層・石垣Ⅱ南側盛土裏込層、土壤層Ⅱ・遺構Ⅳ・土壤層Ⅲ・地山層Ⅰ・地山層Ⅱが堆積する。2区は全体的に北から南へ傾斜する地形となっている。洪水砂層はE F間に一部に堆積する。現代耕土層は、調査区全体にわたって広がる。現代の石垣畔部分周辺には、裏込層や現代盛土層、床土層など廃絶後の造成④に関わる層によって階段状に平坦地が造成される。そして、廃絶後の造成③の盛土層Ⅰは、石垣Ⅰ北側のG H間とJ K間南半分に認められる。また、造成②となる土壤層Ⅰ・遺構Ⅰは、D E間・F G間・J K間付近に堆積する。造成①となる盛土層Ⅱは石垣Ⅰ北側部分およびJ K区間に見られる。次に、平福御殿屋敷廃絶段階の遺構Ⅱ・盛土Ⅲは主にE F間とF G間の中心部分に認められる。御殿屋敷造成段階の盛土層Ⅳ・V・遺構ⅢはD～G間に中心的に南へ下る段上の堆積が認められる。H～J間では、地山層Ⅰに由来する堆積物が石垣Ⅰ北側盛土・裏込層、石垣Ⅱ南側盛土裏込層として堆積しており、堀の掘削と平行することが分かる。このときに石垣Ⅰ北側、特にG H間付近と、石垣Ⅱ南側、特にJ～L間の地面のレベルが一段と低くなる地形が造成される。その後に御殿屋敷造成段階から機能段階に形成されたのが土壤層Ⅱ・遺構Ⅳで、C D間にまとまって認められる。遺構ⅣはK L間付近にも認められる。そして、土壤層Ⅲは調査区全体に認められ、この上面において遺構検出している。また、その下層である地山層Ⅰについても調査区全体で確認出来る。地山層Ⅱについては堀底でのみ確認したが、佐用川河床と連続することから調査区全体に広がるものとみられる。標高は、現地表が調査区北端で135.3m、南端で132.5mを測り、遺構検出面が北端で135.1m、南端で132.3mを測る。

（3区）（図版8・9） 3区は、上から現代耕土層、床土層、現代盛土層、搅乱層、土壤層Ⅰ・遺構Ⅰ・遺構Ⅱ・盛土層Ⅲ・土壤層Ⅱ・土壤層Ⅲ、地山層Ⅰが堆積する。地形は2区と同様に南へ向かって傾斜する。現代耕土層は、調査区全体に広がる。床土層は主にM N間やP Q間南半部に堆積する。現代盛土層はP Q間の中央部畔にみられ、同位置の下層には土壤層Ⅰの薄層が認められる。遺構Ⅰについては調査区南端のみに確認できる。遺構ⅡはO P間の中央部およびP Q間の中央部に認められ、特にP Q間中央部については大きく落ち込む遺構となっている。その埋土上部から調査区南端にかけては、盛土層Ⅲが広がる。そして、土壤層ⅡはM N間に顕著にみられ、遺構Ⅳについては調査区北半において認められる。土壤層Ⅲについては、ほぼ調査区全域に広がり、地山層Ⅰは調査区全体にて確認できる。現地表の標高は、調査区北端で132.26m、調査区南端で131.2mである。また遺構検出面の標高は、調査区北端で131.76m、調査区南端で130.88mを測る。

第2節 調査の成果

(1) 1区(図版10)(写真図版9)

1区は調査区の北端で、佐用川と庵川の合流点付近に位置する。北側は智頭急行線路敷に接し、佐用川が庵川に分岐した合流点にある。

調査の結果、厚く河川の氾濫堆積が観察され、御殿屋敷関係の遺物は少量出土したもの、遺構は検出されなかった。上層で検出された土砂も後世の人為的な造成土であり、最下層で検出された砂層は自然堆積層であった。この地区が河川の合流点にあたることから、氾濫時の浸食を受け、遺構面が流失したことが原因と推定される。

(2) 2 A区

この地区は1区の南側から石垣1～3までの地区で、平福御殿屋敷の郭内にあたる。調査の結果、江戸時代初期の平福御殿屋敷跡関連の遺構が検出された。検出された遺構は石垣・堀・石列・掘立柱建物・石組暗渠・石組溝・畝状造構・土坑・溝や瓦溜め土坑などである。

ただし、施設に関わる建物などの遺構が検出されたのは北端のa区画を中心で、b区画以南では全く遺構が検出されなかった。c区画についても石組溝S D 69やSK 74などの深い遺構は検出されるものの、屋敷や城郭に関わる建物の検出はなく、d・e・f区画でも同様に基本的に廃棄土坑以外は検出されない。これらの地区的建物は水田の開発に伴ってすでに遺構が破壊されたものと推定される。

掘立柱建物・柱穴

a区画周辺では多くの柱穴が検出された。これらの柱穴の存在から実際には何棟かの建物が存在したと思われるが、復元できた建物は1棟に限られた。

S B 80(図版10・11)(写真図版9)

a区画の中央付近で検出された。3間×3間(南北6.0m×東西6.5～6.8m)の建物である。東柱はS P 38・17の2基が確認された。建物の軸方向は南側に隣接する石列60と同様、建物の軸はN 20°Wの方向に傾く。柱穴は平面円形で直径30～60cm前後、柱並びはおむね良好であるが、梁行北辺が歪になる。

石列

小型の河原石を並べた石列60と大型の石材を用いた石列82がある。

石列60(図版10・11)(写真図版10)

a区画で検出された石列でS B 80の南隣り、SK 65の北側に検出された。長さ30cm前後の河原石を敷き並べたもので建物の縁石にあたる可能性が高い。周囲の礎石列が明確でないため南北どちら側に建物本体が存在したのかは結論できないが、南側に柱穴の検出が希薄であることを根拠とすれば、南側に建物本体が存在した可能性がある。

石列82(図版10・13)(写真図版11)

a区画で検出された。この石列はS D 68に直行して検出された。1m大の石材の周囲にはグリ石(河原石)が多量に散布することから槽台などの根固めの可能性が推定される。石列は検出長6mであるが、さらに北側に続くと思われるが、おそらく上面の削平によって消失したと思われる。S D 68と石材が交差する形で構築されるので、おそらく同時期に構築されたものである。また、周囲の状況から見て、本石列は護岸のラインに並行するため、護岸側の石垣と対になって石垣を構成した可能性が高い。2 A区

の中ではほかに同様の石列が検出できないので結論できないが、城郭機能時の護岸石垣は隨所に石墨を設けた可能性があり、本石墨もこの1つであったと推測される。

鍛冶炉

S K 4(図版10・11)(写真図版9)

a区画の北端付近で楕円形の焼土を検出した。規模は長軸1.2m、短軸0.6mを測る。土坑としたが焼土面で、平面は卵頭形を呈している。鍛冶炉ないし竈などの下層赤変部である可能性が高い。

土坑

瓦を大量に投棄した廃棄土坑(S K 48・65・72・74・100)が中心を占める。これらの土坑はすべて調査区の東壁周辺から検出され、一定の間隔を持っており、各土坑の位置関係には規則性が認められる。また、内部には瓦や土器などが多く含まれおり、この点でも他の土坑にはない共通性を持っている。

S K 48(図版10)

a区画、石列60の北側で検出された不定形土坑である。南北3.5m、東西4.5m、深さ20cmである。

S K 62(図版10・12)

a区画、S K 65の北に隣接して検出された小規模な廃棄土坑である。

S K 65(図版10・12)(写真図版10・11)

a区画の南寄り石列60に隣接して検出された瓦廃棄土坑である。東西方向に長く、さらに東側の調査区外に伸びている。検出範囲での規模は南北2.6～4.5m、東西3.9m以上、深さ65cmである。内部からは多量の軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦などが出土した。

S K 74(図版12・15)(写真図版14)

c区画で検出された廃棄土坑で、大半が調査区東側に伸びる。S K 65と同様、内部から多量の瓦が出土したことから廃棄土坑と考えられる。検出範囲での規模は南北6.5m、東西12m以上、深さ80cmである。出土した瓦には軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦がある。

S K 72(図版15)

e区画東壁で検出された廃棄土坑である。平面不定形で検出深さは10～15cmと浅い土坑である。周辺は開田に伴って上層をかなり削平されていると思われる。

S K 100(図版12・17)

f区画の東壁で検出された廃棄土坑である。平面不定形で、長さ1.5m、検出面からの深さは50～60cmである。埋土には炭が多く混じっていた。この土坑も開田に伴う削平によって上層を削られている。

S K 102(図版17)

f区画東壁で検出された土坑で、S D 79の下層に位置する。

石組溝

石組溝は調査区北端の石組溝S D 68と中央部分の石組溝S D 69、南側の石組溝S D 79の3本がある。これらの溝は直線的で調査区を東西に横断する。

S D 68(図版2・10・13・14)(写真図版12・13)

a区画南端で検出された。この溝は蓋石を持つ暗渠である。長さ11mを検出したが、調査区の東側にさらに続いており、御殿屋敷中心部分となるうわがみ門方向に伸びる。また、護岸側(西側)にもこの溝は伸びるが、拡張区で検出された溝は護岸石垣改修時に佐用川へ(拡張区)延伸したもので、構造は全く異なる。拡張区の溝は石材が小さく、護岸石垣裏に流水を向けるが、石垣に開口部はなくそのまま浸透させて排水する構造である。

溝内法の規模は幅 0.4 m、深さは東側で 35cm、西側で 20cm 前後である。蓋石は大型のものを用いるが自然石が中心となる。長さは 0.6 ~ 1 m のものがあり大型で比較的平石に近い形状の石材を使っている。さらに、東側では蓋石は 1 段ではなく 2 段積となる部分も見られた。

溝の掘方は図版 10 のとおりで、東側で幅 4 m、中ほどで幅 5 m、西南側は溝から幅 5 m あるが、北側では石列 82 の下層まで広がっており溝からは幅 8 m ほど広がる。このため、SD 68 の掘方は a 区画南端周辺の造成土と考えられ、この掘方には褐色繰混り土が充填されるが、この種の繰混り土は東側の山裾から供給されたと推測される。なお、同種の土砂は SD 68 の掘方のみではなく、特に 2 A 区 b 区画の郭内造成土にも共通する。この点からみると、SD 68 は凹地地形の造成と共に構築されたもので、周囲の造成の一連の作業として構築されたと考えられる。

溝底は西側で高く、石列 82 を境にして東側が低くなる。図版 14 のとおり、一定の勾配で下がるのではなく、西端の幅 5 m ほどの範囲が高く、この部分にだけ敷石が敷かれる。一方、掘方の土砂が石列 80 の基礎地業でもある点や、SK 83 などの礎石根固め石の存在からすると、石列 80 と護岸石垣の幅 4 ~ 5 m の間に建築物(槽)が設せられ、SD 68 はこの建築物の下部構造であったと考えられる。

SD 69(図版 15・16)(写真図版 14)

c 区画中央で検出された。この溝は調査区を東西に横断するが、SD 68 同様さらに東側に伸びる。一方、護岸石垣側にも続いており、この部分は調査区を拡張して検出した。溝の規模は幅 0.4 m、深さ 0.3 m、検出長は 10 m である。蓋石はなく、側壁も部分的に石材が喪失した箇所や、側壁が崩落し溝内部に石材が崩れた箇所が多く認められる。側壁の石材は長軸 30 ~ 80 cm ほどのものが多く 1 ~ 2 石前後が積まれるが、実際にはもう少し高く積まれていた可能性が高い。側壁の基底石は軟弱な砂層の上に直接据えるもので、底の高さは高低差が見られる。ただし、西端付近では溝底に敷石が葺かれ両側壁も長軸 60 ~ 80 cm の大型のものが用いられるなど少し構造が異なる。また、蓋石はないが SD 68・SD 79 との関係を考えると元々は存在した可能性が高い。一方、溝底は全体的には東から西に向かって、つまり佐用川に向かって傾斜しており、東側への排水のための溝と考えられる。西側拡張区で溝の延長部分を検出したが、護岸石垣背面で途切れる。このため護岸石垣の構築時に西端は破壊されたものと考えられる。

さらに、溝底から近世後半の磁器などが出土したが、この溝は江戸時代を通じて利用された可能性が高く、西寄りで南壁に小舞を用いた修築が認められるのは、近世以降の補修に伴うものと考えられる。

SD 79・SK 101(図版 17~19)(写真図版 15・16)

SD 79 は f・g の 2 つの区画に検出されたもので、調査区を東西に横断する溝と、この溝から北に曲がる溝の 2 種類の溝を SD 79 とした。東西側は石組暗渠で g 区画南端に位置し、石垣 1 の背面造成が確認される境界を流れる。規模は検出長 10 m、幅 0.5 m、深さ 0.3 m である。直線に築かれた溝で溝底には敷石が敷かれる。蓋石は長さ 1 m ほどの長方形の石材が多く、すべて自然石である。蓋石周囲にグリ石を充填するが、これらの中に宝鏡印塔(S 1)・一石五輪塔(S 2)などが含まれる。溝側壁は 1 段の石材で構築され、横方向に長軸をもち、控えは短い。一方、西側(護岸石垣側)は護岸石垣の造成時に破壊されていることが判明した。

南北側は石組みで開渠となる。溝底に敷石はなく、大体に並行して伸びるが、蛇行する溝である。側壁石は 1 段が基本で、北に行くほど小さくなり、かつ石材が疊らになる。さらに、末端では痕跡が辿りにくく素掘り溝であった可能性が高い。この南北方向の溝では南側の側壁材として鬼瓦 T 130・131 が転用されていた。武家屋敷の中心建物もしくは橿建物などの瓦を転用したものと推定される。

東西方向の溝は南側の石垣 1 のラインや造成痕跡の区切りに並行し SD 68・79 とも同軸方向を向いて

いる。そして、東端は溝が寸断されこの部分から東側は近世以降と思われる擾乱によって土層が分断される。SK 101とした落ち込み遺構は側壁に石材を並べるが、半球状に膨らむ平面をもつ。おそらくこの土坑の掘削によってSD 79の東側は破壊され、SK 101を埋めてSD 79南北部分が東西部分に接合して構築されたと見られる。

畝状遺構・大畦(図版 17・18)(写真図版 15)

f 区画で検出された。石垣の北側で検出された畠の畝に酷似した遺構と、これを区切るように畦畔のような小規模な堤状遺構が見つかっているが、前者を畝状遺構、後者を大畦と仮称した。

まず、畝状遺構は調査区西端に沿って検出されたもので、佐用川護岸石垣の背面に沿って広がる。検出範囲は長さ 19.0 m、幅 3.0 m で、畝の長さは 3.0 m、畝の間隔は 0.6 m 前後、畝の高さは 0.1 m 前後で、東側の大畦に制約される形で見つかった。直上には厚く粗砂が堆積するが、この層内には長さ 0.5 ~ 1 m 前後の角礫が相当数混じていた。当初はこの畝状遺構を畠と考えたが、土層に土壤層が検出されないことから平福御殿屋敷護岸構造物の基礎地業の痕跡と推定している。

また、粗砂は組成からみると佐用川から供給されたと考えられるが、石垣背面のうち東縁盛土下の自然堆積層面上や、郭外である 2B 区に沿っても検出されており、佐用川の護岸東縁の広い範囲に分布する。さらに、この粗砂は石垣背面の盛土下層にも検出されるので築城時の人の為的な盛土であった可能性が高い。このため、粗砂の堆積は築城時の護岸石垣の根切りに際して背面に盛土されたものと判断される。また、この造成では川砂と一緒に河床石材も多量に混入するが、これも意図的なものである。

次に、大畦(土堤)である。この遺構は幅 1 m 前後、高さ 0.3 m ほどで e・f 区画に渡って長さ 68 m の範囲で検出された。この遺構の直上も粗砂層が被覆するが、概ねこの遺構を境にして堆積の境界となっているようで、東側では土壤層の検出が顕著であるが、粗砂層は広がらない。

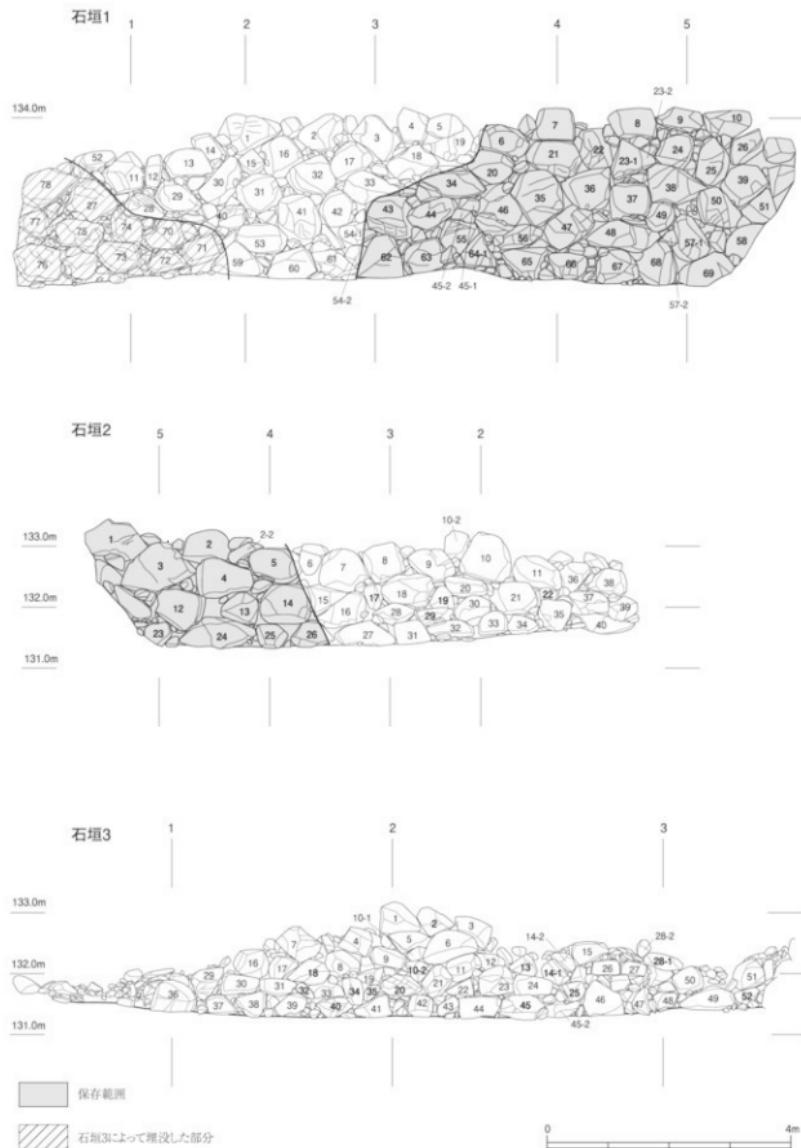
石垣・堀(図版 20 ~ 28)(写真図版 17 ~ 27)

2A 区の南端、h 区画で堀 1 および石垣 1~3 を検出した。石垣は御殿屋敷内側のものを石垣 1、堀外側のものを石垣 2、佐用川護岸内側のものを石垣 3 とし、これらに開まれた堀跡を堀 1 とした。この堀と石垣は郭内の南側を限るもので、調査区の範囲は山側から一直線に続く南土塁(石塁と堀)の西端にあたる。ただし、調査区周辺の石塁部分は開墾などによって既に削平され、埋没した部分のみが残されていた。従って、今回検出した石垣 1 は石塁南面の石垣下半部分に限られる。なお、護岸に接した石塁西端の隅角部については、調査によって護岸石垣構築以前に失われていたことが判明している。

それぞれの石垣は、石垣 1 が高さ 6 m 前後の石塁の基底部にあたり、本来は石塁背面にも石垣が存在したと思われる。石垣 2 は堀外の護岸石垣で、高さは検出面より 1 石程度上が天端と考えられる。石垣 3 は佐用川と堀を区切る堀堤内面の石垣で、元々の高さは石垣 2 と同程度と推定される。この堀堤はかつては川側にも石垣を有したと思われるが、現状石垣は谷積みによるもので、近代以降のものである。

調査範囲での寸法は石垣 1 が幅 13 m、高さ 28 m で角度は 72 ~ 75°、石垣 2 側が幅 11 m、高さ 1.9 m、で角度は 75°、石垣 3 は長さ 13 m、高さ 1.3 m で角度は 75 ~ 80° である。堀 1 は幅 13 m、深さ 28 m の規模で、断面が箱堀状になる。そして、調査区の範囲内では石垣 1・2 はほぼ平行であるが、石垣 3 は川の流路の方向に影響を受けて 10° 前後西に傾いている。ただ、全体として石垣 1~3 はコの字状で、堀幅は一定である。

堀底は岩盤を掘削して加工するが、岩盤の掘削が困難な部分を掘り残すため凹凸が著しい。例えば石垣 1 の中央付近の石 1・55・64 では岩盤が隆起したまま石材を据えている。ただし、堀底は全体的に北側(石垣 1 側)から南側に向けて傾斜するが、東西方向では東側が低く、石垣 3 の西側で高くなる。東側



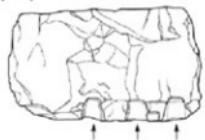
第17図 石垣石材番号

第3表 平福御殿屋敷跡石垣石材寸法表

石垣1			石垣2			石垣3		
No.	表面 横幅 高さ	柱上部2 幅	No.	表面 横幅 高さ	柱上部2 幅	No.	表面 横幅 高さ	柱上部2 幅
1	100	45	115	表面剥離で凹む		1	100	50
2	83	45	120		2	76	50	73
3	60	26	46		3	100	65	前面に矢穴1箇所
4	52	42	26	矢穴3箇所	4	55	55	
5	54	35	30		5	94	39	95
6	96	45			6	33	38	54
7	53	64	37	弓形で凹む部分	7	74	66	73
8	82	33			8	60	58	66
9	68	40	39		9	52	75	65
10	68	39	80		10	84	79	65
11	66	25	125		11	72	36	80
12	96	25	60		12	90	52	69
13	84	25	100		13	70	50	69
14	43	36	27	矢穴	14	36	34	100
15	40	47	74		14	75	51	
16	53	50	58	矢穴	15	30	42	50
17	60	58	83	矢垂れ	16	56	58	92
18	86	52	121		17	25	40	80
19	70	45	107		18	53	85	76
20	78	56			19	24	38	55
21	91	52			20	26	52	91
22	66	60		弓縫み	21	25	52	91
23	74	68			22	46	36	69
24	63	64			23	66	53	73
25	58	81		弓縫み	24	100	34	
26	55	60			25	45	45	
27	87	20	80		26	60	65	
28	58	38	115	白雲石	27	101	55	89
29	66	40	130		28	56	27	68
30	93	45	112		29	60	38	62
31	64	64	92		30	50	25	88
32	74	79	83	矢垂れ	31	49	68	63
33	90	52	87		32	24	28	70
34	115	66			33	40	30	65
35	85	85		弓縫み	34	46	33	53
36	80	79			35	62	50	80
37	69	60			36	63	52	82
38	100	55			37	25	66	11
39	80	72			38	69	67	70
40	59	38	106		39	55	25	39
41	80	79	94		40	82	79	94
42	64	62	92		41	52	39	54
43					42	24	65	102
44	61	15		弓の柄	43	50	30	70
45	52	15			44	25	25	50
46	40	20		弓縫み	45	72	26	78
47	61	86		弓の柄	46	79	23	50
48	123	54			47	2	60	16
49	95	65			48	64	62	66
50	70	74			49	25	36	93
51	90	57			50	38	23	90
52	96	30	112	前面調整	51	85	32	70
53	77	53	96		52	20	50	42
54	93	42	79		53	55	68	81
54-2	30	80	23		54	31	17	69
55	55	65	95		平均値	48.7	37.7	72.6
56	75	39						
57	64	27						
57-2	30	36						
58	50	30		半埋没				
59	70	58	120					
60	78	34	65					
61	60	46	95					
62	20	21						
63	70	50						
64	56	29						
65	75	53						
66	64	45						
67	70	36						
68	71	29						
69	45	65		半埋没				
70	62	98	108	半垂れ				
71	64	55	53					
72	36	40	29					
73	29	30	64					
74	45	56	29					
75	29	40	43					
76	40	40	29					
77	30	35	102					
78	66	46	83					
T計合	473.1	34	387					

■ : 保存石材
 ■ : 保存のため計測不能部分
 単位: cm

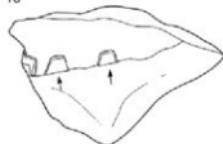
石1-4



石1-14



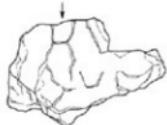
石2-16



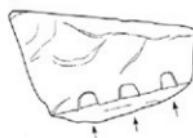
石2-35



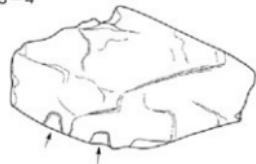
石2-6



石3-2



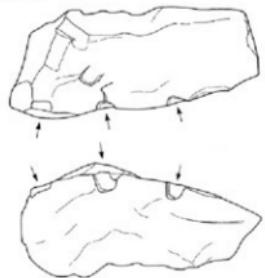
石3-4



石3-8



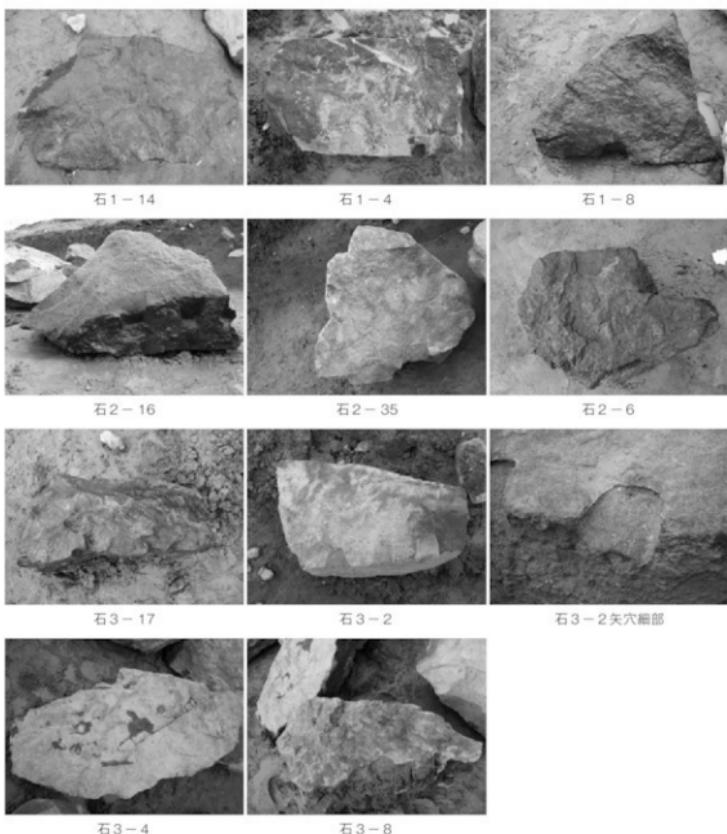
石3-17



石3-18



第18図 矢穴石材(1)



第19図 矢穴石材(2)

で標高131.1m、石垣3の中央付近で標高131.2m、南側で131.25mである。このため、地形的には南側に向かって傾斜するが、貯水を可能にするために10~15cm程度、石垣3側の地山を高く削り残したと思われる。

石材と粗割り加工：本石垣に使用された石材は硬質の安山岩系のものが大部分を占める。この石材は佐用川に散布するものや護岸石垣の石材、伝承にいう西山石にも共通するものである。なお、本石材は風化が進むと褐色系の色調を呈するが、新鮮な剥離面を見ると暗黒色~暗黒褐色を呈している。

石材は自然石が多いが、粗割り面を持つ石材が一定程度含まれ、矢穴が残る石材(14石)も僅かであるが含まれる。これらのことから技法的にはいわゆる打込みハギの石垣となる。個々の石垣では石垣1・2の石材は自然面を残し風化を見せるものや、角が丸くなるものも多い。これに対して、石垣3は若干角が鋭利で方形状の石材が多く選ばれている印象である。

矢穴と面の加工：使用された石材は大半が自然石であり、加工痕跡(矢穴)が明瞭にわかる痕跡が残る

石材は少ない。矢穴痕跡が見つかった石材は第18図のとおりで、石1-4・8・14・16、石2-3・16・35、石3-2・4・8・17・18・19・25の14石がある。このうち矢穴が単体のものは石1-16、石2-3・6、石3-8・17・18・19・25の8石、矢穴2個のものは石1-14、石2-16・35、石3-4の4石で、3個のものは石1-4、石3-2の2石のみである。これらはすべて1面の粗削りのために穿たれた矢穴である。このほかに石3-17では1面に3か所の矢穴と別の面に1か所の矢穴が穿たれていた。ただし、この石材は2面を粗削によって切断したのではなく、第1次の粗削で形状に不都合が生じたことから部分的に矢穴を入れたものとみられるので、粗削は自然石材を半裁ないし、部分切断するものであったと推定される。

今回の調査で検出された矢穴は規模や形態からみるとほぼ1種類で、平面形態はやや綫長の台形を呈し、矢穴の開口部幅が8~10cm、深部幅が6~7cm、矢穴の長さが6~9cm前後であった。そして、石材に残される厚さは1~2cm前後である。また、矢穴と矢穴の間隔は石1-4で8~9cm、石2-16で13cm、石3-2で8~10cmで概ね平均的な間隔は10cm前後の寸法となる。

当然ながら矢穴は石材の粗削り面に残されるが、矢穴が残らない石材にも粗削り面が認められるので、矢穴以外の方法で粗削りを行っていることが推測される。出現数からすると、むしろ本石垣では矢穴を用いた粗削り加工は特殊なものである印象を持つ。矢穴による粗削りがどのように選択されたのかは今後の検討が必要であろう。

石垣の面は今回検出された3か所の石垣とも凹凸が著しい。元々不定形な石材を多く使用している影響もあるが、その仕上がりは石材間の空隙が広いことと共に、著しく荒い印象を持つ。ただし、この面の凹凸を解消する目的から、積み上後に出っ張り部分と思われる個所を削っている石材が散見された。石垣1の石1-20・44(写真図版21)などである。この研りは石垣1・2で顕著で、石垣3では削石面が多いためかやや少ない。ただ、頻度の差を別にすると石垣全体を通して確認される。

利神城跡や御殿屋敷のほかの地点で矢穴と石垣面(つら)について見ると、矢穴では山城の全域にわたって多数確認ができる。その出現頻度は20~30%程度で、隅角部については100%に近い場所もある。さらに、1つの石材に10個以上の矢穴が列をなす石材も少なくない、これに対して御殿屋敷では南土塁の東側石垣上部の石垣では、列をなす矢穴はほとんど見られないものの、矢穴の出現頻度はかなり高く、同一石垣の面ではあるが傾向が大きく異なる。一方、うわがみ門周辺では逆に矢穴は目視の限りでは確認できない。

また、面の問題では石垣1~3のように凹凸を持ち荒々しい印象の石垣は他の地点では全く確認できない。同じ南土塁東側石垣やうわがみ門周辺の石垣ではすべて面を意識した積み方となる。さらに山城においてもこの点は共通しており、むしろ石垣1~3が例外的といえる。この石垣が石垣下端であることから、見られることを意識しない場所であるためとも推測されるが、今後他の地点の資料も検証しながら考える必要があるだろう。ただ、面の問題は置くとしても、城内の各地点でこのように矢穴や石垣の技法に大きな偏差が存在することは見逃せない。

石垣の構築技術：石垣は法をもつが反りは不明である。積み方は長方形の石材を横方向に積む意識があるものの、形状の異なった自然石を用いるため、横方向に整然と並ばない布積み崩しとなる。ただし、石垣1の石1-30・石1-57・1・石2-16などでは落し積みも含まれ、一見乱雑な印象に見える。

基底部は胴木を用いず整形された岩盤上に直接石材を据えている。石垣背面は根切りが行われるが、面(前面)から見ると根切りの幅は下部では50cm、上方では60~70cm前後で上部ほど幅が増す傾向にある。ただし、石垣1の下部では垂直に根切りをおこない、上方で角度を持つようである。そして基本的

に上方では石垣の角度に並行して根切りを行う。さらに、検出された範囲は背面がほとんど自然面である。今後は人工的な造成面となる石垣上部との比較を検討する必要があるだろう。

石材と根切りの空隙にはグリ石が充填される。ただ、石材の控え幅が部位によって前後するため実際のグリ石幅は捉えにくい。グリ石は拳大のものから人頭大のものまでさまざまであるが、部位によって大きなグリ石と小さなグリ石がまとまる傾向にある。大半が自然の円錐で削石がほとんどなく、転用石は認められない。おそらく大半の場所で川原石をそのまま充填したと思われる。

石材の規格寸法から見た石垣：石垣石材を石垣に組まれた状態でそれぞれの寸法を測ったのが第3表である。この表から各石垣石材に関する平均値を計算してみると次のようになる。石垣1で面側の横方向が67.3cm、縦方向が54cm、控えが88.7cm、石垣2ではそれぞれ61.2cm、48.9cm、69.2cm、石垣3ではそれぞれ48.7cm、37.7cm、72.6cmとなる。いずれも面の寸法より控えの寸法の方が長く、面側では明らかに横軸方向に長い傾向が見て取れる。

検出されたそれぞれの石垣の面積は石垣1が35m²、石垣2が13m²、石垣3が12.3m²である。これに対して使われた石材が石垣1で78石、石垣2で39石、石垣3で52石であるので1石当たりの石垣面における面積は石垣1で0.45m²、石垣2で0.3m²、石垣3で0.23m²となる。これらをみると圧倒的に石垣1が巨石を用い、控えを長くとる傾向にあることがわかる。そして、石垣1→石垣2→石垣3へと石材の規模に階層差があることも明瞭である。ただし、石垣2の大型石材は最大のものが石2-3で、同規模のものが、石2-1・24・27などいくつかあるので、石垣1と比べて最大規模の石材では遜色がない。ただし、石材全体でみると石垣1は石垣2・3より巨石が平均的に用いられ、表面だけの規模ではなく控えについても長くとられていることが明白である。そして、石垣2では西側の基底部付近、石2-19・20・29～34周囲に小規模な石材が使われる点や、石2-10は巨石であるが立積することで控えが45cmと極端に短い積み方になる。天端に近いことから控えよりも面を大きく見せることが優先されたのであろうが、石垣1では見られない技法である。さらに、控えの取り方では石垣1と石垣2・3の間で顕著な差が見られる。石垣1と石垣2の控えは88.7cmと69.2cmで、その差は19.3cmと大きい。これに比べ石垣2と石垣3では69.2cmと72.6cmであり差が出ない。石材の面積では石垣2が0.3m²と石垣3が0.23m²で、明らかに差が見られるものの、控えでは差が縮まる点は石垣2が面を埋めることを優先した結果とみることができるだろう。

石垣1の控えが長いもので石1-1・11の115cm、短いものでは石1-14の56cmや石1-71の53cmがあるが、全体は平均すると90cm弱であり、実際には大半の石材が80cm前後の控えを有し、面の面積も総じて大きいことがわかる。この点から見ると高石垣を想定して技術的な工夫を行っているのは石垣1であり、石垣2・3は外見的には似ているが、その技法には差が認められる。

石垣背面の造成(図版27・28)(写真図版26・27)：石垣1の背面は造成によって嵩上げが行われる。検出された造成面は石垣1背後の自然堆積層から最大で厚さ1.5m、幅20mに渡って検出され、主としてシルト質の土砂が盛られていた。この造成は周辺の地形が大きく北から南に傾斜することから、北側(石垣直下)を盛土によって嵩上げし、石垣構築のための土台地盤を築くためのものである。特に石垣1から6.5m前後北側までは造成面が高くなるが、この幅は東側の南土墨石垣の幅に一致するので、この高まりは石垣構築のための土台と判断される。そして土台を含め造成面の周囲には広く円錐を中心とした疊床が敷かれる。この疊は厚さ5～10cm程度と薄いが、石垣造成の基礎面とみることができる。

一方、造成の西側(護岸側)は粗砂混じり土で粘性の低い土砂が盛られる。この土砂は川に沿って盛られ、東側のシルト質土の下層に潜る。このため西側の粗砂混じり土→シルト質の土砂の類で造成が行われた

もので護岸壁から造成が開始されたことがわかる。いずれにしてもこの石垣背面の造成は大規模なもので石垣構築の前段階で根切り→造成の順に実施されたものと推測される。なお、西側の粗砂混じり土は川から供給されたと思われるが、東側のシルト質の土砂は堀の掘削によって発生した土砂を盛土したものと推測される。

石垣の年代：石垣1～3は石材の粗削りが部分的に行われ“矢穴”を残す調整石が含まれる。技法的には不定形で大小石材がまじり“乱積み”的特徴を示している。落し積みの存在や基底部の石材がやや小さいなど一見稚拙な印象を持つが、同様の技法は姫路城跡の池田期（II期）石垣にも見られるので、後世の積み直しではなく、築城期（慶長5年～10年・1600～1605年）に構築されたものと評価できる。さらに、石垣の空隙やグリ石、背面の造成土などに遺物が混入しない点も注意される。このことは、築城以前にこの場所に生活痕跡がなかったことを示すもので、今回検出された石垣は利神城跡および平福御殿屋敷の構築当初（慶長5～10年・1600～1605）のものと評価する傍証となる。

（3）2B区

石垣2の南外側から京橋（智頭急行平福駅前）までの範囲で、平福御殿屋敷の城下にあたる。この地区では北側で土坑・石組溝・石列、南側で掘立柱建物群・柱穴・櫛跡・土坑などが検出されている。

掘立柱建物

調査区の南端のd区画で掘立柱建物および柱穴が密集して検出された。多くの柱穴があるが復元できた建物は3棟（S B 50・55・82）である。検出状況や建物の復元状況から見ると、調査箇所は屋敷地の西端にあたるので、これらの建物はいずれも建物本体の西端に位置するものである。

S B 50（図版31・32）（写真図版32）

南北4間（4.1m）×東西2間（1.95m）以上、中抜けの総柱構造を持つ建物で、さらに東側に延びる。柱通りは比較的良好で根石をもつ柱穴が多い。柱穴は直径30～60cm前後の円形ないし楕円形である。棟軸方向はN 78°Wである。

S B 55（図版31・32）（写真図版32）

南北3間（3.0m）×東西2間（2.0m）以上の建物である。建物内部には東柱が部分的に欠損するので中抜け総柱構造の建物である。柱通りは良好で、柱穴は直径30～60cm前後の円形ないし楕円形である。棟軸方向はN 78°Wである。

S B 82（図版31・32）（写真図版32・33）

南北2間（2.0m）×東西3間（2.8m）以上の身舎に、西・南面庇で、さらに南面に1間×3間以上の下屋が付属する建物である。身舎内部の東柱がないので基本的に側柱建物と考えられる。検出範囲は建物の西側部分のみであるが、複雑な構造を持つ建物である。

柱通りは良好で、柱穴は直径30～60cm前後の円形ないし楕円形が多い。棟軸方向はN 78°Wで、S B 50・55とも共通している。

柵・石組土堀基礎

屋敷区画のための遺構と考えられる。柵はS F 8・29・96の3基、石組土堀基礎はS F 25の1基がある。ここではまとめて報告する。

S F 25（図版29・30）（写真図版28）

a区画で検出された石列である。築地堀などの基礎と考えられるが、上部構造を削平される。2段の石列が東西方向に検出され、検出長8.4m、幅1.4m前後である。用いられる石材は60～80cm前後の自

然石が主体である。石列の末端は調査区のほぼ中央で途切れる。

S F 8(図版31・33)(写真図版29・34)

c区画北端で検出された。個別の柱穴は検出深さが40cm前後と深いもので、2列の柱穴で構成される。さらに東側に伸びていると推定される。柱穴は掘り方が概ね円形ないし楕円形のもので、柱間は1.8m前後、柱列の幅は1.2m前後を測る。2列であるため土壠などの基礎の可能性も残されるが上部構造を欠くため、とりあえず柵として報告した。

S F 29(図版31・33)(写真図版31・34)

d区画で検出された。5基の柱穴が並ぶもので、さらに東側に伸びているものと推測される。柱間は1.4m、柱穴は平面円形ないし楕円形で直径50~60cm、検出深さは50~60cmである。

S F 96(図版31・33)(写真図版33)

d区画南端、柱穴が稠密に検出された地点に重なって検出された。基本的に4基の柱穴ないし礎石が2列平行する。S F 8や23と同様の性格を持つ区画施設である。検出範囲での長さは5m、柱列の幅は1m前後、柱間は1.9~2mである。ただし、西端のP 100~101・P 104~108は0.9~1m前後で半開幅となる。P 96・P 102・P 103からは唐津焼が出土している。この地区的他の柱穴ではS B 5のP 131から土器類93が出土したので、明らかに17世紀前半頃と判明する土器の出土はS F 96に集中する。本遺構はS B 82に重なって検出されたが、他の柱穴に遺物がほとんど混入しない事実を重視すれば、S B 96が先行する築城期のもので、その後屋敷改変に伴ってS F 96が設置されたことが想定される。

石組溝

S D 24(図版29・30)(写真図版28)

a区画南端、護岸石垣に向かって流れる石組み溝である。護岸側に蓋石が検出される。S D 79と同様、壁石材の裏にはグリ石が充填される。検出範囲は長さ3.5m、溝幅は0.4m前後で、ほかの石組溝と共に通する。溝底には敷石が敷かれ、西側の護岸に向かって傾斜する。溝の末端は敷石のみが検出され、不完全な形で終わる状況からみると、元々はさらに西側に伸びていたものと考えられる。

土坑

2A区の土坑と同様に廐棄土坑と推定される遺構が検出されている。具体的にはS K 7・20の2基がある。両者は50mほど離れて検出されるが、その間は遺構がほとんど検出されない。

S K 7(図版31・33)(写真図版29)

c区画の東壁に検出された廐棄土坑で、東側にさらに半分が伸びる。平面は円形に近い土坑で、円錐形の緩やかな側壁を持つ。土坑の直径は5.8m、深さ0.9mである。埋土は黒褐色の疊混り土で下層に人頭大の礫が多量に投棄されていた。陶磁器などの遺物や瓦はほとんど出土していない。

S K 20(図版29・33)(写真図版28)

a区画で検出された土坑である。平面は不定形で、東西6.1m、南北5.2mを測る。本土坑は広い範囲を浅く掘削するもので、瓦が敷き詰めるように多量に出土している。

S K 16(図版29・30)(写真図版28)

a区画北側、石垣2の西南に隣接して検出された。備前焼甕を据えた埋甕土坑である。ただし、甕内に針金や鉄鍋の取手などの現代遺物が捨てられていた。また、検出された地点が近代以降の改変を受けた場所であることから甕を据えた時期は新しいと考えられる。

(4) 3区

3区は、京橋の南側から天神橋の北側までの範囲で、周辺は平福御殿屋敷跡の城下にあたる。調査の結果、掘立柱建物・礎石建物・柱穴・溝・土坑・擾乱土坑を検出している。(図版34~37)

掘立柱建物

掘立柱建物は、S B 171・172・173・157の4棟を検出している。

S B 171(図版34・37)(写真図版36・38)

a区画中央部に位置し、S B 172とは重なり、S B 173の北辺とは近接する。桁行1間以上、梁行2間の柱並びの良好な側柱建物である。西側部分のみを検出しており、東側は調査区外へ続くと考えられる。桁行はP 102-P 105間で1.8m、梁行はP 102-P 91間で3.7mを測る。棟軸方向はN 78°Wである。柱穴は直径40cm前後である。

S B 172(図版34・37)(写真図版36)

a区画中央部に位置し、S B 171と重なり、S B 173の北辺と近接する。桁行1間以上、梁行2間の柱並びの良好な側柱建物である。西側部分のみを検出しており、東側は調査区外へ続くと考えられる。北西隅の柱穴は検出できなかった。桁行はP 89-P 95間で1.6mで、梁行はP 99-P 89間で1.72m、2区分の推定値は3.16mを測る。棟軸方向はN 80°Wである。柱穴は直径44cm前後である。

S B 173(図版34・37)(写真図版36・38)

a区画中央部に位置し、S B 171・172の南辺とは近接する。桁行4間以上、梁行1間以上の柱並びの良好な側柱建物である。北西側部分を検出しており、南東側は調査区外へ続くと考えられる。桁行はP 92-P 78間で8m、梁行はP 92-P 97間で1.48mを測る。棟軸方向はN 10°Eである。柱穴は直径44~52cmである。

S B 157(図版35・37)(写真図版37・38)

b区画に位置し、SK 52の北側にある。桁行4間、梁行1間以上の柱並びのやや悪い側柱建物である。西側部分を検出しており、東側は調査区外へ続くと考えられる。桁行はP 61-P 56間で7.9m、梁行はP 56-P 65間で2mを測る。棟軸方向はN 11°Eである。柱穴は直径38~44cmである。柱穴の一つであるP 59から施釉陶器の鉢(153)が出土している。

礎石建物

S B 163(図版36・38)(写真図版37)

d区画の南側に位置し、擾乱土坑29の南に隣接する。桁行1間以上、梁行2間である。西側部分を検出しており、東側は調査区外へ続くとみられる。桁行はS 165-S 164間で16.8m、梁行はS 165-S 167間で4mを測る。棟軸方向はN 83°Wである。建物の北側に隣接して、S 168-S 170の礎石列が位置する。S 168-S 169間は1.5mを測るが、S 169-S 170間は2.7mを測り、この間に礎石が1基存在した可能性がある。また、この礎石列の軸方向はN 78°Wであり、S B 163の付属施設の一部と考えられる。礎石の大きさは約30~40cmで、礎石上面の標高は概ね1312mを測る。

溝

S D 131(図版34・38)

a区画北側で、佐用川に面して位置し、北西-南東を指向する。西側は調査区外の、少なくとも佐用川の手前まで続くとみられる。検出面で残存長3.7m、最大幅1.44m、深さ18cmを測る。埋土の横断面は逆台形状を呈する。埋土は炭化物を含む1・2層の上下2層があり、主に1層から遺物、土師器小皿(154・155・157・158)、土師器灯明皿(156)、唐津焼皿(159~161)が出土している。

土坑

3区では、SK 76・74・69・52・51・42・39・5・4・3・2・1・160を検出している。

SK 76(図版34・38)

a区画中央、SB 173の西側に隣接して位置する、平面長楕円形の土坑である。検出面で長軸1.86m、短軸0.66m、深さ10cmを測る。

SK 74(図版34・39)

a区画中央、SK 76の南東に隣接して位置し、SB 173に切られる。土坑の西側部分のみを検出し、平面は歪な半円形を呈する。東側は調査区外へ続く。検出面で長軸3.9m、短軸1.9m、深さ14cmを測る。染付磁器椀(167)が出土している。

SK 69(図版34)

a区画南端、P 62の北東に位置する。西側のみ検出しており、東側は調査区外へ続く。検出部の平面は半円形、断面は皿状を呈する。検出面で直径0.74m、深さ12cmを測る。土師器甕(174)が出土している。

SK 52(図版35・39)

c区画北側に位置する。東側のみ検出しており、西側は後世の搅乱を受ける。残存部の平面は歪な隅丸形状、横断面は逆大形状を呈する。検出面で長軸5.4m、短軸1.5m、深さ15cmを測る。

SK 51(図版35・40)

c区画南端、SK 42の東に隣接して位置する。西側のみ検出しており、東側は調査区外へ続く。検出部の平面は隅丸方形で、横断面は箱形を呈する。検出面で残存長軸1.6m、短軸1.5m、深さ70cmを測る。土師器小皿(166)が出土している。

SK 42(図版35・40)

c区画南端、SK 51の西に隣接して位置する、平面長楕円形の土坑である。検出面で長軸2.54m、短軸1.2m、深さ42cmを測る。土師器小皿(162・163)、瀬戸焼天目椀(164)が出土している。

SK 39(図版35・39)

c区画南端、SK 51の南に隣接して位置する。西側のみ検出しており、東側は調査区外へ続く。検出部の平面は歪な隅丸方形で、横断面はやや袋状を呈する。検出面で長軸4.12m、残存短軸0.98m、深さ68cmを測る。土坑内には約10~30cmの大の多量の石が集積しており、廃棄土坑と推測される。

SK 5(図版36)

f区画南端に位置し、SK 3の北西側に隣接して位置する鋳型廃棄土坑である。東側のみ検出しており、西側は調査区外へ続く。平面円形、断面は半円状を呈する。検出面で長軸0.8m、短軸0.6m、深さ50cmを測る。SK 4よりかなり少ないが、鋳型(C 18・22・24~26)が出土している。

SK 4(図版36・40)(写真図版39)

f区画南端で、SK 2の北に位置する、直径1.1mのやや歪な円形の鋳型廃棄土坑である。深さ62cmを測る。埋土1・2層目から鋳型(C 1・4・6~12・14~17・19・20・23・27)が出土している。

SK 3(図版36)

f区画南端で、SK 2の西側に隣接して位置する鋳型廃棄土坑である。平面は円形、断面は皿状を呈する。検出面で長軸0.8m、短軸0.6m、深さ50cmを測る。鋳型(C 2・3・5・13)が出土している。

SK 2(図版36・40)

f区画南端で、SK 4の南側に隣接して位置する。平面は歪な楕円形、断面は皿状を呈する。検出面で長軸4.6m、短軸2m、深さ10cmを測る。埋土には焼土を多く含み、SK 3・4・5と関連する鋳造

関連の遺構と推測される。

SK 160・161(図版36・40)

f区画南東隅で、SK 2の南側に隣接して位置する。北西部分のみ検出し、他は調査区外へ続く。検出部の平面は重な扇形、断面は皿状を呈する。検出面で長軸1.34m、短軸0.9m、深さ12cmを測る。埋土には焼土を多く含み、SK 3・4・5と関連する鋳造関連の遺構と推測される。

SK 160・161(第20図・図版36)(写真図版39)

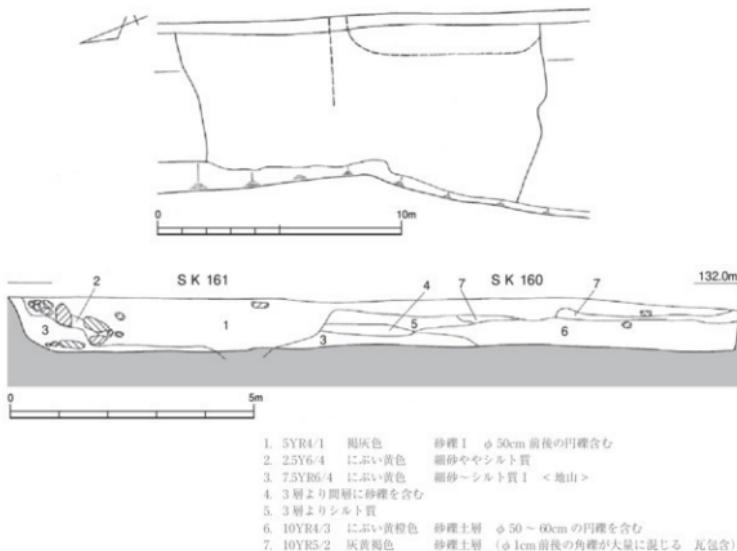
3区e区画、SB 163の南側で土坑ないし溝の可能性がある遺構が検出された。当初は擾乱と考えすべてを掘削せず、側溝と中央の断ち割りトレーナによって様相を確認にするに留めたが、その後、埋土などの状況から近世初頭の遺構と認識した。北側のSK 161は幅5m、深さ0.6mで溝になる可能性がある。一方、南側のSK 160は土坑で長さ8m、深さ0.6mの規模である。

擾乱土坑

3区では、資料価値の高い遺物が出土する擾乱土坑29を検出しており、ここでは特別に報告する。

擾乱土坑29(図版36)

d区画の中央付近に位置し、SB 163の北側に位置する。長軸2.8m、短軸2.2m、深さ41cmを測る。佐用川の近現代の佐用川の護岸に関わる擾乱土坑と考えられ、花生(169)が出土している。



第20図 SK 160・161 平・断面図

第4章 出土遺物

第1節 土器・陶磁器

(1) 概要

調査によって出土した遺物は瓦を含めてコンテナ 170 箱分に及んだ。出土遺物は土師器小皿・皿・鉢、中国産の白磁、染付、備前焼擂鉢・壺・小壺・壺・徳利・盤・建水、花生・水滴・茶入・唐津焼皿・碗・鉢、伊万里焼皿・瀬戸焼小丸皿・天目碗・志野焼・織部焼、中国産の白磁杯・皿・染付皿・碗・青磁碗などの陶磁器、土鉢などの土製品がある。このほか、下層の河川氾濫による洪水糞と推測される堆積層から古墳時代の壺・壺が出土している。

(2) 1区および2A区

1区で図示できた遺物は備前焼擂鉢 87 のみである。近世 I 期 b 段階のもので、口縁部が肥厚し、内面に段を持つ、放射状の鉄目も観察される。

2 A 区では北端の遺構集中地区に多くの遺物が出土している。さらに S D 69、S K 74 などの周囲、S D 79 の周囲などに一定量が出土している。

柱穴(図版 43)

P 38 土師器皿 1 がある。糸切り底の底部片で体部を欠損するため詳細は不明である。

P 46 瀬戸焼天目碗 2、備前焼擂鉢 3・4 がある。2 はハの字に開く体部で口縁部を屈曲させる。暗黒褐色の鉄釉を厚く施す。備前焼 3・4 は口縁部が拡張し、器壁が肥厚したもので、内面に面を持つ近世 I 期 b 段階の製品である。

P 93 備前焼擂鉢 5 がある。小振りの擂鉢で口縁部が肥厚するが外面の四線はやや目立たない。鉄目は放射状に施されるが間隔がやや粗い。近世 I 期 b 段階の製品である。

土坑・溝・石組溝(図版 43・44)

S K 48 土師器皿 6、備前焼擂鉢 7 がある。6 は在地系の皿で丸い体部を持ち口縁部がやや厚手になる。

擂鉢 7 は近世 I 期 b 段階のもので、斜めの鉄目を持つ。

S K 62 土師器小皿 8 がある。手づくね皿でハの字に開く体部を持つ。

石列 60 伊万里焼皿 40 が、石列 60 の石材脇から出土した。輪花皿で内面に風景文、体部に渦文を描く。北端瓦瀬り S K 62・石列 60 の周辺で検出された遺物である。遺構面上層に堆積した土砂に含まれたもので、厳密には一括性はないが一まとまりの土器として報告する。土師器小皿 27・皿 28・壺 29・30、中国産染付皿 31・碗 32~35、備前焼擂鉢 36・37・徳利 38、唐津焼皿 39 がある。

土師器小皿 27 は手づくね、丸い体部で口縁部をやや肥厚させておえる。皿 28 は糸切り皿である。29 は壺の口縁部細片、30 は直立する体部を持ち、外面の鉄目はナデによる凹凸によって表現する。口縁部の小片のため体部下半の詳細は不明であるが、残存部にはタタキ痕跡は確認されない。

中国産の製品は 31 が端反り皿で外面に花文を描く。碗はいずれも丸く立ち上がる体部を持つもので、32 が外面に草花文、33 は外面に御所車、34 が魚と荒磯文、内面に四方博文を描く。35 は端反りになる。

備前焼 38 は底部が大きく、口がすぼまる器形で、頸部には絞り目が観察される。外面は板状工具によって器面調整を行う。36・37 の擂鉢はやや板状の口縁帶であるが肥厚した個体で口縁部内面に面を持つので近世 I 期 b 段階のものである。唐津焼皿 39 は碁笥底になる個体で、胎土目のトチン痕跡が確認される。

S K 72 土師器皿 10 を図示した。糸切り皿で薄手の造りである。

S K 74 多量の瓦に混じって、土師器皿 12 ~ 14、備前焼擂鉢 24・盤 25・建水 26、中国産白磁碗 23・染付碗 21・22、唐津焼碗 17 ~ 19・皿 15・16・大皿 20 などが出土している。

12 ~ 14 は糸切り皿で 12 は体部を直線的に開き、底部の器壁が厚い。13 は底部を欠く、14 は杯に近い器形である。備前焼は 24 が近世 1 期 b段階のものである。口縁部内面に段を持つ。盤 25 や建水 26 は茶陶関係の製品である。

唐津焼は皿 15・16 が胎土目では体部中位に段を持つ。碗は 17・18 が口縁部を玉縁状にする。19 は腰が直線的に立ち上がる個体でしっかりした削り出し高台を持つ。

中国産の磁器は腰を丸く立ち上げ碗形にする白磁 23、外面に植物文を描く染付 21、口縁部を端反にする染付 22 がある。22 は外面に窓の中に花文を描き、内面口縁部に四方捺文、腰部に芭蕉文を描く。

S D 68 中国産青磁碗 42 がある。底部の小片で S D 68 の拡張区から出土した。15世紀代のものである。

S D 79 土師器皿 44、唐津焼皿 45・小碗 46・壺 47 などが出土している。44 は厚手の手づくね皿で口縁部は丸く肥厚する。京都系土師器の技法を踏襲するが器高が低く、厚手になる。唐津焼は皿 45 と碗 46 がある。45 は藁灰釉で体部を内湾させる。46 は小碗で胎土目である。47 は落とし蓋が付く壺の口縁部片である。白濁した釉をかける。

S K 102 備前焼小壺 41 が出土した。小壺の底部片である。

壠(図版 44)

壠 1 は最下層の泥土を中心に遺物が出土している。出土遺物には土師器皿 48・49、中国産白磁杯 58、唐津焼碗 55・碗 50 ~ 54・鉢 56、伊万里焼皿 57 などの近世初頭のものと、染付磁器碗 59・皿 60、陶器鉢 60、硝子瓶 62 などの近世後半~近代のものがある。近世初頭の遺物は唐津焼が多く目立った。

土師器の 48・49 は糸切り皿で体部をハの字に開く。中国産白磁杯 58 は腰を丸く湾曲させるタイプで、体部上半から上を欠く。57 は初期伊万里の皿である。器面は濃灰色の色調で、内面に図像化された文様が描かれる。白磁 58 は腰が湾曲しながら立ち上がる器形である。

唐津焼碗 55 は胎土目で、高台が小さく基筒底に近い形態のもので、体部中位で段を持つ。50 ~ 52 は底部片で、51 には胎土目が観察される。53 は筒形の碗である。54 は口縁部を端反りになる。口縁端部を外側に折る器形で腰を張り、高台は比較的小さい。56 は一方に注ぎ口を持つ鉢である。丸く内湾しながら立ち上がる体部で外面に図像化されたぐりぐり文と葦の葉を描く。

近世後半~近代の遺物は 59 が植物文を転写した染付の小碗、60 も外面に植物文あるいは花卉文を描く染付皿である。61 は体部中位が窪む器形で外面に山水図を描く。62 は薬や化粧水などの小瓶である。

包含層(図版 45)

土師器小皿 63、皿 64 ~ 66、瓦質土器鉢 67、中国産白磁皿 68 ~ 70、同染付皿 71・碗 72 ~ 75・青磁碗 76、唐津焼皿 77・80・碗 78・79、瀬戸焼丸皿 81・志野焼向付 82・織部焼向付 83・織部(器種不明) 84、備前焼盤 85・皿 86・擂鉢 87 ~ 91・大甕 92 がある。

63 は糸切り皿で、内湾する短い体部をもち口縁部を丸く終える。64・66 は杯形になる器形で、糸切り皿である。65 は手づくね皿である。67 は小型の鉢で外面に左上がりの平行タタキを残す。

中国産の磁器は 68 ~ 70 が端反りの白磁皿で 71 が基筒底タイプのもの。外面下部に芭蕉文を描く。碗 72 は外面に幾何学的な花文、口縁部および内面に回線、73 は口縁部に回線、外面にワンポイントの雲を描く。74 は外面に芭蕉文、口縁部外面に渦文、内面に回線を描く。75 は緩頭芯タイプの碗 E である。高台内に大明年製の銘、内面見込に人物文を描く。76 は青磁碗である。外面に形散化して線刻となった蓮

弁文が観察され、内面見込みに草花文が陰刻される。15世紀代のものである。

唐津焼は皿 77 が濃い緑色の施釉で、小さな高台をもつ。78・79 は碗で高台が断面方形に削り出され、腰が渋曲しながら立ち上がり体部を直線的に上方に向ける。78 は胎土目を持ち、杯オリーブ色の施釉を施す。79 は高台の細かいヘラ削り痕跡が残る。

瀬戸焼の丸皿 81 は内面に花文印刻する。志野焼 82 は白濁して貫入の目立つ個体である。織部焼 83 は内面に花文を印刻する。同じく 84 も織部であるが鉢か皿の細片と思われるが、器種は不明である。

備前焼 85 はハの字に開き口縁部を上方に尖らせる。86 は薄手の造りで内湾しながら立ち上がる体部を持つ。高台は輪高台である。擂鉢 87～91 はすべて口縁部が肥厚して内面に面を持つもので、87 では放射状の鋸目を持つ。近世 1 期 b 段階に位置づけられる。92 は肩部の破片である。胎土は田土で焼成は堅緻である。

(3) 2 B 区

2 B 区の遺物は多くない。全体的には 2 A 区同様に廃棄土坑からの出土が多くを占める。この他、南側に集中する柱穴からも一定量の土器が出土している。

柱穴(図版 46)

P 13 土師器皿 93 は口縁部に煤痕跡が残されるため灯明皿である。口縁部を横ナデし、尖らせ気味におえる個体で、底部を欠くが手づくね皿で京都系土師器である。

P 96 土師器皿 94 は体部が内湾気味に立ち上る個体で、口縁部を丸くおえる。底部を欠くが糸切り底である可能性が高い。

P 103 唐津焼天目碗 98 は口縁部を欠く個体で、体部を内湾気味に立ち上げる。にぶい黄橙色の釉で高台に縮締じわが観察される。胎土目である。

P 102 中国産染付碗 97 は口縁部の小片である。口径が小さく、薄手で退化した器形である。内面口縁部に回線、外面に植物文様と回線を描く。

P 29 近世陶器碗 96 は筒型碗で底部を欠く。外面に幾何学文を陽刻する。関西系陶器であるが产地不明である。近世後半のものである。

P 131 土師器皿 95 は口縁部の破片で、底部を欠く。手づくね皿であるが腰部を湾曲させて立ち上げ、口縁部を丸くおえる。

P 107 唐津焼大皿 99 はにぶい黄橙色の釉で、内面に鉄絵を描く絵唐津である。体部の小片である。

土坑・溝(図版 46)

S K 7 土師器皿 100～102、瀬戸美濃焼天目碗 104、志野焼 103(器種不明)、備前焼徳利 107・小壺 108、唐津焼碗 105、中国産染付碗 106 がある。

100～102 はいずれも糸切り底の皿で体部が短く立ち上がる器高の低い器形である。104 は天目碗、103 は志野焼の細片で鼠志野と思われるが器種は不明である。107 は徳利の口縁部片で鉄絵をかける、108 は底部片である。105 は輪高台をもつ。106 は口縁部を外反させる碗で外面に抽象化した植物文を描く。

S K 16 備前焼壺 118・119 がある。この土坑は埋壺遺構で、壺を据えるための遺構あるが、2 個体とも口縁部を欠損するので時期の詳細は不明である。ただし胎土や肩部のプロポーションからみると近世 I 期(慶長期)以降の製品と推測される。

S K 20 土師器皿 109、備前焼擂鉢 110、唐津焼皿 111・112 がある。109 は糸切り底の皿で体部をハの字に開き、直線的に立ち上げる。110 は体部の破片であるが、放射状の鋸目が観察され使用痕跡が顕著

である。111・112は体部中位に段を持つ個体で、2個体とも砂目のトチン痕跡が残る。112は高台部にもトチン痕跡が顕著で、ざっくりとした削り出し高台である。

S K 37 土師器皿 113、唐津焼碗 114 がある。113は型作り(内型)の皿で外面底部周辺をミガキ調整する。114は口縁端部を外反させる。器表に貫入が顕著で、口径 9.15cm の小型碗である。

S K 89 中国産染付碗 115 がある。外面に花文、内面下半に回線を描く。

S D 17 土師器皿 116・117 がある。116は磨滅するが口縁部を横ナデし、端部をつまむもので、京都系土師器と考えられる。117は底部に直径 1cm 大のものと、口縁下部に直径 0.3cm の穿孔を持つ。

包含層(図版 47)

土師器皿 120、土鉢 121、中国産染付碗 122・123、志野焼向付 124・織部焼筒花生 125、備前焼水注 126・127、唐津焼皿 131・鉢 128・大皿 129・130・132などがある。瀬戸焼系の 124～126 や、備前焼の 124～127、さらに唐津焼 128～132 などは茶陶関係の製品と評価できる。

120は口縁部の小片である。121は型物であるが、下半を欠損する。122は外面に花文を描き口縁部および、内面下半に回線を巡らす。123は粗製の製品で見込に花文を描く。124は器種不明であるが白濁した釉に鉄絵で文様を描く。125は型物の製品で薄手の造りである。126は型物の注ぎ口を持つ備前焼水滴で、下彫れの器形を持ち、下部をケズリ調整する。127は型物の備前焼の肩衝茶入である。

128は唐津焼の鉢で堀 1 出土の 56 などと同様の器形と推測される。129・130・132 は大皿で、129 は内面に鉄絵を描く。131 は甚簡底の皿で体部中位に段を持つ。

(4) 3区

3区でも備前焼・唐津焼・瀬戸焼などの茶陶関係の器種が含まれる。

柱穴(図版 48)

P 16 備前焼壺 152 が出土した。肩部の破片である。

P 59 土師器皿 154 が出土した。糸切底の皿で体部を直線的に立ち上げる。

P 62 中国産白磁小壺 151 が出土した。底部片である。

P 98 土師器皿 150 がある。体部は直線的に立ち上がるもので、短くハの字に開き個体である。

溝・土坑(図版 48)

S D 131 土師器皿 155～158、唐津焼皿 159～161 が出土した。155～158 はすべて糸切り皿でハの字に開くタイプの 155・157・158 と、体部中位をくの字に折る 156 がある。159～161 はすべて胎土目で 159 は体部中位、160・161 は内面底体部の境付近で段を持つ。すべて藁灰釉である。

S K 42 土師器皿 162・163、唐津焼 164、瀬戸焼天目碗 164、備前焼擂鉢 165 が出土した。

162・163 は糸切り皿で、162 は体部中位をくの字に折る。164 は天目碗で鉄さびは施さない。165 は近世 I 期 b の製品で、口縁部内面に段を持ち放射状の鉗目を持つ。

S K 52 土師器皿 166 が出土した。手づくね皿で厚手、粗製の皿である。内面底部がやや隆起する。

S K 74 中国産染付碗 167 が出土した。口縁部に回線を巡らし体部にワンポイントの模様を描くものの破片のため詳細は不明である。

S K 160 志野焼向付 168 を国示した。今回の調査で最も残りの良い志野焼である。三足の足がつくが、器形は平面四角形と思われる。白濁した釉に鉄絵で内面に花文、口縁部に植物文を描く。

包含層(図版 47・48)

主として3区南側から出土したものが多い。出土遺物は土師器小皿133・皿134～137、唐津焼皿138～141・碗142・143・鉢144、備前焼壺147・擂鉢148・149、中国産染付小壺145・碗146がある。

土師器皿は133～135が糸切り皿であるが、体部底部を含め全体にナデ調整を施す。133は内面および口縁部に油脂分が付着するため灯明皿である。136・137は底部を欠くが口縁部の状況から手づくね皿で京都系土師器皿と思われる。136は薄手の個体であるが、口縁部を丸くおえる。137は口径14cmとやや大振りで厚手の皿で、137と同種のものである。

唐津焼皿138は絵唐津で、体部中程を軽く屈曲させる。内面には沈線状の段を持つ、器表は淡褐灰色を呈するもので墨灰釉である。胎土目を持つ。140も同種の個体であるが絵唐津ではない。トチンは胎土目で高台内に縮緬じわが観察される。141はボタン状の大きなトチンで砂目である。142は口縁部を外反させて丸くおえる個体である。143は筒型の器形で外面に縱筋の文様を持つ。144は腰が弯曲して立ち上げ、体部が中位から直立する。

備前焼壺147は胴部の破片である。水挽き痕跡が顯著に残される。備前焼擂鉢148・149は口縁部が近世I期b段階で、口縁部が上下に拡張し、内面に段を持つ。

このほか攪乱土坑29から出土した備前焼置花生169がある。3脚の獸足をもつ個体で、器高の割に口径がやや大きい。胴部と頸部の境に2条の凹線をもつ。器形から見ると徳利であるが獸足の付く点や膨らんで拡張した口縁部の形態からは花生と考えられる。ただし、同一の器形はほかに類例を見ないものであるため特注品の可能性が高い。京都下白山町などに口縁部の形態が類似したものや、獸足が付いた花生があるものの同一の形態は確認できない。

(5) 近世初頭以前の遺物(図版 49)

平福御殿屋敷の時代より古い遺物も少量であるが出土している。弥生土器壺172・173、古墳時代の土師器小型丸底壺175・176、壺174・177、中世前半(13世紀代)の須恵器碗170・鉢171がある。

弥生土器172は口縁内面に円弧文を加飾し、外面に刻み目文を施す。173は口縁部に凹線をもつ。175・176は内面をハケないしナデ調整、外面をハケ目調整する。174・177は外面にハケ目を施し、177は内面にケズリ調整が観察される。170は底部片で、171は口縁部が断面三角形になる。

(6) 土器・陶磁器の小結

今回、平福御殿屋敷から出土した遺物は土師器や瓦質土器などの在地で生産されるものが限定され、備前焼・瀬戸焼・唐津焼などの国産陶器と染付・白磁・青磁などの中国産の磁器などの広域流通品が多く出土していることに特徴がある。これらの遺物群の年代は唐津焼皿・碗に胎土目が多いこと、備前焼擂鉢・壺は近世I期b・c段階が主体を占め、胎土は暗紫灰色のものが目立つ点、瀬戸焼の志野焼・織部焼が含まれるなどの点からは、17世紀代初頭頃に遺物群の主体があると評価できる。ただし、伊万里焼皿40・57が含まれる点や、唐津焼に砂目の製品(皿111・112・141、半筒碗143)が混じる点などは後出の要素である。特に伊万里焼の出土からは1630年代の廢城時(寛永8年)までの遺物群を想定する必要がある。ただし、これより後出の遺物は近世後半から近代のものを除くと全く出土していない。この点からは、利神城跡の機能年代と出土遺物の年代は一致しており、廢城と同時にこの場所全体が耕作地になつた(「田住家文書」といわれるが、これは考古学的にも検証される。ただし、出土遺物が17世紀前半に主体があり元和期以降の遺物群がごくわずかである点は注意が必要であろう。御殿屋敷内部の利用の

仕方に変化が見られた可能性も想定されるので、今後の検討が必要であろう。

次に、在地産の土器器について少し検討を加えておきたい。皿については京都系土器器が含まれるが、肥厚して器高の低い個体が多く、小皿がほとんどない。在地産では手づくね・糸切りの両者が見られる。鍋は29・30などがごくわずかに含まれ、30ではナデによって窓の凹凸を作り出している。ただ、16世紀後半からの播磨では土器系の煮炊具の出土量が減少傾向にあり、基本的には鉄鍋に比重が傾いていると思われる。(山上雅弘 2013) さらに、3区南端から出土した鋳型に鍋型があることなど、平福周辺では少なくとも築城期前後から煮炊具は鉄製品が主流となっていることは疑いがない。

最後に、今回の調査では備前焼の置花入や盤・建水・水注や瀬戸焼では志野焼・織部焼・唐津焼では大皿・鉢・壺などが出土しており、茶陶などに関係する嗜好品が多く含まれている点が注目される。

17世紀初頭の都市遺跡では一般的な組成といえるが、調査区全域に渡る点をみると、この場所が茶陶などの文化的な生活レベルを持った人々の居住地であったことを示している。

そして、これらの出土地点が郭内2A区に限られない点も重要で、特に3区南端で備前焼花生169や志野焼向付167が出土している事実は、城下の構造論とも関わって御殿屋敷および平福の町の形成を読み解くうえでも重要な問題を提起している。

第2節 その他の遺物

(1) 鋳型(図版54～57)(写真図版63～66)

鋳型関連の遺物は3区の南端で検出された土坑から出土した。出土した鋳型には鍋の内型C1・外型C2～15・24・25、じょうC26・27・三叉状土製品C23、鋤先型C16～22などがある。これらの中型が出土した土坑は3区のSK3・4・5などである。

鍋内型 C1の細片1点のみである。湾曲部側に真土が付着することから内型とした。

鍋外型 C2～15は内面に真土が残る。C2・3は鍋型の合わせ目の部分と思われる。C4は鍋の底部分で逆転して鋳るため湯口に近い部分と推定される。C6～14・15は胴部の破片である。C14は鍋型の端部である。C24・25は型の湯口の部分である。

じょう C26・27型の最下部の部分でこれを土台として上の型を載せる。型と違って使い捨てではなく何度も使用するものである。

鋤先型 鋤先型は上型・下型・中子の3つの型で構成されるが、C16～19は上型の芯にあたる。上型は真土の貼り付け面(型となる面)にキリで格子状の刻み目を入れる。出土品では上面に僅かに真土が残される。一方、出土した型は長方形であるが、類似するものに鏡型がある。ただし、鏡型は一方が細くなる形状を持つので鋤先型とした。

不明 C21・22も鋳型と思われるが部位は不明である。

三叉状土製品 C23鋳型を焼成する際の土台となるものである。手づくねで造られている。

(2) 石製品(図版50)(写真図版61)

石製品は墓石である宝篋印塔S1・一石五輪塔S2、長方形石材S3がある。S1は宝篋印塔の頭部である。凝灰岩製のものである。S2は火輪が直立し、水輪が小さくなつたものである。S3は石材である。製品に加工する以前のものと思われる。表面にノミ痕跡が残る。

(3) 金属製品(図版 51～53)(写真図版 62・63)

金属製品は鉄製品が釘・火箸・小札・小刀・財壺金具・留金具、鉛製品が鉄砲玉(三つ玉)、銅製品が笄・茶托・錢貨・煙管、そのほかに鉄滓がある。

武器(図版 52)(写真図版 62)

鉄砲玉 M 47 は船製の鉄砲玉である。形状は半球形であり、法量は直径 1.5cm、厚さ 1cm、重量は 11.66 g である。底面には凹凸がみられず、底面から曲面にかけてなだらかに連続する。その形状から、球形の個体が破損あるいは変形したものとは考えられず、半球形の外型に湯を流し込んで作成したものと思われる。火繩銃の銃弾として、和紙で包んだ 3 個の玉を一度に込める場合があった〔三つ玉」とよぶ〕が、銃の破損を防ぎ、弾速を得るために、同大の玉 3 個を使うことはなかったとされる。秘伝書「玉こしらえの事」には、球形の弾の前後に半球形の弾を配置して「三つ玉」とする場合が示されている(宇田川 2002)。この半球形の鉄砲玉は、單発の銃弾よりも威力を増すために工夫された「三つ玉」等を構成するために作られた銃弾と思われる⁽¹⁾。

小札 M 46 の 1 点がある。下半を欠損するもので、頭部は隅丸の方形で、穿孔が 5 か所残される。

刀子 M 48・49 の 2 点がある。M 48 は反りを持つが、M 49 は直刀である。

小柄 M 52 は柄の部分である。

釘(図版 51・52)(写真図版 62)

M 1～M 40 の 40 本を図化した。すべて断面が方形を呈する和釘である。M 1～4・M 6～20・22～25・27・29 は頭巻き釘、M 26・28・30 は皆折釘である。M 5・21・31～34・36～40 は頭部を欠損するので不明。M 1～13 は 2～3 寸、M 14～19・27～35 は 3～4 寸、M 20～23・36～40 は 5～6 寸前後の釘と思われる。

その他(図版 52・53)(写真図版 62)

銅製品 笄 M 42・43 および、茶托 M 58 がある。M 58 は底部片である。輪高台を持ち、内面見込みに茶碗を受ける輪状の突起がある。煙管 M 59・60 の 2 本がある。M 59 は吸い口部分のみで、M 60 は銅製の一体型の製品である。

瓦釘 M 44 は瓦釘もしくは工具と思われる。

火箸 M 45 は火箸である。

留金具 M 53 は留め金具であるが、門扉などの財壺金具の固定用のもの可能性がある。先端を欠く。

鑄型のバリ M 56 は鋳物から出たバリである。

用途不明品 M 41 は先端に輪状の紐通し穴を持つ。M 50 は毛針状のものである。M 51 は鉄片の切れ端と思われる。M 55 は腐食の進んだ鋳物であるが近代の農具の可能性がある。M 54・57 は、いずれも用途不明の鉄片である。

鉄滓(図版 53)(写真図版 63)

M 61～64 の 4 点を図化した。M 61 のみが 3 区 S K 5 出土で鍛冶工房付近からの出土である。

錢貨(写真図版 63)

いずれも残りの悪いもので採拓できるものはなかった。このため写真のみ掲載した。M 65～68 は熙寧元寶(初鑄年 1068 年、北宋錢)、M 69 は元符通寶(初鑄年 1098 年、北宋錢)、M 70 は至和通寶(初鑄年 1054 年、北宋錢)。M 71 が銭種不明で読める範囲では元□通寶である。この他、M 72 は寛永通寶(初鑄年 1636 年)である。

(4) 木製品(図版58・59)(写真図版67・68)

当遺跡の木製品は、すべて2B区の堀1中層以下の青灰色シルト(粘土)から出土したものである。同層からは自然木や板材、種子や葉等も伴出した。なかでも板材のなかに、厚さ1mm前後の針葉樹と思われる柾目取りのものが多く含まれていたが、幅の分かる個体さえないため、図化していない。

製品は極力図化した。その内訳は漆塗12点、結桶の底板3点、鍵1点であり、このほか、用途不明品6点、建築部材と考えられるものが4点である。

容器(図版58)(写真図版67・68)

漆椀 全形が判明する個体が少ないものの、器形から以下の5つに細分できる。

I類：外傾する口縁、器高が口径の1/4程度の浅い体部、低い高台をもつもの。

II類：外反する口縁、器高が口径の1/2以上の深い体部、挽き込みの深い高い高台をもつもの。

III類：器高が口径の1/2以上の深い体部、挽き込みが極端に浅い高い高台をもつもの。

IV類：直立する口縁、器高が口径の1/2以上の深い体部、挽き込みが深い高い高台をもつもの。

V類：低い高台内の挽き込みが凹面をなすもの。

W1・2は、I類に分類される。漆色は内外面とも朱色であり、この配色はI類に限られる。W1は体部外面に黒色漆で木瓜文と草花文を手描きする。W2は無文である。

W3は、II類に分類される。漆色は内面が朱色、外面が黒色である。体部外面に、金色漆と朱色漆で円弧を主とする文様を描く。

W4・5は、直立する口縁の破片のみであり、分類不可能である。漆色は内面が朱色、外面が黒色である。体部は無文と思われる。

W6～8は、III類に分類される。漆色は内面が朱色、外面が黒色である。W6はII類のW3とまったく同じ施文を行う。

W9～11は、IV類に分類される。漆色は内面が朱色、外面が黒色である。腰の張る個体(W9)と張らない個体(W10・11)がある。W10は体部外面に朱色漆で施文を行う。

第4表 木製品観察表

番号	地区	出土遺構	器種	相模	法量		深さ(高さ)	口縁形状	腰の位置	漆色の 組合せ	漆色 (内面) (外面)	複合 分類		
					口径	底面								
W1	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	漆椀	トカリコ窓	(10.8)	—	24.5	外傾	なし	0.6	朱色	口縁漆1-6	I	
W2	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	漆椀	トカリコ窓	(13.4)	(3.9)	—	外傾	なし	(0.5)	朱色	朱色	口縁漆1-5	
W3	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	漆椀	トドメ4	—	—	6.0	(53.5)	69% 溝立	あり	1.5	朱色	朱色	口縁漆3-4
W4	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	漆椀	トドメ5	(13.8)	(4.4)	—	溝立	—	—	朱色	朱色	口縁漆1-4	
W5	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	漆椀	—	—	(12.8)	(5.0)	—	溝立	—	朱色	朱色	口縁漆1-4	
W6	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	漆椀	トドメ6	—	(5.2)	5.8	—	—	あり	1.2	朱色	朱色	体部下半段有
W7	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	漆椀	トドメ7	—	(4.9)	—	—	—	あり	—	朱色	朱色	体部1-6
W8	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	漆椀	コナラ属コラ筋	—	(7.0)	—	—	—	あり	—	朱色	朱色	体部1-2
W9	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	漆椀	トドメ8	(14.0)	(9.1)	(6.6)	(67.8)	溝立	あり	2.6	朱色	朱色	N
W10	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	漆椀	—	—	(4.6)	—	—	—	なし	—	朱色	朱色	体部1-3
W11	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	漆椀	—	—	(4.3)	—	—	—	なし	—	朱色	朱色	N
W12	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	漆椀	—	—	(4.1)	(6.7)	—	—	なし	0.9	なし	なし	カタハ
測量													※ 测り回数は、各面×1辺×100による	
※ I : 口縁堅型													※ I : 口縁堅型	
番号	地区	出土遺構	器種	相模	身	蓋	底	厚さ						
W13	2B 堀1	中層(青灰色粘土)	結桶	—	(10.3)	(2.8)	0.9							
W14	2B 堀1	中層(青灰色粘土)	結桶	—	(25.4)	(6.8)	1.7							
W15	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	結桶	スギ	(32.9)	(8.2)	2.2							
W16	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	鉢	—	—	22.7	(9.9)	3.7						
W17	2B 堀1	中層(青灰色粘土)	用途不明	コナラ属アガシ集属	11.1	3.3	2.3							
W18	2B 堀1	中層(青灰色粘土)	用途不明	クリ	(11.3)	3.5	2.8							
W19	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	用途不明	コナラ属コラ筋	6.1	3.5	3.0							
W20	2B 堀1	下層(青灰色粘土)	用途不明	マツ属油桐管束集属	(10.4)	(8.9)	1.0							
W21	2B 堀1	中層(青灰色粘土)	用途不明	—	(19.1)	(3.9)	0.8							
W22	2B 堀1	中層(青灰色粘土)	用途不明	—	25.5	0.7	0.4							
W23	2B 堀1	中層(青灰色粘土)	建築用材	—	(53.5)	9.8	6.7							
W24	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	建築用材	—	(19.4)	(5.8)	3.3							
W25	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	建築用材	ヤナギ属	(31.9)	4.9	3.2							
W26	2B 堀1	中層(青灰色シルト)	建築用材	—	(31.7)	7.1	5.1							

※ ()は現在値

W 12は、V類に分類される。全体に残存状況はよくない。見込みの窪みは腐朽によるものであるが、高台の挽き込みは、他の個体と異なって凹面をなしている。体部の残存はわずかで、漆が認められない。

結構 底板の破片を3点図化したが、側板や簾は認められなかった。底板の法量はそれぞれ異なり、中・大(W 14・W 15)の2者には、だば接ぎ手法がみられる。

土木具(図版58)(写真図版68)

鍤 W 16は、中世末に出現し、民具に見られる風呂鍤につながる角先ゲワの風呂部の破片である。台形の柄装着孔をもつ。鉄製の刃部は装着されていない。

建築部材(図版59)(写真図版68)

W 23は、柱状の製品である。上端は平坦に削り、下端を欠失する。貫孔状の穿孔が2ヶ所みられる。孔の大きさは3.9×9.3cmで、相互の間隔は11cmである。

W 24は、柱状の製品である。上端は平坦に削り、下端を欠失する。貫孔状の穿孔がみられるが個数、大きさは不明である。

W 25は、柱状の製品である。上下端を欠失する。図の左辺は本来の形状をとどめるため、2ヶ所以上の切り欠きを持つ、垂木掛のような水平材の可能性もある。

W 26は、柱状の製品である。芯持ち材を切断し、枝を払い、下端を削って細くする。上端は欠失する。

用途不明品(図版58)(写真図版68)

W 17は、円筒形を呈する完形品。中程に刃のあたった痕跡がある。

W 18は、直方体の一方を薄くした形状であり、先端を欠失する。貫孔の余掘りに差し込む楔の可能性がある。

W 19は、角のとれた直方体の一角を落とした形状である。完形品。

W 20は、2ヶ所に穿孔をもつ板状製品の破片である。

W 21は、直方体の製品の一部であるが、両端を欠失する。断面形は台形または多角形である。

W 22は、箸状の完形品である。断面は長方形で、下端は両側からの切り込みによって尖らせる。

註)

1. 兵庫県内では15遺跡から41点の鉄砲玉が出土している。このうち、豊岡城館遺跡(豊岡市)に3点の半球形の鉄砲玉が出土している。形態的な特徴は平福御殿屋敷跡出土例と酷似することを確認した。

第3節 瓦

平福御殿屋敷跡(以下、御殿屋敷)の今回の調査では多量の瓦が出土している。出土した瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・面戸瓦・道具瓦類(鳥食・熨斗瓦)・鬼瓦である。本項では、軒丸瓦・軒平瓦については型式分類を実施し、これに基づいて報告する。その他の瓦については、要点のみを報告する。個別資料の詳細は観察表(第15～22表)を、各部名称や計測部位(観察表はアルファベットに記号変換)については第23図を参照されたい。また、軒瓦については、利神城跡からの出土の有無及び乗岡実氏による利神城跡表採瓦の型式分類(以後、乗岡分類と呼称)(乗岡2001)との対応関係について触れる。

(1) 軒丸瓦(第15表)

本調査で出土した軒丸瓦は、瓦当文様を基準にNM1～14の14型式15種に分類できた。次に、各型式別に報告する。型式分類図(第21図)・型式分類表(第7表)を適宜参照されたい。なお、巴文の巻方向については、巴の頭部に対して尾部が巻き込む方向を示す。

NM1(図版60・61)(写真図版69・70)

11点出土しており、そのうちのT1～6を図示した。瓦当文様は、左巻き三巴文を持ち、内区外縁に13点の珠文を配する。巴文の頭部はC字状にやや強く巻き込む。巴の尾部は、隣接する巴の尾部に付き、圓線状になる。接合する丸瓦の粘土板切離は、基本的に鉄線切りによる。2A区SK74から多く出土する。なお、利神城跡から同范例が出土しており、乗岡分類のⅣ類に対応する。

NM2(図版62・63)(写真図版70・71)

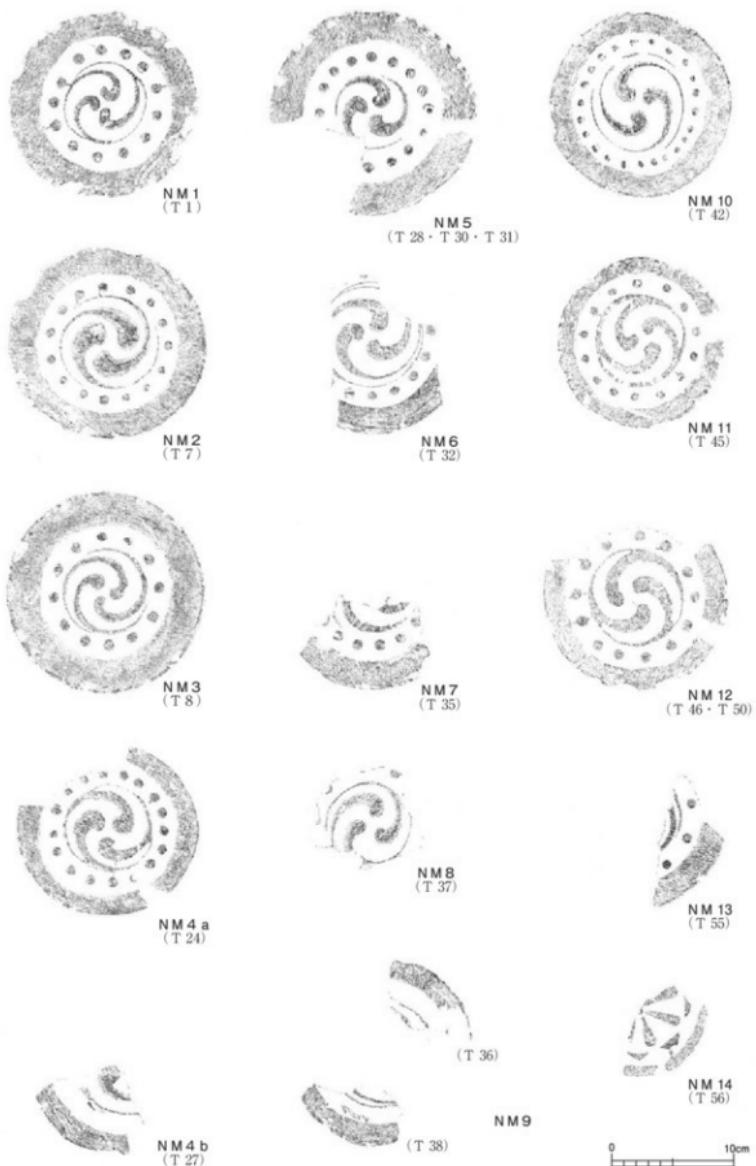
9点出土しており、そのうちのT7～11を図示した。瓦当文様は、左巻き三巴文を持ち、内区外縁に15点の珠文を配する。巴文の頭部は、やや円形で少しくびれをもって巻き込む。全体に肉厚だが頭部に平坦面をもち、周縁よりもやや高く突出する。また、巴の尾部は、隣接する巴の尾部と離れる。接合する丸瓦の粘土板切離は、基本的に鉄線切りによる。なお、利神城跡からは同范例が出土するが、乗岡分類には対応するものはない。

NM3(図版63～67)(写真図版71～74)

28点出土しており、本調査では最多である。そのうちのT12～23を図示した。瓦当文様は、左巻き三巴文を持ち、内区外縁に12点の珠文を配する。巴文の頭部は、ほぼ円形で少しくびれをもって巻き込む。全体にやや薄く、やや丸みを帯びる。また、巴の尾部は長く伸びるが、隣接する巴の尾部と離れる。接合する丸瓦の粘土板切離は、鉄線切り(T13・18)と糸切り(T12・17)が見られる。糸切り痕は、丸瓦短軸方向に残る。出土は2A区(郭内)に集中する。なお、利神城跡からは同范例が出土しており、乗岡分類のV類に対応する。

NM4[NM4a・NM4b](図版68)(写真図版75)

5点出土し、そのうちのT24～27を図示した。瓦当文様は基本的に左巻き三巴文を持ち、内区外縁に17点の珠文を配する。巴文の頭部は、やや円形で少しくびれをもって逆L字状に巻き込む。全体にやや肉厚で頭部に平坦面をもつ。また、巴の尾部は、隣接する巴の尾部に付く。付着部の巴間無文部分の外形は2つの角を持ち、特徴的である。NM4は、内区外縁が未調整のNM4a(T24～26)と外区の珠文を撫で潰すNM4b(T27)に細分できる。T24の接合丸瓦の粘土板切離は、鉄線切りによる。NM4aとNM4bに技法・焼成・胎土面の基本的な差異は認められない。胎土には、大きい粒径の砂が目立つ。出土は2B区(城下)に多い。なお、利神城跡では同范例が出土していない。



第21図 軒丸瓦型式分類図

NM 5 (図版 69・70) (写真図版 75・76)

6点出土しており、そのうちのT 28～31を図示した。瓦当文様は、左巻き三巴文を持ち、内区外縁に珠文を配する。一部珠文は配置間隔が特徴的に狭くなる。珠文数は、利神城出土同範例から15点配することができる。巴文の頭部は、やや俵形を呈し、逆L字状に少しきびれて巻き込む。巴文は全体にやや薄めである。巴の尾部は、隣接する巴の尾部と離れる。巴文径は5.6～6.0cmを測り、今回確認できた型式の中で最小である。接合する丸瓦の粘土板切離は、基本的に鉄線切りによる。出土は2A区(郭内)に集中する。なお、利神城跡からは同範例が出土しており、乗岡分類のVI類に対応する。

NM 6 (図版 70) (写真図版 76)

T 32～34の3点のみ出土している。瓦当文様は、左巻き三巴文を持ち、内区外縁に珠文を配する。珠文数は不明である。巴文の頭部は、やや円形で少しきびれて巻き込む。巴文は全体に薄めで平面的である。巴の尾部は、隣接する巴の尾部と付いて圓線状になる。接合する丸瓦は欠失しており、接合や粘土板切離痕等は不明である。出土は2A区(郭内)に集中する。なお、利神城跡からは同範例が出土しており、乗岡分類のIII類に対応する。

NM 7 (図版 71) (写真図版 77)

T 35の1点のみ出土している。T 35は瓦当面のおよそ4分の1の破片であるため、瓦当文様の大半は欠失している。瓦当文様は、おそらく左巻き三巴文を持ち、内区外縁に高く突出する珠文を配するが、その数は不明である。巴文の頭部は欠失しており不明である。巴文は全体に薄めで平面的である。巴の尾部は、隣接する巴の尾部から離れる。接合する丸瓦は欠失しており、接合や粘土板切離痕等は不明である。なお、利神城跡からは同範例が出土していない。

NM 8 (図版 71) (写真図版 77)

T 36の1点のみ出土している。T 36は瓦当面の巴文部分のみの破片である。瓦当文様は、左巻き三巴文を持ち、内区外縁に珠文を配するが、その数は不明である。巴文の頭部は、やや円形で少しきびれて巻き込む。巴文は全体に薄く、各巴間のくびれ部の無文部は他型式と比べてやや広い。巴の尾部は、隣接する巴の尾部から離れる。接合する丸瓦は欠失しており、接合や粘土板切離痕等は不明である。なお、利神城跡からは同範例が出土していない。

NM 9 (図版 71) (写真図版 77)

T 37・38の2点のみ出土している。T 37・38ともに瓦当面の内区外縁と周縁部分の破片である。瓦当文様は、おそらく左巻き巴文を持ち、内区外縁に珠文を持たない。巴文の頭部については不明である。巴文の尾部はやや薄く、隣接する巴の尾部と付く。内区外縁には文様がなく、NM 4 bとは異なり瓦範そのものに文様を持たない。粘土板切離痕等は不明である。なお、利神城跡からの同範例の出土は不明だが、破片のため断定できないものの乗岡分類I類の可能性もある。

NM 10 (図版 71・72) (写真図版 77・78)

5点出土しており、そのうちのT 39～42を図示した。瓦当文様は、右巻き三巴文を持ち、内区外縁に23点の小さい珠文を密に配する。巴文の頭部は、やや楕円形でくびれを持ち、「フ」字状に巻き込む。全体にやや肉厚で、巴の頂部は頭部から尾部にかけてややにぶい稜になる。また、巴の尾部は長く伸びるが、隣接する巴の尾部と離れる。接合する丸瓦の粘土板切離は、糸切り(T 42)で、丸瓦長軸方向に痕跡が残る。出土は2A区(郭内)が多い。なお、利神城跡からは同範例が出土しており、乗岡分類のII類に対応する。

NM 11 (図版 72・73) (写真図版 78・79)

T 43～45の3点出土している。瓦当文様は、右巻き三巴文を持ち、内区外縁に14点の珠文をやや広い間隔で配する。巴文の頭部は、やや梢円形～俵形で、ややくびれて「し」字状に巻き込む。全体にやや肉厚で、巴の頭部は頭部から尾部にかけて平坦面を持つ。また、巴の尾部は、隣接する巴の尾部と付く。接合する丸瓦の粘土板切離は、鉄線切りである。胎土には、大きい粒径の砂が目立つ。出土は全て2B区(城下)である。なお、利神城跡からは同範例が出土していない。

NM 12(図版73～75)(写真図版79・80)

19点出土しており、そのうちT 46～54を図示した。瓦当文様は、右巻き三巴文を持ち、内区外縁に13点の半球状の大きな珠文を配する。巴文の頭部は、やや円形だがほぼくびれずに巻き込む。全体に凸型に突き出て、巴の頭部は頭部から尾部にかけて平坦面である。巴の尾部は、隣接する巴の尾部と付く。接合する丸瓦の粘土板切離は、鉄線切りである。胎土には、大きな粒径の砂が目立ち、特徴的である。出土は2B区(城下)のSK 20に集中し、最多である。なお、利神城跡からは同範例が出土していない。

NM 13(図版75)(写真図版80)

T 55の1点のみ出土している。T 55は、瓦当の内区と周縁の一部のみの破片で、瓦当文様全体は不明であるが、右巻き巴文を持ち、内区外縁に珠文を広い間隔で配する。珠文数は不明である。巴文の頭部は、不明である。巴は全体にやや薄いが、断面形は丸みを帯びる。また、巴の尾部は、隣接する巴の尾部と極めて近接するも離れる。接合する丸瓦の粘土板切離は、鉄線切りである。出土は2B区(城下)のSK 20である。なお、利神城跡からは同範例が出土していない。

NM 14(図版75)(写真図版80)

T 56・57の2点のみ出土している。いずれも瓦当の内区と周縁の一部のみの破片だが、瓦当文様は内区に菊花文を施し、内区外縁は無文であることがわかる。NM 14は、瓦当径が他型式に比べて格段に小さく、菊丸瓦の可能性もあるが、丸瓦部分の欠失により断定できないため、軒丸瓦に含めて報告する。菊花文は、二重に凸型の花弁を巡らせる。一重目は、外側が肥厚する棒状の花弁をほぼ等間隔で巡らせる。二重目は、半円形の花弁を一重目の花弁間の無文部分に対応させて巡らせる。出土は2B区・3区(城下)である。なお、利神城跡からは同範例が出土していない。

(2)軒平瓦 (第16表)

本調査で出土した軒平瓦は、瓦当文様を主な分類基準にNH 1～5の5型式10種に分類できた。次に、型式別に報告する。型式分類図(第22図)・型式分類表(第8表)を適宜参照されたい。なお、型式分類出来なかつたが比較的残りの良いものについては不明軒平瓦として報告する。

NH 1

瓦当文様は均整唐草文で、五葉の唐草を中心飾りとし、左右へ唐草が下・上向きに2回反転する。中心飾りは、文様が細線で表され、上端に小さな菱形の珠点が付く縦一本の直線文を中心に、内向きに巻く2葉の唐草が左右へ展開する。この型式は、NH 1 A～Eの5種類の同文異范が認められた。いずれも、平瓦広端部にカキヤブリを施して顎部を貼り付ける顎貼り付け技法によって段顎に製作される。次に各種類について報告する。なお、NH 1 Aと1Bは残存状況によって判別困難なものがある。ここでは、これらを他の同文異范例とは質的に異なるため区別し、NH 1 Zとして便宜的に一括して報告する。

《NH 1 A》(図版76・77)(写真図版81・82)

14点出土しており、そのうちT 58～64を図示した。NH 1 Aと後述するNH 1 Bは唐草文が酷似しているが、NH 1 Bに比べて中心飾りがやや高く、左右に展開する唐草の巻き方に微妙な差異があり、

向かって左側第2単位の唐草の下方向への張り出しが中央寄りに大きくなり、右側第2単位の唐草の下方向の張り出しが外寄りに大きくなる。出土は2A区(郭内)に集中する。なお、利神城跡から同范例が出土しており、乗岡分類のⅢ類に対応する。

《N H 1 B》(図版77)(写真図版81・82)

3点が出土し、そのうちT 65・66を図示した。N H 1 Bは、N H 1 Aに比べて中心飾りがやや低く、左右に展開する唐草の巻き方に微妙な差異があり、向かって左側第2単位の唐草の下方向への張り出しがやや外寄りに大きくなり、右側第2単位の唐草の下方向の張り出しが中央寄りに大きくなる。範が極めて酷似する点は、同じ型紙を基に作範されたことが推測され、製作主体の同質性・同時性が伺える。出土は2A区(郭内)に集中する。なお、利神城跡から同范例が出土しており、乗岡分類のⅣ類に対応する。

《N H 1 C》(図版78・79)(写真図版83)

5点出土しており、そのうちT 67～70を図示した。いずれも向かって左側の文様のみが分かる破片資料である。N H 1 Cは、向かって左側に展開する第2単位の唐草文に特徴があり、先端部の珠点が大きい点、また唐草の巻込みがきつい点、基部が山型に膨らんで第1単位の唐草文の頂部に付く点、線がやや太くなる点が挙げられる。出土は3区(城下)SK 160に集中する。なお、利神城跡からは同范例が出土しており、乗岡分類のV類に対応する。

《N H 1 D》(図版79)(写真図版84)

4点出土しており、そのうちT 71～73を図示した。いずれも向かって右側の文様のみが分かる破片資料である。N H 1 Dは、右側に展開する第2単位の唐草文に特徴があり、唐草の線が太い点、唐草の縱幅は短く横に長く延びる点、先端の珠点がやや大きい点、基部が第1単位の唐草文の頂部に付かない点が挙げられる。出土は2A区(郭内)・2B区(城下)にみられる。なお、利神城跡からは同范例が出土しているが、乗岡分類に対応する型式はない。

《N H 1 E》(図版79)(写真図版84)

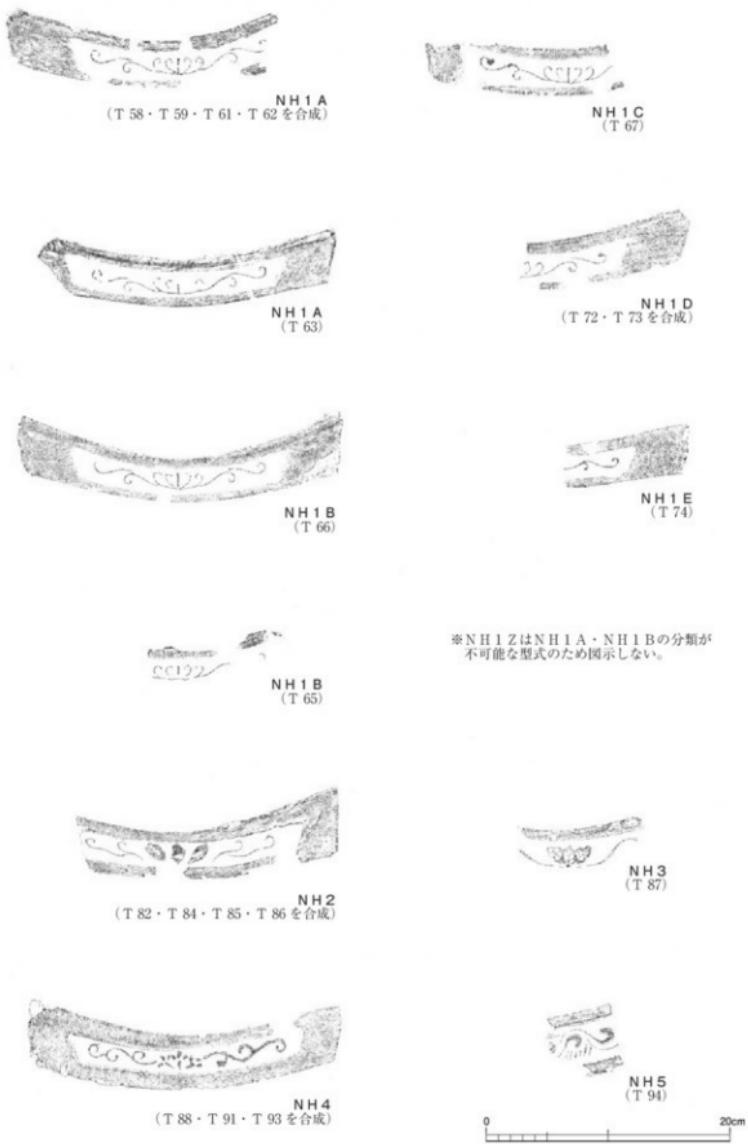
T 74の1点のみ出土している。T 74は向かって右側の文様のみが分かる破片である。N H 1 Eは、右側へ2葉の唐草が展開するが、その唐草が他のN H 1の中でも縱幅が最も狭く、横長である点、唐草文は稜線をもつやや太い線である点が特徴としてあげられる。第2単位の唐草文の基部は第1単位の頂部に付く。出土は2A区(郭内)である。なお、利神城跡からは同范例が出土しており、乗岡分類のVI類に対応する。

《N H 1 Z》(図版79～81)(写真図版84・85)

7点出土しており、T 75～78を図示した。N H 1 Zは、N H 1 AとN H 1 Bを判別できなかったものを便宜的に一括して分類したものである。T 76は全長31.5cmを測り、N H 1 A・Bの法量の参考となる。

N H 2 (図版81・82)(写真図版86・87)

13点出土しており、T 79～86を図示した。瓦当文様は均整唐草文で、肉厚な三葉を中心飾りとし、細線で表された2本の上向きの唐草が左右へそれぞれ展開する。中心飾り各葉の中央に沈線で主葉脈を表現する。瓦当文様の内区左上角には、大きな范削が認められる(T 79・83)。そして、瓦当上縁は強くヨコナデされるため、周縁及び文様の上部が潰れるものも見られる(T 81)。また、瓦当面にハナレズナを用いるものもある(T 80・82)。顎部は、平瓦広端部にカキヤブリを施して顎部を貼り付ける顎貼り付け技法によって段顎に製作される。出土は2A区(郭内)に集中する。利神城跡から同范例が出土しており、乗岡分類のII類に対応する。



第22図 軒平瓦型式分類図

NH3 (図版82)(写真図版87)

T 87の1点のみ出土している。瓦当文様は均整唐草文で、葉脈を持つ3葉を中心飾りとし、やや太線で表された下向きに巻く唐草をそれぞれ左右に展開する。唐草はおそらく左右それぞれ1本とみられる。中心飾りの3葉は、輪郭を波状に表し、中央を僅かに寄せた中央に、主葉脈と支葉脈を尖線で表現し、柏葉状を呈する。また、3葉の基部には1つの珠点がある。顎部は、平瓦広端部にカキヤブリを施して顎部を貼り付ける顎貼り付け技法によって段顎に製作される。出土は2A区(郭内)の北端瓦溜に多い。なお、佐用町所蔵の利神城跡出土の未報告資料に同範例を確認できたが、乗岡分類には対応する型式はない。また、姫路市心光寺に同範の可能性の高い資料がみられる(山崎2008第83図7)。

NH4 (図版82・83)(写真図版87・88)

15点出土しており、そのうちT 88～93を図示した。瓦当文様は均整唐草文で、3葉を中心飾りとし、太線で表された唐草を左右へ3回反転させる。中心飾りは、3本の直線軸のそれぞれの先端に3つ珠点を配し、松葉状を呈する。左右に展開する唐草は、向かって右は内側から下・上・下向きに巻く。一方左は内側から上・下・上向きに巻いて右側と巻き方向が逆になり、第3単位のみ唐草の頂部から1本の枝葉が僅かに延びる。瓦当上縁は面取りしない。顎部は顎貼り付け技法によって段顎が作り出される。胎土は、基本的に生地はやや粗く、φ6mm以下の砂粒を中量含む。粒径の大きい砂をやや多く含む点は特徴的である。出土は2B区(城下)が主で、SK 20からが最多である。なお、利神城跡では同範例は確認されていない。

NH5 (図版83)(写真図版88)

T 94の1点のみ出土している。瓦当部中央付近の破片である。文様は、3葉の中心飾りの大半が欠するが、内向する一葉部分が認められる。右に展開する唐草は、端部が巴の頭部状に太くなっている。上・下向きに巻く2葉と巻き方向不明の1葉が確認できる。少なくとも左右に3回反転する唐草になるとみられる。また、中心飾りの上方に波状の2本の細線と、1単位目の唐草の下方にヒゲ状の6本の細線が配される。顎部は、貼り付け段顎である。瓦当面の継幅は4.6cm、瓦当厚は2.3～2.7cmと厚作りである。やや須賀質に硬く焼成され、今回の出土軒平瓦の中でも丁寧つくりである。出土は、丁度2A区北端瓦溜まりと同位置にある平成23年度確認調査1トレレンチからである。なお、利神城跡からは同範例が出土しており、乗岡分類I類に該当する。

不明軒平瓦(図版83)(写真図版88)

11点出土しているが、T 95の1点を図示した。T 95は、瓦当部片側の破片で周縁と文様の一部のみが確認できる。文様は不明瞭だが唐草文とみられる。他型式と比べて唐草文の外端部から周縁までの幅や唐草文の大きさもやや異なる。顎部は、平瓦凸面広端部をカキヤブリした後、顎部を貼り付けて段顎に作られる。2A区(郭内)堀1の最下層(第10層)から出土する。

(3)丸瓦(第17表)(図版84～87)(写真図版88～90)

出土した丸瓦の総重量約367kgのうち大半は破片で、復元を含め完形に近いものはごく僅かである。ここでは、その中でも残りが良好かつ特筆すべき資料T 96～T 102について報告する。

T 96・T 97は、全長約33cmを測り、四面に布袋外側縦じ付けの吊り紐痕が認められるものである。玉縁側面の面取りは側部まで及ぶ。粘土板の切り離し痕は糸切りによるものである。

T 98～T 101は、完形で全長30～31.6cmを測り、四面に棒状工具を用いた内タタキ痕が認められるものである。内タタキ痕の施される位置は、狭端を上にしたとき、T 98・99・100が左側に、T 101が

右側に集中する。そして、T 100の凹面には、ゴザ状圧痕が認められる。玉縁側面の面取りについてはT 99を除き、胴部まで及ぶ。また、いずれも粘土板切離痕は鉄線切りによるものである。なお、T 99は、玉縁から胴部の破片で、本来は軒丸瓦の丸瓦部である。釘穴と凹面に欠損した引っ掛け部が認められる。

T102は、凸面と凹面広端側にヘラ記号を持つものである。記号のヘラ筋は凸面側の記号は細く浅いのに対し、凹面側は太くやや深く刻まれる。記号の意味は不明である。凹面には、ゴザ状圧痕がみられる。玉縁側面の面取りについては胴部まで及ばない。粘土板切離痕は鉄線切りによるものである。

(4) 平瓦(第18表)(図版87~92)(写真図版91~93)

出土した平瓦の総重量約1024kgのうち大半は破片で、復元を含め完形に近いものはごく僅かである。ここでは、の中でも残りが良好なT 103~112、狭端面に刻印を有するT 113~116について報告する。

残りが良好な平瓦、T 103~T 108はSK 65からT 109~T 112はSK 74から出土し、いずれも瓦が多量に廃棄された土坑である。平瓦の推定値を除く法量は、長さ30cm前後、狭端幅23cm前後、広端幅26cm前後、厚さ19cmを測り、ほぼ同一規格といえる。技術的側面を見ると、凹面については丁寧なヨコナデ後、側縁に沿ってタテナデを丁寧に施し、凸面については全面に粗いタテナデを施し、端部をヨコナデするものもある。凸面狭端縁付近には凹型台状圧痕が認められるものもあり、特にT 108・111は顯著である。また、粘土板切離痕は、基本的にナデ調整などで消されるが、T 107の広端隅には鉄線切りの痕跡が認められる。T 108の狭端隅にも糸切りの可能性のある切離痕が見られるが、判断が困難である。

T 113~116は、平瓦の技術的特徴は上記の平瓦とは同じであるが、狭端面の概ね中央付近に刻印を押す点が特筆される。確認できた刻印はA~Cの3種類である。刻印はいずれも花文で、花弁を陰刻、中房を陽刻する。刻印AはT 113に認められ、直径1.1cm、8葉の三角形の花弁で、その基部は繋がらない。刻印BはT 114に認められ、直径1.3cm、10~11葉の台形の花弁で、その基部は繋がる。刻印CはT 115・116に認められ、直径0.9cm、7葉の台形の花弁で、その基部は繋がる。これらの刻印と同種のものが、利神城跡で表採された鬼瓦(中井1993)や別所構の平瓦端面(藤本1993)にも認められる。

(5) 面戸瓦(第19表)(図版93~95)(写真図版94・95)

出土した面戸瓦は28点、総重量約8.5kgを測り、その内の残存良好で典型的なT 117~125を報告する。今回出土した面戸瓦は、丸瓦を横方向に広端部・中間部・狭端部の3つに分割して作り出されることが確認できた。T 117・118が広端部で、片方の水平な端部が側面に対してほぼ直交する。T 119・120が中間部で、両端部が同じ中心方向に切り取られるため、平面台形になる。T 121~124が無段丸瓦の狭端部、T 125が玉縁部を有する有段丸瓦の狭端部である。出土点数としては無段丸瓦が多く、基本的には無段丸瓦の状態から製作されたと考えられる。技術面について見ると、側面のケズリ調整は丸瓦本体のもので殆ど資料に認められるが、分割後の凹面側の狭広端縁の調整は、ヨコケズリを両方するもの(T 117・118・119)と広端側のみするもの(T 121)、そして全く調整しないもの(T 120・122~125)が確認できた。分割面については、殆どがケズリの後ナデ調整されるが、T 123・125は未調整である。また、粘土板切離痕は、報告する9点を含め、今回出土したものの大半に鉄線切り痕が認められた。

(6) その他の道具瓦(第20表)(図版95)(写真図版95・96)

熨斗瓦・隅軒丸瓦・鳥糞が出土している。

熨斗瓦 T126 の1点が出土している。T126は長軸側の約半分以上が欠失する。凸面にやや粗いナデが施され、凹面には不定方向の丁寧なナデが施されて平滑に仕上げられる。凸面を上にした場合の側端面の左側は、平瓦と同じナデ調整され、右側は截断後にナデ調整される。短軸方向の端面は調整されない。

隅軒丸瓦 T127の1点が出土している。瓦當下部の破片で、文様は外区の珠文が3点確認できるのみである。側面は凸型に立ち上がり、端面の一部が山形状に突起する水切りを有する。突起は裏面側に僅かに湾曲する。側面及び裏面をナデ調整する。

鳥衾瓦 T128とT129の2点が出土している。T128は瓦当と筒部の下部の一部が残る破片である。T128の瓦当文様は、おそらく内区が右巻き巴文で外区に珠文を有するもので、御殿屋敷出土軒丸瓦の分類型式に該当しない。瓦当に接続する筒部の下部は瓦当より約11cm斜め下方に延びて端面に至り、鬼瓦頂部への引っ掛け部をなす。外面は板状工具によるタテナデが施される。T129は衾瓦から延びる筒部付け根部分の破片である。粘土板にカキヤブリを施して二重に重ねて厚みを出す。外面には工具によるタテナデ、内面にはヨコナデ、側面はケズリ調整が施される。堀1の機能時堆積層(第10層)から出土している。

(7) 鬼瓦(第21表)(図版96~98)(写真図版96~98)

T130~134の5点が出土している。

T130は、頂部が欠損するのみで比較的の残りがよい。文様面にはカキヤブリをして立体的に造形された巾着文の飾り部が貼り付けられる。巾着は、襞状に布が重なって広がる袋口、組紐で絞られる頭部、中身が詰まつた袋部が、ヘラを用いて表現される。また、組紐の端部にヘラキザミを施して襞を表す。周縁部、鰯部、脚部は平坦な文様面から一段高くなつて面を持つ。鰯部は上部へ巻き込みながら反り上がり、脚部には直帶でやや波打つ4条の襞が表される。残存する肩部は水平に延びるが、僅かに立ち上がる部分が認められ、肩部には切れ込みがあったと考えられる。側面は粘土板が裏面側へ立ち上がり、箱形に作り出される。側端面、側面裏側から裏面全体にかけてケズリを全面に施し、薄く仕上げるとともに整形する。また、裏面における飾り部と同位置には、飾り部側に空洞部を作り、裏面側へ断面円形の取手部をアーチ型に作り出す。取手部表面にもケズリが施される。今回出土した鬼瓦の中で最も大きく、最大長70.8cm、最大幅89.8cm、側面端部から飾り部までの最大厚17.3cm、抉りの深さ26.9cm、抉り部上辺の幅15cm、側面幅6.7~7cmを測る。総重量は37kgである。なお、正面に向かって左側面には、「<」状のヘラガキとみられる痕跡が認められる。SD79の側壁に脚部の一方と体部が別々に転用された状態で出土しているが、鬼瓦の規模から比較的規模の大きな建物の棟を飾っていたことが考えられ、御殿屋敷に本来葺かれていたものと推測される。

T131は、文様面部分が主に残り、頂部と脚部が欠失する。おそらく鰯部ではなく、脚部の端部が反り上がる形になる。文様面には、カキヤブリを施し、立体的に造形された草花文の飾りが貼り付けられる。草花文は、半球形の花とその下部に短い茎、その付け根部分に葉が左右に各一枚広がる。花は中央部に微かにヘラ筋が認められるが、大半が欠損し、表現される植物の種類は不明である。茎は文様面にアーチ状に貼り付けられて、断面に一部空洞ができる。葉は中軸部分に向かって窪み、棒状工具でスジを入れて葉脈を表現する。側脈間は、貼り付けた粘土の側面を指頭で押して、葉の表面が波打つ様子を表す。また、両脚部の付け根部分にも、中軸が張を描いて窪む凸型の葉が貼り付けられる。周縁は、基盤にカキヤブリを施して、幅6.6cmの面を持つ粘土板を張り付けて作る。裏面は、基盤となる粘土板を強くケズり取つて薄く仕上げられる。側面は、裏面に粘土板を張り付けて作り、周縁を含めた推定高7.1cmに

なる。裏面中央部には、粘土円柱をアーチ状に貼り付けて取手部が作られるが上部の大半が欠失する。T130と同様、SD79の側壁に転用された形で出土しているが、本来御殿屋敷の建物に葺かれていた可能性がある。

T132は、葉の飾りが施される文様面の破片で、厚さ2cmと小型である。おそらく周縁部を持たない。葉の表現は、T131に比べて粘土が薄く盛り上がる程度で、葉脈は棒状工具でスジを入れて表現される。

T133は、脚部の破片である。裏面の中央を縦に強くケズリ取って箱形に作り出す。外面・側面はナデ調整され、側端面もナデ調整される部分もみられるが、下部は未調整である。

T134は、鬼瓦裏面の取手部の破片である。一部、ナデ調整によって平坦になる部分を除き、ほぼ全面にケズリ調整が施され、表面の凹凸が顕著である。

(8)出土瓦の検討

これまでに今回の調査で出土した瓦について報告してきた。ここでは、出土した軒瓦を中心に入分析・検討し、平福御殿屋敷跡の造瓦について考察し、出土瓦について評価を試みる。

出土軒瓦型式の組み合わせ 出土軒瓦の型式ごとの出土点数を出土地別に第5表に示した。御殿屋敷跡は、堀1より内側の郭内(2A区以北)と外側の城下(2B区以南)とに区分できるが、出土軒瓦の型式の出土量の多寡を郭内・城下の別にみると、型式によってどちらかに偏って多く出土する傾向がある。その傾向に基に郭内・城下で振り分けると次のような型式のまとまりが抽出できる。

[郭内]軒丸瓦：NM1・2・3・5・6・9・10/軒平瓦：NH1A・1B・1D・1E・2・3・5

[城下]軒丸瓦：NM4・7・8・11・12・13・14/軒平瓦：NH1C・1D・4

この型式のまとまりの違いは、軒瓦の製作・供給に郭内と城下とで差があったことを示す可能性が高い。

第5表 平福御殿屋敷跡出土軒瓦の地点別出土点数表

地 区	調 査 区	遺 構	軒瓦												軒平瓦													
			NM1	NM2	NM3	NM4	NM5	NM6	NM7	NM8	NM9	NM10	NM11	NM12	NM13	NH1	NH1A	NH1B	NH1C	NH1D	NH1E	NH2	NH3	NH4	NH5	NH6		
郭 内	2A 区	堀2号室 壁面瓦合計																										
		基壇瓦合計	2	9		1	1									15	2	1				1	3	1		2		
		SK602	1																									
		SK605	1			1																					1	
		SK607					1									1												
		SK74	7	3	12		3			1	4					7	2	1		1		1	1	8	2	5		
		SK75	1																									
		SK102																										
		SK68																										
		SK79																										
		100&101 壁																										
		壁1 壁101 壁102 壁103	2	1			1		1		1					1											1	
		伝荷物	1	2												1							1		2	1	9	
城 下	2B 区	堀内合計	9	7	26	0	0	5	3	0	0	2	4	0	1	0	0	26	11	3	1	2	1	4	13	1	2	
		SK20	1	1	3	1					1	3	15	1	1	3	3			2	1				10	2		
		SK100	1																									
		伝荷物				1	1																				3	
		壁丸						1																				
		SK160	1													1	1		3									
		伝荷物	1						1																			
		SK2	2	2	2	4	1	1	0	1	1	0	1	3	18	1	2	4	3	0	4	2	1	3	0	0	1	
		城下合計	11	9	28	1	1	6	2	1	1	2	5	3	19	1	2	30	14	3	5	4	1	7	13	1	15	11
		同様例の 利便施設出土	●	●	●	●	不規	不規	●	●	不規	不規	●	不規	不規	不規	—	●	●	●	●	●	—	●	●	不規	●	—

●=出土

—=軒瓦文様あるも未確認

不規=複数点で未確認

(—)=対象外

次に、郭内・城下別で各型式の出土量をみていく。郭内では軒丸瓦はNM3(26点)が最多でNM1(9点)・2(7点)が続く。軒平瓦はNH2(13点)が最多で、NH1A(11点)がそれに次ぐ。しかし、同時に同じ製作主体によって作られた可能性の高いNH1B(3点)や、その判別不可のNH1Z(4点)を加えると数は圧倒的に多くなる。さらに同文異范であるNH1D(2点)や少し文様が崩れるNH1E(1点)も、出土量が僅少であるものの補足的ではあるが同様に作られた可能性が高い。出土量からみて、郭内

ではNM 3とNH 1 A・B・Dの組み合わせが考えられ、御殿屋敷造営の製作・供給の中心になるものと想定される。ただし、今回郭内からわずかな出土だが同文異範のNH 1 C（1点）も同様に作られた可能性が高く、NM 3と組み合うと推測される。そして、NM 2は硬質に焼成され、焼しがあまり見られないのに対し、NM 1とNH 2は焼成がやや軟質で焼し焼きするものが多い点が類似し、NM 1-NH 2が組み合わせの一つと考えられる。この組合せとNM 2は出土量が比較的多いことから、同じく主体的に製作・供給されたと推測される。また、検討の詳細については後述するが、古く位置づけられるNM 10とNH 5も組合せとしてあげることができる。その他の型式は出土量も少なく、組合せの判断が難しいが、NM 10-NH 5も含めて補足的に供給されたと考えられる。

一方、城下での最多出土は軒丸瓦がNM 12（18点）、軒平瓦がNH 4（14点）である。いずれも2B区SK 20からの出土が主で、石垣2南隣接部に瓦葺構造物があった可能性もあるが、基本的に城下に向けて主体的に製作・供給された組み合わせと想定される。これらは胎土に大きな砂粒を比較的多く含む共通性があり、同様の胎土はSK 20出土のNM 4・11にも見られ、いずれも製作主体の同質・同時性が伺える。そして、NM 7・8・13・14については、破片で出土数も少なく、組み合わせは不明だが補足的な製作・供給が考えられる。ただし、NH 1 Cについては、郭内の主要型式のNH 1 A・BやNH 1 Dと範が酷似し、同様に製作された可能性が高いが、確認資料の多くは3区SK 160から出土している。これは逆に言えば、SK 160ないしその付近に城郭造営に関連する遺構の存在を暗示すると思われる。

なお、組合せの判断については軒平瓦に対し軒丸瓦の型式が多いこともあり、今後の資料の増加や検討によって軒丸瓦の複数型式が軒平瓦一型式に組み合う可能性はある。

利神城跡出土軒瓦との比較 御殿屋敷出土軒瓦の興味深い点は、上記の分類した郭内出土軒瓦は利神城跡出土軒瓦と同範例のみに限られるのに対し、城下で主体となる組み合わせNM 12（・4・11）-NH 4を初めとして、上記分類の城下出土軒瓦はこれまでに同範例が利神城跡で確認されていないことである。このことは、軒瓦の製作・供給が利神城と御殿屋敷郭内が同一である一方、利神城・郭内と城下との間に差があったことを示すと考えられる。NM 12（・4・11）-NH 4の胎土が郭内出土軒瓦と異なる点は、このことを支持する。また、時期については、NH 4がNM 3の多く出土する2A区SK 74から出土することや、土器類に郭内と城下では差異がみられないことを勘案しても、利神城・郭内と城下の造瓦はほぼ同時期とみて大過ない。以上のことから、造瓦面で利神城・郭内と城下とで意図的に区別していたと想定される。

さて、軒瓦で問題の一つとなるのは、利神城跡出土軒瓦の組み合わせである。この組み合わせについては、乗岡実氏によって、軒丸瓦IV・V類と軒平瓦II類（NM 1・3、NH 2とそれぞれ同範）、軒丸瓦II・VI類と軒平瓦III～VI類（NM 10・5、NH 1 A～Cとそれぞれ同範）のように提示されている（乗岡2001）。この組み合わせは先述した御殿屋敷、特に郭内出土軒瓦の組み合わせと異なる。乗岡氏の判断根拠は、粘土板切離痕（コビキA・B）を基礎に、前者の組み合わせについては「胎土の生地の微粒さ・焼成が甘いものや離れ砂が付着するものを含む点・つくりの粗雑など」、後者については「胎土・焼成の面で明確に区別できるのは軒丸瓦II類（NM 10）、軒平瓦VI類（NH 1 E）程度で、その他は、胎土によって厳密に区別するのは困難であり、焼成についても個体差があり難しいと思われる。また、離れ砂については、瓦製作時において瓦工人や工房の技法的な共通性を指摘しうるが、このことで必ずしも屋根に葺く軒瓦の組み合わせとして限定的に扱えない。さらに、利神城跡と郭内の出土軒瓦には大きな規格差はみられないことから、利神城と郭内で供給された瓦の量が異なり、組み合わせも異なる可能性もある。いずれにしても、

利神城跡出土軒瓦は現時点では表掲資料のみであるため難しいが、少なくとも複数型式の瓦が出土している以上、数量的検討を踏まえて利神城の軒瓦の組み合わせは再考を要するといえる。

なお、御殿屋敷跡の南側に位置する別所構跡からは、NM 3とNH 1 Aの同範例が出土している。御殿屋敷跡郭内の主要軒瓦の組み合わせと共に通する点は興味深い。

粘土板切離痕（糸切り・鉄線切り）と出土瓦の時期的検討 軒瓦についてみると、糸切りは基本的にNM 10に見える他は、NM 3の一部に見えるのみである。軒平瓦については、今回の御殿屋敷出土資料では確認できなかったが、NH 1 A同範の利神城跡出土の乗岡分類軒平瓦Ⅲ類の一部に認められ（乗岡2001）、御殿屋敷でも同様にNH 1 Aの一部が糸切りの可能性がある。また、NH 3も、同範と目される心光寺例に糸切りが確認されており（山崎2008）、糸切りの可能性が高い。NH 1 A同範例の一部に糸切りが認められる点は、これと組み合うNM 3の一部に糸切りが認められる点と符号し、軒瓦の製作・使用時の組み合わせとして支持する。ただし、この組み合わせに見えるのは、基本的に鉄線切りである点をここで再確認しておく。

糸切りそのものに着目すると、NM 10で今回確認できた糸切り痕は、丸瓦長軸方向に弧を描きながら残る、よく見られる糸切りである。これに対し、NM 3（T 17）で認められた糸切りは、丸瓦短軸方向に残り、糸の燃り目が移動した痕跡となる沈線の幅も太く、やや異質な感を受ける。このことは工具の違いだけでなく、製作主体あるいは製作時期の差も示す可能性がある。糸切りと鉄線切りの違いは時期差にあることは定説となっているが、その移行年代については幅があり、地域によって異なるとされる（山崎2008）。そして、NM 3やNH 1 A同範例の一部に糸切りが見える点については、製作初期段階に糸切り技法によったものが、製作途中で鉄線切りの技法に転換したか、あるいは両技法が併存し、一部の瓦工人が糸切り技法を駆使していたことなどが推測される。いずれにしても、利神城・御殿屋敷造瓦時は技法的に過渡期であり、鉄線切り技法が主体であったといえる。その移行時期については、乗岡氏の見解が参考となる。乗岡氏によれば、NH 1が福田（備前市福田）の瓦工人一派の製品の可能性を指摘し（乗岡2001）、岡山の近世瓦の糸切りから鉄線切りへの「技法変化は慶長2～6年頃」とする（乗岡1995）。御殿屋敷郭内の主要な組み合わせとなるNM 3とNH 1の造瓦が、御殿屋敷造営期（≈利神城築城期）と考えられる慶長5～10（1600～1605）年頃に実施されたとすれば、乗岡氏の見解とは齟齬を来さない。技法変化があったとすれば、御殿屋敷造営期でも早い段階の可能性が高いと考えられる。

では、一方のNM 10については、文様面から見ると珠文は細密で珠文数も23点と多く、今回確認できた他の軒丸瓦に比べて古相を示す。燃しが見られるものがほぼない点も焼成法の違いとして指摘できよう。これを踏まえると、前述の糸切りの差は、製作主体と製作時期の違いを示すと考えられ、NM 10は御殿屋敷造営期を廻る製品といえる。これと組み合うのは、出土点数は僅少だが、展開する唐草数が多いと推測される文様をもち、他の軒平瓦よりも古相を示すNH 5が考えられる。技法面でも他の軒平瓦と一線を画し、丁寧なつくりで、燃しも見られず、胎土もNM 10に類似する。そして、NH 5は乗岡氏が天正期の製品とする利神城出土軒平瓦I類（乗岡2001）と同範である。すなわち、NM 10とNH 5の組み合わせは、利神城・御殿屋敷造営期を廻る製品に位置づけられ、御殿屋敷郭内・利神城において再利用あるいは流用されたと考えられる。

そして、NH 3については姫路市心光寺に同範の可能性の高い資料がみられる。山崎信二是この資料の年代について判定は難しいとしながらも糸切りがみえることから、1582～1591年まで廻る可能性を指摘しつつ、1592～1600年に位置づけている（山崎2008第83図7）。御殿屋敷・利神城の造営年代も考慮すると多少後出する可能性もあるが、造営前に製作され、造営時に再利用ないし流用されたと考えら

れる。その他に時期的に判明するのは、鉄線切りが認められるNM2・NM5であり、これらも造営時に製作・供給された可能性が高い。ただし、破片のみのNM6・7・8・9・13・14については不明である。

NM12—NH4の時期については、造営期

に城下に向けて主体的に製作・供給されていたことは先述した。NM12には鉄線切りが認められ、時期的に矛盾せず、御殿屋敷造営時と同時に位置付けられる。

さて、今回の調査で出土した丸瓦・面戸瓦について、粘土板切離痕(糸切り・鉄線切り)別に重量計測し、第6表に示した。ただし、平瓦については、僅かながら切離痕を判別できるものはあったが、製作時の調整によってほとんどが不明であったため計測対象としては除外した。表を一瞥しても、糸切りは僅かで、鉄線切りが出土量のはば90%を占め、圧倒的に多い。基本的に御殿屋敷で使用された瓦の粘土板の切離痕は鉄線切りによることは明らかである。時期については、少なくとも丸瓦短軸方向の太幅の糸切りと鉄線切りによるものは造営時に位置づけられ、丸瓦・面戸瓦の大半が造営時に製作・供給されたことがわかる。

利神城の築城・平福御殿屋敷の造営と造瓦 造瓦の面で御殿屋敷郭内と城下とで意図的な差異があった可能性は先に指摘したが、利神城築城・御殿屋敷造営における具体的な造瓦のあり方について検討する。郭内では、御殿屋敷の造瓦の主体となったのがNM3—NH1の組み合わせである。この軒瓦は、先述したように備前福田の瓦工人によって製作された。特に、NH1はA～Eの瓦范が展開することからも、文様様式として重視したことがわかり、その主体性を支持する。これに次いで中心的に製作・供給されたと見られるのがNM1—NH2である。NH2と同範の利神城例について、乗岡氏は「文様に播磨的要素が窺えるが、その主流の工人の製品ではなさそうである」とする(乗岡2001)。瓦工人の詳細は不明だが、少なくとも備前福田とは異系統の瓦工人の関与が伺える。また、NM2・5はおそらく同時に製作・供給されたとみられるが、補足的である。そして、造営前に製作されたNM10—NH5やNH3については、文様面で姫路系工人の関与が想起されるが、これらは再利用・流用瓦と考えられる。時期的位置づけが不明で出土数も少ないNM6・9は、再利用・流用瓦か小規模な製作・供給があったか判断できないが、少なくとも補足的に利用されたといえる。一方、城下では、郭内に供給された瓦が一部利用されることもあったが、基本的にNM12(・4・11)—NH4が主体的に製作・供給された。この組み合わせは、明らかに郭内の主体的な軒瓦とは製作技法や胎土が異なるため、備前福田と異なる瓦工人が関与したと考えられる。また、時期不明で出土数の少ないNM7・8・13・14については、再利用・流用か、小規模な製作・供給があったか判断できないが、少なくとも補足的に利用されたといえる。

以上をまとめると、御殿屋敷郭内では、一部に造営前製作の瓦の再利用をしつつ、備前福田の瓦工人を主体に複数の異系統の瓦工人が関与して造瓦を行っていた。一方、城下でも造営期に造瓦があったが、郭内とは製作・供給に意図的な隔絶があった。ここにも備前福田とは異系統だが主体となる瓦工人がおり、一部の瓦に再利用・流用あるいは複数の異系統の瓦工人の関与があった。御殿屋敷造営において、郭内・城下でそれぞれ主体となる瓦工人を中心に関連する瓦工人が編成されていたことがわかる。

利神城の造瓦については、御殿屋敷郭内から基本的に利神城出土例と同範である軒瓦が限定的に出土することから、利神城の瓦の製作・供給が御殿屋敷郭内と同一である可能性は高い。勿論、軒瓦の型式によって利神城への供給量は御殿屋敷郭内と若干異なる可能性はあるが、基本的には同一の工人編成の

第6表 粘土板切離痕別重量計測表

丸瓦	糸切り	鉄線切り	不明	合計
重量(kg)	33.27	284.37	49.88	367.52
重量比	9%	77%	14%	100%
(不明分控除)	10%	90%	—	100%
面戸瓦	糸切り	鉄線切り	合計	
重量(kg)	0.78	7.73	8.51	
重量比	9%	91%	100%	

造瓦体制に位置づけられる。問題は、御殿屋敷城下の造瓦との関係である。異系統の工人による造瓦という意図的な差異はすでに指摘したが、同時に造営した利神城・御殿屋敷郭内・城下を都市計画としてみた場合、どのように造瓦体制を捉えられるであろうか。ひとつは利神城・御殿屋敷郭内の造瓦体制と城下とは無関係という可能性がある。あるいは、それら二つを包括する造瓦体制があり、利神城・郭内と城下とを区別する志向が働いていた可能性も指摘できる。判別は難しいが、慶長期の短期間の作事を考慮すれば、後者の可能性は十分にある。また、山崎信二氏は、「聚楽第造営期から伏見城造営期にかけて、大規模な労働組織の編成が行われ、同一場所で異なる流派の造瓦が実現した」と指摘し、本城となる慶長期の姫路城の造瓦は不明だが、天正期の初期姫路城の造瓦には備前福田の瓦工人の関与を指摘する（山崎 1012）。このことを踏まえれば、慶長期の利神城・御殿屋敷・城下における、備前福田の瓦工人を主体に複数の異系統の工人を編成する造瓦体制は、豊臣期の組織編成方式を継続するものと理解される。また、天正の初期姫路城、慶長の利神城に備前福田の工人が共通に関与する点は、造瓦の労働組織編成において地域的近接性が重視されたといえよう。

以上、姫路城の支城である利神城・御殿屋敷郭内・城下の造瓦のあり方を明らかにしてきた。今回の調査成果は、慶長期の豪城と都市計画、そしてその造瓦体制を考えるうえでも重要である。

《補遺》 利神城跡表採瓦 （第22表）(図版99) (写真図版98)

本調査時に利神城で鳥衾瓦(利神1)・軒平瓦(利神2)各1点を表探しており、本項にて報告する。

鳥衾瓦 (利神1) 瓦当部のみの破片で、瓦当文様は内区に左巻三巴文、外区に13点の珠文を巡らせる。御殿屋敷のNM1と同范である。裏面には、胴部を接合するカキヤブリと補填粘土が認められる。

軒平瓦(利神2) 瓦当の半分と平瓦が約4分の1残る。瓦当文様は均整唐草文で、五葉の唐草を中心飾りに、左右へ唐草文が下・上向きに2回反転する。御殿屋敷のNH1Aと同范である。

〔引用・参考文献〕

中井均 1993「利神城跡採集瓦について—池田氏支配の播磨国における利神城の考古学的位置付け—」

『播磨利神城』城郭談話会

乗岡実 1995「岡山県下における織豊系城郭の瓦(素描)」「織豊城郭」第2号 織豊城郭研究会

乗岡実 2001「利神城の瓦」「ひょうご考古」第8号 兵庫考古研究会

藤木透 1993「別所構の考古学的研究」「播磨利神城」城郭談話会

山崎信二 2008「近世兵庫の瓦」「近世瓦の研究」同成社

山崎信二 2012「瓦が語る日本史 中世寺院から近世城郭まで」吉川弘文館

第7表 平福御殿歎出出土軒丸型式分類表

型式 分類名	文様	文の 書向	巴の 形態	構成する巴 の複数と 其の 配置	珠文數	周縁	正方形部量(cm)					正方形部量(cm)					瓦当裏面の調整		
							A 瓦面幅 内区幅		B 巴文幅 内区幅		C 巴文幅 内区幅		D 周縁幅 内区幅		E 上周縲 内区幅		F 下周縲 内区幅		
							A 瓦面幅 内区幅	B 巴文幅 内区幅	C 巴文幅 内区幅	D 周縁幅 内区幅	E 上周縲 内区幅	F 下周縲 内区幅	G 上周縲 内区幅	H 下周縲 内区幅	I 正方形 内区幅	J 周縲幅 内区幅			
NM1	三巴文	左巻き	C字状に 彫り、色く。	付く	13	直立 平縁	15.3 ~ 16.1 (15.7)	10.0 ~ 11.3 (10.4)	7.0 ~ 7.5 (7.2)	1.0 ~ 1.1 (1.07)	21 ~ 27 max10 (24.2)	0.7 ~ 0.9 (0.79)	25.6	34	不定ナダ。 下端内風呂ナダあり。				
NM2	三巴文	左巻き	やや内彫。少し筋 れをもって色く。	離れる	15	直立 平縁	15.7 ~ 15.9 (15.7)	10.8 ~ 11.2 (10.9)	8.1 ~ 8.3 (8.18)	0.8 ~ 1.05 (0.97)	21 ~ 26 max10 (22.5)	0.65 ~ 0.75 (0.69)	23.8	27	不定ナダ。 下端内風呂ナダあり。				
NM3	三巴文	左巻き	ほぼ円彫。少し筋 れをもって色く。	離れる	12	直立 平縁	15.8 ~ 16.1 max17.0 (16.2)	10.8 ~ 11.2 max10.3 (10.7)	6.8 ~ 7.2 max6.2 (7.0)	0.9 ~ 1.1 (0.90)	23 ~ 29 max11 (26.7)	0.5 ~ 0.75 (0.56)	不明	不明	ヨコナナ - 不定ナダ。 下端内風呂ナダあり。				
NM4a	三巴文	左巻き	やや内彫。少し筋 れをもって色く。漢 字形に巻く。漢 字形に平面的。	付く	17	直立 平縁	14.15 (14.2)	10.2 ~ 10.4 (10.3)	7.2 ~ 7.5 (7.33)	1.0	15.5 ~ 16.5 (15.6)	0.7 ~ 0.95 (0.87)	4.0	不明	ヨコナナ。 下端内風呂ナダあり。				
NM4b	三巴文	左巻き	ナシ	付く	不明	不明	不明	不明	—	—	1.95	0.6	4.0	不明	ナシナダ。 下端内風呂ナダなし。				
NM5	三巴文	左巻き	やや内彫。透し 字形に巻く。透し 字形に巻く。漢 字形に巻く。	離れる	15	直立 平縁	16.2 ~ 17.0 (16.55)	11.0 max13.4	5.5 ~ 6.0 max6.8	0.95 ~ 1.8	2.6 ~ 2.85 (2.69)	0.5 ~ 0.7	26.9	42	不定ナダ。 下端内風呂ナダあり。				
NM6	三巴文	左巻き	やや内彫。少し 筋れをもって巻く。 全体に平面的。	付く 離れる	不明	直立 平縁	15.5 ~ 16.0 (15.8)	10.6 ~ 11.3 (10.8)	8.0 ~ 8.6 (8.0)	0.85 ~ 0.95 (0.92)	2.0 ~ 2.35 (2.0)	0.9 ~ 1.0	不明	不明	不定ナダ。 下端内風呂ナダあり。				
NM7	三巴文	左巻き	不明	付く	不明	直立 平縁	15.4	9.8	7.1	1.1	2.3	1.1	不明	不明	ナシナダ。 下端内風呂ナダあり。				
NM8	三巴文	左巻き	やや内彫。少し 筋れをもって巻く。	離れる	不明	直立 平縁	不明	不明	6.9	1.0	不明	不明	不明	不明	ナシナダ。 ナダは失火により不明。				
NM9	三巴文?	左巻き	不明	付く	無し	直立 平縁	13.6 ~ 14.0	9.7 ~ 10.0	min7.6 max8.7	—	min10.8 max11.8	0.6	不明	不明	失火により不明。				
NM10	三巴文	右巻き	やや内彫。透し 字形に巻く。透し 字形に巻く。	離れる	23	直立 平縁	14.6 ~ 15.5 (15.0)	10.5 ~ 11.2 max12.2	7.5 ~ 8.0 (7.7)	0.6 ~ 0.7 (0.65)	1.2 ~ 1.8	0.6 ~ 0.7 (0.65)	29.3	29	不定ナダ。 下端内風呂ナダあり。				
NM11	三巴文	右巻き	やや内彫。透し 字形に巻く。透し 字形に巻く。	付く	14	直立 平縁	13.5 ~ 13.9 (13.8)	10.2 ~ 10.5 (10.4)	7.6 ~ 7.7 (7.6)	0.8 ~ 0.85 (0.8)	1.5 ~ 1.6 max1.1	0.6 ~ 0.75 (0.65)	不明	不明	ナシナダ。 下端内風呂ナダある ものないものあり。				
NM12	三巴文	右巻き	やや内彫。透し 字形に巻く。透 字形に巻く。	付く	13	直立 平縁	14.8 ~ 15.2 max14.2 (15.3)	10.6 ~ 11.0 max10.9 max11.7	7.4 ~ 7.8 max8.9	1.2 ~ 1.30 max1.1 max1.4	1.8 ~ 2.0 max1.7	0.7 ~ 0.9 (0.75)	4.0	不明	不定ナダ。 下端内風呂ナダある ものないものあり。				
NM13	三巴文?	右巻き	不明	離れる	不明	直立 平縁	16.4	12.1	9.1	0.9	2.1	0.6	不明	不明	ナダあり。 ナダは失火により不明。				
NM14	葉草文	—	—	—	—	直立 平縁	11.0 ~ 11.5	9.0 ~ 9.5	8.5	—	1.0 ~ 1.2	0.75 ~ 0.8	不明	不明	ナシナダ。 下端内風呂ナダなし。				

数字は代表的な数値 ()内の数字は平均値 max = 最大値 min = 最小値

第8表 平福御殿歎出出土軒丸型式分類表

型式 分類名	文様	支拂		法量(cm)												平瓦部														
		中心拂		左右		A 瓦面幅 内区幅		B 瓦面幅 内区幅		C 内区幅		D 内区幅		E 内区幅		F 内区幅		G 内区幅		H 内区幅		I 内区幅		J 内区幅		K 内区幅		平瓦部		
		A 瓦面幅 内区幅		B 巴文幅 内区幅		C 内区幅		D 内区幅		E 内区幅		F 内区幅		G 内区幅		H 内区幅		I 内区幅		J 内区幅		K 内区幅		全長						
NH1A	五葉	唐草文 (左右2単位DU)	26.8 ~ 29.4	18.0 ~ 21.0	16.0 ~ 18.2	21 ~ 25	5.5	0.8 max1.05	0.7 ~ 0.9	0.4 ~ 0.65	0.8	1.7 ~ 22	12cm, 1.7 ~ 1.8cm	不明	不明	1.4 ~ 1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
NH1B	五葉	唐草文 (左右2単位DU)	26.8	4.1 ~ 4.2	17.8 ~ 18.1	1.9 ~ 20	4.2 ~ 4.5	0.7 ~ 0.8	0.7 ~ 0.9	0.4 ~ 0.6	0.3 ~ 0.45	0.8 ~ 1.0	1.3 ~ 17 2.3cm	不明	不明	1.7 ~ 20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
NH1C	五葉	唐草文 (左右2単位DU)	23.8 ~ 26.8	3.6 ~ 4.15	20 ~ 21.0	18.5 ~ 19.5 max2.25	4.3 ~ 4.5 max2.9	0.8 ~ 1.1	0.6 ~ 0.7	0.2 ~ 0.25	0.3 ~ 0.4	1.95 ~ 2.6	1.5cm, 2 2.5cm 2.8cm	29.6	不明	不明	1.8 ~ 19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
NH1D	(五葉)	唐草文 (左右2単位DU)	—	3.6 ~ 3.8	不明	18.5 ~ 21	4.0 ~ 5.3	0.8 ~ 1.0	0.6 ~ 0.7	0.2 ~ 0.25	0.4 ~ 0.5	1.95 ~ 2.35	1.8 ~ 19 cm	不明	不明	18 ~ 20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
NH1E	五葉	唐草文 (左右2単位DU)	—	3.85	不明	2.05	4.5	0.8	0.7	0.55	0.55	1.9	1.2cm	不明	不明	1.75	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
NH1F	五葉	唐草文 (左右2単位DU)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.2 ~ 2.5 cm	31.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
NH2	三葉	唐草文 (左右2単位DU)	26.6 ~ 27.0	3.7 ~ 3.8	20.2 ~ 20.4	1.9 ~ 2.05	3.4 ~ 4.5	0.8 ~ 1.2	0.6 ~ 0.9	0.25 ~ 0.4 max0.75	0.5 ~ 0.7 max0.55	1.7 ~ 2.3	1.3 ~ 1.8 cm, 2.3 ~ 2.5cm 2.8cm	不明	不明	1.6 ~ 20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
NH3	上向き葉 葉巻葉	唐草文 (左右1単位D)	—	3.8	不明	2.2	不明	0.7	0.2	0.35	0.4	2	1.2cm	不明	不明	1.95	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
NH4	松葉三葉	唐草文 (左右1単位DU, 右3単位DUD)	23.8 ~ 26.8	4.3 ~ 4.6	16.8 ~ 20.3	1.85 ~ 2.05	3.1 ~ 3.9	1.1 ~ 1.2	1.1 ~ 1.35	0.45 ~ 0.5 max0.55	0.5 ~ 0.6 max0.55	2.0 ~ 2.5	1.5 ~ 1.7 cm	不明	不明	1.6 ~ 20	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
NH5	三葉	唐草文 (左右1単位DU, 右3単位DUD)	—	4.6	不明	2.6	不明	0.9	1	0.5	0.6	2.3 ~ 2.7	2.5cm	不明	不明	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

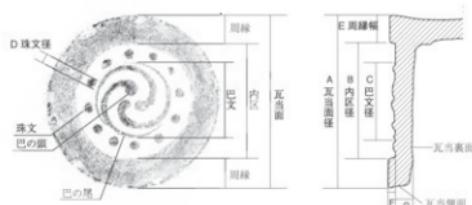
唐草文(D=上巻き, U=下巻き)

直立平縁

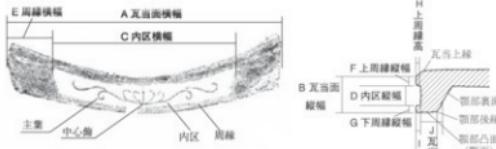
直立平縁

瓦瓦合接合法 上端＝瓦裏裏面と下端への接法 瓦瓦＝瓦への接法	瓦瓦面		瓦瓦縫隙密 度面の面取りの 面取り	瓦瓦合接合 位置と瓦 瓦の隙間の 隙間	瓦筋の形態	出土数 箇内 / 箇外 合計	備考	表面分類 (2003)との 比較	利便性 被出し土の 有無
	粘土板切削面	その他の面諸							
上端＝内張状瓦セリフ 瓦瓦＝内張状瓦セリフ・端面裏面横コロ 瓦瓦＝瓦への接法	鉛錆切り	右目側かにみえ る。瓦筋は瓦裏に及 ぶものもあり。	面取りあり。 倒伏状態に及 ばない形	あり	不規 上下左右がわ らう形	9/2 11		V類 有り	
上端＝内張状瓦セリフするものとしないものあり 瓦瓦＝不規	鉛錆切り	右目側かにみえ る。	面取りあり。 倒伏状態に及 ばない形	あり	一定 上下左右がわ らう形	7/2 9		なし 有り	
上端＝内張状瓦セリフして窯を作るものと内張状に 瓦セリフするものあり 瓦瓦＝端面裏面横コロセリフするものあり	鉛錆切り 希切付瓦瓦方向 瓦瓦	右目側かにみえ る。瓦筋は瓦裏に及 ぶものもあり。	面取りあり。 倒伏状態に及 ばない形	不明	一定 上下左右がわ らう形	26/2 28	瓦面にハナレグサセリフ む見るものあり。あ付り被 はえ、瓦瓦軽方向に残る。	V類 有り	
上端＝不規 瓦瓦＝横面に接方向のセリフアリ	鉛錆切り	右目有無不明	不規	あり	ほぼ一定 おぞらく上下左 右がわらう形	0/4 4		なし 不明	
不規	不規	右目有無不明	不規	不規	不規	0/2 1		なし 不明	
上端＝内張状瓦セリフあり 瓦瓦＝広面内張状瓦セリフあり	鉛錆切り	右目側かにみえ る。外縫に付け る筋跡がある。	面取りあり。 倒伏状態に及 ばない形	不明	一定 上下左右がわ らう形	5/1 6	瓦面にハナレグサアリキ は見えない。	初期 有り	
上端＝矢先により不規 瓦瓦＝矢先により不規	不規	矢先により不規	不規	不規	不規	2/0 3		初期 有り	
上端＝矢先により不規 瓦瓦＝矢先により不規	不規	矢先により不規	不規	不規	不規	0/2 1		なし 不明	
上端＝矢先により不規 瓦瓦＝矢先により不規	不規	矢先により不規	不規	不規	不規	0/2 1		なし 不明	
上端＝矢先により不規 瓦瓦＝広面にあそくくセリフアリ	不規	矢先により不規	不規	不規	不規	2/0 2		初期 有り	
上端＝内張状横に接するものあり 瓦瓦＝不規 瓦瓦＝横面裏面横コロセリフアリ	系付II (瓦瓦瓦方向)	外縫に付ける筋 跡跡がある。	面取りあり。 倒伏状態に及 ばない形	不明	不規 上下左右がわ らう形	4/1 5	あ付り被はえ瓦瓦軽方向に残 る筋跡方向は広面・扶壁	V類 有り	
上端＝内張状斜て接する可能性あり 瓦瓦＝広面裏面横コロセリフアリ	鉛錆切り	右目側かにみえ る。筋跡を残す。	矢先により不規	あり	一定 上下左右がわ らう形	0/2 3	柱上は軽く、ゆるく5mmの筋 跡が垂直に並ぶ。	なし 不明	
上端＝内張状斜て接する可能性あり 瓦瓦＝瓦瓦瓦方向のセリフアリ	鉛錆切り	右目側かにみえ る。筋跡を残す。	矢先により不規	あり	一定 上下左右がわ らう形	1/18 19	少強・横に残さず少ない、規 則で細胞。筋跡はやや東だ が、約2~3mmの筋が立つ。	なし 不明	
上端＝矢先により不規 瓦瓦＝矢先により不規	不規	矢先により不規	不規	不規	不規	0/2 1		なし 不明	
上端＝矢先により不規 瓦瓦＝矢先により不規	不規	矢先により不規	不規	不規	不規	0/2 2		なし 不明	

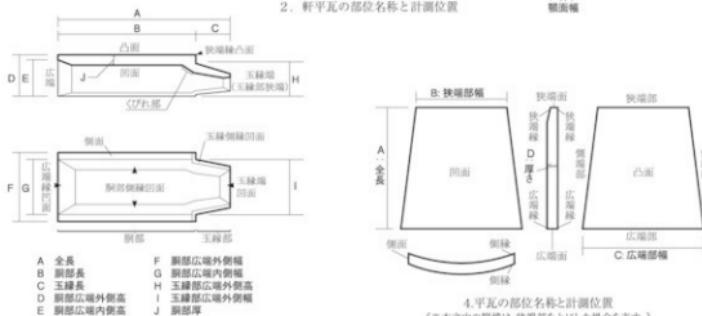
瓦当接合の調査技法	瓦当接合の調査技法						出土数 箇内 / 箇外 合計	備考	表面分類 (2003)との 比較	利便性 被出し土の 有無
	瓦当面	瓦当上縁の面取り	面取	製造 裏面	平瓦部調整 (凹面、凸面)	粘土板 切削面				
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	端まで及ばない (内張筋痕)	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	ヨコナメ 凹面	不規	11 3	一部腰料にあ付りあ り(東岡2001)	初期 有り	
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	端まで及ぶもの たる(内張筋痕 修復工程)のものあり	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	ヨコナメ 凹面	不規	3 0		B類 有り	
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	端まで及ばない (内張筋痕)	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	ヨコナメ 凹面	鉛錆切り	1 4		V類 有り	
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	端まで及ばない (内張筋痕)	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	矢先により不規	不規	2 2	瓦当面にハナレ グサ付着する ものあり	なし 有り	
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	端まで及ばない (内張筋痕)	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	矢先により不規	不規	1 0		初期 有り	
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	端まで及ばない (内張筋痕)	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	矢先により不規	不規	4 3	NHLAから日賀獨 不規なもの	—	—
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	端まで及ばない (内張筋痕)	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	矢先により不規	不規	13 0	鉛錆切りの報告あり (東岡2001)	II類 有り	
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	なし	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	矢先により不規	不規	1 0	周縁の可燃性の高い 心材に付着する ものあり	初期 有り	
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	あり(端まで及ぶ 不規)	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	矢先により不規	不規	1 1	製面版、中部 13cm、端部19cm のものあり	なし なし	
鋸歯り付け (瓦瓦内張部端部セリフアリ)	周縁ナメ調整	なし	ヨコ ナメ	凹面 ヨコナメ 凸面	矢先により不規	不規	1 0		初期 有り	



1. 軒丸瓦の部位名称と計測位置

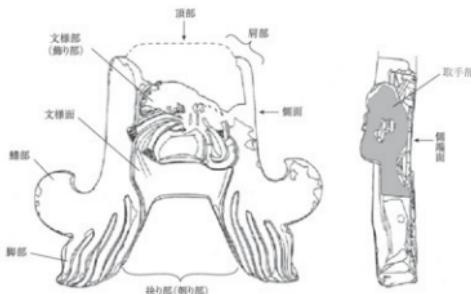


2. 軒平瓦の部位名称と計測位置



3. 瓦の部位名称と計測位置

4. 平瓦の部位名称と計測位置
（※本文中の縦横は、狭端部を上にした場合を表す。）



5. 鬼瓦の部位名称

第23図 瓦の各部位名称

第5章 庵川左岸・佐用川左岸の護岸石垣の調査

第1節 調査経緯、調査方法、調査位置

(1) 調査経緯と調査方法

平福御殿屋敷跡の遺跡範囲には、佐用川および合流する庵川の左岸域に、川に面して石積みされた護岸石垣が延びる。川の合流地点を境に庵川地区と佐用川地区に分けられ、庵川地区は、遺跡北端の北土塁から庵川の佐用川合流部分まで、佐用川地区は、佐用川の庵川合流部分の南から天神橋の北側までの範囲である。庵川地区・佐用川地区的護岸石垣の多くは人頭大の石材を谷積するものや、切石を間知積するものなど、近・現代以降に積み直されたもので、佐用川地区には部分的に現代のコンクリート製の擁壁も存在する。しかし、護岸石垣には慶長期に遡る可能性が指摘される箇所が部分的に存在する。

兵庫県西播磨県民局光都土木事務所が計画する千種川水系佐用川災害復旧助成事業における工事に伴い、庵川に面する北土塁を除き、庵川地区・佐用川地区的護岸石垣は撤去されることになっていた。そのため、庵川地区および佐用川地区的現存する護岸石垣について測量と発掘調査を実施した。

測量については、平面はヘリコプターによる空中写真測量を、石垣立面はポール等を利用して地上写真測量を実施し、図化を行った（付属CD写真図版99～118）。立面の図化対象は基本的に石積みが残存する部分である。また、発掘調査については、慶長期に遡る可能性がある石垣部分を中心にトレッチを設定して、基本的には岩盤まで掘削して断面観察を行い、写真撮影及び実測を行い、記録保存した。

(2) 測量調査範囲と発掘調査対象位置

石垣立面の測量位置については、庵川地区はI 1・2区の2箇所、佐用川地区は北から順にS 1～14区の14箇所に区分して図化した（第40図）（付属CD図版100～109）。I 1区は、御殿屋敷跡の遺跡北端に位置する北土塁の範囲で、I 2区は、その下流約12mに位置する石垣部分である。S 1～7区は本調査区の2A区にはば対応し、そのうちS 2・3・5・6区は東から佐用川へ流れる現代水路の放水口の擁壁部分である。S 8区の北半は、東の山側から西へ一直線に続く御殿屋敷の南土塁の西端部分にあたり、南半の一部は堀1の堰堤となる石垣3の西側にはば対応する。S 9区はその南側に隣接する。S 10区は京橋の北側隣接部にあたり、S 11区～14区は京橋の南側に位置する。S 14区南端は本調査の3区南端とほぼ対応する。

発掘調査は、慶長期の石積みの可能性がある、I 1・2区、S 1区北側、S 4区中央南寄りにある張り出し部分、S 8区の北半部を対象とした。I 1区については石垣前面に新規に護岸石垣を構築して保存されるため発掘調査せず、I 2区にのみT 1・2を設定した。S 1区についてはT 1、S 4区にT 2、S 8区にT 3を設定した。なお、掘削時に不安定な石材を除去したため断面面は傾斜面となり、断面図は傾斜面を垂直投影したものとなったため、石垣立面図とは必ずしも整合しない。

第2節 庵川地区・佐用川地区護岸石垣の調査

(1) 庵川地区的調査

I 1区の調査（図版41）（写真図版40・41）

I 1区は、平福御殿屋敷跡の北側石垣がL字状に南側へ屈曲して庵川に面する部分で、この部分は江戸時代中期の「利神城古図」によると北側の出入り口付近にあたる。I 1区は、発掘調査をしておらず、

石垣の現況を報告する。石垣は河床に露頭する岩盤上に構築し、現存高は東隅部で約4.5m、西隅で約3.2mを測る。ただし北東隅付近延長約4mについては、土砂で埋没しており基底石底部は未確認である。石垣に使用する石材は付近で採取したとみられ、無加工の人頭大の円礫や角礫が、乱雑に谷積される。ただし、隅部は切石を用いた算木積みであり、大半の石材に矢穴が認められる。石垣上面は、北東隅付近の標高約139.1mを頂点に南西に傾斜し、南西隅付近で約138.1mを測る。東西隅で約1mの比高があるが、本来の傾斜かは不明である。東西隅の最上段の石材はいずれも上面よりも石一つ分突出しており、本来の高さは現状よりも少なくとも1石分高く、後世に削られた可能性がある。なお、I 1・2区間にについてでは数石の基底石が僅かに残存する。「利神城古図」の当該箇所には対岸の八幡神社方向へ続く橋が描かれるが、現況ではその痕跡は認められない。

I 2区の調査(国版41)(写真国版40・41)

I 2区は、岩盤が川側に「く」字状に張り出すのに従って、石垣も平面「く」字状を呈する。上下流側は水害により消失し現存長は約20mである。石垣は河床に露頭した岩盤上に構築し、岩盤から上面までの高さは1.5m前後である。使用する石材は、周囲で採石したとみられる円礫や角礫が混じり、切石は認められない。下部の石材2・3段分については0.7～0.8mの大きな石材の長手方向を前面とするが、上半部は0.2～0.4cm大の石材が乱雑に積まれる。上半部は後世の補修によるが、下半部については慶長期の可能性が考えられたため、T 1・2を設定し発掘調査を実施した。

T 1 岩盤から石垣上面までの高さは1.6mを測る。基底石から3石まで大型の石材を用いる。裏込めは25cm以下の角礫をグリ石に用いるが、川砂を含む土が多く混じる。基底石は岩盤上に直接据えるが、岩盤の加工痕跡は認められない。石垣上半部の裏込めは、5cm以下の礫混じりシルト質細粒砂である。裏込めの下層付近より平瓦片が1点出土している。

T 2 岩盤から石垣上面までの高さは1.6mを測る。石材の用い方はT 1と同じである。基底石から2石までは大きな石材を用い、裏込めは25cm以下の角礫をグリ石にして川砂を含む土が多く混じる。基底石は岩盤直上に据えるが、岩盤の加工痕跡は認められず、安定させるために小型の礫を岩盤との間に噛ませるものがある。石垣上半部の石材は40cm以下の角礫で、裏込めも礫が混じるシルト質細粒砂である。

(2) 佐用川左岸地区の調査

S 1区北側の調査(国版42)(写真国版42・44)

S 1区は、延長35m、高さは1.7～2.5m、石垣上端の標高は1348～1354mを測る。大半は人頭大の石材を谷積する近代以降の石積みだが、北側には長さ70cm前後の横長の石材が布目積みされており、慶長期の可能性が考えられたため、北端部分にT 1を設定して発掘調査を行った。

T 1 地山は下から岩盤、淡灰色～灰色砂礫、暗灰色粗粒砂という河成堆植物で、最も上の暗灰色粗粒砂層が御殿屋敷跡の基盤層となる。地山は若干掘削され、最下段の石材を据える平坦面を整えた地形根切りが認められる。地表面の傾斜は約70度である。石垣は5段に石材を積んで高さ2.1mに構築される。前面の傾斜は、現状では孕みのためほぼ垂直であるが、もとは70～80度あった可能性がある。根石は幅0.7m、奥行き0.8mの大きさであり、岩盤上に直接据えられる。2・3段目は控の小さな石材だが、4段目は幅0.6m、奥行き0.8mの控の大きな石材を用いる。地山と石材の間はグリ石を含む灰色粗粒砂が充填され、中～下層はグリ石の量は多く、上層は土が主でグリ石の量は少なく締まりが悪い。

S 4区の調査(国版42)(写真国版42・44)

S 4 区は、延長 716 m、高さ 1.9 ~ 2.4 m、石垣上端の標高は 134.4 m を測る。南端から約 25 m 付近には、川へ降りる坂道が、下底幅 6 m、高さ 2.4 m の山型状に西へ約 1.5 m 張り出して石積みされる。S 4 区の大半は人頭大の石材を谷積する近代以降の石積みだが、張り出し部の下部には約 1 m の石材の布目積みが見られ、慶長期の可能性が考えられたため、その中央部分に T 2 を設定して発掘調査を行った。

T 2 地山は下から灰色砂礫、黄灰色粗粒砂、黄灰色中粒砂～粗粒砂という河成堆積物で、最も上の黄灰色中粒砂～粗粒砂が御殿屋敷跡の基盤層となる。地山は 2 段に掘削され、石垣構築の作業面とみられる。石垣は 5 段に石材を積んで高さ約 1.8 m、前面の傾斜約 70 度に構築される。根石は幅 1 m、奥行き 0.4 m の控の少ないもので、地山直上に据えられる。その上の 2 段目の石材は奥行き 0.8 m の控の大きなものだが、3 段目より上は幅・奥行きも小さな石材となる。地山と石材の間はグリ石を含む灰色粗粒砂で充填されるが、それより上層は土が主でグリ石の量は少なく、突き固めが弱いためか締まりが悪い。

S 8 区北半の調査(図版 42)(写真図版 43・44)

S 8 区は、延長約 37 m を測り、南土堀の西側延長部に対応する北半部と堀 1 に対応する南半部に分けられる。北半部は高さ 3 m、石垣上端の標高 133.8 m を測る。北半は約 1 m の大きな石材を多く利用して乱積みされるため、慶長期の可能性があり、中央部に T 3 を設定し発掘調査を実施した。なお、S 8 区北端には S 7 区と連続して切石が角を持って積まれ、幅 1.4 m、深さ 1.7 m の凹型状の構造が見える。機能は不明で、位置的に 2 A 区 S D 79 とは少しずれる。窪み部は後世に人頭大の石材で埋め立てられる。

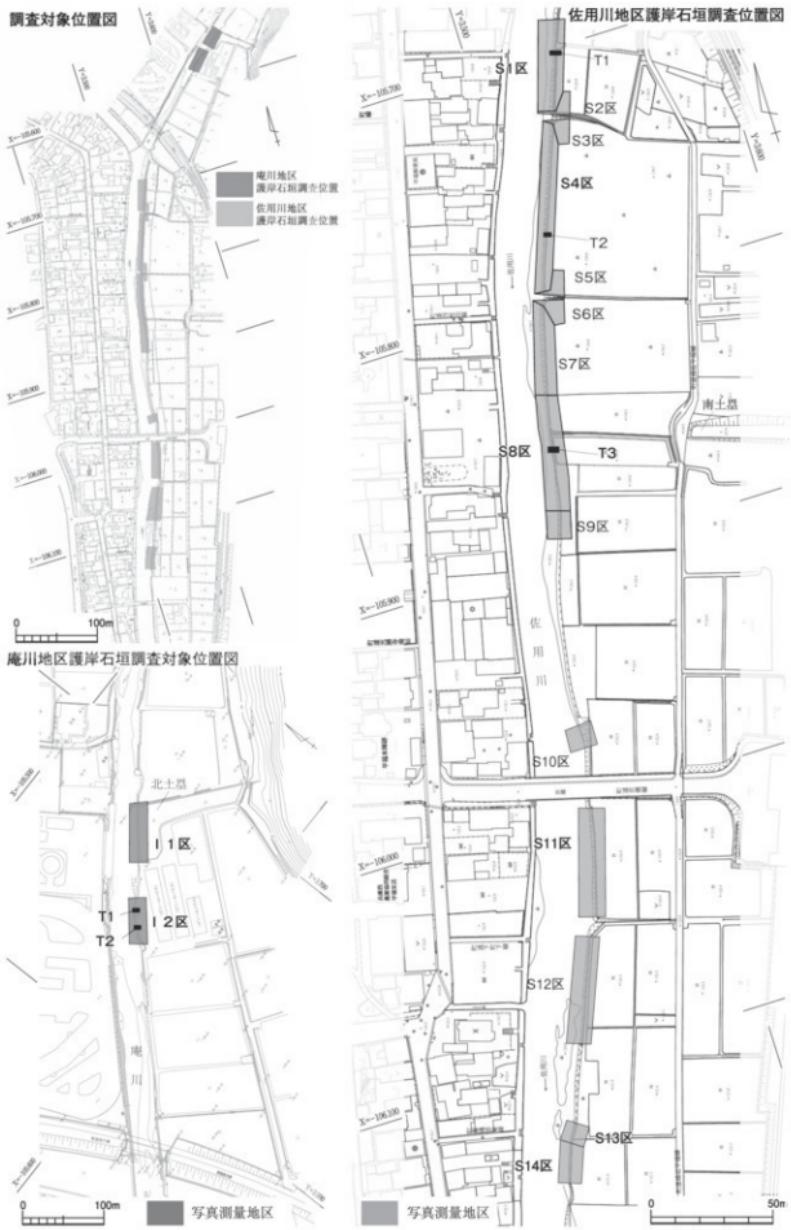
T 3 地山は約 45 度に傾斜し、下から岩盤、その上に灰色砂礫、褐色粗粒砂という河成堆積物あり、最も上の褐色粗粒砂層が御殿屋敷跡の基盤層となる。石垣構築にあたり、岩盤には石材を据える平坦面を掘削して作った地形模切りが認められるが、上の河成堆積物の傾斜面の成因が、掘削か浸食によるものか不明である。地山上には下層に褐色疊混じり粗粒砂、上層に暗褐色疊混じり粗粒砂が盛られて石垣構築の作業面となっている。上層の土にはシルトブロックを含み、河成堆積物を利用した盛土とみられる。石垣は 5 ~ 6 段に石材を積んで高さは約 3 m、傾斜は約 75 度に構築される。根石は幅 1.2 m、奥行き 0.8 m ほどの控のないものであり、岩盤直上に据えられる。その上の石材も幅 1.4 m、奥行き 0.5 m のもので、地山との間に人頭大の石が込められる。最も上の石材は幅 0.6 m、奥行き 1.2 m 程度で、この石材のみ控が大きい。盛土と石材の間にはグリ石を含む褐色～灰色の土が充填されているが、上層は土が主でグリ石の量は少なく、突き固めが不十分なためか締まりが悪い。

第3節 小結—護岸石垣の時期的位置づけ—

護岸石垣の時期的評価については、今回の本発掘調査した石垣 1・2・3 の成果が、慶長期の石垣と判断する基準となる。具体的な示標については、本報告書の別項を参照されたい。

I 1 区について現況のみの判断だが、用いる石材の小ささや乱雜な谷積が見られる点から、新たな積み直しとみられる。I 2 区の発掘調査では、下部の大きな石材の控えが短いことが判明した。また、S 1 区北側・S 4 区・S 8 区北半も同様で、石材の長手を前面にして、控えが短くなってしまい、石垣 1 で認められた慶長期の特徴がみられない。以上から、少なくとも慶長期よりも後世に新しく積み直されたと考えられる。また、大きな石材は、慶長期の石垣のものを再利用したとみられ、S 1 区北側や S 8 区北側など城郭に関連する構築物の存在が近接する地点に特に顯著であること、このことを裏付ける。

以上、麻川・佐用川地区的護岸石垣には、總じて慶長期に遡るものはなく、後世の積み直しのみであつたことが判明した。また、この事実は逆に当地域の水害の頻度や影響の大きさを物語るともいえよう。



第24図 麻川地区・佐用川地区護岸石垣調査区位置図

第6章 まとめ

(1) 平福の歴史

利神城跡は播磨国主となった池田家の支城として、池田由之によって慶長5～10年（1600～1605）に築かれた。同時に山麓御殿として築かれたのが平福御殿屋敷跡（以下、御殿屋敷）である。初期に築かれた池田領の支城は三木城・岩屋城・明石城（船上城）・高砂城・赤穂城と、利神城跡の6城がある。

由之は慶長12年（1607）に備前下津井に転封となるが、その後、輝政の弟・長政、妻・貞正院などが領主となり、慶長19年（1615）池田輝興が入封して平福藩が成立する。しかし、寛永8年（1631）に輝興が赤穂に転封してしまうと、利神城は御殿屋敷と共に廃城となつた。

平福の町ではその後に領主となった旗本松平康朗（～1644年）によって、陣屋（第32図）が川の対岸に建設された。江戸時代の平福の町は陣屋や鳥取藩本陣が置かれる因幡街道最大の宿場町として発展した。また高瀬舟によって坂越からの舟運が栄え、町屋300戸余りの家の約8割に屋号がつく商人の町となつた。

その後も昭和初期まで出雲街道・因幡街道の宿場町として繁栄したが、鉄道が敷設されなかつたため衰退しその地位を失つたという（1994年に漸く智頭急行が開通し平福駅が設置された）。往時の面影を伝える旧街道沿いには連子窓と千本格子を持つ古い家並みが見られ、佐用川沿いの石垣と川座敷、土蔵群などの景観は、1983年に制定された佐用町歴史的環境保存条例の保存区域の指定を受けている。

一方、利神城跡・御殿屋敷は短期間に廃絶したために、その後の改修があまりないときれ、良好に遺構が残されてきた。ただし、廃城と一緒に畠などの開墾が始まつたようで、払い下げを受けて開墾をおこなつた田住家によって、寛永10年代には御殿屋敷周辺は耕作地となつたといわれる。

(2) 平福御殿屋敷の構造

御殿屋敷の構造は南北に南土塁・北土塁と呼ばれる仕切り土塁と堀を設け、西側は佐用川を堀として護岸に石垣を築いて郭内を囲む構造を持ち、南土塁の中央には内折形と推定される虎口を持つ。これらに囲まれた郭内は武士が住む居住区と“うわがみ門”（第30図）と呼ばれる巨大な枡形門を通つて入る城主常屋敷と呼ばれる中心郭で構成される。さらに、城主常屋敷は西北側に並んでお花畠が付属しており全体で広い主郭を構成する。一方、うわがみ門は利神城跡への登城虎口でもあったようで、近年まで使われていた九十九折れの道へとつながつていた。

石垣は現存部分ではうわがみ門・南北土塁に残されるが、かつては護岸にもあった。これらの構造からすると御殿屋敷という名称が使われるものの、実質的には山城と同



第25図 利神城跡と平福御殿屋敷（西尾孝昌氏作成図を一部改変）

様に城郭であったことは明白である。

(3) 調査の概要

調査の結果、平福御殿屋敷跡の内部では南土塁西端部の石垣・堀や、郭内の建物・排水溝・廐棄土坑などが検出された。

検出された石垣は部分的に粗削りや矢穴を残すものが、自然石の中に混在する打ち込みハギで、積み方の技法としては布積み崩しとなる。石材そのものは方形を意識するが規格性に乏しいため、荒々しい印象を持つ。城郭石垣は慶長期後半になると規格性のある調整石が多く混在し始めるが、上記の印象からすると検出された石垣は慶長初期の築城に際して築かれたものと考えられた。この一方、慶长期前後の石垣は短期間のうちに変遷するが、現存の石垣は修築を受けることが多いので、本石垣は城郭石垣の変遷を探る上でも後世の改修の形跡がない貴重な資料である。

出土遺物は陶磁器が17世紀前半頃のものが主体を占め、瓦類は利神城跡と同種のものが出土している。これららの点からは平福御殿屋敷跡が利神城跡の築城に並行して構築されたことが窺え、両者が一体の構築物であったことが確認できた。この点は池田家の城郭政策を考えるうえで重要な成果となった。

また、これらの成果は支城の山麓居館においても、本格的な城郭を築城したということであり、この事実は池田家の築城が姫路城にのみ集中したのではなく、支城クラスにおいても大規模なものであることを示している。その事実は池田家の城郭政策の様相を明らかにするうえで、今後他の支城との比較検討の上で考える材料となる。

遺物の出土は調査区の全域に及んだが、主として廐棄土坑からのものが多くを占めた。これららは平福御殿屋敷跡の退去時に集中して廐棄されたものと考えられ、年代的には慶長期のものが中心となる。ただし、初期の伊万里焼の存在など17世紀前半の遺物も少量含まれるので、全体としては御殿屋敷が機能した慶長5年~寛永8年までの期間のものが含まれると考えられる。そして、これらの遺物群には広域流通品が多い点や、茶陶関係の遺物が含まれるなどの特徴がある。ただし、茶陶関係の出土遺物の中では瀬戸焼関係よりも唐津焼に比重がやや多い点や、備前焼に特殊な製品が含まれる点が注目される。

一方で土師器などの狭域流通品が少なく、煮炊具では鉄製品への移行によるためか土器製品の減少が顕著である。さらに、茶陶関係の出土地点については郭内(2A区)ばかりではなく2B区・3区にも多く含まれ、特に3区の南端に近いS B 163周辺では志野焼や特注の備前焼花生が出土するなど居住者の生活レベルの高さを示した。

ただし、出土個体数が限定される点や、器種組成に狭域流通品が目立たない点は、この時期の城下町の典型的な資料とはいえない。今回の調査地点が屋敷の端に位置する点や、平和裏に移転が行われたことなどを考慮すると大半の遺物が持ち出されたことが想定され、本来の土器組成を示しているかどうかは検討の余地がある。

(4) 遺構と瓦

石組溝 排水施設としての石組溝が郭内ではS D 68・69・79の3本、郭外ではS D 24の1本が検出された。これららのうちS D 68では盛土造成と共に構築しこれを完全に埋めて、枠台などの基礎石垣の下層に構築されていたり、S D 79東西方向が石垣背後の造成と一体で構築されるなど、築城に関わって郭内の公的なインフラとして構築された可能性が高い。その点からするとS D 69や郭外のS D 24についても同様の性格と思われ、これらの排水溝は屋敷地個々の施設ではなく、御殿屋敷・城下の公共インフラとして

整備された可能性が高い。

掘立柱建物 今回の調査で建物が検出されたのは主として2B区・3区である。2A区についても掘立柱建物が検出されているが屋敷地に伴うものかどうかは疑問がもたれる。調査区が屋敷の端に位置するので詳細は不明であるが、瓦の量などから見ると郭内は礎石建物が多いことが予測される。一方、大阪城下町や兵庫津、堺の町屋では戦国時代末期には建物構造は礎石が主流となる。この変化は播磨においてもほぼ同時に進行するものと思われ、姫路城や播磨の城館では既に16世紀後半から礎石建物への移行が進み、掘立柱建物は急速に減少することが知られている。千種川流域では赤穂城の城下町で検出された下層町屋建物で17世紀前半の建物に掘立柱建物が検出されるが、17世紀の中ごろには礎石に移行する。従って、本遺跡の掘立柱建物は赤穂城跡の下層町屋の時期とは平行するもので、町屋建物が礎石構造に変化する直前のものと評価できる。

石垣について 石垣は前述のとおり、築城時のものである。これらの石垣では石材の粗削りが部分的に行われて“矢穴”を残す調整石が含まれる。技法的には不定形で大小石材がまじり“乱積み”的特徴を示している。落し積みの存在や基底部の石材がやや小さいなど一見稚拙な印象を持つが、同様の技法は姫路城跡の池田期（II期）石垣にも指摘されており、後世の積み直しではない。さらに、石垣の空隙やグリ石、背面の造成土などに遺物が混入しない点からは、石垣構築に先行した生活痕跡がないことが考えられ、少なくともこの場所については新規築城であったことの証佐となる。

護岸石垣 は第4章で示したように、築城時のものではなく近世～近代にかけて平福町の開発と共に築かれたものであることが判明した。石材そのものは矢穴などの存在から城郭石垣の石材を転用したものが多いが、組む技術は城郭石垣とは全く異なり、間知積の技術が随所に反映された石垣である。ただし、前述のとおり、護岸石垣の裏込土背後には城郭石垣構築時の造成土（黄色粗砂）が残されており、護岸にかつて石垣が存在した痕跡は確認することができた。

瓦 平福御殿屋敷から出土した瓦は多種類のものがあるが、鬼瓦が出土するものの鰐や家紋瓦（池田家では揚羽蝶）は含まれない。郭内からの出土品が数量的に多数を占め、各地点から出土していることに比べ、城下は出土地点が主に2B区のSK 20と3区SK 160周辺に限定される。そのうち郭内からは主としてNM 3とNH 1 A・B・Dが出土し、ほかにNM 1・2、NH 2などがあるが、これらの瓦は利神城跡の瓦に同種のものがあり、瓦の供給が同一職人によったことを明らかにした。一方、城下からはNM 12(・4・11)やNH 4などが主に出土するが、これらは山城や他の地点を含めても今までのところ出土例がないものである。このため、郭内は山城と相関係を持つが、城下の瓦はこれらと別種の系譜を持つものが供給されたことが明らかにされた。

(5) 御殿屋敷および城下の構造

御殿屋敷 は重臣クラスの武家屋敷を石垣・堀で囲むものの、城下全体を囲い込む総構えは持たない。そして、城下にも武家地が置かれ、広い城下を左岸南側にもつ郭内専士型と評価される構造となる。

廐棄土坑 廐棄土坑が調査区東堀付近に検出されるが、多くは半分ないし大部分が調査区東側に伸びている。郭内では2A区SK 65・62・72・74・75・76・100、郭外では2B区SK 20・7などがある。さらに北端瓦溜・103瓦溜などもこの種の廐棄土坑と同様の性格を持つ可能性が高い。調査区は護岸から一定の距離を持つが、屋敷地の位置からすると全体が屋敷裏にあたると推測される。これらの場所では姫路城城下町の事例などから見ると、建物のない裏庭ないし空間地でありしばしば廐棄土坑が掘削されることが知られている。ただし、本調査区での廐棄土坑のように陶磁器や瓦などを一括で大量に捨てる

場合は災害による片付けや大名交代期における引っ越しに伴うものの可能性が高い。そして、本事例においても SK 65・74 のように完形に近い瓦を一時期に廃材として遺棄していることからみると、単なる退去ではなく、建物の解体などに伴う瓦礫の片づけが想定される。つまり、廃棄土坑の調査成果からは御殿屋敷の築城と同時に、郭内および城下の建物を解体した可能性が高いことが示唆される。ただし、この解体が退去時の解体なのか、その直後に行われたという田住家の開墾時に伴うものなのかは検討を要する。

また、廃棄土坑から瓦が出土する地点は 2 A 区では広範囲にわたるが、郭外では SK 20 のある 2 B 区 a 区画と 3 区 d・e 区画 (SK 160) の南端の 2 地点に限られる。SK 20 は堀外に隣接する屋敷地のものであるが、3 区は城下の南端にあたり、城下の階層からすると一般的には最下級の居住者に拝領される場所である。

屋敷区画 武家屋敷を区画する造構としては郭外 2 B 区の築地基礎 (SF 25) や柵 (SF 8・29・96)、SF 25 と SF 8 の間の築地基礎などがある。これらの間隔は SF 25 - 石垣 2 が 27 m、同様に SF 25 - 築地痕跡が 13 m、築地痕跡 - SF 8 は 23 m、SF 8 - 23 は 24 m、SF 23 - 96 は 24 m となり、23 ~ 24 m を規格地とする屋敷地が設定されていた可能性が指摘できる。ただし、SF 96 は SB 82 と重なるので、この区画には部分的に変遷があり、ある時期に屋敷割の変更があったことが予測される。

盛土造成 郭内では 2 A 区 b ~ g 区画まで自然堆積層の上に人為的な盛土が確認される。これらは護岸石垣背後の造成土とも関連するが、築城時に造成された盛土である。特に 2 A 区 b 区画の赤褐色のバラス層の供給先は東側の山陰斜面と推定され、低位の郭内を嵩上げしている。これに対して郭外である 2 B 区・3 区ではシルト質土ないし軟弱な土砂が盛土されていた。

屋敷区画と城下普請 郭内では周囲の石垣・堀や柵の構築などに並行して、内部の盛土造成が行われるとともに、礎石構造の瓦葺建物（大型鬼瓦を葺くような）を持つ重臣クラスの屋敷も建設された。これらの屋敷地はすべて利神城の城郭建物と同系譜の職人が担っていたことが瓦の成績から推定される。つまり、郭内では城郭と重臣屋敷の両方が築城と一体の事業として実施されたと思われる。一方、城下では掘立柱建物が多く、瓦葺きの建物は限定され、石垣 2 に隣接する屋敷地や、3 区南端の城下最外縁部に存在するのみである。特に、3 区南端では城下の最外縁にも関わらず瓦葺きの礎石建物が建ち、備前焼花生（169）・志野焼向付（168）などを所有する居住者がいた。外縁部は城下町の一般的な理解からすると下層の武家地となるが、これらの事実からは武家以外の富裕層の存在が浮かび上がる。この意味では城下左岸に武家のみが住んだという点は検討の余地がある。

一方、区画施設から見ると、城下では 12 m 前後を単位とする屋敷地が東西方向に設定され、掘立柱建物を中心とする建物が建てられた。ただし、2 B 区ではほぼ堀 1 に近い地割（東に N 15° E）を持つが、3 区の掘立柱建物はほぼ北に近い軸を持ち、礎石建物のみが 2 B 区に近い軸を持つ。この点から見ると屋敷区画が城下全体に及んだかどうかは検討の余地があり、未区画の空間地に居住者が入り込み、多様な建物軸をもつ景観を形成した可能性がある。さらに、2 B 区 f 区画でみられた建物と区画施設のように屋敷区画の部分的な変遷もある。

今後への検討課題は多いが、調査によって郭内が築城と一体の事業として屋敷建築が進んだことに対して、城下は異質な技術者や技術によって構築され、区画を持つ屋敷地とそうではない部分が混在する様相が垣間見えた。

このほか、城下は SK 160 を境にして全く屋敷がない土地となるため、SK 160 は城下の境界を画する溝の可能性がある。そして、その外側に鉄物師が（3 区 f 区画 SK 3 ~ 5）工房を建てて鍋・鎧先など

を製作していた。このように城下の外縁部では単純な階層社会とは異質な世界が展開した可能性が指摘できる。

ともすれば、絵図研究による影響から、城下全体を一律に計画的な都市設計によるものと評価しがちであるが、本例は17世紀初頭の都市建設について別の側面を提示しているように思える。

（註）

1. 現在70歳代の人が小学校（平福陣屋にあった）から利神城への遠足にこの道を通ったという。
2. 池田家の揚羽蝶文瓦は姫路城を始め岩屋城・由良城・山崎城（鹿沢城）などから出土しており、殿町構では揚羽蝶を象った鬼瓦片が出土している。

〔引用文献〕

（財）観光資源保護財団 1984『利神城と平福の町なみ』

佐用町 1986『平福 伝統的建造物群保存対策調査報告書』

矢守一彦 1988『城下町のかたち』筑摩書房

城郭談話会 1991『播磨利神城』

赤穂市教委 2005『発掘された赤穂城城下町』



第26図 佐用川から利神城を望む(西から)



第27図 利神城天守郭石垣南面(南から)



第28図 利神城山頂曲輪群



第29図 利神城山頂旗脚部石垣



第30図 うわがみ門(西から)



第31図 農道



第32図 平福陣屋(東から)



第33図 別所構土塁(西から)



第34図 護岸石垣隅角部



第35図 石垣1の石材



第36図 護岸石垣(石垣3背面)



第37図 佐用川に並んだ護岸石垣の石材



第38図 護岸石垣に残る矢穴



第39図 護岸石垣の矢穴 拡部



第40図 護岸石垣の修景工事



第41図 平福駅に設置された石垣石材(石1-4・石3-2)



第42図 西山の石垣(東から)



第43図 西山の石切り場(東から)



第44図 西山に残る矢穴(南東から)



第45図 天満神社(東から)

付章 平福御殿屋敷跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

(1)はじめに

本報告では、平福御殿屋敷跡より出土した木製品に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行う。木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする本部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

(2)試料と方法

試料は、平福御殿屋敷跡より出土した漆椀、部材、板状木製品、薄板状木製品、棒状木製品などの木製品計30点である。時期は江戸時代である。試料は結果表に、ともに対照を記す。

方法は、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目と同義)、接線断面(板目と同義)の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

(3)結果

第9表に結果を示し、各断面の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1)マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り扱うエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりマツ属複維管束亞属に同定される。マツ属複維管束亞属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

2)スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

仮道管、树脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。树脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものが多い。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型で、1～15細胞高ぐらいである。树脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。

3)ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

横断面：小型で丸い、放射方向にややのびた道管が、単独あるいは2～3個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

第9表 平福御殿屋敷跡における樹種同定結果

報告番号	器種など	結果(学名／和名)	
W1	漆榎	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属
W2	漆榎	<i>Fraxinus</i>	トネリコ属
W3	漆榎	<i>Aesculus turbinata Blume</i>	トチノキ
W4	漆榎	<i>Aesculus turbinata Blume</i>	トチノキ
W6	漆榎	<i>Aesculus turbinata Blume</i>	トチノキ
W7	漆榎	<i>Aesculus turbinata Blume</i>	トチノキ
W8	漆榎	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W9	漆榎	<i>Aesculus turbinata Blume</i>	トチノキ
W15	底板	<i>Cryptomeria japonica D.Don</i>	スギ
W17	棒状	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
W18	櫻?	<i>Castanea crenata Sieb. et Zucc.</i>	クリ
W19	棒状	<i>Quercus sect. Prinus</i>	コナラ属コナラ節
W21	板状	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亞属
W25	部材	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亞属
W26	部材	<i>Salix</i>	ヤナギ属

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

4)クリ *Castanea crenata Sieb. et Zucc.* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、数列配列する環孔材である。晩材部では小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりクリに同定される。クリは北海道の西南部、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20m、径40cmぐらいであるが、大きいものは高さ30m、径2mに達する。耐朽性が強く、水湿によく耐え、保存性の極めて高い材で、現在では建築、家具、器具、土木、船舶、彫刻、薪炭、椎茸はだ木など広く用いられる。

5)コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～2列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靭で彈力に富み、建築材などに用いられる。

6)コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、單列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強韌、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

7) トノキ *Aesculus turbinata* Blume トノキ科

横断面：小型の道管が、単独ないし放射方向に2～数個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞からなる同性である。放射組織と道管との壁孔は、小型で密に分布する。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型で、層階状に規則正しく配列する傾向を示す。

以上の形質よりトノキに同定される。トノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ15～20m、径50～60cmに達する。材は軟らかく緻密であるが耐朽性、保存性がなく、容器などに用いられる。

8) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科

横断面：年輪のはじめに、大型で厚壁の丸い道管が、ほぼ単独で1～2列配列する環孔材である。孔圈部外では、小型で丸い厚壁の道管が、単独あるいは放射方向に2～3個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の形質よりトネリコ属に同定される。トネリコ属にはヤチダモ、トネリコ、アオダモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する落葉または常緑の高木である。材は建築、家具、運道具、器具、旋作、薪炭など広く用いられる。

(4) 考察

同定の結果、平福御殿屋敷跡の木製品は、マツ属複維管束亜属2点、スギ1点、トノキ5点、コナラ属コナラ節2点、トネリコ属2点、ヤナギ属1点、クリ1点、コナラ属アカガシ亜属1点であった。

マツ属複維管束亜属は部材、棒状木製品、板状木製品に使用されており、木理おむね直立で肌目は粗く、水湿に良く耐える材である。スギは薄板状木製品、棒状木製品、板状木製品、底板などに使用されており、木理直立で肌目は粗く、加工工作が容易で、大きな材がとれる良材である。トノキは漆椀に使用されており、耐朽性、保存性は極めて低く、切削、加工は容易で柔らかい材である。コナラ属コナラ節は漆椀、棒状木製品に使用されており、強韌で弾力に富む材である。トネリコ属は漆椀に使用されており、概して強韌で堅硬な材である。ヤナギ属は部材に使用されており、耐朽性、保存性は低く、切削、加工の容易な材である。クリは楔？に使用されており、重硬で保存性が良い材である。コナラ属アカガシ亜属は棒状木製品に使用されており、硬堅な材である。

マツ属複維管束亜属、スギは温帯に広く分布する常緑針葉樹であり、いずれも高木となる。その内マツ属複維管束亜属には、土壤条件の悪い岩山に生育し二次林を形成するアカマツと、砂地の海岸林を形成するクロマツがある。スギは特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する。

ヤナギ属、クリ、コナラ属コナラ節、トチノキは温帯を中心に広く分布する落葉広葉樹である。その内、ヤナギ属は湿地や河辺などの水辺に、クマシデ属イヌシデ節は山地等に生育する。クリ、コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に生育し、二次林要素でもある。

トネリコ属も温帯を中心に広く分布する落葉または常緑広葉樹である。沢沿いなどの湿原や水湿のある低地に生育し、ときには湿地林を形成する。コナラ属アカガシ亜属は、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。

以上から平福御殿屋敷跡の木製品の樹種は、当時遺跡の周辺からか流通によってもたらされたとみなされよう。

参考文献

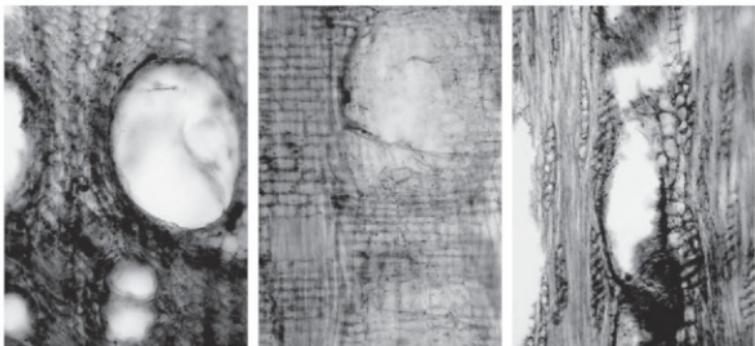
佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.

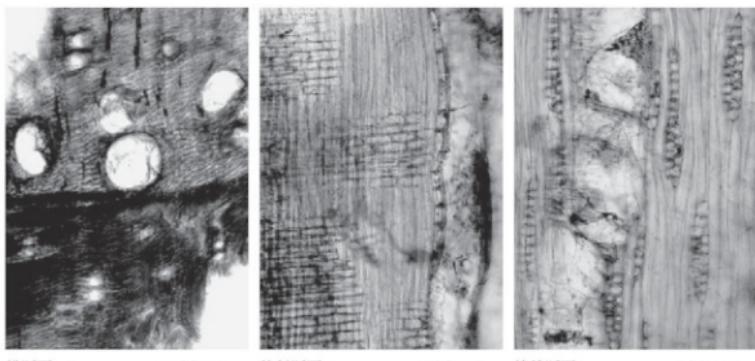
島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296.

山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242.

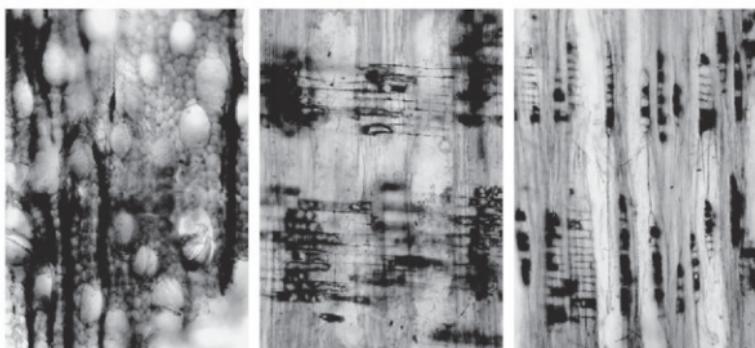
第46図 平福御殿屋敷跡の木材 I



横断面 : 0.2mm
放射断面 : 0.2mm
接線断面 : 0.2mm
1.W1 漆挽 トネリコ属

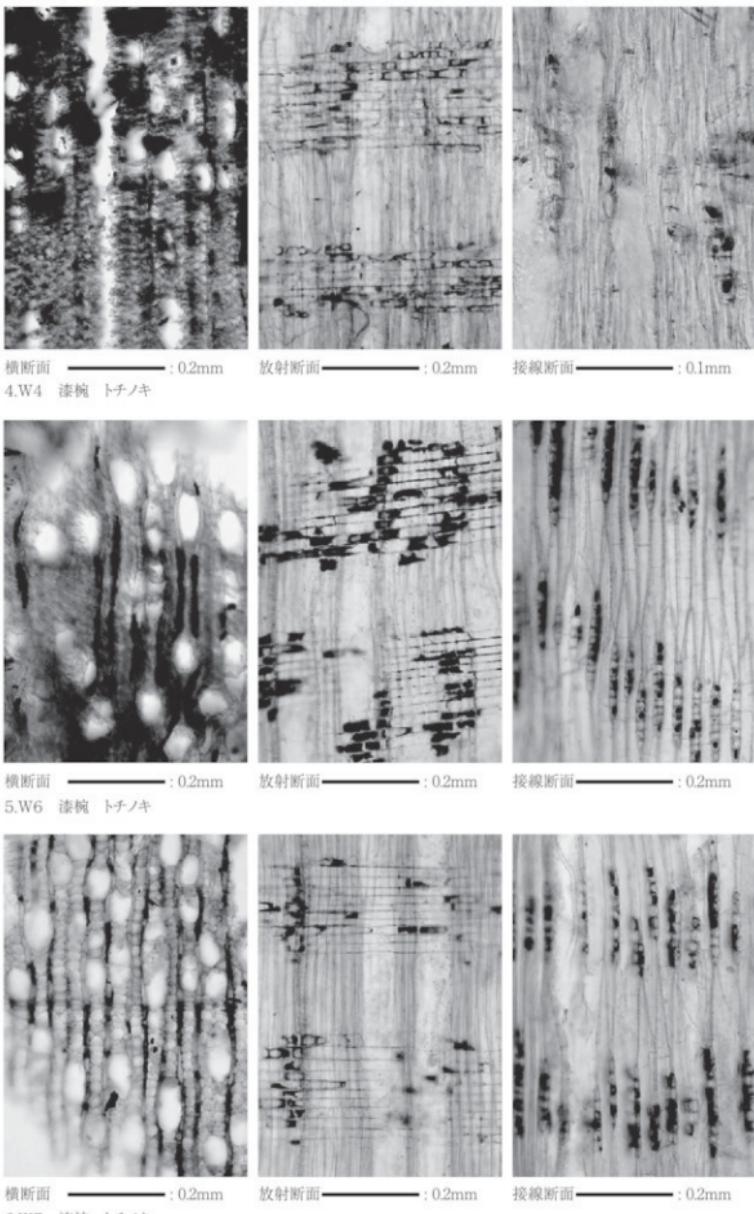


横断面 : 0.5mm
放射断面 : 0.2mm
接線断面 : 0.1mm
2.W2 漆挽 トネリコ属

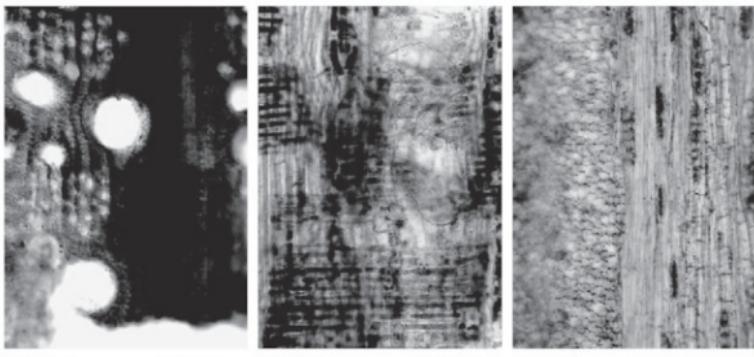


横断面 : 0.2mm
放射断面 : 0.2mm
接線断面 : 0.2mm
3.W3 漆挽 トチノキ

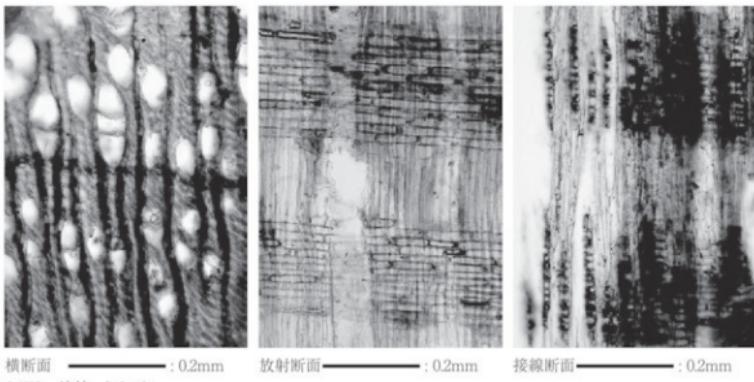
第47図 平福御殿屋敷跡の木材II



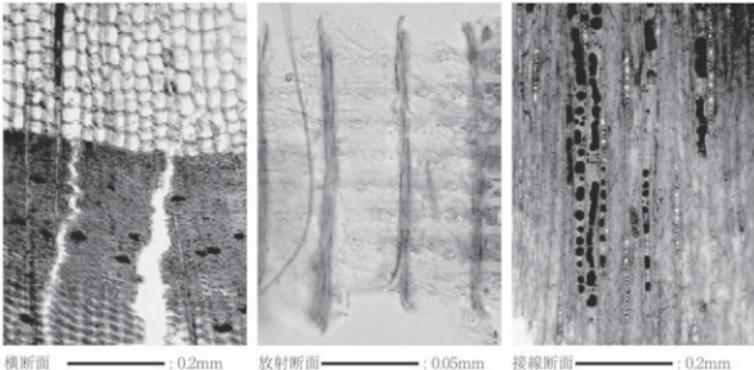
第48図 平福御殿屋敷跡の木材Ⅲ



7.W8 漆椀 コナラ属コナラ節

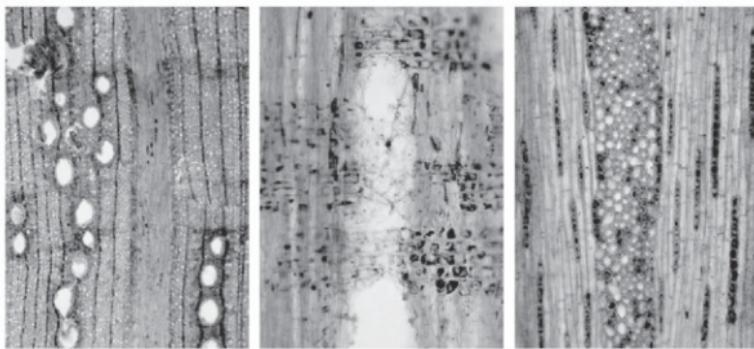


8.W9 漆椀 トチノキ

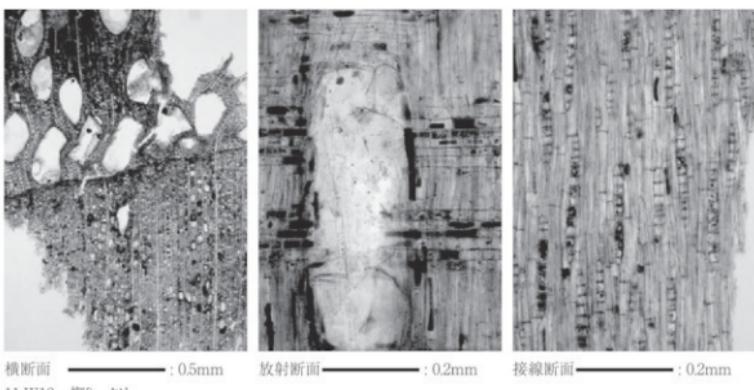


9.W15 底板 スギ

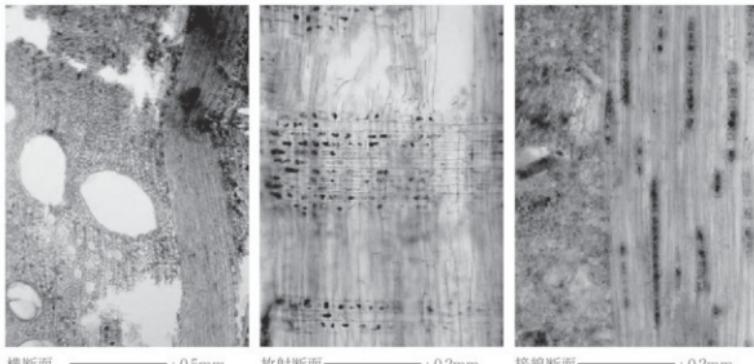
第49図 平福御殿屋敷跡の木材III



横断面 : 0.5mm
放射断面 : 0.2mm
接線断面 : 0.2mm
10.W17 棒状 コナラ属アカガシ亜属

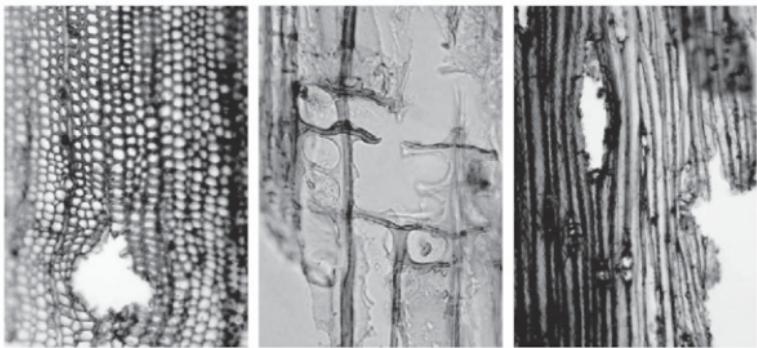


横断面 : 0.5mm
放射断面 : 0.2mm
接線断面 : 0.2mm
11.W18 楢? クリ

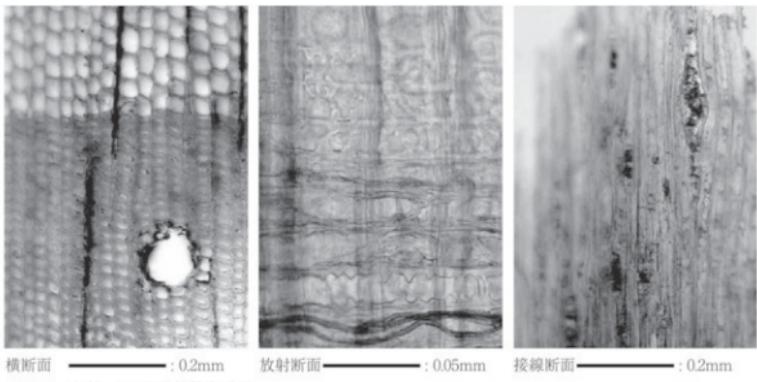


横断面 : 0.5mm
放射断面 : 0.2mm
接線断面 : 0.2mm
12.W19 棒状 コナラ属コナラ節

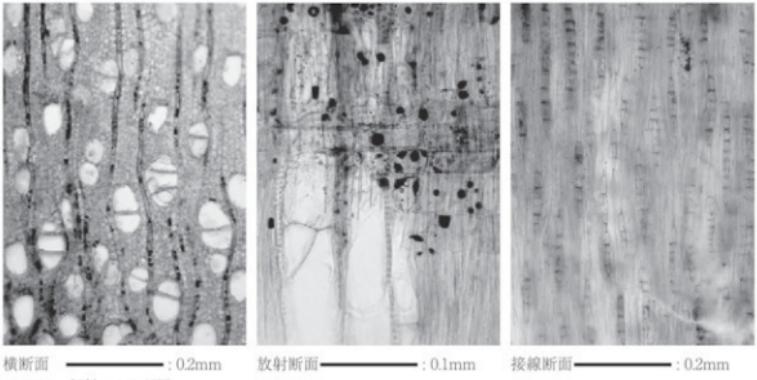
第50図 平福御殿屋敷跡の木材V



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
13.W21 板状 マツ属複維管束亜属



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.05mm 接線断面 : 0.2mm
14.W25 部材 マツ属複維管束亜属



横断面 : 0.2mm 放射断面 : 0.1mm 接線断面 : 0.2mm
15.W26 部材 ヤナギ属

第10表 遺物観察表1

No.	出土場所	出土遺構	区画	種別	器種	法量(㎤)				現存			
						口徑	脚高	底径	脚径	口縫	底	脚部	他
1	2A1K	P28	a区西	土師器	瓶	(50.0)	(6.2)			1/2			赤褐色。
2	2A1K	P46	a区西	土師器	瓶(口)	(11.3)	(4.75)	—	—	1/2	—	—	白陶を丸く側付。
3	2A1K	P46	a区西	土師器	瓶	(33.0)	(9.0)	—	—	小片			灰褐色。開口段跡。
4	2A1K	P46	a区西	土師器	瓶	(35.6)	(6.2)	—	—	1/9			灰褐色。開口段跡。
5	2A1K	P93	a区西	土師器	瓶	(24.0)	(11.1)	(15.0)		1/6	若干	1/6	灰褐色。開口段跡。
6	2A1K	SK48	a区西	土師器	瓶	(87)	2.0	—	—	1/2	1/2		上縫直上。手づくね型の瓶。
7	2A1K	SK48	a区西	土師器	瓶	(31.0)	(4.75)	—	—	1/12			近口1開口段跡。
8	2A1K	SK62	a区西	土師器	小瓶	(6.5)	2.0	—	—	1/5			手づくね型。
9	2A1K	SK100	c区西	陶器	碗	—	(2.2)	(5.0)	—	1/4	1/5		動土日。
10	2A1K	SK72	e区西	土師器	瓶	(97.5)	2.15	6.0	—	1/9	完存		赤褐色。
11	2A1K	SK72	e区西	土師器	瓶	(47)	—	—	—				複又土。
12	2A1K	S.K.74	c区西	土師器	瓶	(10.1)	2.5	5.4	—	1/2	完存		赤褐色。
13	2A1K	S.K.74	c区西	土師器	瓶	(11.0)	2.5	—	—				赤褐色。
14	2A1K	S.K.74	c区西	土師器	瓶	(10.2)	2.1	(5.1)	—	1/4	1/2弱		灯明器。赤褐色。
15	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	—	(2.4)	(4.5)	—				動土日。熟成する。黒褐色の施釉。
16	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(12.0)	2.5	(4.0)	—	1/8弱	3/4		動土日。薄青色に施釉。緑い赤褐色の施釉。
17	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(10.0)	(3.0)	—	—	1/6			口縫部を玉緑にする。緑い赤褐色の施釉。
18	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(10.2)	6.1	(5.0)	—	1/10	1/2弱		口縫部を玉緑にする。緑い赤褐色の施釉。
19	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(12.0)	7.0	5.3	—	1/4	1/2		口縫部を玉緑にする。緑褐色の施釉。
20	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(35.4)	(5.5)	—	—	1/8			赤褐色。
21	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(11.0)	(3.0)	—	—				複又土。
22	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(11.0)	(5.0)	—	—				複又土。
23	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(11.0)	(4.0)	—	—				手づくね持つ。
24	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(28.1)	(5.0)	—	—				近口1開口段跡。斜めの鋸目。
25	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(39.2)	(9.4)	(2.0)	—	わずか	1/4弱		口縫部を内側に折る。断面暗灰色。
26	2A1K	S.K.74	c区西	陶器	瓶	(32.7)	8.1	(10.7)	—	わずか	1/6		断面暗灰色。外側濃褐色。
27	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	小瓶	8.1	2.1	5.9	—				手づくね型。
28	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(10.4)	3.0	(6.2)	—	1/6			手づくね型。
29	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	—	3.2	—	—	わずか			口縫部裂片。
30	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(27.2)	5.9	—	—	わずか			チリで西の前歯をつくり。外面に平行テキテキ。
31	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(11.0)	2.6	(6.4)	—	わずか			複又土。
32	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(12.0)	3.3	—	—				外側に花弁と2葉4瓣。
33	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(12.0)	2.9	—	—				外側に網状。
34	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(13.0)	5.4	—	—	1/8	1/8		外側に魚文、内側に四方彌文。
35	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(16.0)	5.4	—	—	1/8	1/8		複又土型。外側に草花文。
36	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(30.0)	4.9	—	—	わずか			近口1開口段跡。
37	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	(29.0)	(8.0)	—	—	1/9			近口1開口段跡。2本革の鋸目。
38	2A1K	北端土壠	c区西	土師器	瓶	—	(17.4)	(—)	(—)	1/5			複又土(無口)に瓶口。外側ハケナリ。
39	2A1K	北端土壠	c区西	陶器	瓶	10.8	3.15	3.5	—				動土日。基筒瓶。
40	2A1K	No.17石判溝周邊	f区西	陶器	瓶	—	34	(4.0)	—	1/3	1/3		初期伊万里焼。輪花瓶。山本文と波文。
41	2A1K	S.K.102	f区西	陶器	瓶	—	(25)	4.0	—	1/2	1/2		鉢入れなどの容器。
42	2A1K	S.D.68	a区西	青磁	瓶	—	(23)	4.75	—	1/1	3/4		高台
43	2A1K	S.D.69	c区西	青磁	瓶	—	(23)	6.0	—	1/2弱			上面圓窓。高台の縫合を縫き取る。
44	2A1K	S.D.79	土師器	土師器	瓶	(32.2)	1.65	(7.4)	—	1/6	若干		厚口(横窓)中空透手の製品。
45	2A1K	S.D.79	c区西	青磁	瓶	(10.0)	(2.0)	(2.0)	—	1/6			京都上野の花。
46	2A1K	S.D.79	c区西	青磁	瓶	—	7.0	4.15	3.3	2/2	2/1		丸くひらがる骨盤。
47	2A1K	S.D.79	c区西	青磁	瓶	(10.0)	(3.0)	—	—	1/4			側面に斜め。
48	2A1K	瓶1	b区西	土師器	瓶	—	(16.0)	6.1	—	—	—		受け臺の作りと骨盤。
49	2A1K	瓶1	b区西	土師器	瓶	—	(9.7)	1.85	—	1/7	—		[中軸]赤褐色。
50	2A1K	瓶1	b区西	青磁	瓶	—	(2.4)	4.85	—	—			[中軸]波文と高台。
51	2A1K	瓶1	b区西	青磁	瓶	—	(3.15)	4.5	—	—			[中軸]動土日。
52	2A1K	瓶1	b区西	青磁	瓶	—	(3.1)	(3.1)	—	—	1/4		[中軸]波文と高台。細かなケズリ。
53	2A1K	瓶1	b区西	青磁	瓶	(7.75)	6.2	(4.0)	—	1/2	1/2		[中軸]半球。
54	2A1K	瓶1	b区西	青磁	瓶	(14.0)	7.0	(5.0)	—	1/2	1/2		[中軸]輪花瓶。腰元出し高台で白薙した施釉。
55	2A1K	瓶1	b区西	青磁	瓶	—	(32.5)	(4.0)	—	1/4	1/6		[中軸]骨盤中位で段さ。
56	2A1K	瓶1	b区西	青磁	瓶	16.65	12.05	8.35	20.35	ばば足	完	1/12	[中軸]復元20.35。口折をもつ。
57	2A1K	瓶1	b区西	青磁	瓶	(15.0)	(2.0)	—	—	1/6	—		[中軸]初期伊万里焼。濃褐色の施釉。
58	2A1K	瓶1	b区西	白磁	瓶	—	(1.7)	2.4	—	—	—		[下軸]小さな高台を持つ。
59	2A1K	瓶1	b区西	白磁	瓶	6.0	4.4	2.6	—	2/3	完		[下軸]外側に参考と見出しえを折く。
60	2A1K	瓶1.3	b区西	青磁	瓶	(9.8)	2.7	(5.3)	—	1/6	1/4		丸みの良さ。肥大系の底で17世紀。
61	2A1K	瓶1.3	b区西	施釉青磁	瓶	(12.1)	(7.25)	—	—	1/12	—	1/6	高台
62	2A1K	瓶1.3	b区西	ガラス	小瓶	1.15	0.9	0.60	3.5	12.12足	若干欠		高台2上油と外側青磁。
63	2A1K	No.19～20罐頭	f区西	土師器	小瓶	(6.7)	1.4	(4.7)	—	—			腰げたし。気泡が入る。
64	2A1K	No.22罐頭	d区西	土師器	瓶	—	(1.4)	(7.1)	—	1/4弱			手づくね。瓶蓋タイプ。
65	2A1K	瓶模造	e区西	土師器	小瓶	(11.2)	2.2	—	—	1/9			手づくね。灯明瓶。
66	2A1K	No.19～20 罐頭	f区西	土師器	瓶	—	(1.4)	5.0	—	—	—		赤褐色。
67	2A1K	No.32～33 罐頭	a区西	瓦質土器	瓶	(147.5)	(5.0)	—	—	1/6			小さな器形で外側にわざかにテキテキ模様。
68	2A1K	No.32 西端 罐模造	a区西	白磁	瓶	(12.0)	2.6	(6.0)	—	1/5	1/5		複又りタイプ。
69	2A1K	No.30～31付近	a区西	白磁	瓶	(14.2)	3.5	(6.0)	—	わずか	1/4弱		複又りタイプ。

※器皿の()は残存基。その他の()は復元基。

第11表 遺物観察表2

No.	出土 地名	出土遺構	区画	埋蔵	器種	法量(㎤)				現存				
						口徑	脚高	底径	脚径	口縫	底	側面	他	
70	2 A区	%32 - 33 1.高畠田	a区画	白磁	瓶	(335)	(255)	—	—	1.6	—	—	縦反りタイプ	
71	2 A区	%31 西端 高畠田	a区画	染付	瓶	(99)	(235)	—	—	1.7	—	—	瓶口タイプ	
72	2 A区	%22 前端	c区画	染付	瓶	(104)	4.1	—	—	1.0	—	—	外側に花文を施す。	
73	2 A区	%19 - 20 前端	f区画	染付	瓶	(122)	(5.3)	—	—	1.8	—	—	外側に茎葉を描く。	
74	2 A区	後食器	a区画	染付	瓶	(118)	(46)	—	—	1.5	—	—	外側下部に蓮華文を施す。	
75	2 A区	後食器	—	染付	瓶五	—	(28)	4.5	—	—	1/2	—	—	瓶口タイプ
76	2 A区	後食器	a区画	青磁	瓶	—	(29)	(50)	—	—	1/2個	1.8	—	内側見込みに草花文、外側に蓮華文、高台内の脚を書きとする。15世紀代。
77	2 A区	2.1 前端 高畠田	c区画	青洋磁	瓶	(110)	3.15	(4.0)	—	1.4	1/2	—	—	動土日、リーフ黒の施施。小さな瓶。
78	2 A区	%22 前端	b区画	青洋磁	瓶	(113)	2.0	(4.0)	—	1.4	—	—	高台	動土日、灰褐色の赤オーブ色の施施。
79	2 A区	—	a区画	青洋磁	瓶	—	(20)	(4.0)	—	1/2	1.5	—	—	動土日、纏めかせの施施。
80	2 A区	—	b区画	青洋磁	瓶	—	(19)	4.5	—	—	—	—	動土日、吉野松の施施。	
81	2 A区	—	c区画	青洋磁	瓶	10.9	3.1	6.60	—	1/5	完存	—	—	内側に花文を施す。
82	2 A区	—	志野施	向日	—	(2.2)	—	—	—	—	—	—	—	白周した施施。寅人。
83	2 A区	鹿追池上	g区画	磁器施	向日	—	(1.2)	(3.0)	—	—	1/3	—	—	瓶口 内側に花文を施す
84	2 A区	—	b区画	磁器施	不明	—	(1.7)	—	—	—	—	—	—	寅土色の施施に他の幾何学文を施す。
85	2 A区	—	—	青磁施	盤	(327)	4.0	(21.0)	—	—	1/16個	—	—	盤状の器形で、口縁部をやや内凹させる。
86	2 A区	—	—	青磁施	盤	10.0	2.7	5.8	—	1/2	3/4	—	—	暗赤褐色の器表
87	1区	—	—	青磁施	盤	(28.0)	(5.0)	—	—	—	—	—	—	近世1期も段階
88	2 A区	前横出	f区画	青磁施	盤	(11.0)	(8.0)	—	—	—	1/2	—	—	近世1期も段階
89	2 A区	%31 西端 前横出	a区画	青磁	盤	—	(9.2)	—	—	若干	—	—	—	近世1期も段階
90	2 A区	前横出	d区画	青磁施	盤	(31.0)	(8.1)	—	—	—	1/8	—	—	近世1期も段階
91	2 A区	後食器	d区画	青磁	盤	(28.5)	(11.8)	(12.95)	—	1.8	若干	—	—	近世1期も段階
92	2 A区	後食器	e区画	青磁	天麩	—	(9.25)	—	—	—	—	—	—	裏部若干
93	2 B区	P13	—	土器部	罐	(117)	(20)	—	—	—	—	—	—	灰陶器。テラコッタ。底部承土無。
94	2 B区	P96	d区画	土和芯	罐	(147)	(2.0)	—	—	—	—	—	—	中や厚手の底で脚ナギ調整。
95	2 B区	SP118	d区画	土和芯	小瓶	(98)	(1.0)	—	—	—	—	—	—	手づくり陶器。粗陶器。
96	2 B区	SP038	d区画	施輪轉器	碗	(11.4)	(5.4)	—	—	—	—	—	—	粗厚壁。底地不同。長脚手。
97	2 B区	SP102	d区画	染付	碗	(10.9)	(2.0)	—	—	—	わずか	—	—	外側に草花文を施す。
98	2 B区	SP103	d区画	青洋磁	瓦片	—	(6.0)	4.5	—	—	—	—	—	高台 瓦片 手づくり青色の瓦片。高台新編成。
99	2 B区	SP098 → SP07	d区画	青洋磁	大皿	—	(37)	—	—	—	—	—	—	粗厚洋。無い青褐色の瓦片に鉄筋を描く。
100	2 B区	S.K.7	c区画	土和芯	瓶	—	(0.8)	5.5	—	—	—	—	—	素切口底の底部。
101	2 B区	S.K.7	c区画	土和芯	瓶	—	(20)	(8.0)	—	—	1/2個	—	—	素切口底。杯型の器形。
102	2 B区	S.K.7	c区画	土和芯	瓶	(10.3)	1.9	7.5	—	—	—	—	—	素切口底。細い口の開きと脚部。
103	2 B区	S.K.7	c区画	染付	瓶	(10.2)	(4.5)	—	—	—	—	—	—	—
104	2 B区	S.K.7	c区画	染付施	瓦片	(11.4)	(6.0)	—	—	—	—	—	—	天日柄。瓦片地で、瓦台面を欠く。
105	2 B区	S.K.7	c区画	青洋磁	罐	—	(3.4)	(5.4)	—	—	1/3	—	—	割り出しと瓦台で違い色の施施。
107	2 B区	S.K.7	c区画	青磁	脚附	(47)	(1.0)	—	—	—	1/2	—	—	口縁部瓦。
108	2 B区	S.K.7	c区画	青磁	小瓶	—	(20)	(6.5)	—	—	1/4個	—	—	2/3 瓦片。熟練者などの容器。
109	2 B区	S.K.20	a区画	土和芯	瓶	(11.6)	1.8	(16.7)	—	—	—	—	—	素切口底。
110	2 B区	S.K.20	a区画	青洋磁	脚附	—	(5.0)	—	—	—	—	—	—	瓦片。中や上の脚は脚出。脚部の位置で段を持つ。
111	2 B区	S.K.20	a区画	青洋磁	碗	(10.9)	3.5	(4.0)	—	1.8	1/3	—	—	春日。灰褐色の施施。底部の位置で段を持つ。
112	2 B区	S.K.20	a区画	青洋磁	碗	—	(2.0)	4.8	—	—	—	—	—	春日。赤褐色～青褐色の施施。
113	2 B区	S.K.27	d区画	土和芯	小瓶	(9.95)	1.95	—	—	—	—	—	—	壁の製品。外側底部に丁度にヘラナグする。
114	2 B区	S.K.27	d区画	青洋磁	小瓶	(9.15)	(4.1)	—	—	1.4	—	—	—	縦反りの小瓶。口縁部を外方に反らす。
115	2 B区	P.89	d区画	染付	杯	(5.0)	(2.0)	—	—	—	1/4個	—	—	手づくり陶器。口縁部を被ナグする。
116	2 B区	S.K.17	c区画	土和芯	罐	(11.6)	(2.0)	—	—	1.8	—	—	—	手づくり陶器。底部と体部に穿孔を持つ。
117	2 B区	S.K.17	c区画	土和芯	小瓶	(9.2)	1.7	—	—	—	1/5	—	—	手づくり陶器。中や6段ないし近世1期。
118	2 B区	S.K.16	a区画	青磁	天麩	—	(10.4)	—	—	—	—	—	裏部若干	裏部の窮屈感。中や6段ないし近世1期。
119	2 B区	S.K.16	a区画	青磁	天麩	—	(4.67)	30.9	—	—	—	—	—	裏部若干
120	2 B区	後食器	b区画	土和芯	罐	—	28	—	—	—	—	—	—	手づくり陶器。手づくり瓦の如くね。
121	2 B区	後食器	b区画	土製品	土跨	—	32	—	—	—	—	—	—	フタのみ
122	2 B区	後食器	d区画	染付	碗	(12.0)	4.8	—	—	1.4	—	—	—	口縁部は直口。外側に草花文。
123	2 B区	後食器	d区画	染付	碗	—	17	(5.5)	—	—	—	—	—	脚付(5.5)内段落に草花文。
124	2 B区	後食器	d区画	土和芯	罐	—	235	—	—	—	—	—	—	手づくり陶器。底部と体部に穿孔を持つ。
125	2 B区	後食器	—	磁器施	壳生	—	715	—	—	—	—	—	—	壁の製品で体部を丸く輪花状に彫廻させる。
126	2 B	後食器	d区画	青磁施	本溝	48	7.2	—	—	—	—	—	—	壁作りである。

※番号の()は残存基、その他の()は復元基

第12表 遺物観察表3

No.	出土地区	出土遺構	区画	種別	器種	法量(cm)				現存			
						口径	高さ	底径	脚径	口径	底径	脚径	他
127	2B区	匂合解	d区画	備前焼	短脚茶入	—	5.4	6.6	—	—	わずか	—	模型である。
128	2B区	匂合解	—	吉洋焼	鉢	(17.2)	6.4	—	—	—	—	—	L脚器を玉縁にする。白萬の類
129	2B区	匂合解	—	吉洋焼	大皿	—	(3.0)	(8.8)	—	—	1/5	—	船洋。
130	2B区	匂合解	d区画	吉洋焼	大皿	—	4.5	17.0	—	—	1/6	—	白萬の施釉。
131	2B区	匂合解	d区画	吉洋焼	鉢	—	2.9	5.1	—	—	1/2	—	垂乳頭で舟形中央に段を持つ。
132	2B区	匂合解	—	吉洋焼	大皿	—	(3.2)	—	—	—	—	蘆片	蘆片
133	3区	匂合解	—	上細部	小皿	(9.0)	2.2	5.5	—	1/2	ほぼ完 成	—	灯明器、あり茎。
134	3区	29(複数)	d区画	上細部	中皿	11.4	2.1	6.8	—	—	ほぼ 完存	—	内面見込みに草文。外面に繩文文。高台内 の窓を書きとる。15世紀代。
135	3区	面模出	a区画	上細部	中皿	—	11.5	6.0	—	—	1/2	—	赤留り窓。
136	3区	複数	d区画	上細部	鉢	(4.0)	1.9	—	—	—	わずか	手づくね窓。	—
137	3区	東横清酒倒削印	d区画	上細部	大皿	(20.6)	2.5	—	—	—	わずか	手づくね窓。	—
138	3区	カクラン上院	e区画	吉洋焼	碗	(6.7)	3.65	14.6	—	わずか	1/2	1/2	船洋でもある。船上日。
139	3区	カクラン上院	e区画	吉洋焼	鉢	—	2.4	—	—	—	—	—	吉洋の脚片。
140	3区	複数	d区画	吉洋焼	鉢	(12.5)	2.9	4.6	—	わずか	3/4	1/2	船上日、高台内面に輪縮。
141	3区	キサキ脚削	a区画	吉洋焼	—	—	3.6	4.6	—	—	完存	—	静日。
142	3区	d区画	吉洋焼	鉢	(13.5)	2.9	—	—	—	—	わずか	—	—
143	3区	29(複数)	d区画	吉洋焼	鉢	—	0.8	4.2	—	—	完存	—	静日、半舟柄。
144	3区	d区画	青磁	鉢	(26.6)	5.2	—	—	—	—	1/6	—	—
145	3区	d区画	桑目	小舟	—	3.4	3.4	—	—	—	1/2	1/2	—
146	3区	面模出	a区画	桑目	碗	—	2.1	4.5	—	—	3/4	—	—
147	3区	複数	b区画	桑目	碗	—	6.3	—	—	—	—	蘆片	—
148	3区	29(複数)	d区画	桑目	鉢	—	11.0	—	—	—	—	蘆片	云掛上院も改修。
149	3区	東横清酒倒削	e区画	桑目	鉢	(27.2)	8.9	—	—	—	—	蘆片	云掛上院も改修。
150	3区	P96	a区画	上細部	鉢	(11.7)	2.1	(6.4)	—	1/9	若干	—	能力 S0352 赤留り窓。
151	3区	P96	a区画	白磁	小舟	—	(15.0)	(3.0)	—	—	1/4	—	小舟の底部。
152	3区	P16	d区画	吉洋焼	—	—	(2.0)	—	—	—	—	蘆片	船底の小舟。
153	3区	P59	b区画	施物和陶	鉢	(11.8)	(2.7)	—	—	1/12	—	—	赤留り窓。
154	3区	上器A	青磁色土器 第1回発見	上細部	灯明器	(10.2)	1.9	7.0	—	1/2	ほぼ 完存	—	赤留り窓。
155	3区	SD101	a区画	上細部	小皿	(8.95)	1.75	(3.0)	—	1/4	1/4	—	赤留り窓。
156	3区	SD101	a区画	上細部	灯明器	(10.15)	2.0	(6.5)	—	1/6	—	—	赤留り窓。
157	3区	SD101	a区画	上細部	小皿	(10.2)	(1.95)	—	—	1/4	—	—	手づくね窓。
158	3区	SD101	a区画	上細部	小皿	(10.2)	(2.15)	(6.6)	—	1/12	1/5	—	赤留り窓。
159	3区	SD101	a区画	吉洋焼	鉢	(11.9)	3.55	(5.15)	—	1/4	1/4	—	船上日、船部中央に段を持つ。
160	3区	SD101	a区画	吉洋焼	鉢	(12.6)	3.7	(5.2)	—	1/2	1/2	—	船上日、船部中央に段を持つ。
161	3区	SD101	a区画	吉洋焼	鉢	(12.45)	2.8	5.1	—	1/9	完存	—	船上日、日跡4ヶ所。船部中央に段を持つ。
162	3区	SK42	c区画	上細部	小舟	(9.6)	1.8	(5.80)	—	1/12	1/4	—	赤留り窓。
163	3区	SK42	c区画	上細部	小舟	(8.2)	1.55	(8.1)	—	1/6	1/3	—	赤留り窓。
164	3区	SK42	c区画	第1回	大皿	10.3	6.75	4.3	—	1/2	完存	1/2	—
165	3区	—	吉洋焼	—	吉洋焼	(26.9)	11.9	(12.0)	—	1/2	1/3	—	元世宗1段脚。斜めの鋸目を持つ。
166	3区	SK31	c区画	上細部	小舟	(7.1)	1.9	—	—	1/4	1/4	—	手づくね窓。
167	3区	SK74	a区画	桑目細部	碗	(13.85)	(4.4)	—	—	—	—	—	L脚器は赤口、L脚部に2重回転。又枝は不明。
168	3区	SK180	e区画	志野器	向付	15.7	4.25	??	—	1/3	4脚	—	脚1脚 内面に丸文、縦筋を2列し細かな支脚を強く 連付けた形状を持つ。若志生である。脚の瓶足と 底脚が折れ落ちて底足が折り曲がり。
169	3区	29(複数)	d区画	備前	花口	8.2	25.95	8.2	140	1/2	完存	—	蘆片
170	2A区	c区画	e区画	粗粘器	碗	(1.2)	(5.1)	—	—	—	—	—	—
171	2A区	c区画	e区画	粗粘器	碗	(3.65)	(3.35)	—	—	1/12	—	—	L脚器は斜面、舟形。
172	3区	4脚器	—	鳥居上器	器	—	(2.2)	—	—	—	—	蘆片	円錐体の笠頭、口縁部背面に筋目目文。
173	2A区	b区画	a区画	上細部	器	(18.0)	(4.6)	—	—	わずか	—	脚部 1/10	L脚器に内面に凸面を持つ。
174	3区	SK09	a区画	上細部	器	(22.4)	4.7*	—	—	1/4	—	—	下斜面複刻出し。内面黒ハ。
175	2A	P32	a区画	上細部	器	(15.5)	(5.25)	—	—	1/6	—	—	理工、外沿黒ハ。内面黒ハ。
176	2A	SD98	a区画	上細部	器	—	(13.1)	—	—	—	—	1/2	整脚器上斜。外沿黒ハ。内面不定方向のナラ 木筋目。
177	2B区	6脚子	b区画	上細部	器	(23.9)	30.2	—	—	わずか	—	1/2	右側裏のみ下斜。(左側黄赤色移行)外沿ハケ。内 面ケズリ調整。

※器底の(—)は残存、その他の(—)は復元品

第13表 遺物観察表4

No.	出土 地区	出土遺構	区画	種別	器種	法量(cm)			重さ (g)
						長さ	幅	厚み	
M1	2A区	SD68	a区画	鉄	頭巻釘	(3.1)	0.8	0.35	0.55
M2	3区	包含層	f区画	鉄	頭巻釘	(3.4)	0.6	0.5	0.96
M3	2B区	包含層	d区画	鉄	頭巻釘	(1.8)	0.7	1.08	
M4	2B区	SK7	c区画	鉄	頭巻釘	(3.5)	1.0	0.4	1.67
M5	3区	包含層	f区画	鉄	頭巻釘	(2.7)	0.55	0.4	0.88
M6	2A区	包含層	—	鉄	頭巻釘	(2.1)	0.95	0.4	1.19
M7	3A区	包含層	—	鉄	頭巻釘	(2.4)	1.2	0.7	1.93
M8	2B区	SK37	d区画	鉄	頭巻釘	(2.8)	0.8	2.26	2.36
M9	2A区	石列60	a区画	鉄	頭巻釘	(3.5)	0.9	0.5	1.51
M10	3区	包含層	d区画	鉄	頭巻釘	(3.8)	1.2	0.6	2.30
M11	2A区	包含層	a区画	鉄	頭巻釘	(4.0)	1.15	0.4	1.77
M12	2B区	包含層	d区画	鉄	頭巻釘	(4.0)	1.0	1.97	1.97
M13	2A区	SK57	a区画	鉄	頭巻釘	(3.9)	1.0	0.8	25.9
M14	2B区	SK17	c区画	鉄	頭巻釘	(4.2)	0.6	0.5	3.23
M15	3区	包含層	c区画	鉄	頭巻釘	(4.9)	1.0	0.5	3.75
M16	2A区	包含層	a区画	鉄	頭巻釘	5.7	0.7	0.8	3.44
M17	2A区	SK74	c区画	鉄	頭巻釘	(5.6)	1.0	0.6	3.07
M18	2A区	SK21	a区画	鉄	頭巻釘	5.4	1.5	0.7	4.31
M19	2A区	SK65	a区画	鉄	頭巻釘	(4.4)	1.6	1.1	8.33
M20	2A区	SK74	c区画	鉄	頭巻釘	(3.4)	1.7	0.75	7.93
M21	2A区	SK65	a区画	鉄	?	7.6	21	1.2	12.21
M22	3区	SK5	a区画	鉄	頭巻釘	8.9	1.0	(0.65)	10.22 (下層)
M23	2A区	SD79	g区画	鉄	頭巻釘	(7.6)	1.0	0.8	6.86
M24	3区	包含層	a区画	鉄	頭巻釘	9.45	0.8	0.5	8.76
M25	2A区	SK48 墓上	a区画	鉄	和釘	(6.6)	1.1	0.6	6.3
M26	2B区	包含層	c区画	鉄	和釘	(1.8)	0.7	1.37	1.37
M27	3区	包含層	b区画	鉄	和釘	(4.8)	0.6	0.5	3.60
M28	2A区	石垣3	h区画	鉄	皆併釘	(5.0)	1.0	1.86	1.86 石垣3の上面
M29	3区	南端部	f区画	鉄	頭巻釘	(4.2)	0.8	0.6	3.10
M30	2A区	SK21	a区画	鉄	皆併釘	(6.0)	(1.1)	0.7	3.89
M31	3区	SK52	c区画	鉄	相釘	(5.5)	0.6	3.03	3.03
M32	2A区	包含層	a区画	鉄	相釘	(5.3)	0.5	0.5	3.62
M33	3区	包含層	d区画	鉄	相釘	(5.7)	0.6	0.6	3.52
M34	2B区	包含層	c区画	鉄	相釘	(4.4)	0.6	3.70	3.70
M35	3区	SK2	f区画	鉄	頭巻釘	(5.25)	0.9	0.6	4.44
M36	2A区	北端瓦礫	a区画	鉄	相釘	(5.3)	(0.8)	0.6	2.48
M37	3区	包含層	b区画	鉄	相釘	(5.9)	0.6	0.6	5.11
M38	2B区	包含層	c区画	鉄	相釘	(5.1)	1.2	11.74	11.74
M39	3区	包含層	不明	鉄	和釘	(7.2)	0.55	0.8	6.90
M40	3区	包含層	不明	鉄	和釘	(7.2)	0.9	1.0	20.12
M41	2A区	北端瓦礫	a区画	鉄	不明	(4.5)	1.6	0.6	6.02
M42	2A区	北端瓦礫	a区画	銅製品	笄	20.2	1.3	0.2	17.78
M43	2A区	SK62	a区画	銅製品	笄	17.7	1.25	0.3	18.81
M44	2A区	北端瓦礫	a区画	鉄	瓦釘 又は工具?	14.5	0.9	0.9	31.22
M45	3区	SK42	c区画	鉄	火箸	25.0	0.6	0.65	31.50
M46	2B区	SD17	c区画	鉄	小札	(3.5)	2.75	0.2	3.36
M47	3区	SK160	e区画	新玉	鉄碇玉	1.5	1.5	1.0	11.66
M48	3区	包含層	f区画	鉄	刀子	(21.6)	2.1	0.5	62.77
M49	2A区	石垣60	a区画	鉄	刀子	(15.6)	1.4	0.6	22.99
M50	2A区	SK67	a区画	銅製品	不明	2.0	0.5	0.1	0.32
M51	2B区	石垣4 裏込内	b区画	鉄	不明	5.0	1.9	10.47	10.47
M52	2A区	SK74	c区画	鉄	小柄	(9.8)	1.7	0.8	24.13
M53	2A区	北端瓦礫	a区画	鉄	賀金具	(6.25)	1.9	1.3	14.04
M54	3区	南端部	f区画	鉄	不明	6.2	6.0	1.5	86.70
M55	2A区	石垣60	a区画	鉄	不明	(12.8)	2.1	2.6	80.13
M56	3区	包含層	f区画	鉄	鑄型のバリ	(9.4)	1.05	0.6	26.72
M57	3区	包含層	b区画	鉄	不明	(2.3)	6.7	0.6	11.15
M58	2A区	北端瓦礫	a区画	銅製品	荼托	—	底径	器高	27.32
M59	2A区	SD69	c区画	銅製品	錐管	(4.3)	1.25	1.25	2.64 裏込内上面
M60	2A区	石垣3	h区画	銅製品	錐管	12.35	1.0	0.6	12.89
M61	3区	SK5(中刷)	a区画	鉄	鍛滓	7.6	4.7	2.4	66.58
M62	2A区	包含層	a区画	鉄	鍛滓	6.9	5.4	2.5	150.55
M63	3区	SK42	c区画	鉄	鍛滓	7.4	8.6	4.7	233.10
M64	2A区	石垣2	h区画	鉄	鍛滓	11.6	8.0	5.4	275.98 グリ石上面

第14表 遺物観察表5

金属製品									
No	出土地区	出土遺構	区画	種別	器種	法量(cm)			重さ(g)
						長さ	幅	厚み	
M65	3 A区	SK62	a区画	銅錢	熙寧元寶	2.37	2.41	0.14	2.96
M66	4 A区	SK75	c区画	銅錢	熙寧元寶	2.38	2.37	0.1	2.20
M67	5 A区	SK75	c区画	銅錢	熙寧元寶	2.33	2.35	0.11	2.92
M68	不明	包含層	—	銅錢	熙寧元寶	2.32	2.29	0.11	2.99
M69	2 A区	SK75	c区画	銅錢	元符通寶	2.34	2.31	0.11	2.27
M70	不明	包含層	—	銅錢	至和通寶	2.43	2.42	0.12	2.81
M71	2 A区	北端瓦罐	a区画	銅錢	元祐通寶	2.37	2.35	0.12	2.11
M72	3区	包含層	—	銅錢	寛永通寶	2.29	2.29	0.11	2.14

石製品									
No	出土地区	出土遺構	区画	種別	器種	法量(cm)			重さ(g)
						長さ	幅	厚み	
S1	2 A区	SD79(東西)	g区画	石製品	石製品	24.9	11.6	11.4	478
S2	2 A区	SD79(東西)	g区画	石製品	石製品	48.6	14.6	12.1	—
S3	2 A区	SD79(東西)	g区画	石製品	石材	22.05	14.0	11.85	6.75

鉄型									
No	出土地区	出土遺構	区画	種別	器種	法量(cm)			
						長さ	幅	厚み	
C1	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の内型	(7.6)	(3.7)	(4.0)	上刷、セクション除去。破片。真土が僅かに付着。
C2	3区	SK3	f区画	鋳型	鍋の外型	(8.5)	2.7	(6.5)	破片。真土が付着。型の合せ目。
C3	3区	SK3	f区画	鋳型	鍋の外型	(13.0)	(5.6)	(5.6)	破片。真土が僅かに付着。鍋底。
C4	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の外型	(20.1)	(14.0)	(7.0)	セクション除去。破片。真土が付着。型の合せ目?
C5	3区	SK3	f区画	鋳型	鍋の外型	(14.2)	5.1	(7.8)	破片。真土が付着。型の合せ目?
C6	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の外型	(7.0)	(5.1)	(1.5)	(中刷)破片。真土が僅かに付着。
C7	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の外型	(4.9)	(7.0)	(1.8)	(中刷)破片。真土が僅かに付着。
C8	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の外型	(30.4)	(2.0)	(10.5)	(中刷)破片。真土が僅かに付着。
C9	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の外型	(7.4)	(7.9)	(4.3)	破片、破片。真土が僅かに付着。
C10	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の外型	(9.8)	(10.5)	5.5	上刷、破片。真土が付着。
C11	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の外型	(10.8)	(9.9)	7.4	中刷、破片。真土が僅かに付着。
C12	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の型	(22.4)	3.4	(12.0)	破片、真土が付着。
C13	3区	SK3	f区画	鋳型	鍋の外型	(12.9)	(11.4)	4.6	破片、真土が付着。
C14	3区	SK4	f区画	鋳型	鍋の型	(21.1)	3.5	(5.9)	破片、型の端。
C15	3区	SK4	f区画	鋳型	外型	(12.2)	(8.8)	9.7	中刷、破片。型の部材
C16	3区	SK4	f区画	鋳型	鍔先の上型	37.6	(13.9)	6.6	1/6
C17	3区	SK4	f区画	鋳型	鍔先の上型	(27.8)	(18.0)	7.0	1/4弱
C18	3区	SK5	f区画	鋳型	鍔先の上型	(14.8)	(11.2)	6.8	破片
C19	3区	SK4	f区画	鋳型	鍔先の上型	(19.7)	(7.0)	(6.15)	破片
C20	3区	SK4	f区画	鋳型	鍔先の上型	(10.5)	(7.2)	(3.5)	破片
C21	3区	包含層	f区画	鋳型	鍔型	(14.2)	(16.4)	3.0	破片、不明
C22	3区	SK5	f区画	鋳型	鍔型	(17.5)	(12.4)	4.7	破片、不明
C23	3区	SK4	f区画	鋳型	三又状土製品	(13.8)	7.4	5.9	中刷、脚部の破片。手づくね。
C24	3区	SK5	f区画	鋳型	鍋の外型	(30.0)	(13.5)	(13.5)	中刷、湯口の部分。
C25	3区	SK5	f区画	鋳型	鍋の外型	20.3	19.8	10.0	ほぼ完存、中刷、湯口の部分。
C26	3区	SK5	f区画	鋳型	じょう	タテ (32.5)	5.8 36.1	5.9 3/4	輪状の製品、手づくね。
C27	3区	SK4	f区画	鋳型	じょう	タテ 64.3	5.8 63.3	8.0	ほぼ完存、輪状の製品、手づくね

第15表 軒丸瓦観察表

固有 番号	型式 番号	直出部底面(cm)							丸瓦部底面(cm)							現存							
		A	B	C	D	E	F	G	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	直出 底面	丸瓦部 底面			
T1	NM1	15.3	11.3	7.2	1.05	2.1	0.9	1.7	(11.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3	保存	1/3			
T2	NM1	(8.1)	(5.2)	(3.9)	测定7.0	1.1	3.0	0.8	1.2	31.0	27.6	3.4	6.3	4.3	13.9	11.0	6.4	7.9	2.2	1/4	3/4		
T3	NM1	(12.8)	(10.0)	(3.9)	测定16.1	1.1	3.0	0.8	1.2	31.0	27.6	3.4	6.3	4.3	13.9	11.0	6.4	7.9	2.2	1/4	3/4		
T4	NM1	(11.3)	(9.9)	(3.9)	测定15.9	7.6~7.3	1.05~ L1	2.1	0.75	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	下平 2.9	欠			
T5	NM1	(4.9)	(3.6)	(3.6)	测定10.5	测定7.5	1.1	2.4	0.7	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3/4	欠		
T6	NM1	NM1	15.7	10.1	7.2	1.05	2.7	0.9	2.25	(9.2)	(3.2)	—	14.9	(15.25)	测定15.5	13.15	—	—	2.2	7/8	わざか		
T7	NM2	15.9	10.9	8.2	1.0	2.1	0.7	1.65	31.5	23.8	7.7	8.25	5.6	16.1	(12.2)	测定14.0	8.35	(8.25)	测定13.8	2.45	保存	頭端3/4 玉締1/2	
T8	NM2	15.9	10.8	8.1	1.0	2.4	0.75	1.7	(5.1)	(1.7)	—	8.5	—	—	—	—	—	—	—	2.7	保存	わざか	
T9	NM2	(9.5)	(7.2)	(5.8)	测定15.7	测定10.9	测定8.1	1.0	2.6	0.65	1.5	(14.0)	(12.3)	—	7.95	5.65	15.8	14.5	—	—	2.4	1/2	頭1/2
T10	NM2	(9.6)	(6.75)	(5.8)	测定16.3	测定11.2	8.3	1.05	2.3	0.65	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/2	欠	
T11	NM2	(10.25)	(7.80)	(6.4)	0.8	—	—	1.95	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/4	欠		
T12	NM3	16.2	10.9	7.1	0.95	2.75	0.6	2.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	頭端 若干欠	欠			
T13	NM3	15.9	10.3	6.8	0.95	2.65	0.55	1.8	28.85	—	—	15.6	13.3	14.8	10.2	—	—	2.1	保存	2/3			
T14	NM3	测定16.7	测定11.1	(10.2)	7.0	1.0	2.9	0.7	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	头部 のみ	欠			
T15	NM3	测定16.1 (14.7)	10.8	7.26	1.1	2.5	0.7	2.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	下平 欠損	欠			
T16	NM3	测定16.6 (16.6) (8.15)	测定10.8 (5.25)	测定7.0 (3.4)	1.0	2.1	0.6	1.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	下平 1/2弱	欠			
T17	NM3	16.0	10.3	6.8	1.0	2.85	0.65	1.9	(21.6)	—	—	7.75	5.3	15.3	11.4	—	—	—	ほげ 完0	1/3			
T18	NM3	16.25	10.65	7.2	1.0	2.7	0.65	1.55	(14.6)	—	—	15.8	13.8	15.5	10.3	—	—	1.95	保存	1/3			
T19	NM3	(12.9)	(10.1)	测定1.7	测定10.4	6.9	1.0	2.5	0.6	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	上部 欠損	欠			
T20	NM3	(11.9)	(9.9)	测定15.8	测定11.0	7.1	0.95	2.6	0.6	1.55	—	—	—	—	—	—	—	—	—	上部 欠損	欠		
T21	NM3	测定16.6 (14.6) (8.15)	测定10.5	测定7.5 (5.25)	1.0	2.75	0.5	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/3	欠		
T22	NM3	(16.05)	(8.2)	测定16.5	测定10.7	7.2	0.95	2.8	0.5	1.5	(9.35)	—	—	(13.8)	(11.9)	测定14.8	测定12.9	16.3	—	—	1.85	3/4	若干
T23	NM3	测定17.0 (13.7)	测定11.2 (10.2)	测定6.2 (6.6)	0.9	2.9	0.75	0.85	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/3	欠		
T24	NM4a	(11.95)	(9.85)	测定14.5	测定10.2	7.45	1.0	1.55	0.95	1.85	(9.7)	(6.6)	—	—	—	—	—	—	—	2.0	7/8	わざか	
T25	NM4a	(11.95)	(8.0)	测定14.2	测定10.4	7.0	1.0	1.65	0.95	1.15	(6.3)	(3.9)	—	—	—	—	—	—	—	1/2弱	わざか		
T26	NM4a	(7.9)	(5.75)	(4.1)	1.0	1.6	0.7	1.35	(3.2)	(1.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	1/2弱	わざか			
T27	NM4a	(7.15)	(5.05)	(3.6)	—	1.95	0.8	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/4	欠		
T28	NM4a	测定16.3 (12.2)	测定11.0 (12.0)	测定6.0 (5.2)	1.0	2.7	0.7	1.45	(15.4)	15.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/2	1/3		
T29	NM5	测定16.2 (9.1)	测定13.4	测定5.9 (8.1)	1.0	2.65	0.65	1.6	(11.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.6	1/4	わざか		
T30	NM5	测定17.0 (11.75)	测定11.0 (7.2)	测定6.8 (3.4)	1.0	2.6	0.5	1.45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/4	欠		
T31	NM5	测定16.5 (9.6)	测定11.0 (8.1)	测定5.5 (8.1)	0.95	2.6	0.65	1.25	34.1	29	4.2	7.45	5.4	16.2	14.5	4.3	13.3	2.3	1/2	保存			
T32	NM6	(12.5)	(10.1)	测定15.8	测定11.1	8.6	0.95	2.1	1.0	1.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/3	欠		
T33	NM6	(7.1)	(4.0)	测定15.5	测定10.6	8.65	2.0	0.9	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/6	欠		
T34	NM6	(6.4)	(3.2)	测定16.0	测定10.8	8.25	0.95	2.35	0.95	1.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/4	欠		

固有 番号	製式 番号	直角部法量(cm)							丸角部法量(cm)							残存			
		A	B	C	D	E	F	G	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	直角 丸角部
T35	NMB	(67.6) 基定 15.4	(38.6) 基定 9.8	(22.2) 基定 7.1	105	23	105	145	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/4 欠
T36	NMB	(8.8)	(8.8)	6.9	10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	中心部 欠
T37	NMB	(44.5) 基定 13.6	(24.5) 基定 9.7	(13.2) 基定 7.6	なし	1.8	0.6	1.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/5 欠
T38	NMB	(4.1) 基定 1.4	(2.6) 基定 1.0	(1.6) 基定 0.7	なし	0.8	—	—	(7.5)	—	—	—	—	(5.8)	(4.0)	—	—	21	1/6 若干
T39	NMB10	146	109	7.8	9.7	1.8	0.7	1.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3/4 欠
T40	NMB10	(12.0) 基定 15.5	10.5	8.0	0.6	12	0.6	16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3/5 欠
T41	NMB10	(8.2) 基定 1.5	—	—	12.2	7.5	0.6	1.4	0.7	17	—	—	—	—	—	—	—	—	1/2弱 欠
T42	NMB10	15.0	11.3	7.5	0.7	1.8	0.6	1.4	32.2	29.3	29	7.3	5.2	13.4	11.8	1.3	(8.0) 基定 11.2	22	完存 2/3
T43	NMB11	(9.5) 基定 12.9	10.2	7.6	0.8	1.5	0.6	1.2	(13.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17 3/5 1/6
T44	NMB11	(9.0) 基定 13.5	(8.2) 基定 10.3	7.7	0.85	1.5	0.7	0.95	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/3 欠
T45	NMB11	13.0	10.7	7.7	0.8	1.3 ~ 1.6	0.75	1.5	(14.0)	—	—	13.0	10.95	13.1	8.8	—	—	17.5	完存 1/3
T46	NMB12	(12.6) 基定 14.9	(10.6) 基定 11.0	7.8	1.35	1.7	0.8	1.2	(5.8)	(3.45)	—	—	—	—	—	—	—	—	7.8 T-Y形
T47	NMB12	(6.6) 基定 3.5	(5.6) 基定 1.7	(4.2) 基定 0.9	1.2	1.9	0.8	1.1	(20.25)	(16.75)	—	6.85	4.95	—	—	—	—	—	19 1/4 1/4
T48	NMB12	(14.0) 基定 14.2	(6.2) 基定 10.0	(3.7) 基定 7.4	1.35	1.95	0.9	1.25	(10.95)	(7.75)	—	6.65	—	—	—	—	—	—	20 2/3 わずか
T49	NMB12	(12.6) 基定 14.8	10.7	7.7	1.1	1.9	0.8	1.25	(7.7)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17 異様 1/2次 若干
T50	NMB12	(12.8) 基定 15.2	(10.6) 基定 10.8	7.8	1.4	2.0	0.85	1.15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5/6 欠
T51	NMB12	(11.4) 基定 15.1	(9.4) 基定 10.9	7.5	1.2	1.8	0.7	1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3/5 欠
T52	NMB12	(13.0) 基定 15.6	10.7	7.6	1.2	2.0	0.5 ~ 0.7	1.35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3/5 欠
T53	NMB12	14.8	10.8	7.8	1.2	1.8	0.7	1.35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2/3 欠
T54	NMB12	(7.4) 基定 14.8	(5.2) 基定 10.6	7.7	1.2	1.8	0.7	1.0	(6.35)	—	—	14.6	12.6	(17.0) 基定 14.8	(13.0) 基定 10.0	—	—	156	1/2 若干
T55	NMB13	(4.0) 基定 16.4	(2.8) 基定 12.1	(1.3) 基定 9.1	0.9	2.1	0.55	1.6	(6.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	21 1/5 若干
T56	NMB14	(9.6) 基定 11.8	(6.6) 基定 9.0	(6.7) 基定 6.3	—	1.0	0.8	1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/3 欠
T57	NMB14	(6.1) 基定 11.5	(5.0) 基定 9.5	(4.7) 基定 6.5	—	1.2	0.75	1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1/4 欠

(-) 内の数字は既存値

空白：属性が無いため計測不能

—: 変形により計測不能

※法量のアルファベットは第23回 1~3に応じ

第 16 表 軒平瓦観察表

固有 番号	製式 番号	直角部法量(cm)							平実部法量(cm)							残存		
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	A	B	C	D	実角 丸角部	
T58	NHIA	(9.4)	(3.7)	(8.25)	2.25	—	0.95	0.8	0.45	0.4	21	17	—	—	—	—	—	中心部 欠
T59	NHIA	(10.3)	3.9	(9.6)	2.2	—	1.05	0.8	0.45	0.4	22	18	—	—	—	—	—	1/5 欠
T60	NHIA	(8.5)	4.3	(7.1)	2.3	—	0.7	0.7	0.4	0.45	0.3	17	12	—	—	—	1.8 1/6 若干	
T61	NHIA	基定 28.8 (15.1)	4.3	基定 18.0 (9.6)	2.7	5.5	0.8	0.8	0.4	0.3	20	12	—	—	—	—	—	1/4 欠
T62	NHIA	(7.4)	4.4	(7.0)	2.1	—	0.8	0.9	0.4	0.4	22	18	—	—	—	—	—	1.4 3/5 欠
T63	NHIA	(24.6) 基定 26.8	4.2	18.1	2.0	4.2	0.7	0.9	0.6	0.3	27	14	(14.0)	—	—	—	—	1.9 1/2弱 欠

胎土	性状	色調		技術的特徴		備考	出土地区	小区域	出生地標	写真番号
		外観	断面	瓦当部	瓦芯部					
やや密、φ 2m以以下石・石英、少量含む。	やや硬質 少量含む。	灰	淡黄	断面：ナデ、裏面：ナデ、下端 に円弧状ナデ。	—	瓦当面に木口板が見られる。	2B	a	瓦及土瓦	71 77
やや密、φ 2.5m以下石・石英、 少量含む。	やや硬質 少量含む。	灰	灰白	裏面：ナデ。	—	—	3	b	弦合瓦	71 77
やや密、φ 2m以上石・石英、 少量含む。	やや硬質 少量含む。	灰	灰白	断面：ナデ、裏面：ナデ、ナメ、下端 に円弧状ナデ。	—	—	2A	c	SK74	71 77
やや密、φ 1cm以下石・石英、 少量含む。	硬質 少量含む。	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：不明。	内面：ナメナデ、端部ヨコナデ、四 角、不明。	高麗北内区外縁の間に見られる。	2A	b	第11集10号中 野	71 77
密、φ 3m以下石・石英、 少量含む。	硬質 少量含む。	灰	灰白	断面：ナデ、裏面：不定ナデ、 上端にユビナデ。	—	—	2A	c	SK74	71 78
やや密、φ 2m以以下石・ 石英、少量、φ 7m以下 の白色粘土、少量含む。	やや硬質	灰	灰	断面：ナデ、裏面：不定ナデ、 下端に円弧状ナデ。	—	—	2A	c	SK74	71 78
やや密、φ 1m以下石・石英、 少量含む。	硬質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、下端 に円弧状ナデ。	—	—	2B	a	SK20	71 78
やや密、φ 2m以以下石・ 石英、少量含む、φ 7m以 下の白色粘土、少量含む。	硬質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、ナメ、下端 に円弧状ナデ。	—	—	2A	c	SK74	72 77
やや密、φ 7m以下石・石英、 少量含む。	やや軟質 少量含む。	灰	淡黄	裏面：ナデ、裏面：ナデ、ナメ、 上端に円弧状ナデ。	内面：ナメナデ、四面：別研磨、 丸孔直角方向舟切、斜穴あ。	高麗切、尾島あ。	2B	a	SK20	72 79
やや密、φ 2m以以下石・ 石英、少量含む、φ 7m以 下の白色粘土、少量含む。	やや軟質	灰	淡黄	裏面：ナデ、裏面：ナデ、下端 に円弧状ナデ。	丸孔直角面キヤナリ。	尾島あ。	2B	a	SK20	72 79
梗、φ 7m以下石・石英、 少量含む。	やや硬質 少量含む。	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、ナメ、 下端に円弧状ナデ。	内面：ナメナデ、四面：未測定、 端部ヨコナデ。	高麗切、尾島あ。	2B	a	SK20	73 78
やや密、φ 1~5mmチャート、 石英、少量含む。	やや軟質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：不定ナデ、 下端に円弧状ナデ。	内面：不明、四面：右肩有。正 面に後合のカケナリ。	尾島あ。	2B	a	SK20	73 79
やや密、φ 1~5mmチャート、 石英、少量含む。	やや軟質 少量含む。	灰	灰	裏面：ナデ、裏面：不定ナデ、 下端に円弧状ナデ、上端にユビ ナデによる横合がある。	内面：ナメナデ、四面：右肩、 丸孔直角面キヤナリ。	高麗切、尾島あ。	2B	a	SK20	73 79
やや密、φ 1~6mmチャート、 石英、少量含む。	やや硬質	淡黄	浅黄	裏面：ナデ、裏面：不定ナデ、 下端に円弧状ナデ。	内面：ナメナデ、四面：ヨコナデ、 丸孔直角面キヤナリ。	高麗切、尾島あ。	2B	a	SK20	74 79
やや密、φ 2.5m以以下チャート、 石英、石英、少量含む。	やや軟質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、ナメ、 下端に円弧状ナデ。	内面：ナメナデ、四面：ヨコナデ、 丸孔直角面キヤナリ。	高麗切、尾島あ。	2B	a	SK20	74 79
やや密、φ 1~5mmチャート、 石英、石英、少量含む。	やや硬質 少量含む。	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、ナメ、 下端に接合のカケナリ。	内面：ナメナデ、端部ヨコナデ、 四面：未測定。	高麗切、尾島あ。	2B	a	SK20	74 79
やや密、φ 2m以以下石・石英、 少量含む。	やや軟質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、ナメ、 下端に接合のカケナリ。	—	—	2B	a	SK20	74 80
やや密、φ 2m以以下チャート、 石英、石英、少量含む。	やや硬質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、 下端に接合のカケナリ。	—	—	2B	a	SK20	74 80
やや密、φ 2m以以下石・石英、 少量含む。	やや軟質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、 下端に接合のカケナリ。	—	—	2B	a	SK20	74 80
やや密、φ 2m以以下石・石英、 少量含む。	やや硬質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナメ、 下端に接合のカケナリ。	—	—	2B	a	SK20	75 80
やや密、φ 3m以以下チャート、 石英、石英、少量含む。	やや軟質	灰	灰	裏面：ナデ、裏面：ナデ、ナメ、 下端に接合のカケナリ。	内面：ナメナデ、端部ヨコナデ、 四面：未測定。	高麗切、尾島有。	2B	a	SK20	75 80
やや密、φ 2m以以下石・石英、 少量含む。	やや硬質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナメ、 下端に接合のカケナリ。	—	—	2B	a	SK20	75 80
やや密、φ 1~4mmチャート、 石英、石英、少量含む。	やや軟質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、 下端に接合のカケナリ。	内面：ナメナデ、端部ヨコナデ、 四面：未測定。	高麗切、尾島有。	2B	a	SK20	75 80
やや密、φ 1~3mmチャート、 石英、石英、少量含む。	やや硬質	灰	灰白	裏面：ナデ、裏面：ナデ、 下端に接合のカケナリ。	—	—	3	e	平成 22 年度 総合調査会 ノンジン	75 80

胎土	性状	色調		技術的特徴		備考	出土地区	小区域	出生地標	写真番号
		外観	断面	瓦当部	瓦芯部					
やや密、φ 1~3mmチャート、 石英、多量に含む。	やや硬質 多量含む。	灰	灰白	断面：ヨコナデ、裏面：ヨウリ ナメナデ、端部ヨコナデ、裏面 ヨコナデ。	—	—	2A	a	北端瓦屋	76 81
やや密、φ 1~8mmチャート、 多量に含む。	硬質 多量含む。	灰	灰白	裏面：ヨコナデ、裏面：ヨウリ ナメナデ、端部ヨコナデ、裏面 ヨコナデ。	—	—	2A	f	SK02	76 81
やや密、φ 1~15cmチャート、 石英、石英、少量含む。	やや軟質 少量含む。	灰	白	内面：ヨコナデ、上端に接合の ヨコナデ、裏面：ヨウリナメナデ、 端部ヨコナデ。	内面：ヨコナデ、四面：ヨコナデ	—	2A	c	SK74	76 81
やや密、φ 1~4mmチャート、 石英、石英、少量含む。	やや軟質 少量含む。	灰	白	裏面：ヨコナデ、上端に接合の ヨコナデ、裏面：ヨウリナメナデ、 端部ヨコナデ。	内面：ヨコナデ、四面：不定ナデ、 ヨコナデ。	—	2A	c	SK74	76 81
やや密、φ 1~5mmチャート、 石英、石英、少量含む。	やや硬質 少量含む。	白	白	裏面：ヨコナデ、上端に接合の ヨコナデ、裏面：ヨウリナメナデ、 端部ヨコナデ。	内面：ヨコナデ、裏面：ヨウリナメ ナデ、端部ヨコナデ。	—	2A	c	SK74	76 81
やや密、φ 1~4mmチャート、 石英、石英、少量含む。	やや軟質 少量含む。	灰	白	裏面：ヨコナデ、上端に接合の ヨコナデ、裏面：ヨウリナメナデ、 端部ヨコナデ。	内面：ヨコナデ、裏面：ヨウリナメ ナデ、端部ヨコナデ。	文政や不明解、周間は3~ 4mほどのヨコナデ、側面は1.2m のヨコナデ。	2A	c	103瓦屋	76 82

固番 登録 番号	登記 番号	瓦当部法量(cm)										平瓦部法量(cm)					備考	
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	A	B	C	D	E	F
T64	NHIA	(9.2)	(3.0)	(8.1)	195	—	(125)	69	0.4	0.35	23	23	—	—	—	1.8	1/4	トドカ
T65	NHIB	(11.0) 審定250	3.6	(11.0) 審定168	1.9	(8) 審定41	1.0	(8) 審定67	0.4	0.3	20	16	(18.1)	—	—	2.0	1/4	トドカ
T66	NHIB	26.8	4.1	17.8	1.9	4.5	0.8	0.7	0.4	0.45	31	20	—	—	—	1.7	定期	トドカ
T67	NHIC	(16.2) 審定268	3.8	(13.2) 審定210	1.85	29	0.9	0.7	0.6	0.35	225	24	296	(325)	—	(14.7) 審定262	1.8	1/2 1/3
T68	NHIC	(12.6) 審定269	3.65	(9.7) 審定174	1.9	4.3	0.95	0.7	0.4	0.4	2.65	22	(1235)	—	(135) 審定266	1.9	1/2	若干
T69	NHIC	(11.9) 審定258	4.2	(8.0) 審定168	1.95	4.5	1.1	0.65	0.4	0.3	26	24	(7.85)	—	—	1.95	1/2	若干
T70	NHIC	(10.8)	4.15	(6.4)	2.25	4.3	0.8	0.7	0.4	0.35	195	17	(6.7)	—	0.98	1.9	1/2~4	若干
T71	NHID	(10.2)	3.8	(6.4)	2.1	4.0	0.8	0.7	0.2	0.4	215	17	(8.4)	—	10.1	2.0	1/3	トドカ
T72	NHID	(8.1)	3.7	(7.7)	(1.85)	—	0.8	0.6	0.2	0.5	195	18	—	—	—	2.0	1/3	トドカ
T73	NHID	(16.2)	3.8	(4.95)	2.1	5.3	1.0	0.7	0.25	0.5	195	17	—	—	10.0	1.8	1/4	トドカ
T74	NHIE	(11.2)	3.85	(6.4)	2.05	4.5	0.8	0.7	0.55	0.55	1.9	1.1	—	—	—	1.75	1/4	トドカ
T75	NHIZ	(12.4)	(3.2)	(6.4)	2.1	4.3	0.8	0.8	0.2	0.4	2.3	2.3	(8.7)	—	(14.1)	1.85	1/4	1/8
T76	NHIZ	(5.7)	(1.9)	(3.7)	(1.8)	—	0.8	—	0.45	—	審定22	—	31.5	(11.5)	(22.5)	1.75	若干	1/2~8
T77	NHIZ	(14.5)	3.85	(9.6)	1.9	6.3	1.05	0.45	0.4	0.3	2.65	26	(246)	—	(16.2)	1.65	1/2~8	1/3
T78	NHIZ	(10.4)	3.5	(6.2)	1.95	4.5	0.8	0.7	0.35	0.35	27	23	(10.8)	—	(8.5)	1.8	1/3	トドカ
T79	NHIZ	(9.2)	4.4	(4.0)	2.8	4.5	0.8	0.9	0.25	0.35	2.0	2.0	(12.6)	—	(7.5)	2.7	トドカ	トドカ
T80	NHIZ	(11.8) 審定 (27.0)	3.8	(12.0) 審定29.2	1.9	(22)	1.15	0.6	0.5	0.6	29	審定15	(9.7)	—	—	1.4	1/2	トドカ
T81	NHIZ	(13.7) 審定26.6	3.8	(12.3) 審定20.4	2.05	3.6	1.0	0.65	0.3	0.6	2.2	2.0	(17.3)	—	(16.2) 審定26.3	2.15	1/2	1/4
T82	NHIZ	(7.0)	3.4	(7.0)	1.8	—	0.8	—	0.4	—	1.7	審定2.0	(15.6)	—	(9.0)	2.25	1/3	1/4
T83	NHIZ	(11.6)	4.2	(7.6)	2.2	3.4	1.2	0.8	0.75	0.7	23	2.5	(11.7)	—	—	1.9	2.5	トドカ
T84	NHIZ	(13.6) 審定26.6	3.7	(10.5) 審定20.4	2.0	3.4	1.0	0.9	0.25	0.5	205	2	(20.1)	—	(14.5) 審定26.4	2.0	1/2	1/4
T85	NHIZ	—	3.7	—	2.0	—	0.8	0.9	0.7	0.7	23	—	—	—	—	1.47	トドカ	
T86	NHIZ	—	3.3	—	1.8	—	0.7	—	0.25	—	1.5	—	—	—	—	—	1.4	トドカ
T87	NHIS	(10.8)	3.8	10.8	2.2	—	1.0	審定0.7	0.35	0.4	20	審定1.2	—	—	—	1.95	1/3	△
T88	NHIS	(20.2) 審定24.1	4.3	(17.2) 審定18.8	2.9	3.3	1.1	1.1	0.4	0.55	22	17	(5.0)	—	(20.2)	2.9	1/5	若干
T89	NHIS	(11.4)	4.6	(7.7)	2.0	3.9	1.2	1.35	0.55	0.55	22	16	(20)	—	—	審定1.9	1/3	若干
T90	NHIS	(20.2) 審定23.8	4.6	(17.3) 審定18.8	1.9	3.1	1.2	1.3	0.45	0.5	20	16	(16.6)	—	(12.6)	2.0	1/2~8	若干
T91	NHIS	(12.5)	4.4	(9.5)	2.0	3.5	1.2	1.3	0.55	0.6	22	15	(6.2)	—	(10.3)	1.95	1/2~6	若干
T92	NHIS	(10.8)	4.5	(7.5)	1.85	3.7	1.15	1.3	0.45	0.55	23	17	(13.15)	—	(10.8)	1.85	1/25	若干
T93	NHIS	(16.0) 審定26.8	(34)	(12.8) 審定20.3	2.05	3.5	審定1.25	1.3	0.5	0.6	25	18	(8.45)	—	(15.3) 審定26.6	1.85	1/2~8	若干
T94	NHIS	—	4.6	—	2.6	—	0.9	1.0	0.5	0.6	23~27	25	—	—	—	2.6	1/5	トドカ
T95	不明	(6.0)	4.2	(4.5)	2.05	3.3	1.3	0.9	0.3	0.4	—	17	—	—	—	2.0	1/3	トドカ

()内の数字は現存値

空白：属性が無いため計測不能

—：欠失により計測不能

※法量のアルファベットは第23回 2~4に於く

第17表 丸瓦観察表

報告番号	丸瓦法量(cm)										残存	地土
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J		
T96	33.65	30.35	3.3	5.8	4.8	14.75	13.5	6.6	(7.0) 推定127	1.9	1/4弱 大根 玉ねぎ 1/3欠	やや密。φ 3mm以下石英・チャート・長石、やや多量含む。赤色粒子、目立つ。
T97	33.0	30.3	2.7	7.85	6.4	15.5	13.5	6.3	1295	2.5	玉ねぎ 1/3欠	密。φ 1mmの長石・チャートを少量含む。
T98	31.2	26.9	4.3	7.25	6.1	14.1	10.8	3.95	(7.5) 推定8.5	1.75	玉ねぎ 密。φ 1~2mmのチャート・長石少量含む。	粗。φ 1~20mmチャート・長石多量に含む。
T99	(21.4)	(16.8)	4.6	—	—	—	—	—	4.6	2.15	玉ねぎ全欠	粗。φ 1~20mmチャート・長石多量に含む。
T100	30.0	27.5	2.5	6.7	5.3	16.1	13.7	5.2	推定 (129)	2.0	玉ねぎ 強度欠 全欠	密。φ 1~2mmのチャート微量含む。黑色粒子、中量含む。
T101	31.6	27.5	4.1	8.4	5.6	16.2	13.8	7.2	132	2.0	玉ねぎ 1/5欠	やや密。φ 1~2mmの長石、少量含む。
T102	(31.0)	(26.1)	(4.9)	7.6	5.6	16.0	14.0	5.7	(135)	2.0	玉ねぎ 1/3欠	密。φ 1~2mmチャート・長石、少量含む。

()内の数字は残存値 空白：属性が無いため計測不能 —：欠失により計測不能 *法量のアルファベットは第23回 3に対応

第18表 平瓦観察表

報告番号	法量(cm)				残存	地土				地成
	A	B	C	D						
T103	29.8	(131) 推定22.85	26.25	1.6	玉ねぎ 1/2弱欠	やや密。φ 15mmのチャート・長石、微量含む。				いぶし 硬質
T104	30.5	(151) 推定22.8	25.3	1.85	玉ねぎ 1/3欠	やや密。φ 1~2mmのチャート・長石、石英少量含む。				いぶし やや硬質
T105	30.0	22.8	(181) 推定26.1	1.85	玉ねぎ 1/4欠	やや密。φ 15mm以下石英・長石・チャート 中量含む。				いぶし やや硬質
T106	29.4	23.3	(160) 推定25.0	1.9	玉ねぎ 1/3欠	やや粗。φ 25mm以下石英・長石・チャート 少量含む。				いぶし やや硬質
T107	30.6	23.65	25.8	1.9	玉ねぎ 1.6	密。φ 1~3mmの長石・チャート中量含む。 黑色粒子、赤色粒子、目立つ。				ややや やや硬質
T108	29.85	22.6	(186) 推定26.2	1.85	玉ねぎ 1/3欠	密。φ 1~2mmのチャート・長石、中量含む。 赤色粒子、少量含む。				いぶし 硬質
T109	30.5	24.1	(1995) 推定27.0	1.8	玉ねぎ 1/4欠	やや密。φ 0.2mm以下石英・長石・チャート、中量含む。				やや軟質
T110	31.0	(18.15) 推定24.0	25.9	1.85	玉ねぎ 1/3欠	やや密。φ 2mm以下石英・長石・チャート 少量含む。				いぶし やや硬質
T111	29.9	23.75	25.8	1.7	完	やや密。φ 1~5mmの長石・チャート 黑色粒子、黑色粒子多い。				いぶし 硬質
T112	(29.9)	23.75	—	2.0	広縫全欠	やや密。φ 1~25mmの長石・チャート やや粗。φ 1~5mmの長石・チャート 中量含む。				いぶし 硬質
T113	(7.4)	—	—	2.0	破片	やや密。φ 0.5~3mmの長石・チャート、黑色粒子、少量含む。				やや硬質
T114	(16.5)	(9.7)	—	1.6	破片	やや粗。φ 8mmのチャート・φ 0.5~3mmの長石、少量含む。				硬質 ややい出し
T115	(10.5)	(10.8)	—	1.6	破片	やや密。φ 1~2mmの長石、少量含む。				やや硬質 いぶし
T116	(9.5)	(7.3)	—	2.1	破片	やや粗。φ 1~5mmの長石、中量含む。				軟質

()内の数字は残存値 空白：属性が無いため計測不能 —：欠失により計測不能 *法量のアルファベットは第23回 4に対応

第19表 面戸瓦観察表

報告番号	丸瓦法量(cm)										残存	地土
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J		
T117	長10.4 幅7.5	—	—	6.7	5.1	15.6	13.6	—	—	1.9	完存	密。φ 0.5~3mmの長石、少量含む。
T118	長11.8 幅10.0	—	—	6.1	5.5	15.2	13.9	—	—	1.7	完存	やや密。φ 0.5~3mmのチャート・長石、 赤色粒子、中量含む。
T119	長12.7 幅9.7	—	—	6.2	4.9	15.2	13.6	—	—	2.4	完存	密。φ 0.5~1mmの長石、微量含む。
T120	11.9	—	—	推定6.9	推定4.9	(9.5) 推定14.2	(6.4) 推定10.4	—	—	2.0	2/3	やや密。φ 1~2mmの長石・チャート、 微量含む。
T121	長11.0 幅9.9	—	—	5.8	4.6	(13.4) 推定14.0	(11.2) 推定11.7	—	—	1.6	ほぼ完 存	密。φ 0.5~1mmの長石・チャート中量 含む。黑色粒子多い。
T122	15.0	—	—	6.2	4.4	(7.8) 推定14.0	(7.3) 推定13.0	—	—	1.8	4/5	やや密。φ 0.5mmの長石、ごく微量含む。
T123	16.0	—	—	推定16.1	推定4.4	推定12.4	推定9.8	—	—	1.75	4/5	やや密。φ 1.5mm以下石英・長石、 黑色粒子、中量含む。
T124	14.1	—	—	5.45	3.85	(8.5) 推定14.0	(9.3) 推定10.3	—	—	1.45	3/4	やや密。φ 1.5mm以下石英・長石、 赤色粒子、少量含む。
T125	13.25	10.8	2.45	7.6	5.1	(11.7) 推定15.0	(8.4) 推定11.1	6.1	(27) 推定9.8	2.6	2/3	やや密。φ 2mm以下石英・長石、 赤色粒子、少量含む。

()内の数字は残存値 空白：属性が無いため計測不能 —：欠失により計測不能 *法量のアルファベットは第23回 3に対応

焼成	色調		技術的特徴	備考	出土地区	小区分	出土遺構	団版番号	写真団版番号
	外観	裏面							
軟質	淡黄・灰	淡黄	凸面タナデ。凹面布目・布袋外縫襤じ付け吊り紐痕。玉縫襤の面取り側部まで及ぶ。	糸切り	2A	a	SD68	84	88
いわし 硬質	灰	灰白	凸面タナデ。凹面内タキ直(左側)、一部タテナデあり。玉縫襤の面取り側部まで及ぶ。	糸切り	2A	a	SK65	84	89
いわし 硬質	灰	灰白	凸面タナデ。凹面内タキ直(左側)、一部タテナデあり。玉縫襤の面取り側部まで及ぶ。	鉄継ぎ切り	2A	a	SK65	85	89
いわし 硬質	灰・灰白	灰白	凸面タナデ。凹面内タキ直(左側)・一部ナデ調整あり。玉縫襤の面取り側部まで及ばない。	針穴・凹面に引っかけ部あり(本末は糸丸丸側部)。鉄継ぎ切	2A	c	SK74	85	90
いわし 硬質	灰・灰白	灰白	凸面タナデ。凹面内タキ直(左側)・一部ナデ調整あり。玉縫襤の面取り側部まで及ばない。	鉄継ぎ切り	2A	b	壁1 (第10層)	86	89
いわし 硬質	黑	灰白	凸面タナデ。凹面内タキ直(右側)・布目あり。玉縫襤の面取り側部まで及ぶ。	鉄継ぎ切り	2A	b	石垣3 前壁下層	86	90
いわし 硬質	黒色・濃	濃い灰	凸面タナデ・ハラ記号あり。西面ゴサ状以前・広瀬部ヨコゲア記号あり・玉縫襤の面取り側部まで及ばない。	鉄継ぎ切り	2B	c	SK74	87	90

焼成	色調		技術的特徴	備考	出土地区	小区分	出土遺構	団版番号	写真団版番号
	外観	裏面							
黒灰	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・広瀬ヨコナデ。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	a	SK65	87	91
灰	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・広瀬ヨコナデ。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	a	SK65	88	91
暗灰	淡黄		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・広瀬ヨコナデ。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	a	SK65	88	91
灰白	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・広瀬ヨコナデ。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	a	SK65	89	91
灰白・黒 灰	—		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・広瀬ヨコナデ。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	a	SK65	89	92
黒灰	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・端面ヨコナデ。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	a	SK65	90	92
灰	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・端面ヨコナデ・四型台状压痕。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	c	SK74	90	92
黒灰~灰	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・端面ヨコナデ。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	c	SK74	91	92
黒灰	—		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・端面ヨコナデ・四型台状压痕。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	c	SK74	91	93
灰	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・端面ヨコナデ・四型台状压痕。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	c	SK74	92	93
灰	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・端面ヨコナデ・四型台状压痕。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	c	SK74	92	93
灰白	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・端面ヨコナデ・四型台状压痕。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	a	北端瓦盤	92	93
灰白(懐 上)	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ後縫接タナデ。凸面:粗いタナデ・端面ヨコナデ・四型台状压痕。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	c	SK74	92	93
灰白	灰白		凹面:丁寧なヨコナデ。凸面:粗いタナデ・四型台状压痕。端面:ケズリ後ナデ調整。		2A	a	北端瓦盤	92	93

焼成	色調		技術的特徴	備考	出土地区	小区分	出土遺構	団版番号	写真団版番号
	外観	裏面							
硬質 いわし	暗灰	灰白	凸面:不定ナデ。凹面:両端縫ヨコケズリ・布目痕。端面:ケズリ後ナデ。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。広瀬部	2A	c	103瓦盤	93	94
やや硬質 いわし	黒灰	灰白	凸面:ヨコナデ。凹面:両端縫ヨコケズリ・布袋の筋痕。端面:ケズリ後ナデ。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。広瀬部	2A	c	103瓦盤	93	94
硬質 いわし	黒灰	灰白	凸面:タナデ。凹面:両端縫ヨコケズリ・布目痕。端面:ケズリ後ナデ。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。中間部	2A	c	103瓦盤	93	94
やや硬質 いわし	黒灰	灰白	凸面:ヨコナデ。凹面:両端縫ケズリなし・吊り紐痕。端面:ケズリ後ナデ。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。中間部	2A	a	北端瓦盤	93	94
硬質 いわし	黒灰	灰白	凸面:ヨコナデ。凹面:両端縫ケズリなし・吊り紐痕。端面:ケズリ後ナデ。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。無段丸扶手部	2A	a	SK48	94	94
硬質 いわし	黒灰	灰白	凸面:タナデ。凹面:両端縫ケズリなし・布目痕。端面:ケズリ後ナデ。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。無段丸扶手部	2A	c	SK74	94	94
いわし 硬質	灰~灰白	灰白	凸面:不定ナデ。凹面:両端縫ケズリなし・吊り紐痕。端面:不調整。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。無段丸扶手部	3区	e	SK160	94	95
いわし 硬質	黒灰	灰白	凸面:不定ナデ。凹面:両端縫ケズリなし・吊り紐痕。端面:不調整。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。無段丸扶手部	3区	e	SK160	94	95
硬質	黒灰	灰白	凸面:ヨコナデ。凹面:両端縫ケズリなし・吊り紐痕。端面:不調整。端面:ケズリ	鉄継ぎ切り。右段丸扶手部	2A	a	北端瓦盤	95	95

第 20 表 その他の道具瓦

道具 番号	種類	法量(cm)						現存	胎土	焼成	色調		技術的特徴	備考	出土 地区	出土 遺構	回収 番号	写真 回数 番号
		長さ	幅	高さ	厚み	外側	内面				外側	内面						
T126	貯糞 丸瓦	長さ 11.3 幅 10.15 高さ 1.8						1/3	やや黒。φ 1 mm以下白灰。 内面下部に黒色 釉薬含む。	焼質	灰	内面：無いチザ ル。不定方向の 斜面。内面は 滑らか。外側は 粗面。不規則。	ヨリナガ不明。 石川33年社工 場等、不規則。	2B	a	規丸上 丸	95	95
T127	鍋形 丸瓦	丸井 面付 径 14.7 幅 11.9 高さ 1.8 厚さ 3.8	巴文 横文 径 14.7 幅 11.9 高さ 1.8 厚さ 3.8	真文 横文 径 14.7 幅 11.9 高さ 1.8 厚さ 3.8	真文 横文 径 14.7 幅 11.9 高さ 1.8 厚さ 3.8	真文 横文 径 14.7 幅 11.9 高さ 1.8 厚さ 3.8	真文 横文 径 14.7 幅 11.9 高さ 1.8 厚さ 3.8	1/3	やや黒。φ 1 mm以下白灰。 内面下部に黒色 釉薬含む。	焼質	灰	内・外側面にチザ ル。内面は白巴文。 外側は黒巴文。	丸井型不明の 有釉瓦。	2A	a	弧斜井 横	95	95
T128	鳥巣 瓦	丸井 面付 径 13.7 幅 11.0 高さ 1.8 厚さ 4.8	巴文 横文 径 13.7 幅 11.0 高さ 1.8 厚さ 4.8	真文 横文 径 13.7 幅 11.0 高さ 1.8 厚さ 4.8	真文 横文 径 13.7 幅 11.0 高さ 1.8 厚さ 4.8	真文 横文 径 13.7 幅 11.0 高さ 1.8 厚さ 4.8	真文 横文 径 13.7 幅 11.0 高さ 1.8 厚さ 4.8	1/3	やや黒。φ 1 mm以下白灰。 内面下部に黒色 釉薬含む。	焼質	灰 黒	丸井型外輪付。内輪 はチザル。外輪は 白巴文。	丸井型式不明。 有釉瓦。	2B	a	規丸上 丸	95	95
T129	鳥巣 瓦	35.5 (11. 4)	96 (12.6)	高さ 厚さ 3.9 (2.0)					やや粗。	焼質	灰 黒	内面：工具ナジ。 外側：ヨコナジ。	軽く削して裏ねる。	軽1 規1 規10 規11	b	規丸上 丸	95	95

第 21 表 鬼瓦觀察表

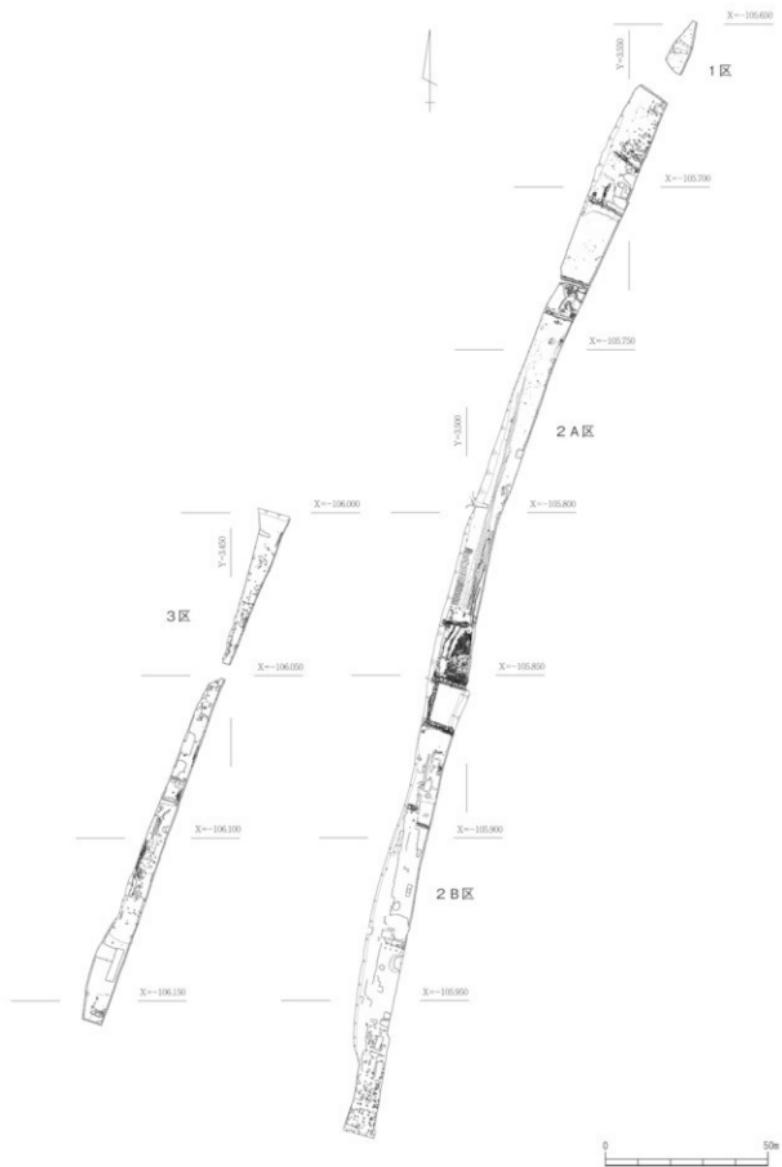
道具 番号	法量(cm)			現存	胎土	焼成	色調		特徴	備考	出土 地区	出土 遺構	回収 番号	写真 回数 番号	
	長さ	幅	厚み				外側	内面							
T130	70.8	89.8	17.3	7.9	やや黒。 φ 1 ~ 3mm大粒石 チャート多く含む。半色粒子 多く含む。	やや焼質	灰	内面：外輪ナジ。内輪 はチザル。内面は白巴文。 外輪は黒巴文。	中輪ナジ付。	重量 37kg	2A	f	SD79	97	97
T131	(23.2) (37.6)	(10.1)	1/4		やや黒。 φ 2mm以下のチャー ト。黑色粒子。中量含む。	やや焼質	灰	中輪ナジ付。	中輪ナジ付。		2A	f	SD79	96	96
T132	8.6	(7.3)	20	支模 鏡片	黒。 φ 0.5 ~ 3mmの鉢石。少 量含む。	焼質 いし	灰	裏形の側面に釘孔付け。裏腹を修復。工具でスジを 入れて裏腹。裏腹：黄緑チザル工具。	裏形の側面に釘孔付け。裏腹を修復。工具でスジを 入れて裏腹。裏腹：黄緑チザル工具。		2A	a	北規丸上	96	96
T133	(16.1) (14.1)	53	鏡片	黒。 φ 3mm以下の鉢石。石英。 チャート。中量含む。	焼質 いし	黒	裏面中央部分ナジ付けて側面に凸凹出し。外側。 裏面ナジ調整。側面面一辺ナジ調整。				2A	c	SK74	98	98
T134	(11.3) (12.6)	6.8	底子 鏡片	やや黒。 φ 2mm以下の鉢石。石英。 黒色粒子。中量含む。	焼質 いし	灰	裏面はヨカリ調整。一部ナジ調整により平坦に なる部分有り。				2A	c	SK74	98	98

第 22 表 利神城跡表揮瓦観察表

道具 番号	種類	工具用法量(cm)										調査用法量(cm)				現存	胎土	焼成	色調	技術的特徴	備考	回収 番号	写真 回数 番号
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	A	B	C	D	瓦当						
利神 1	鳥巣 瓦	EN(M) (12.5) 新定 53.2	(875) 新定 101.1	7.0	11	23	1.1	1.6					1/2 鏡	やや黒。 φ 4mm以下 黒色粒子。中量含む。	焼質 いし	灰 黒	内面：ナジ。外輪 はチザル。内面 は黒色粒子。中量 含む。	内面青釉を半 ナジ。裏面は白 巴文。内輪はチ ザル。	前壁屋敷 NIHAと同様	99	98		
利神 2	籽平 瓦	EN(H) (14.5) 新定 36.1	4.1	(107) 新定 182	21	42	10	0.9	0.35	0.4	33	3.5	(185) 新定 25.5	黒。 φ 1.5 mm以下白灰。 内面：白灰。中量 含む。	焼質 いし	灰 黒	内面：工具ナ ジ。外輪：ヨコナ ジ。裏面：ヨコナ ジ。内面：白灰。 中量含む。	内面：鏡面ヨ コナジ。段階、カ セキナジ。後 期工具付。	御殿屋敷 NIHAと同様	99	98		

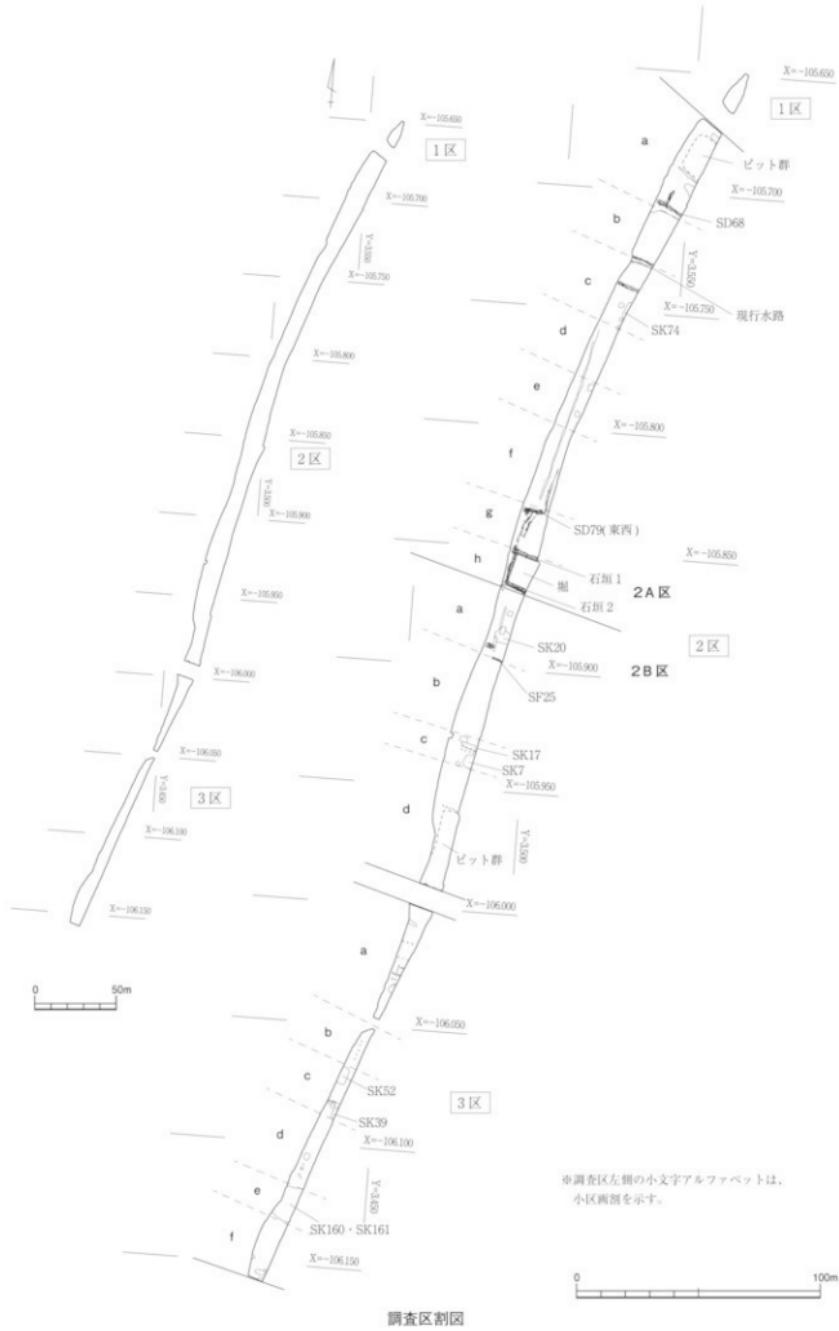
※法量のアルフリットは第22回 1~4に列記

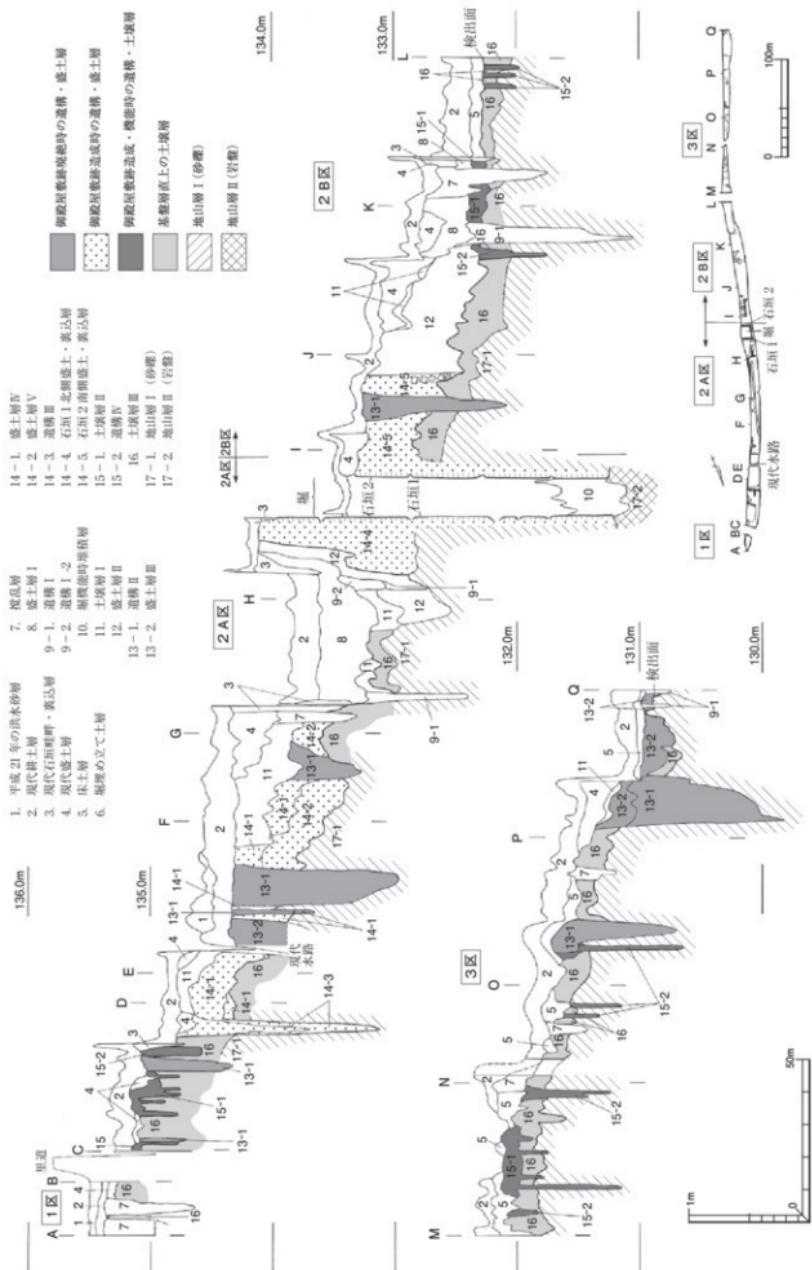
図版

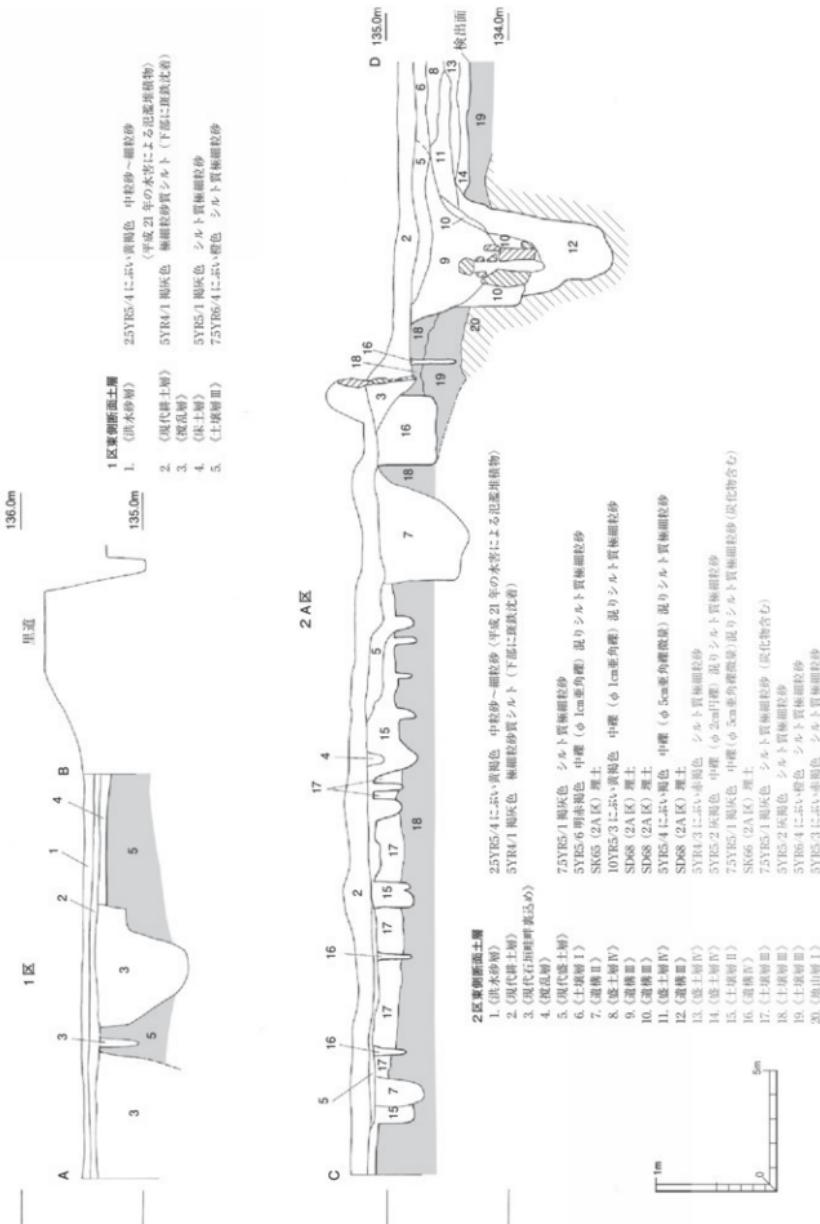


調査区全景

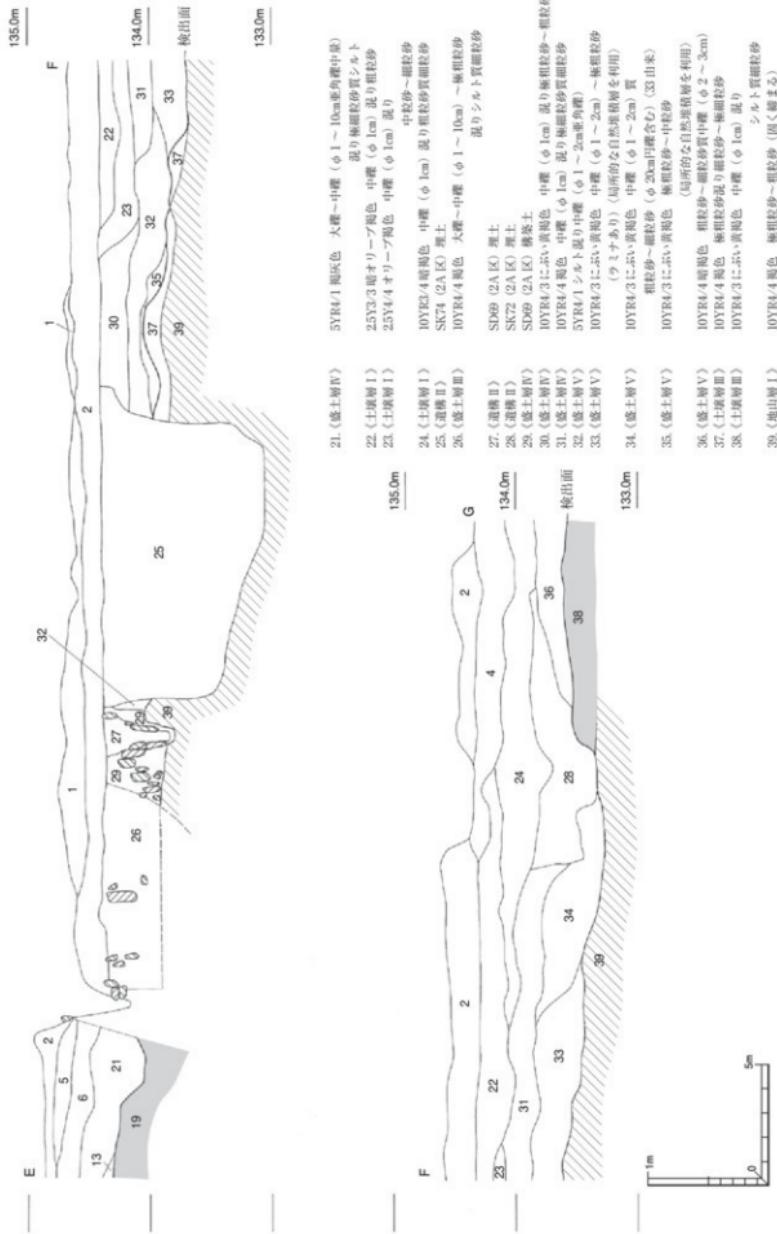
図版 2

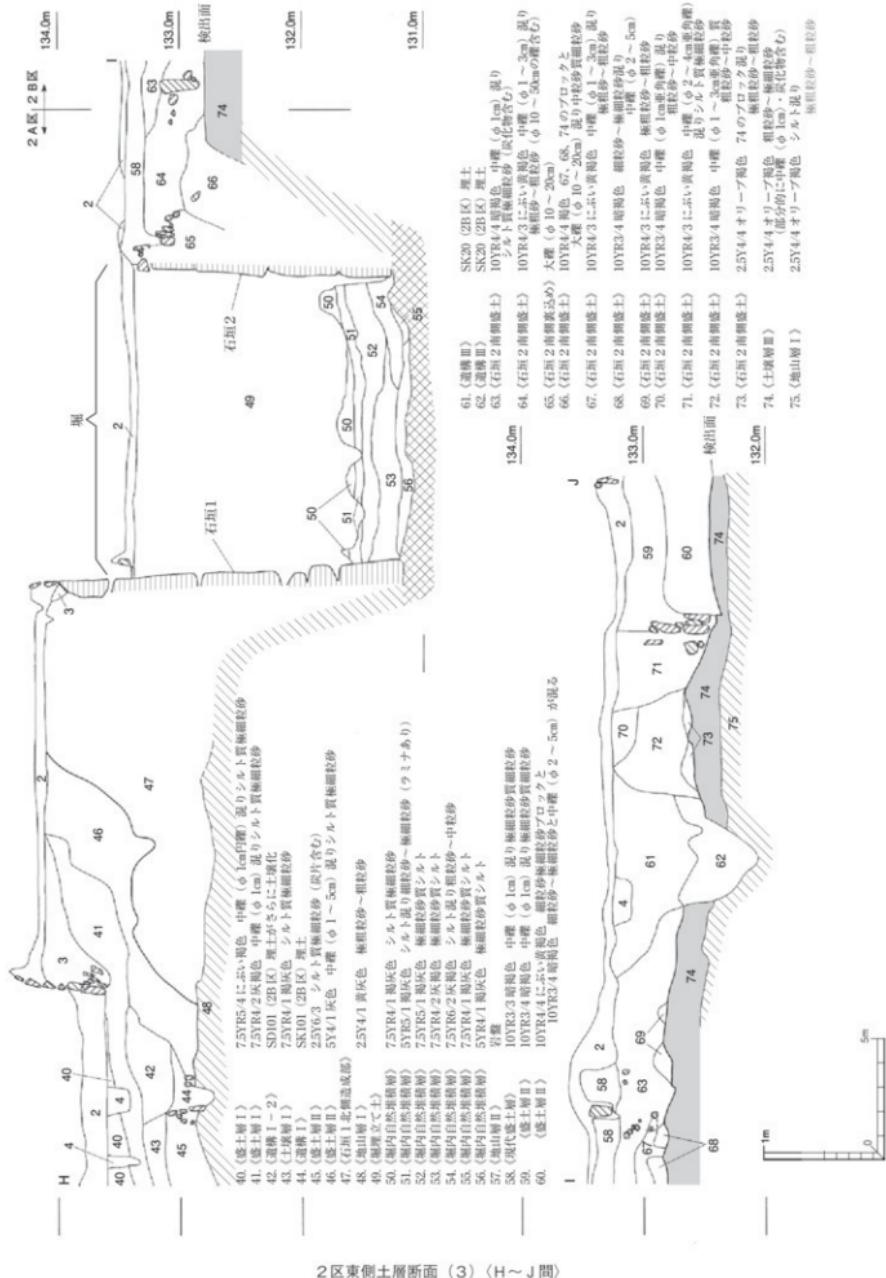


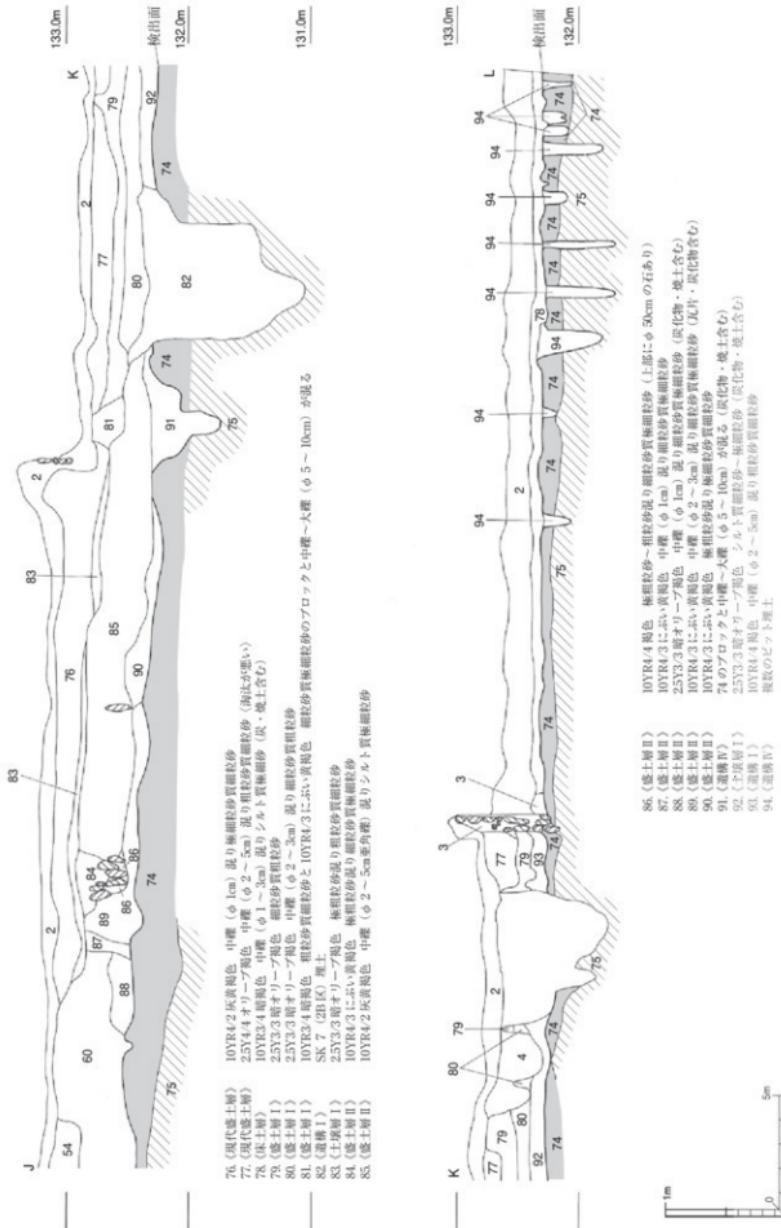


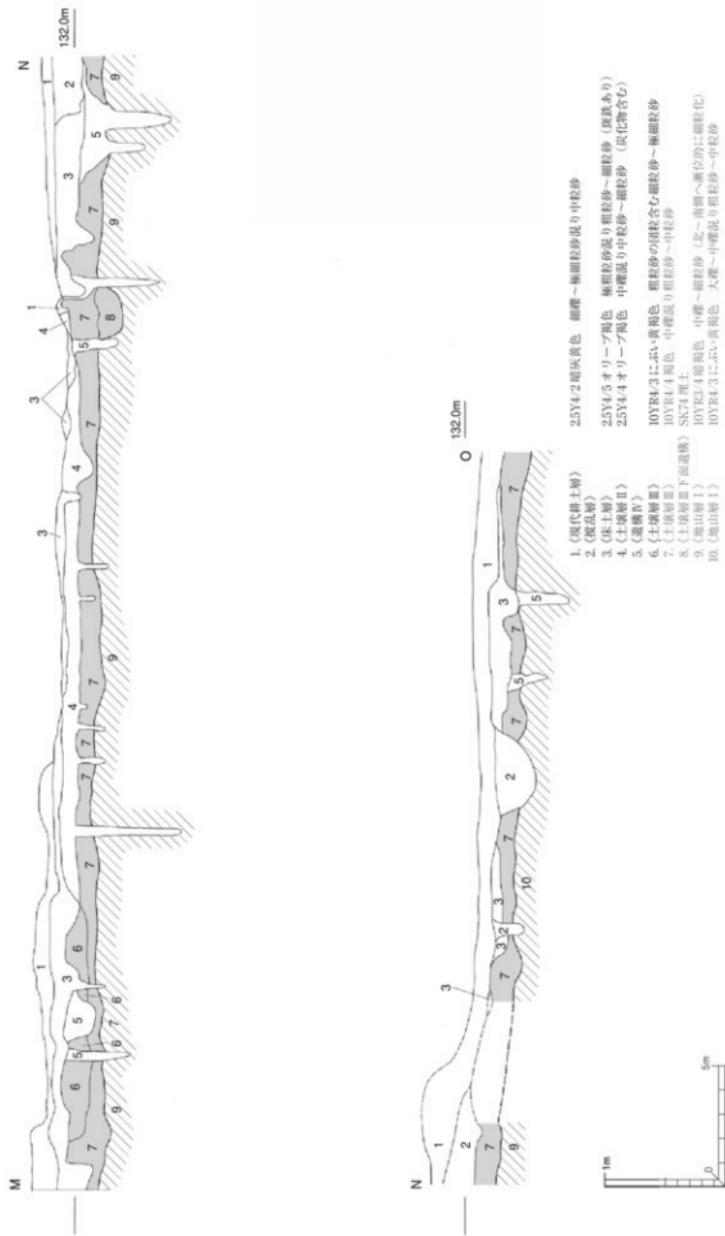


1区・2区東側土層断面図 (1) (A~D間)

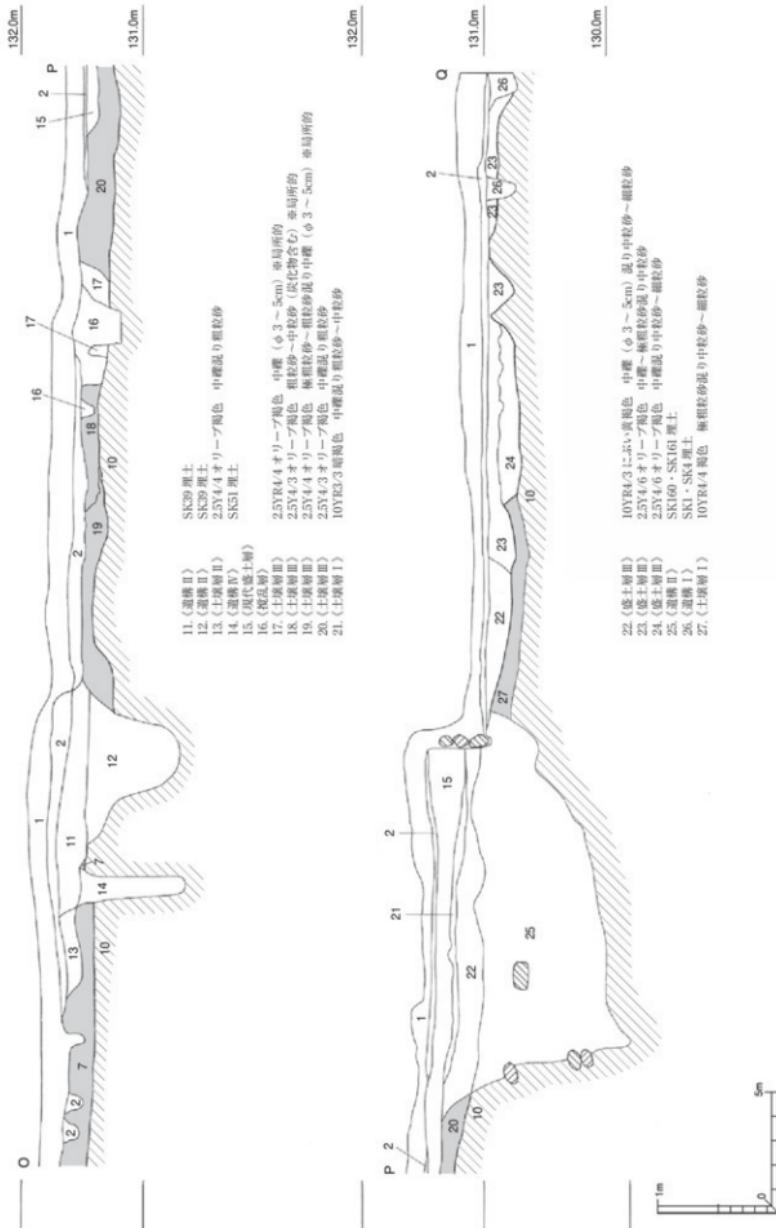




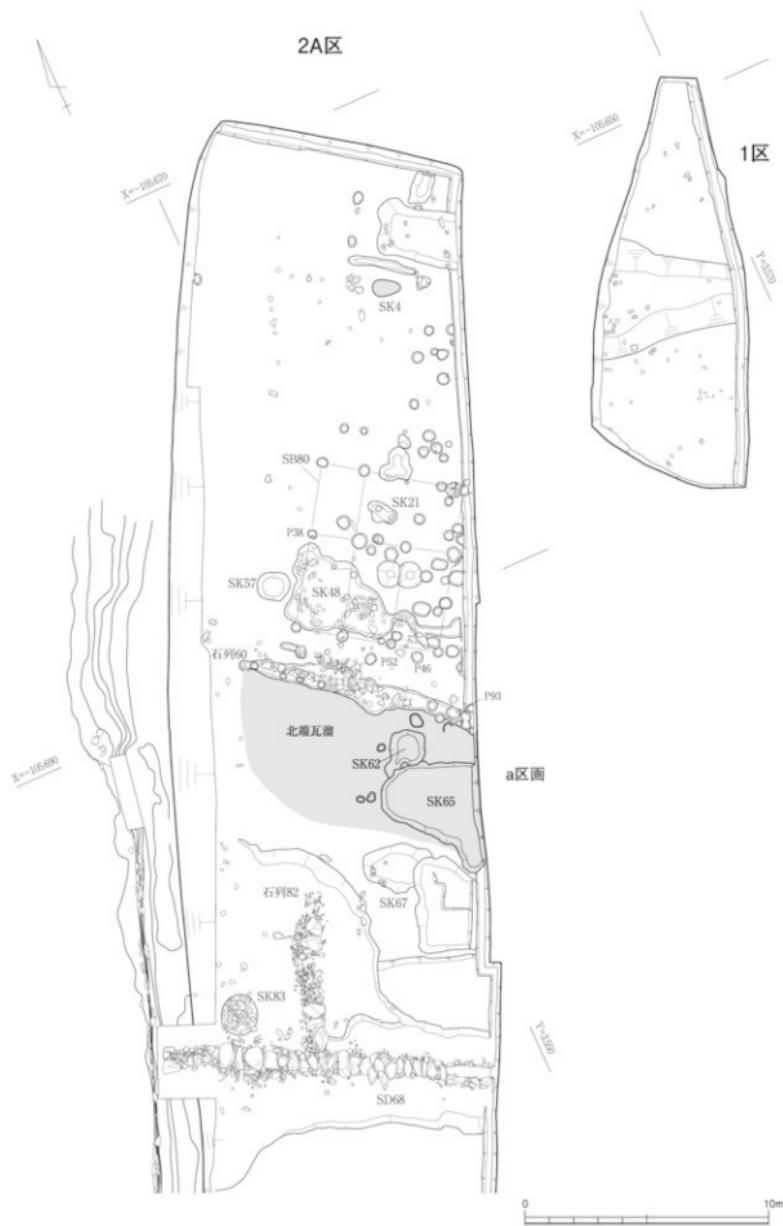




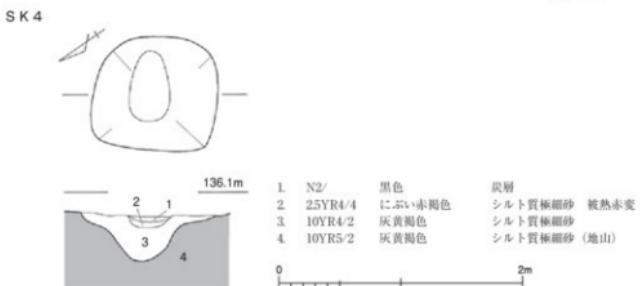
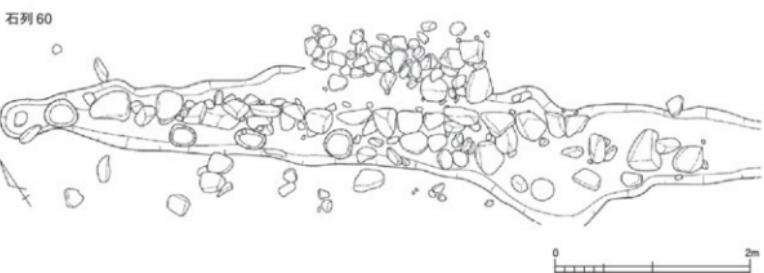
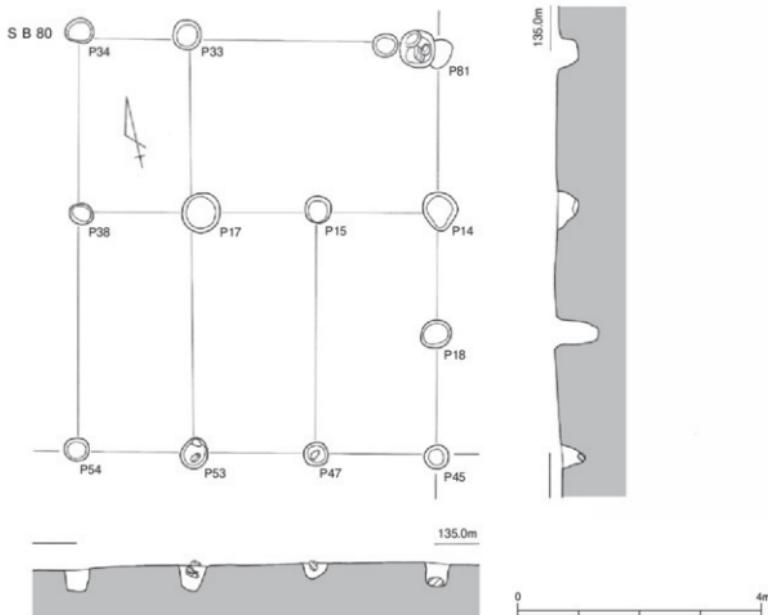
3区東側土層断面（1）（M～O間）



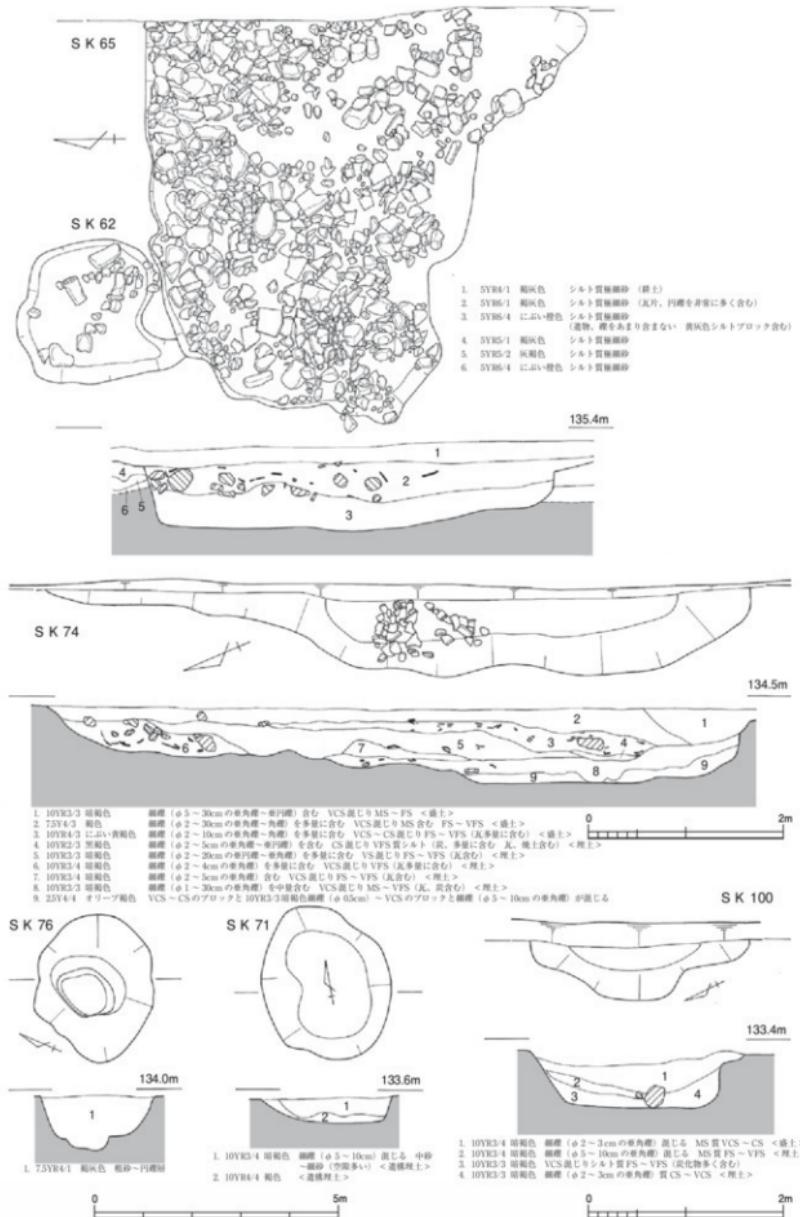
3区東側土層断面 (2) (O ~ Q間)



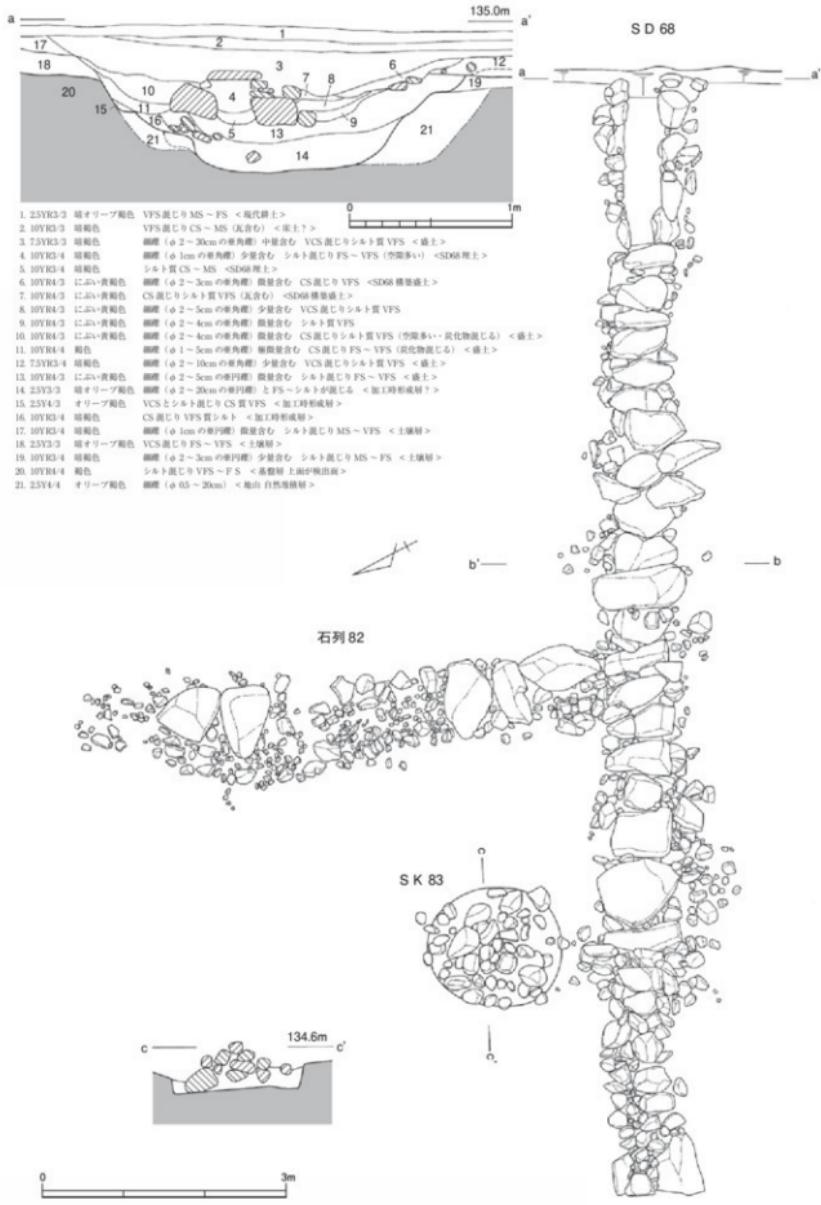
1・2 A区 a区画 平面図



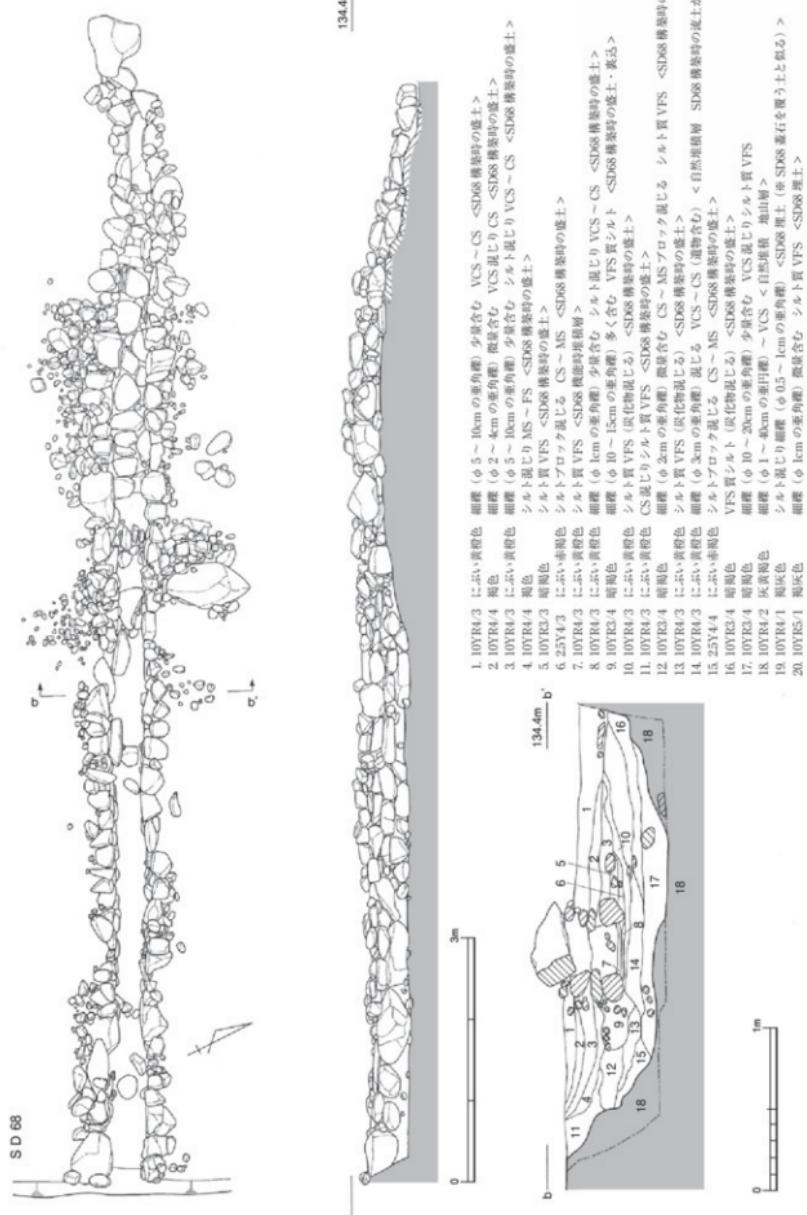
2 A区 a 区画 遺構平・断面図

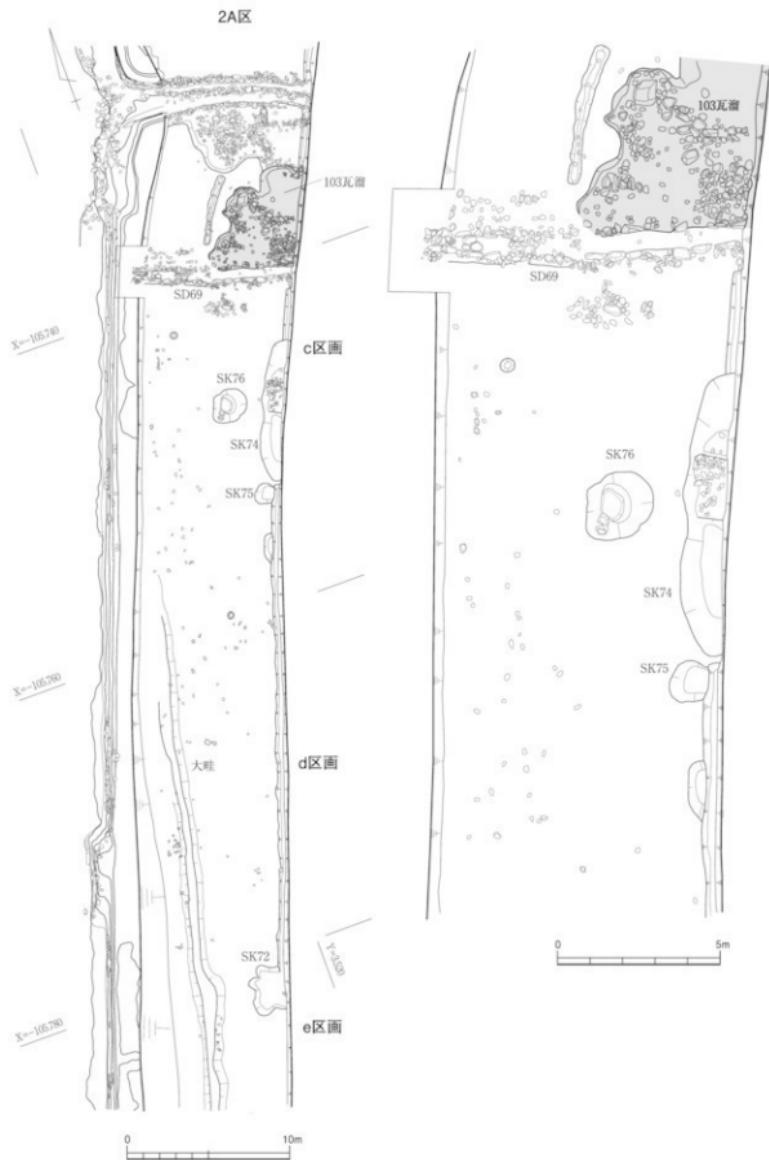


2 A 区 a・c・e 区画 遺構平・断面図

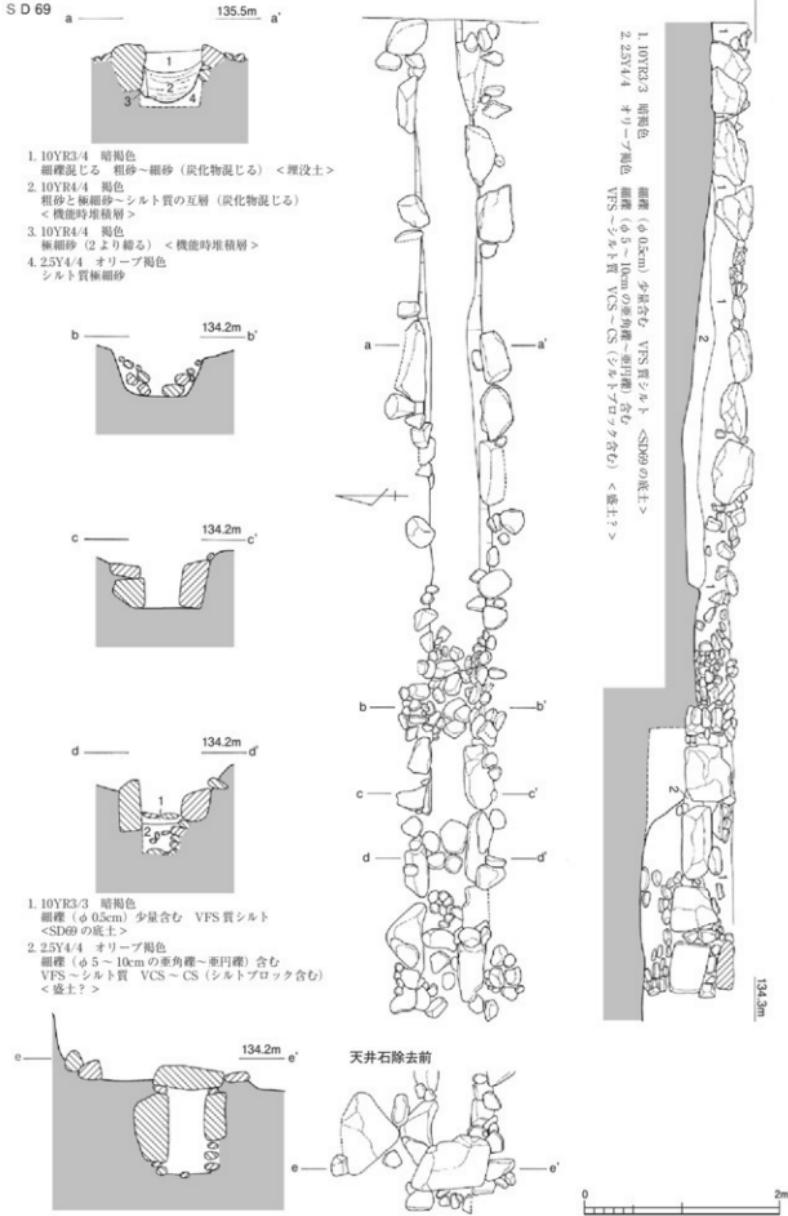


2 A区 a 区画 遺構平・断面図

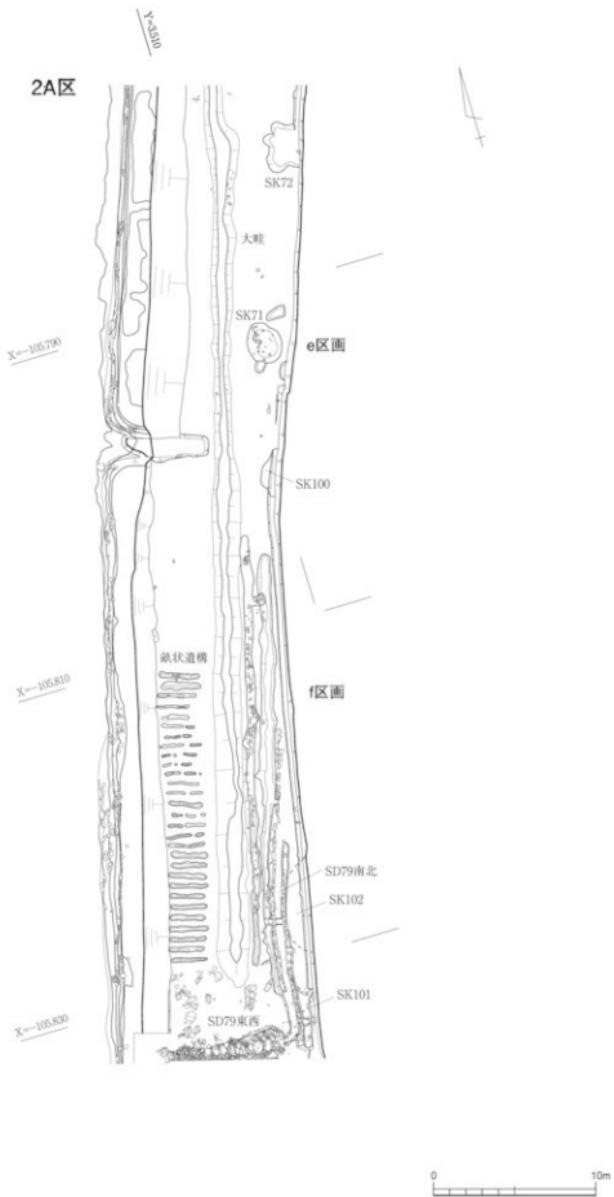




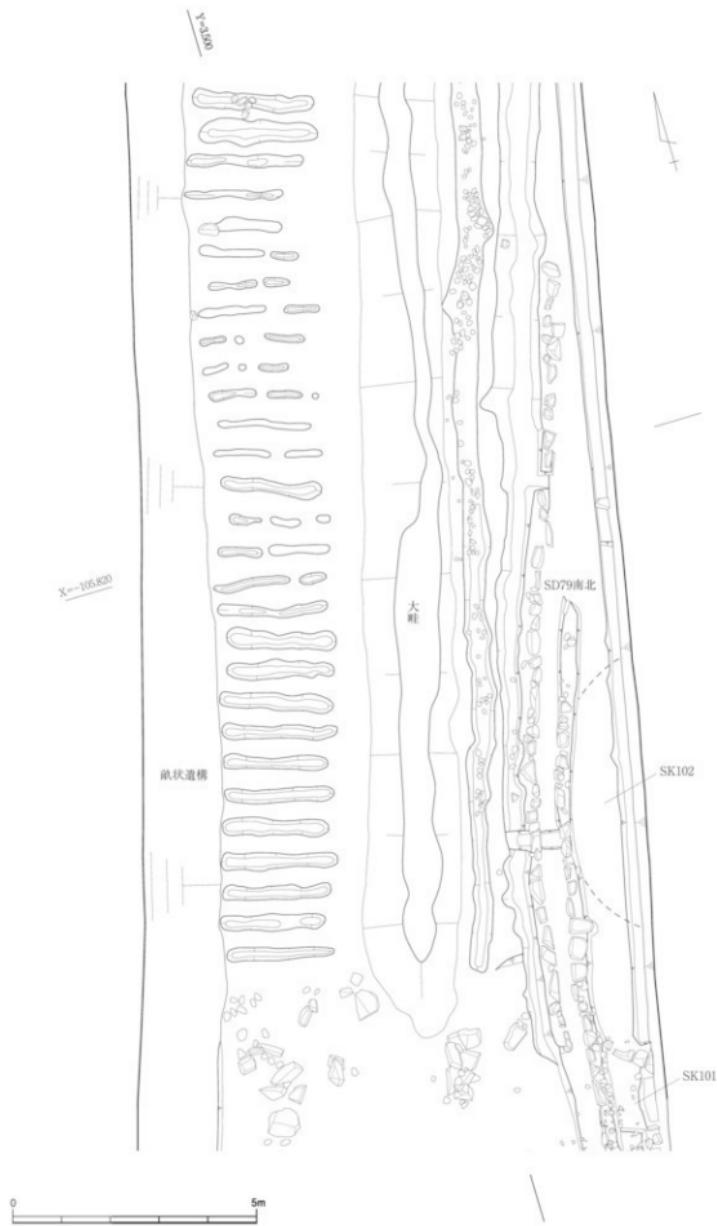
2A区 c・d・e区画 平面図



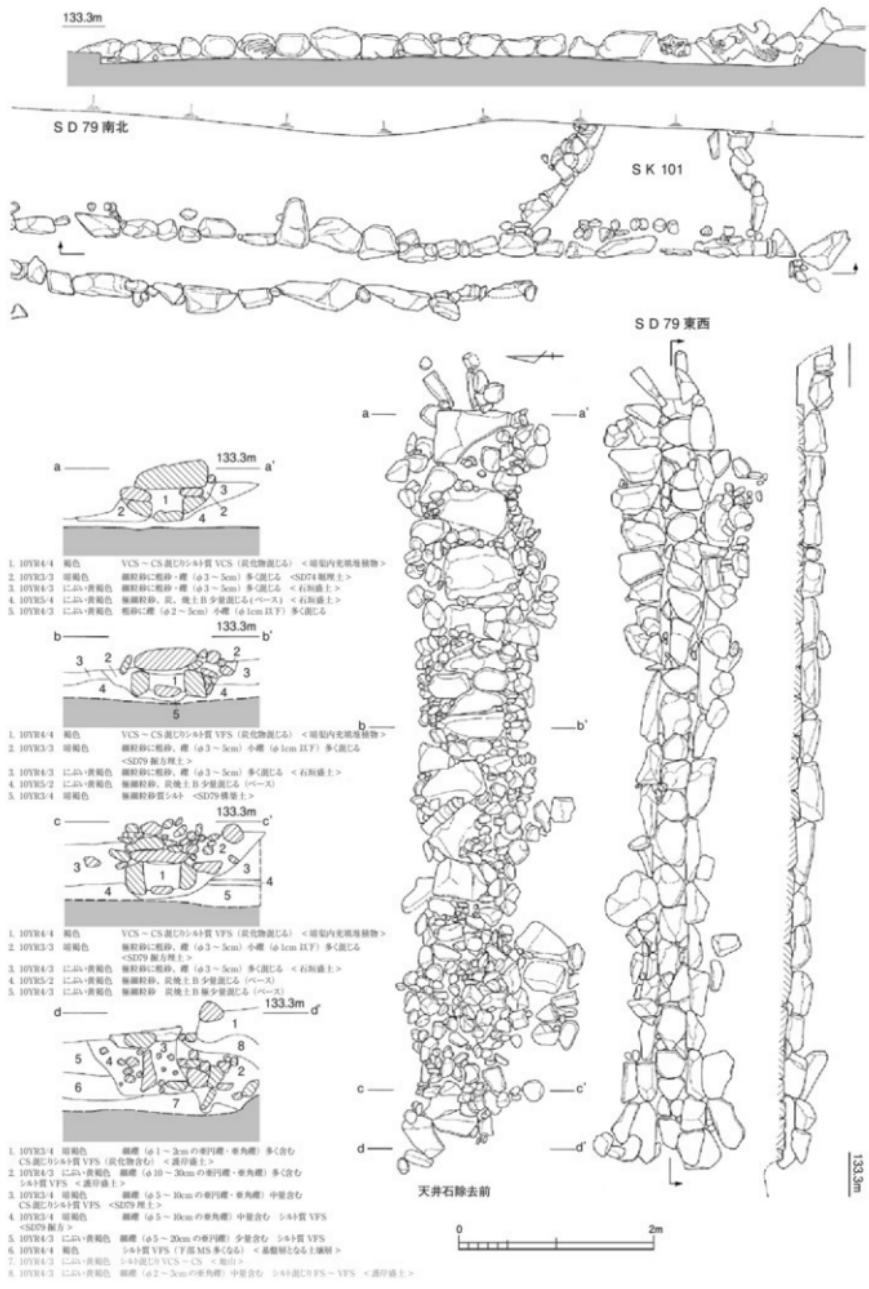
2 A 区 c 区画 遺構平・断面図



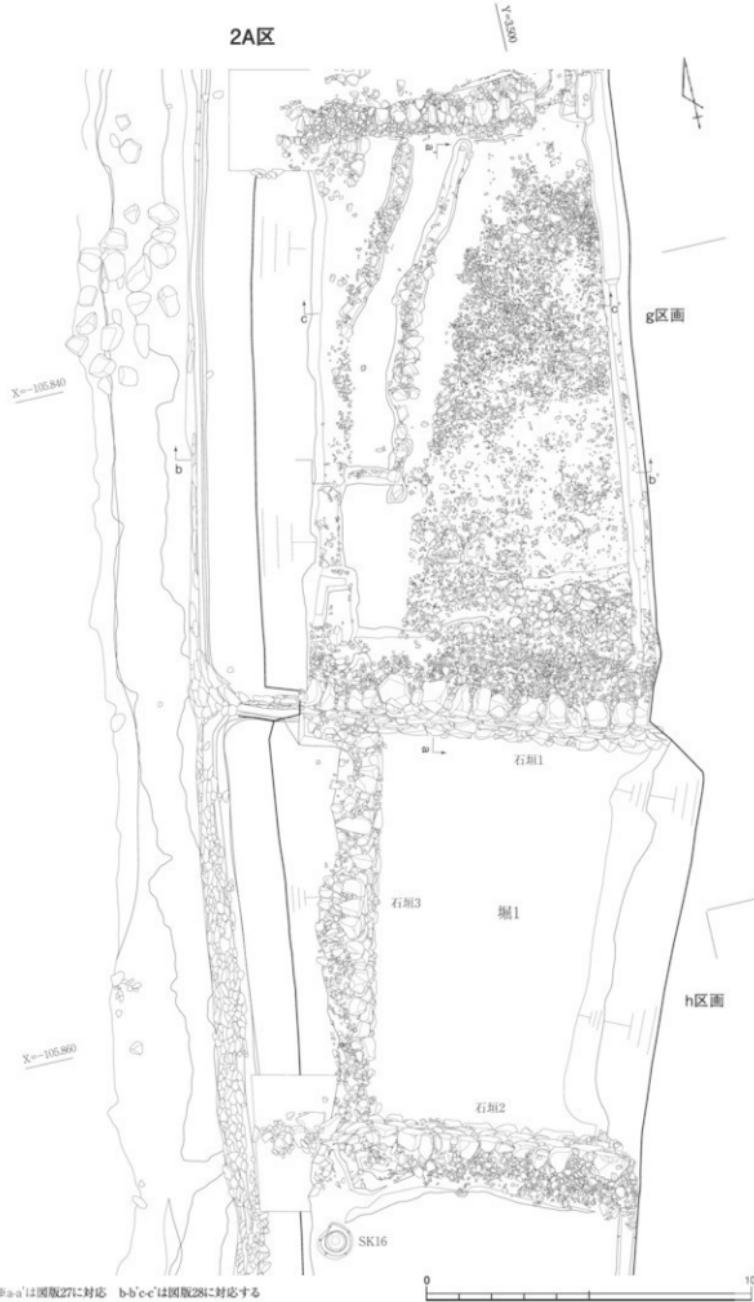
2A区 e・f区画 平面図



2 A 区 f 区画 平面図

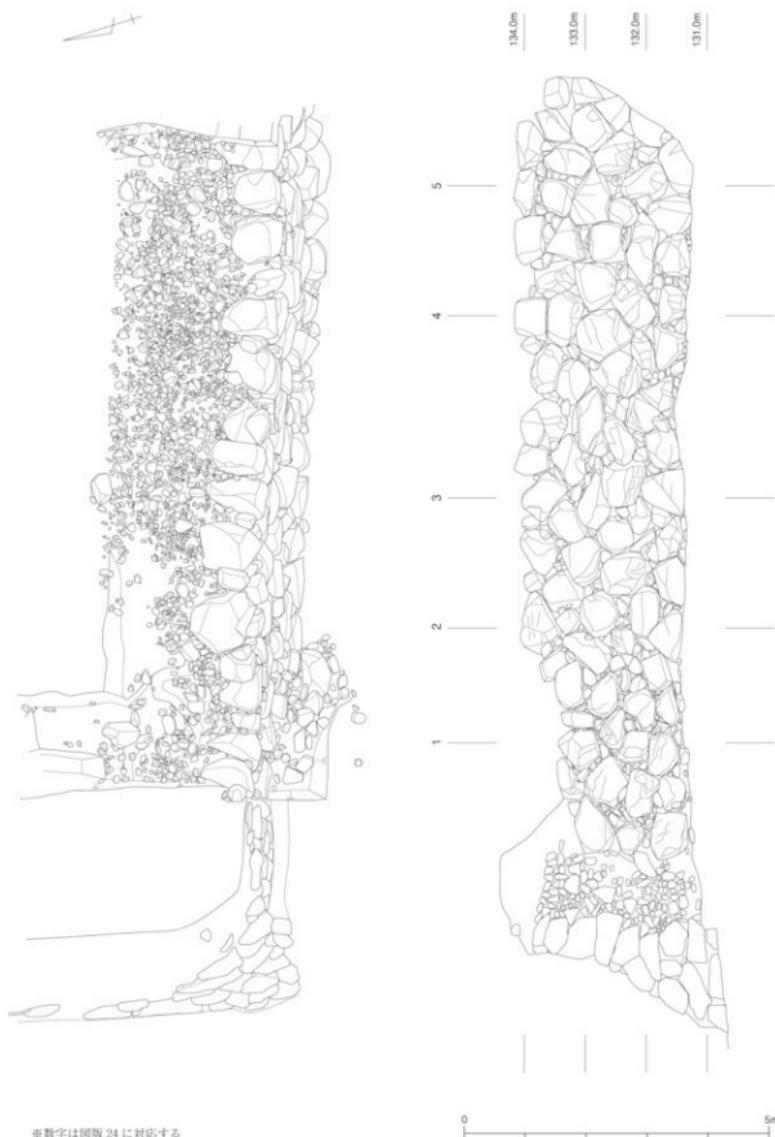


2A区



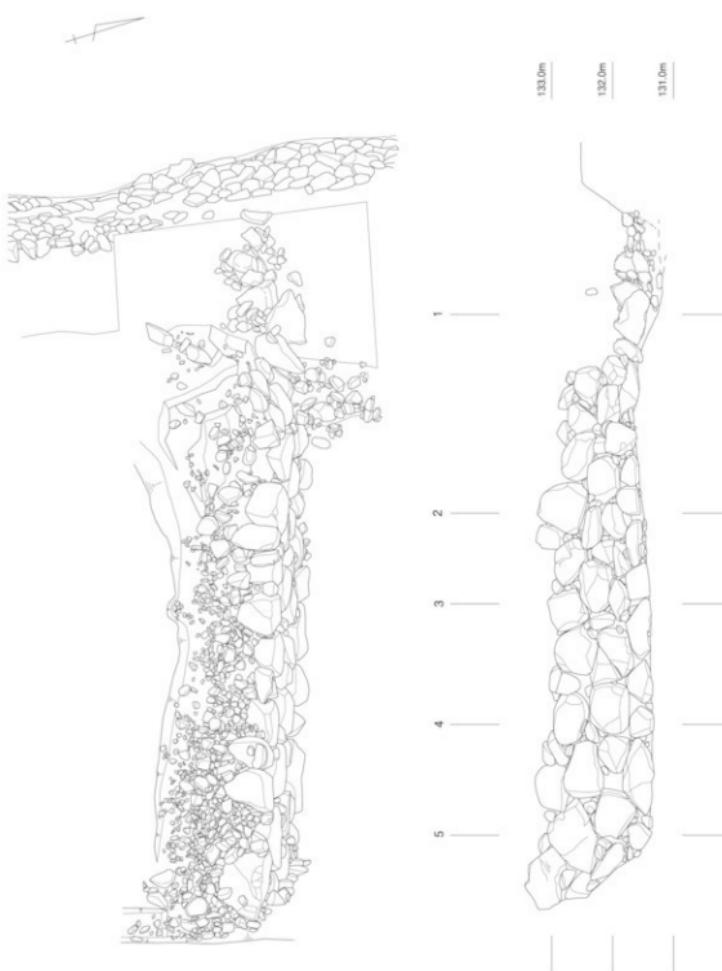
*a-a'は図版27に対応 b-b'c-c'は図版28に対応する

2 A 区 g・h 区画 遺構平面図



*数字は図版 24 に対応する

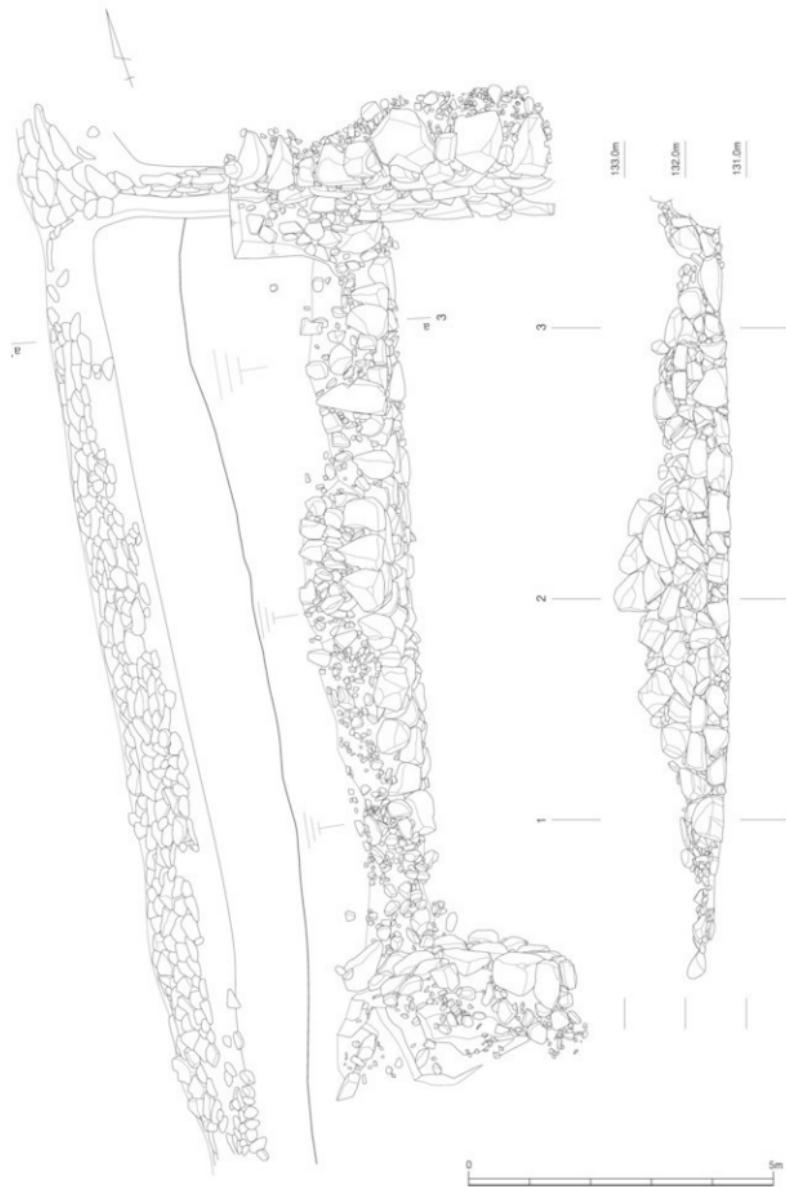
2 A 区 h 区画 石垣 1 平・立面図



*数字は図版 25 に対応する

0 5m

2 A 区 h 区画 石垣 2 平・立面図

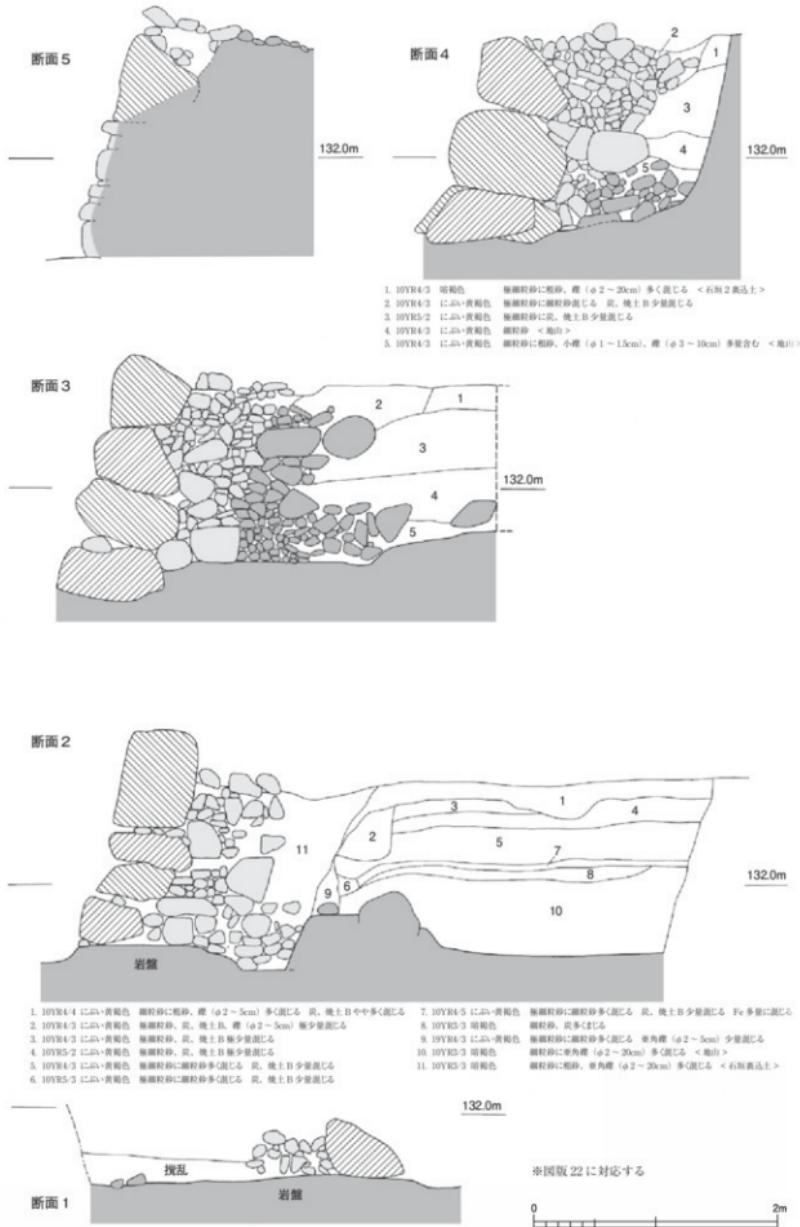


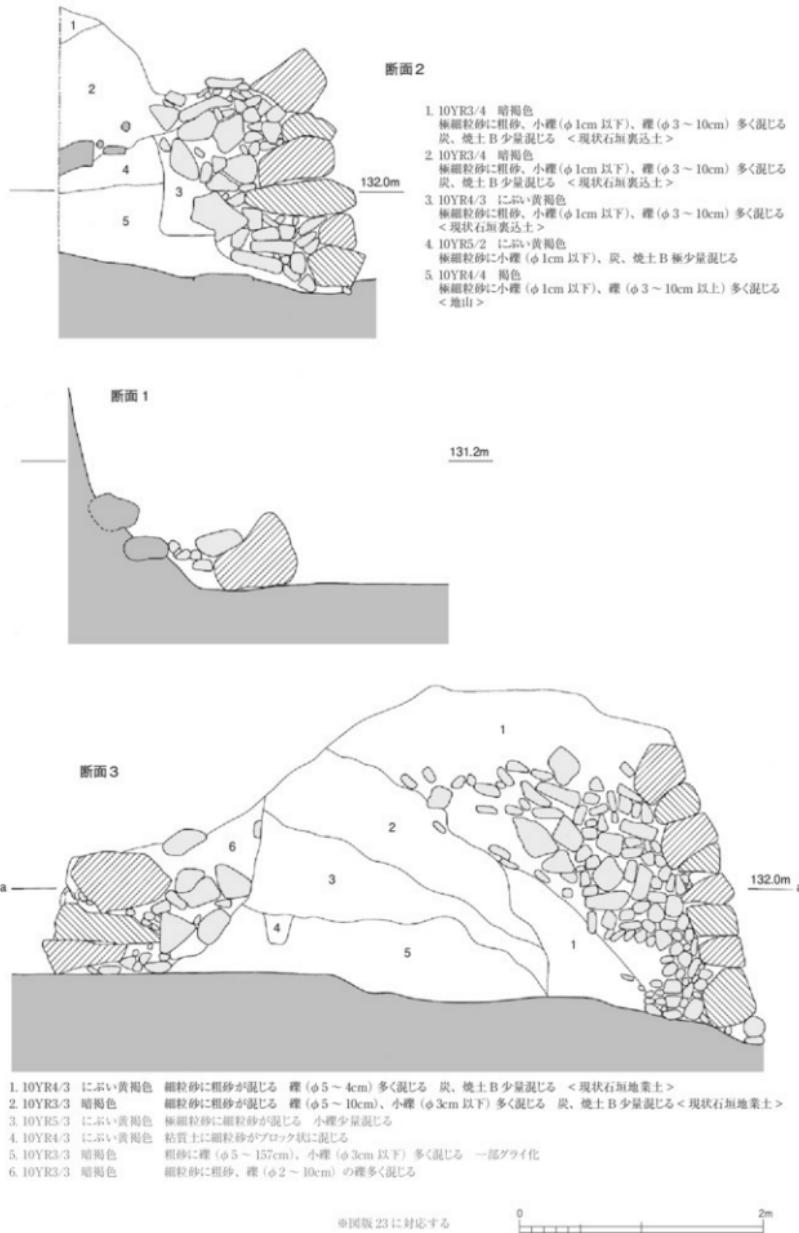
※数字は図版 26 に対応する

2 A区 h区画 石垣3平・立面図

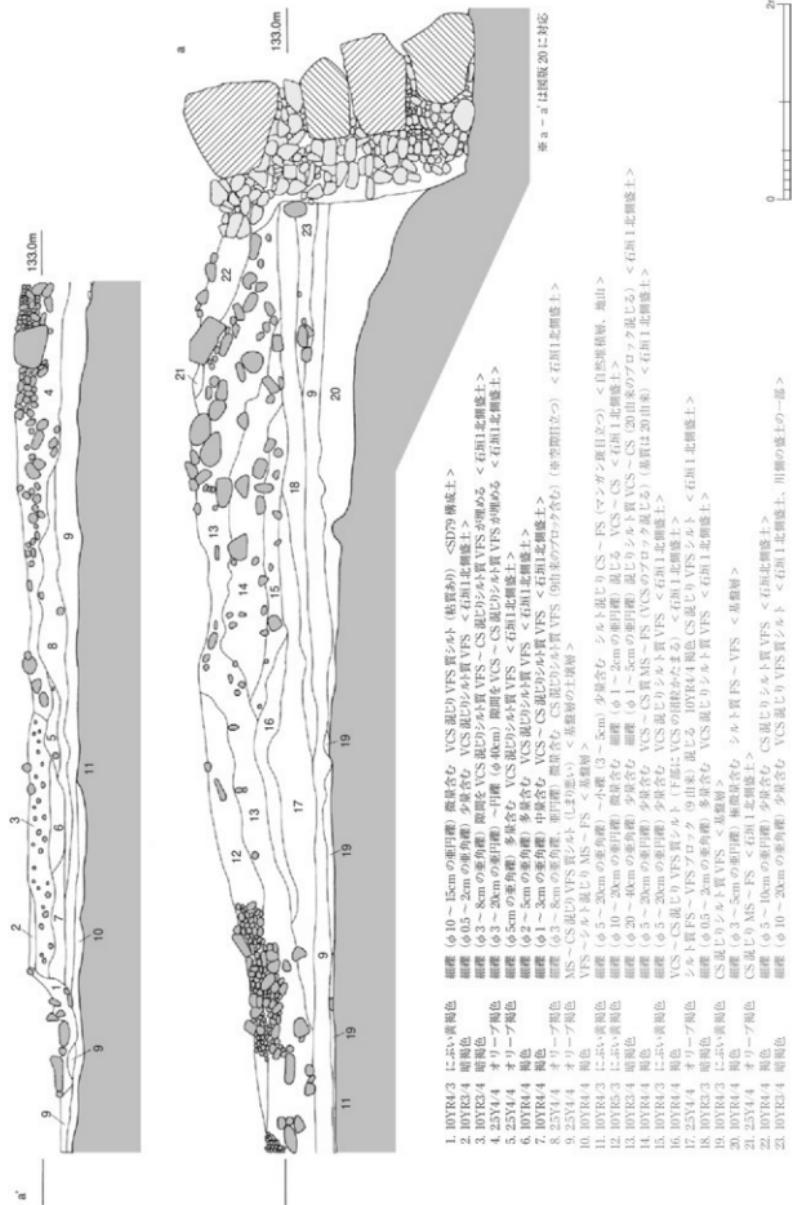


2 A 区 h 区画 石垣 1 断面図

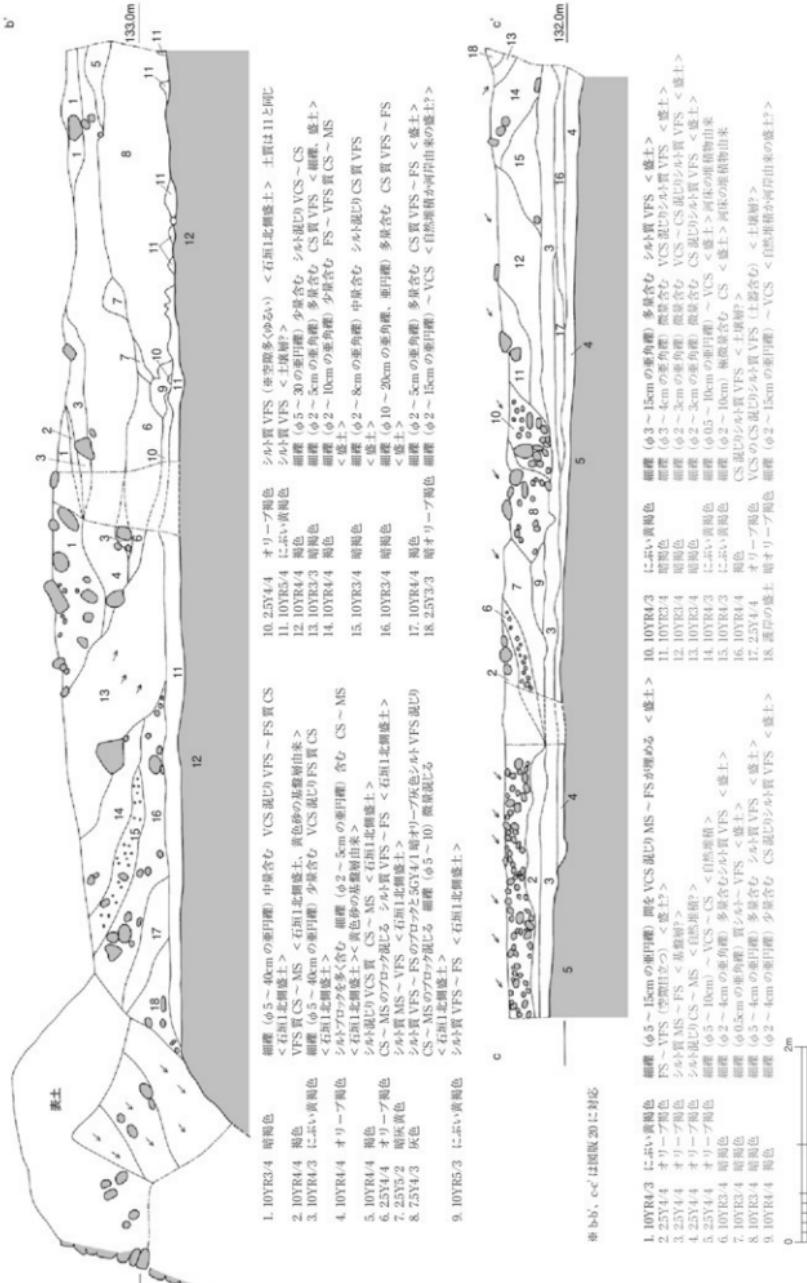




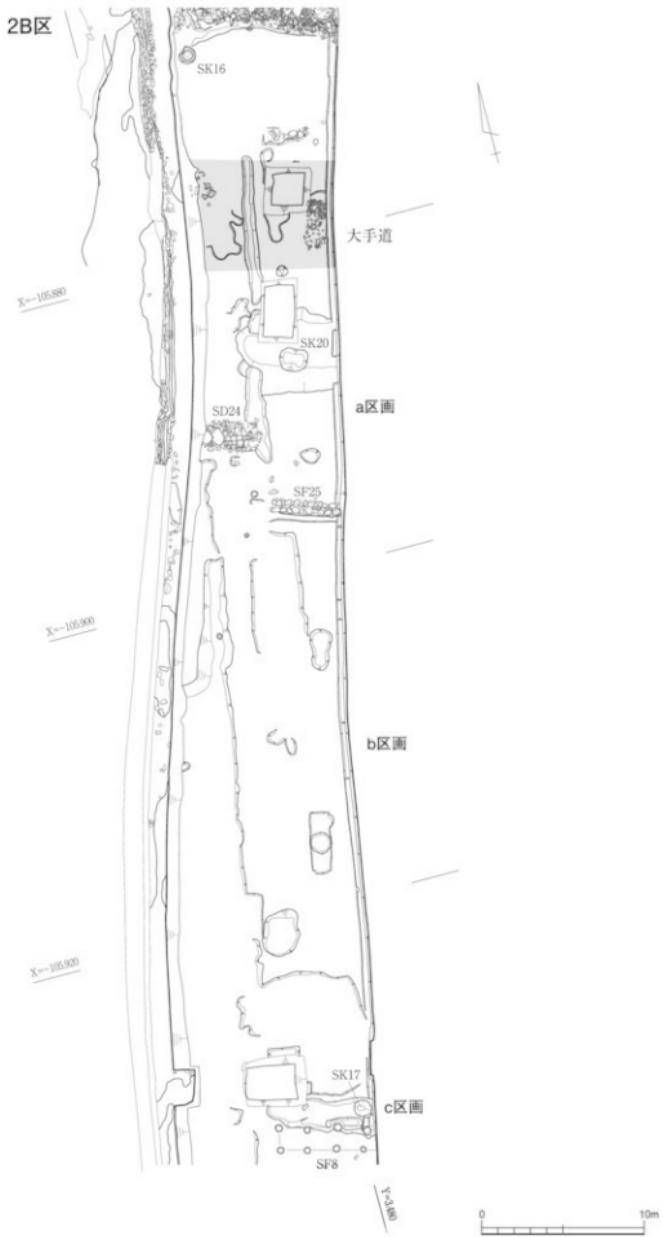
2 A区 h 区画 石垣3断面図

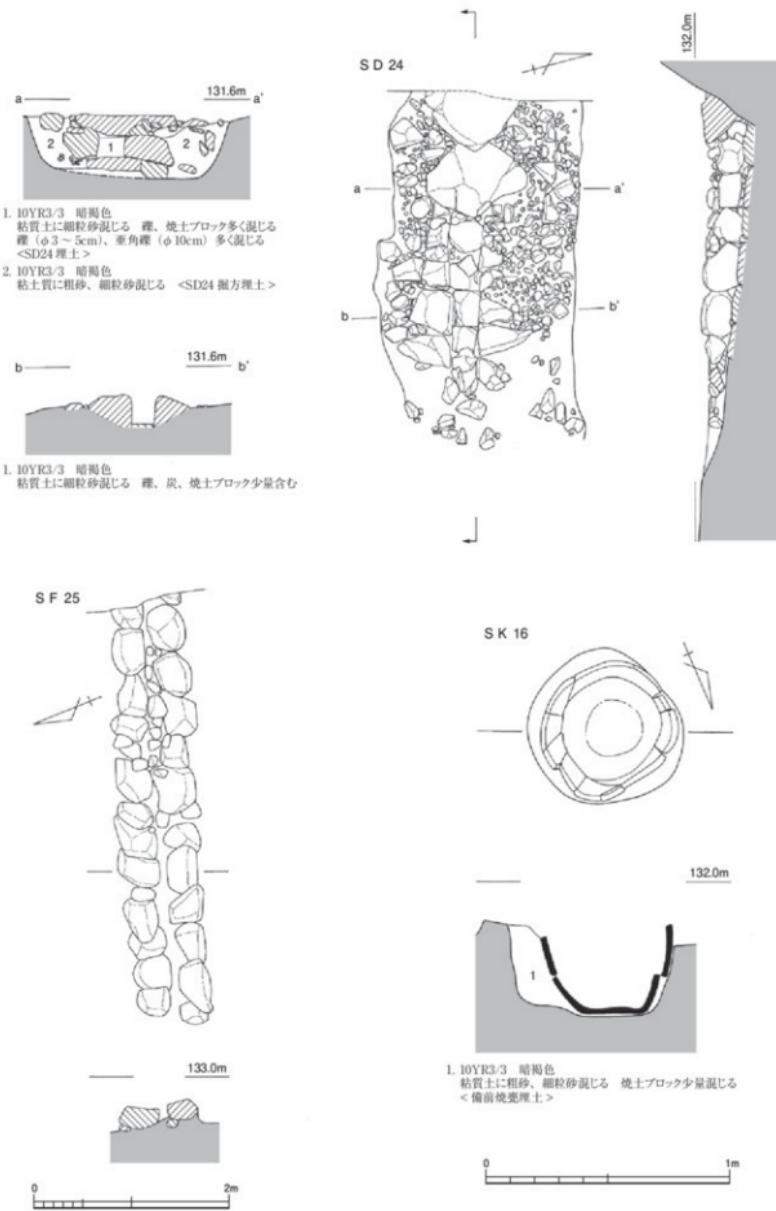


2



2 A区 g区画 土層断面図

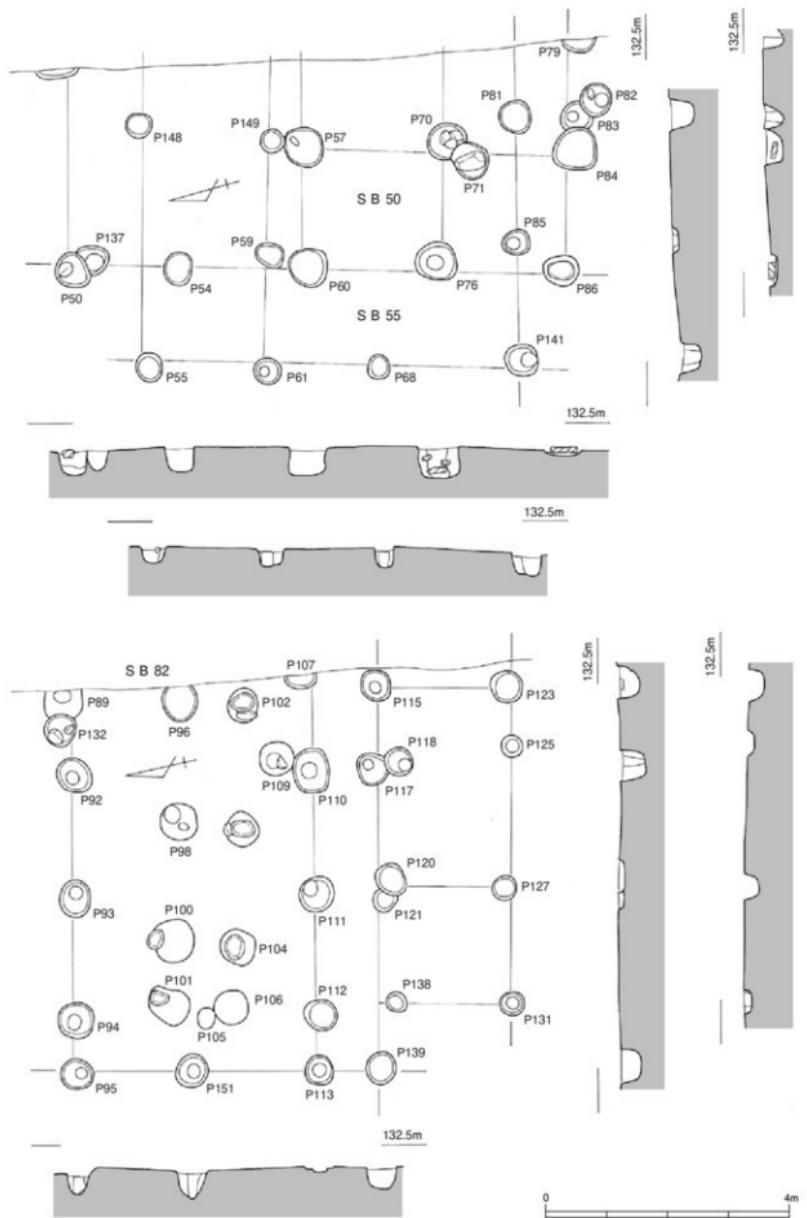




2B区 a区画 遺構平面図

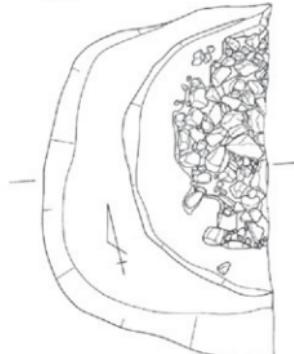


2B区 c・d区画 平面図

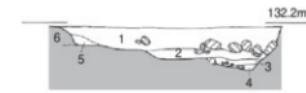
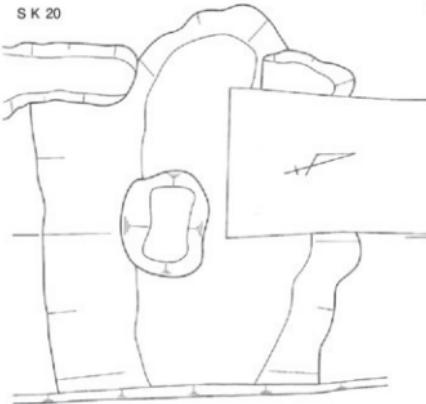


2 B 区 a 区画 遺構平・断面図

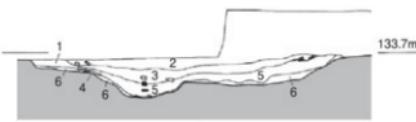
SK 7



SK 20

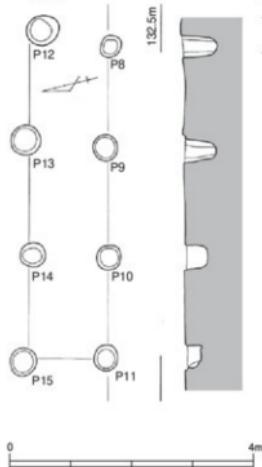


1. 10YR2/3 暗褐色
細繩(亜角繩)混じり シルト質細砂 <道構埋土>
2. 10YB2/4 暗褐色
3. 10YR4/4 黄褐色
粘質土に粗粒砂混じり 岩、焼土ブロックや多く混じる
<SK 7 埋土>
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色
粗粒砂質 岩、焼土ブロックや多く混じる
細繩(亜角繩混じる) <道構埋土>
5. 10YR4/4 黄褐色
CS ~ VFS <基盤層>
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色
細繩混じり シルト混じり VFS ~ FS <土壤層>

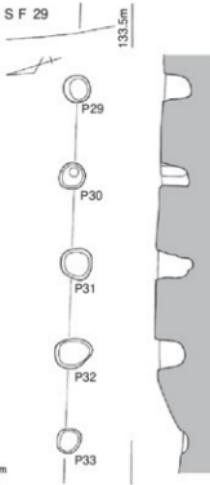


1. 10YR4/4 黄色
粗粒砂 Fe 少量含む
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色
細粒砂質 亜角繩 粗砂含む
3. 10YR3/3 暗褐色
粘質土、瓦片、亜角繩多く含む SK20 埋土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色
細粒砂シルト混じる 緯合む SK20 埋土
5. 10YR3/4 暗褐色
粘質土に粗粒砂混じる 亜角繩、瓦片多く含む 岩、焼土ブロック少量含む SK20 埋土
6. 10R5/2 灰黄褐色
シルトに粗粒砂混じる Fe 含む <基盤層>

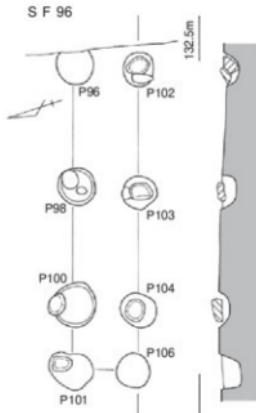
SF 8



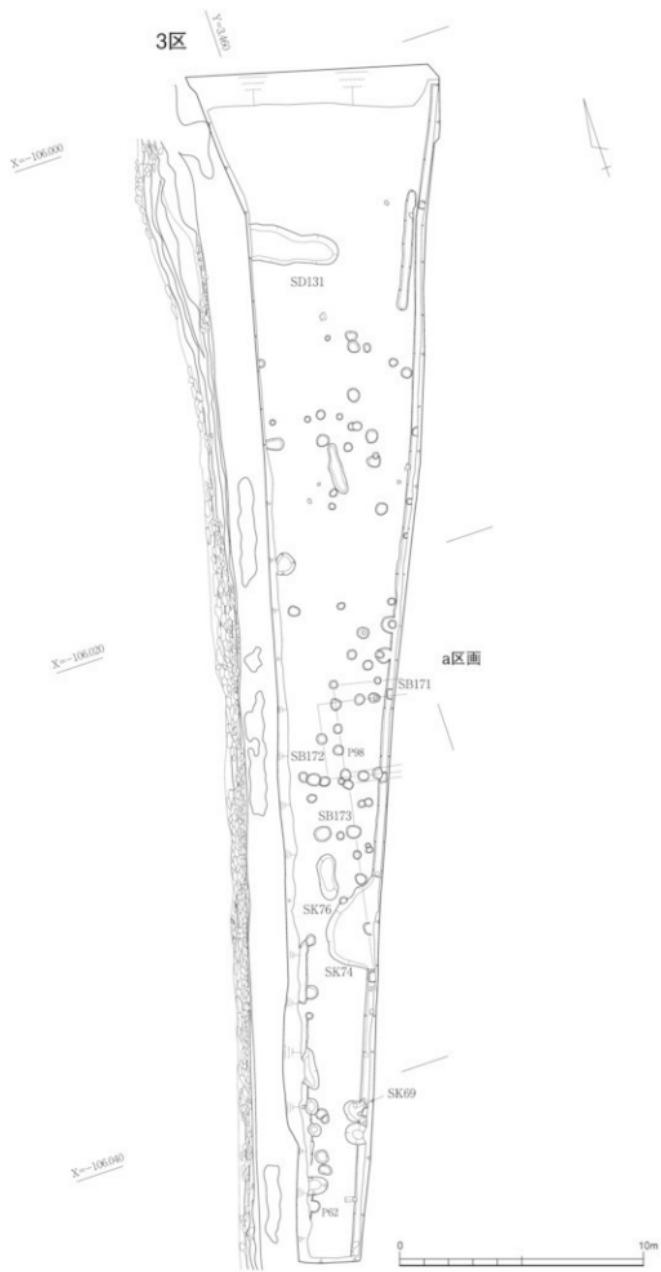
SF 29

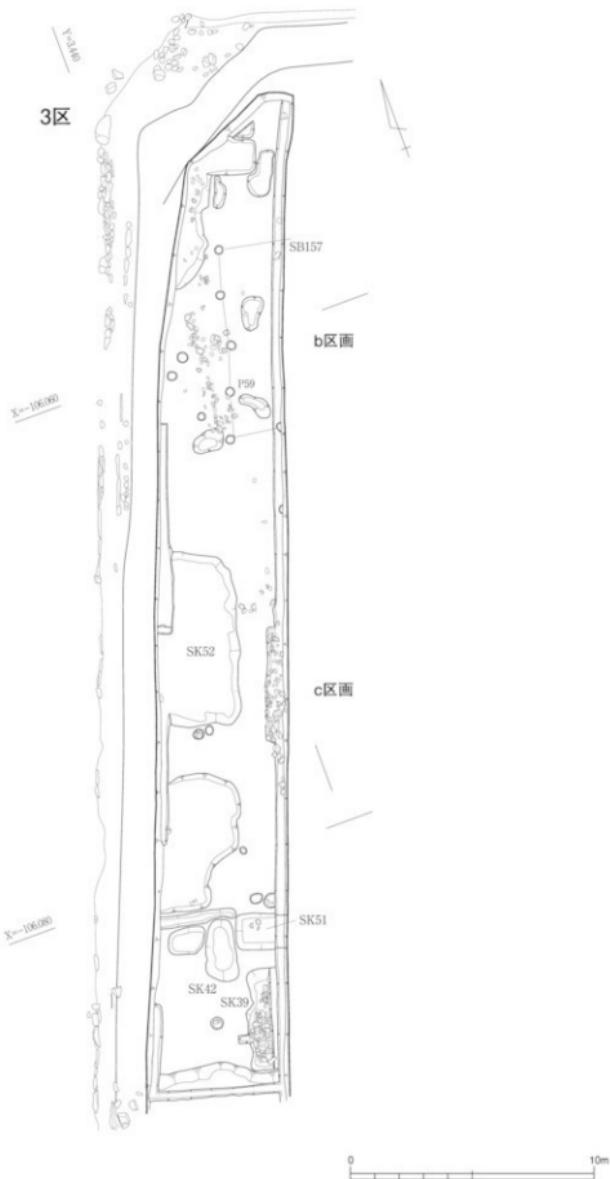


SF 96

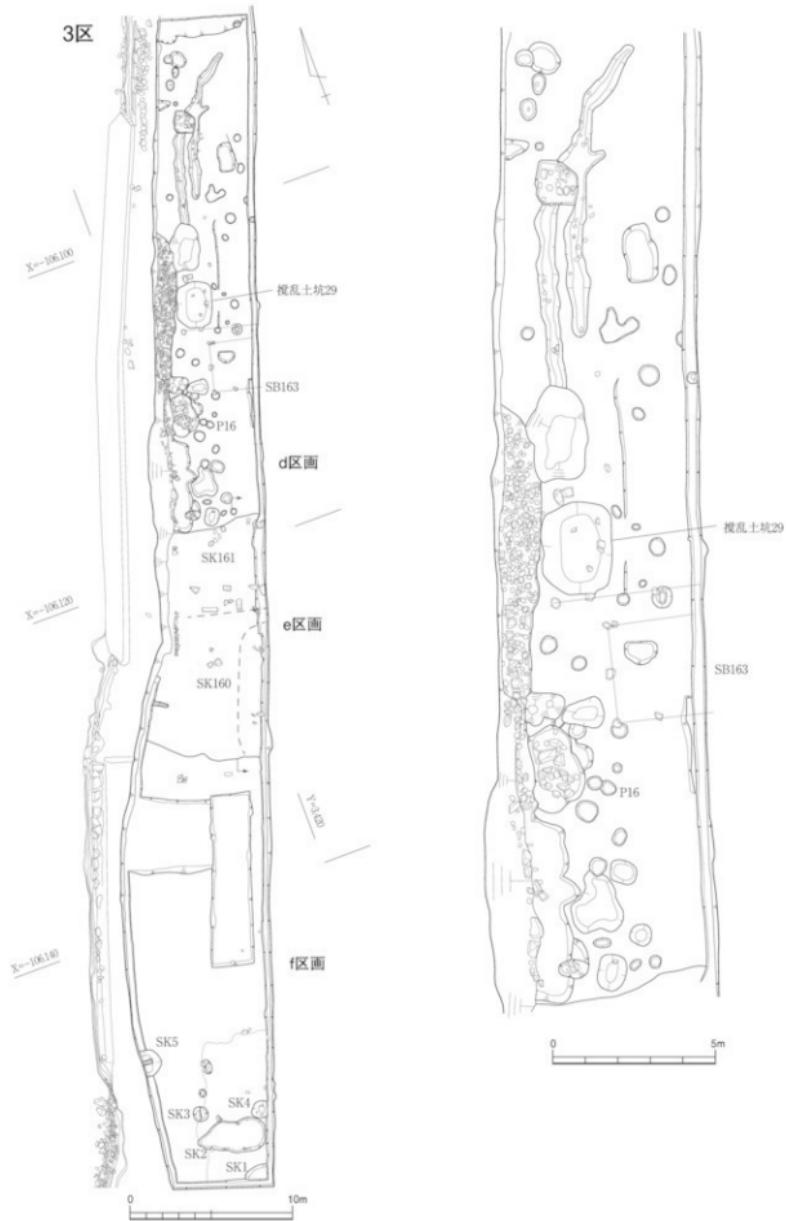


2B区a・c・d区画 道構平・断面図

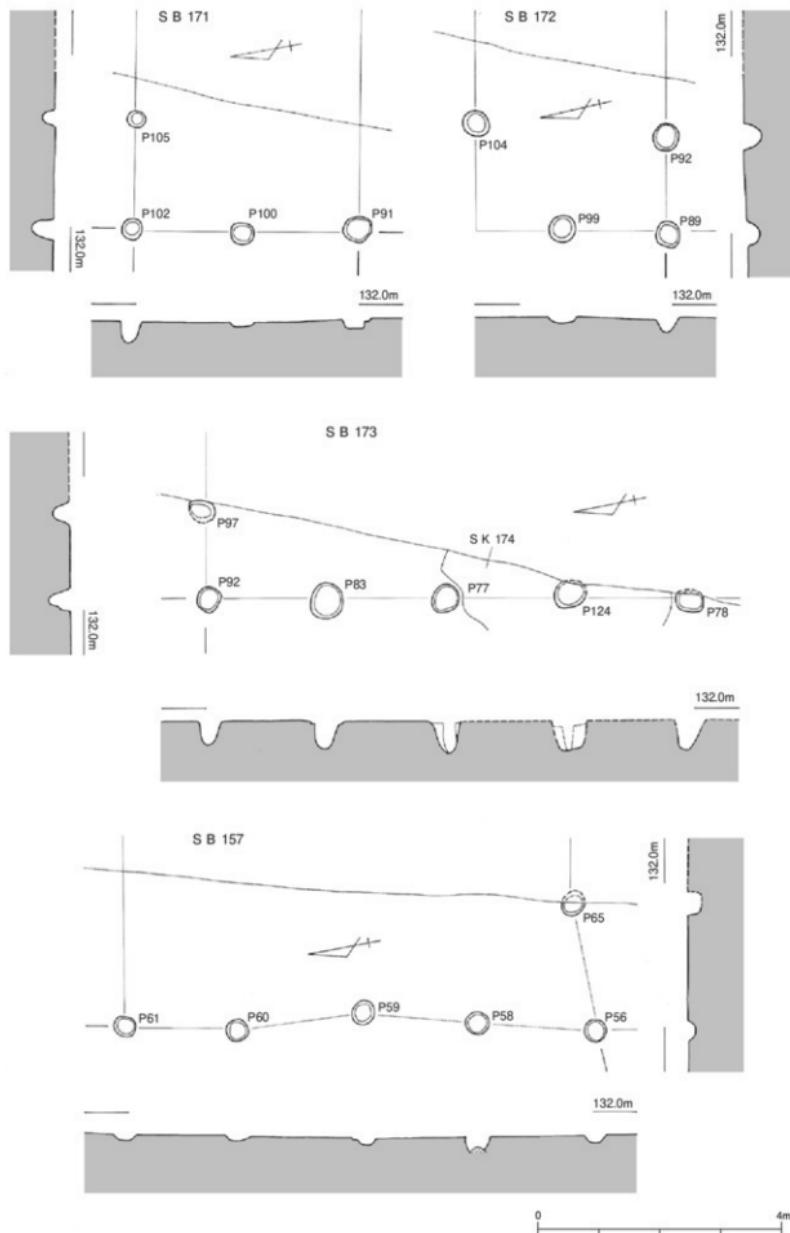




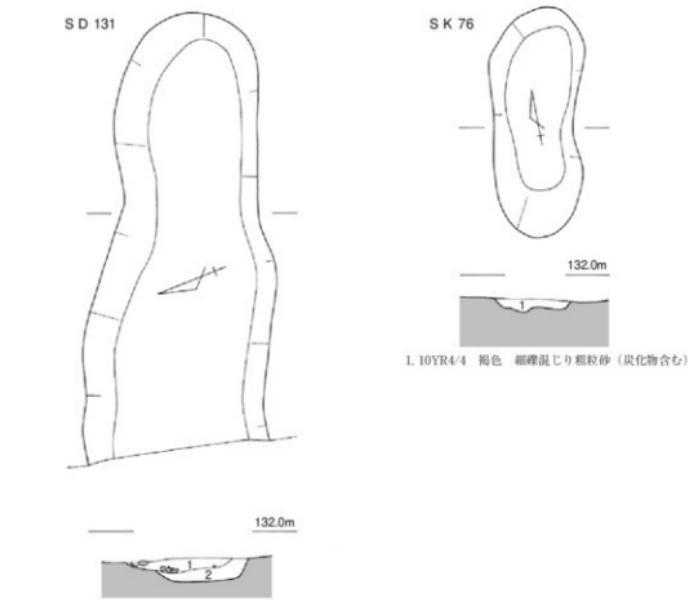
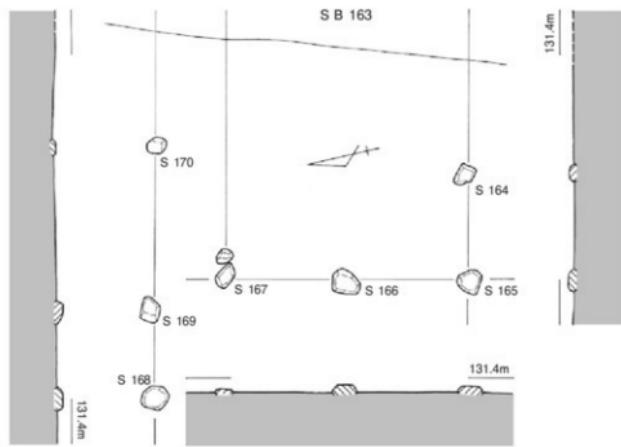
3区 b・c 区画 平面図



3区 d・e・f 区画 平面図



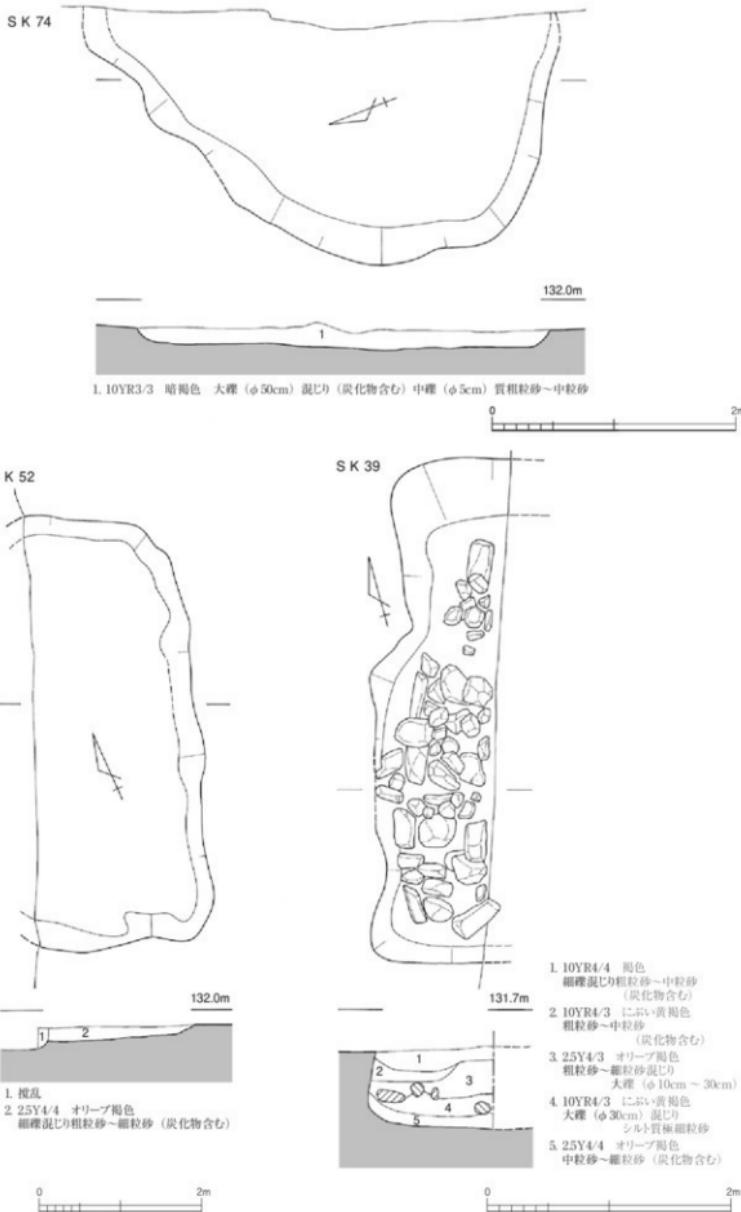
3区 a・b 区画 遺構平・断面図



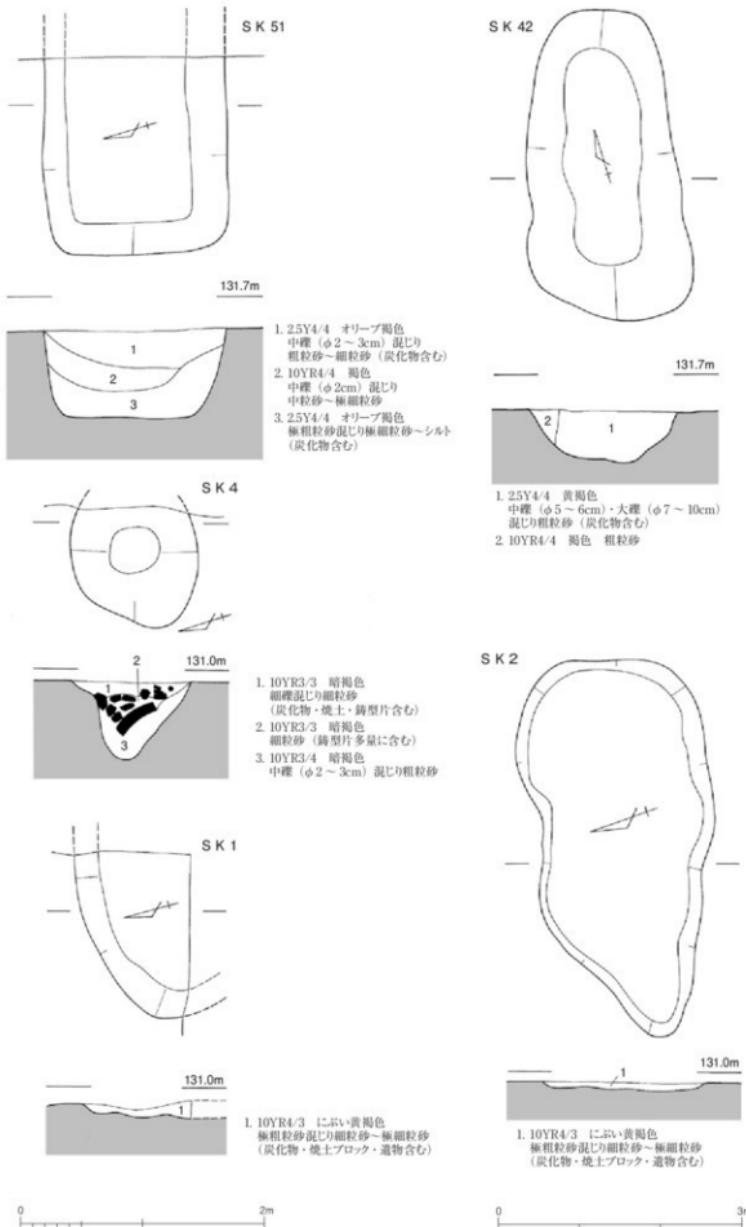
1. 10YR3/3 單褐色 細繊混じりシルト質細粒砂（炭化物・土器含む）
2. 10YR3/4 單褐色 中粒砂混じり細粒砂質シルト（炭化物含む）



3区 a・d区画 遺構平・断面図

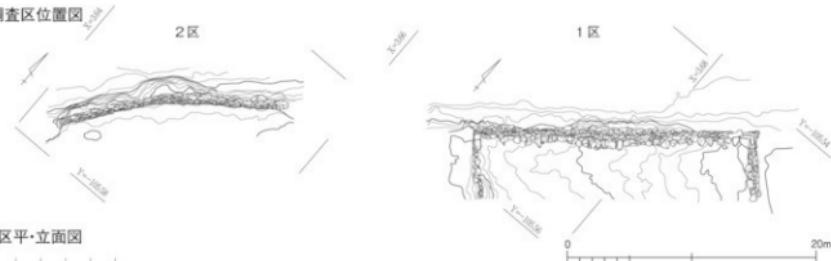


3区 a・b 区画 遺構平・断面図

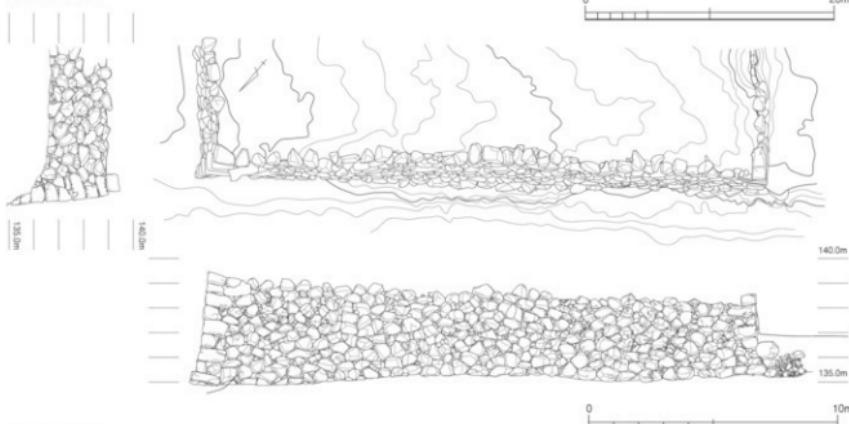


3区 c・d・f 区画 遺構平・断面図

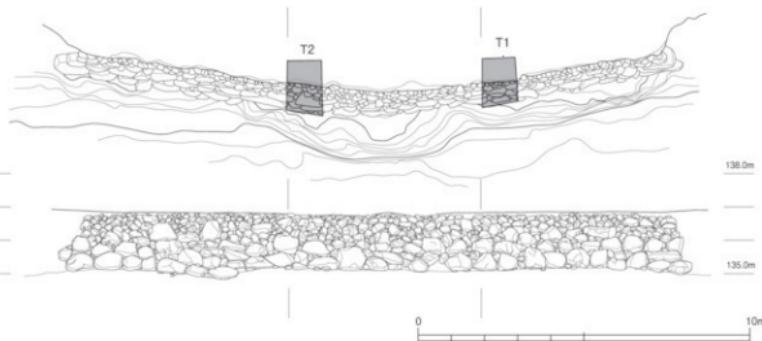
調査区位置図



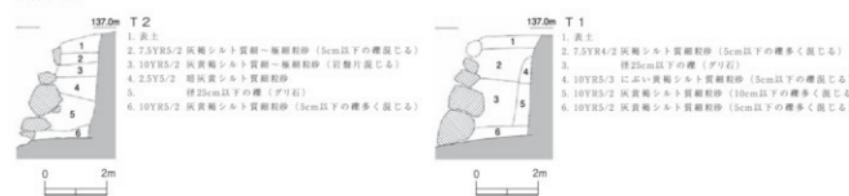
1区平・立面図



2区平・立面図

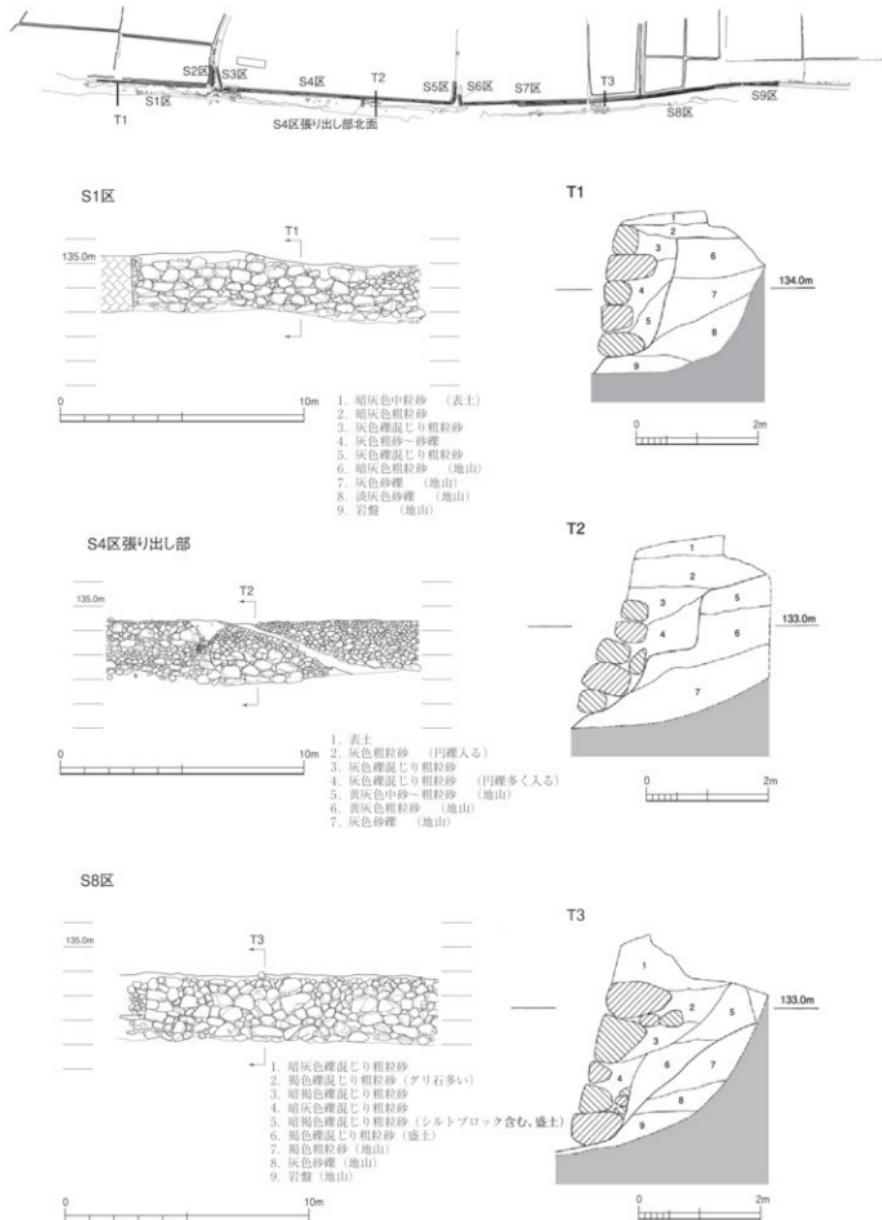


2区断面図

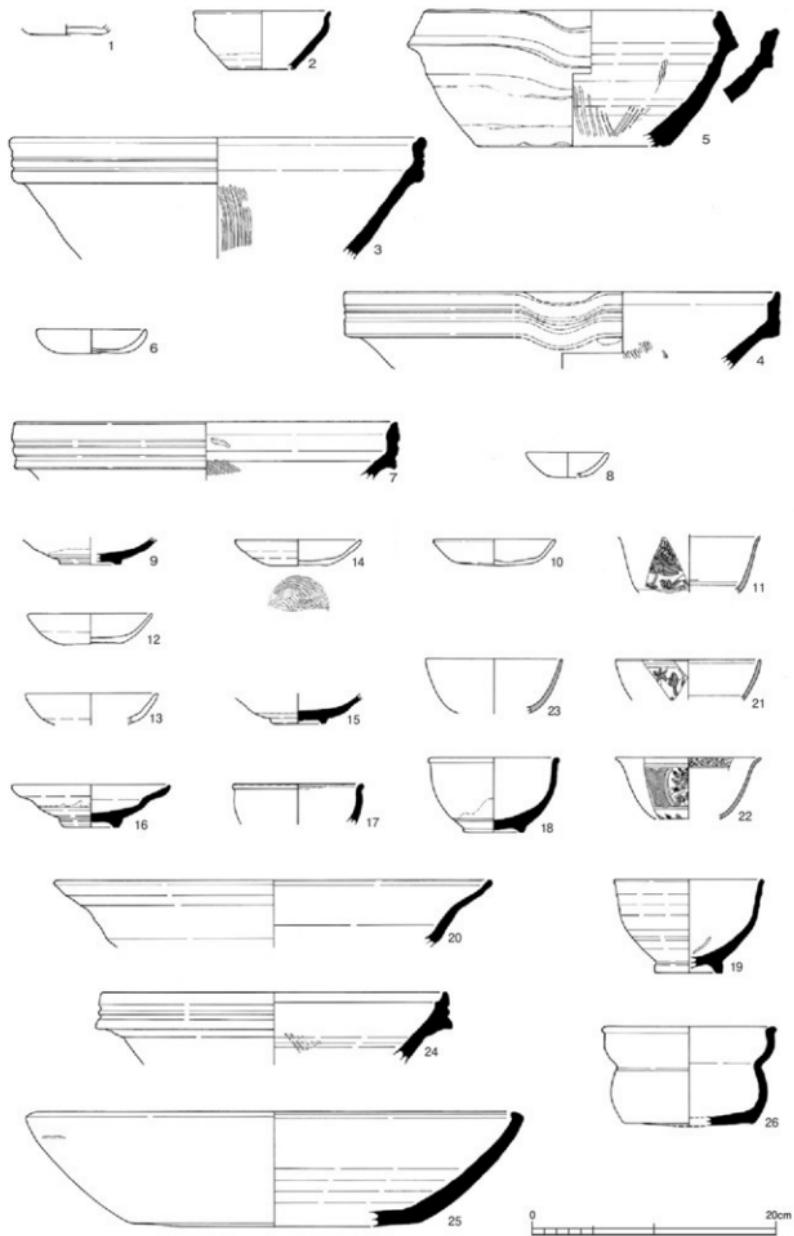


庵川地区護岸石垣 平面・立面・断面図

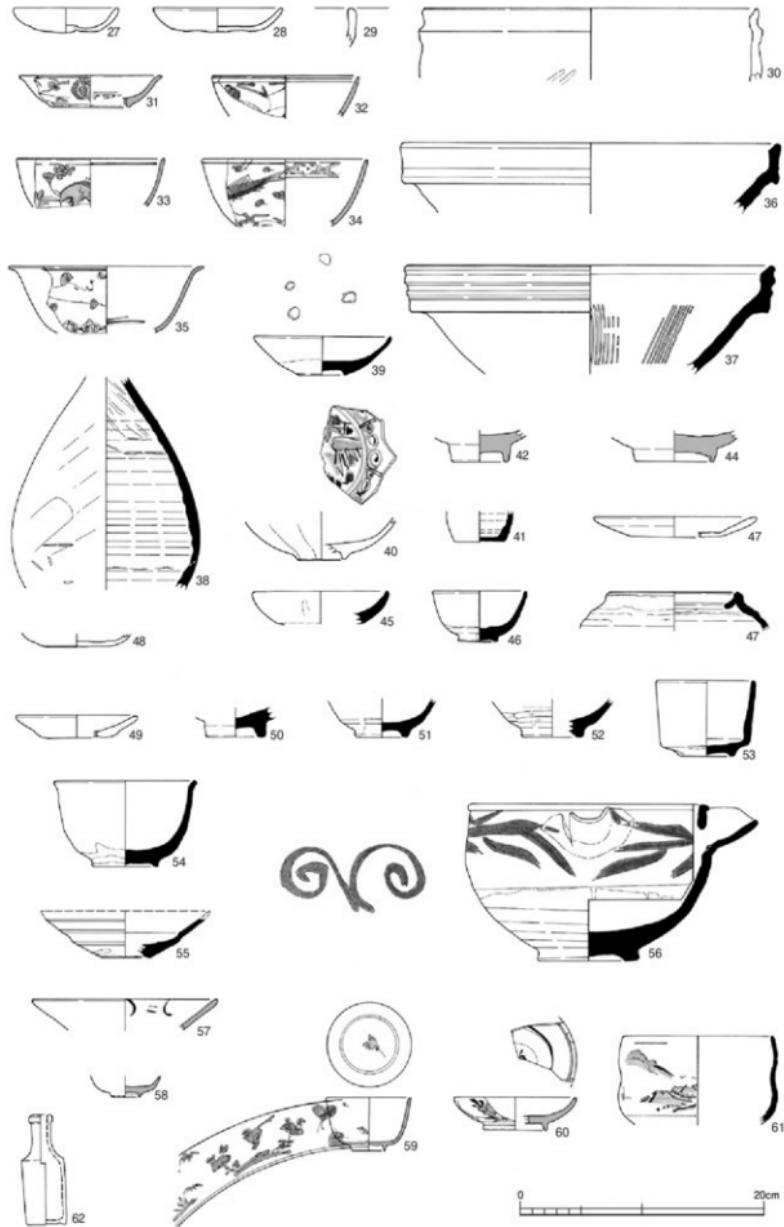
図版 42



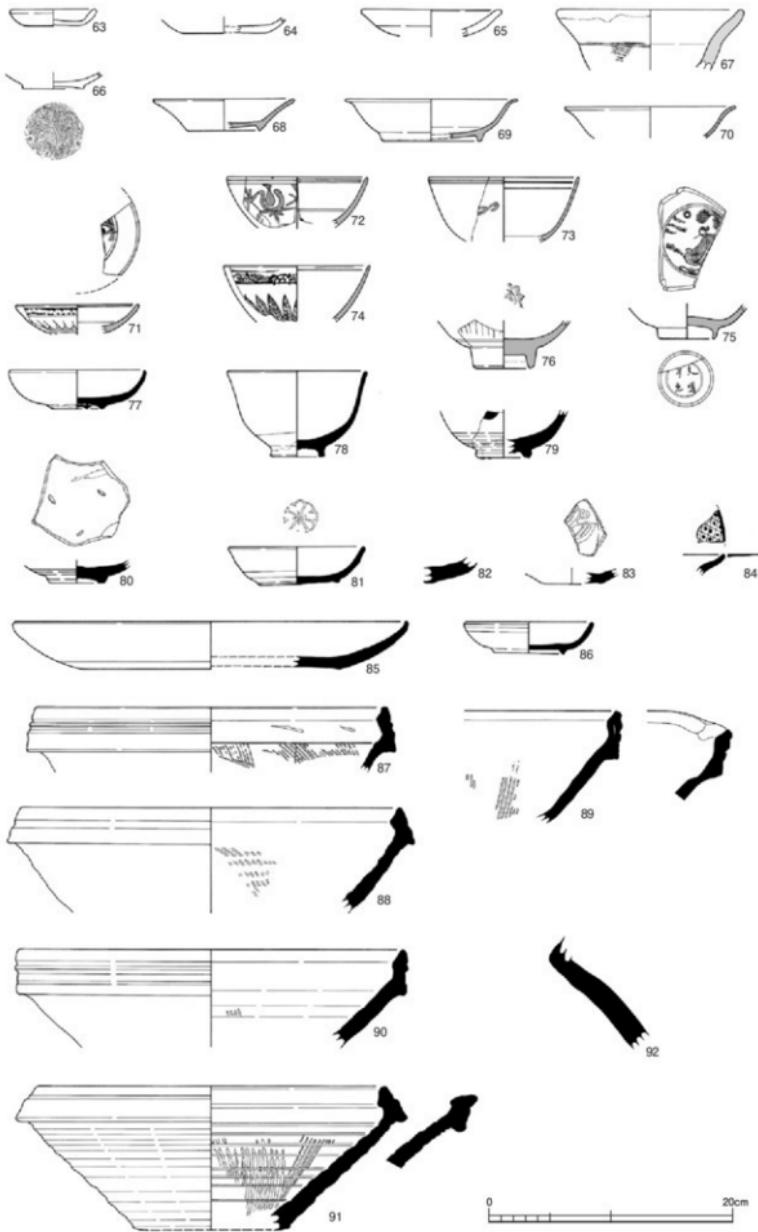
佐用川地区護岸石垣 立面・断面図



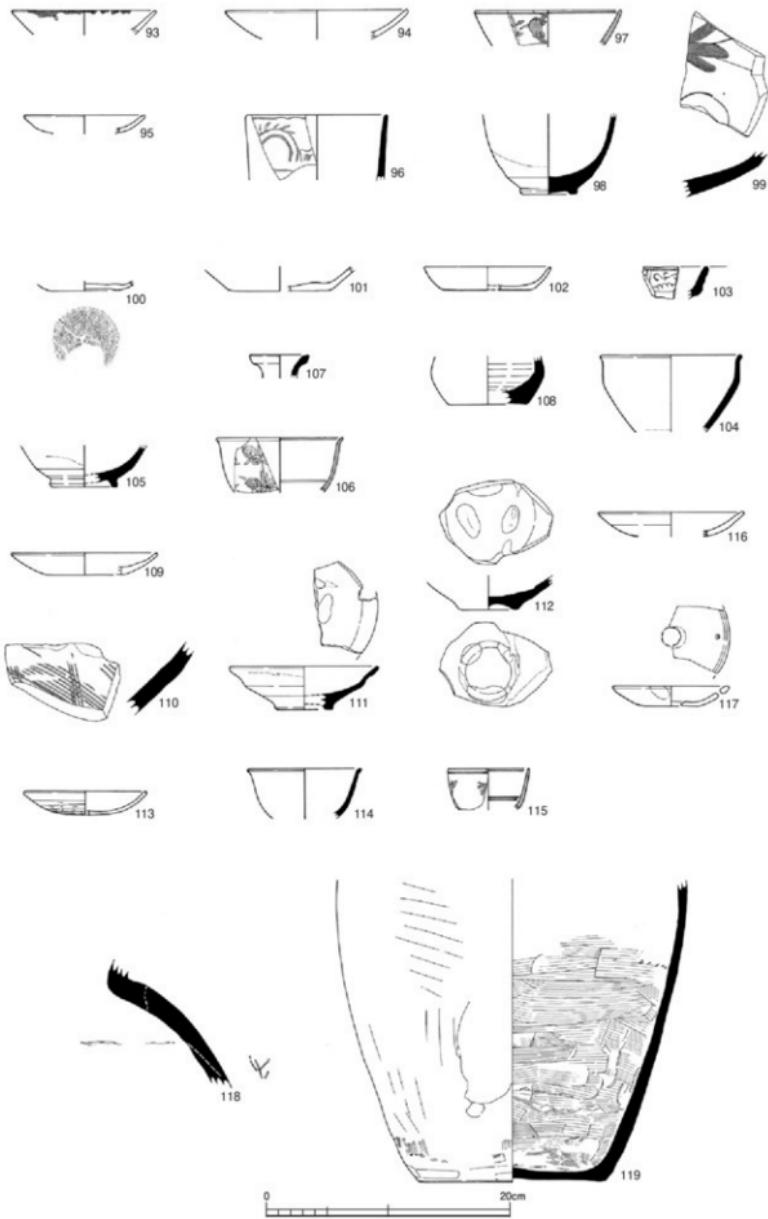
出土土器 (1)



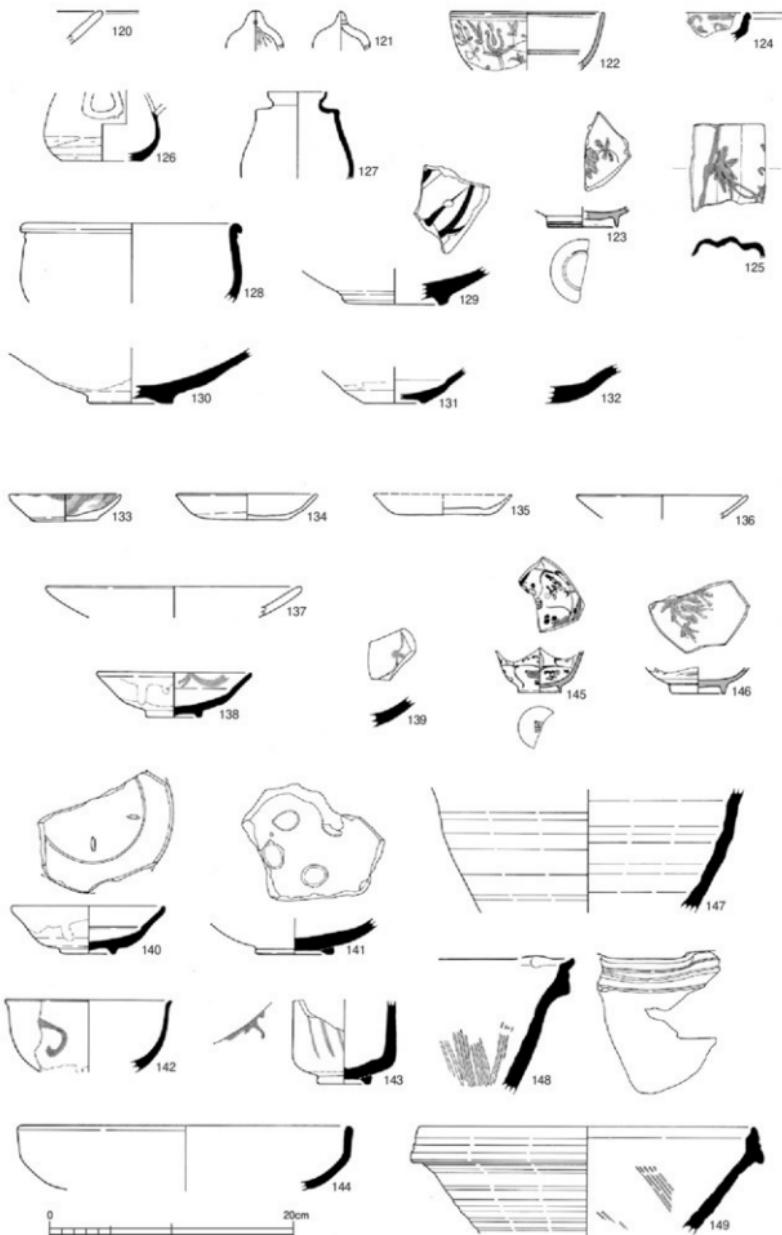
出土土器 (2)



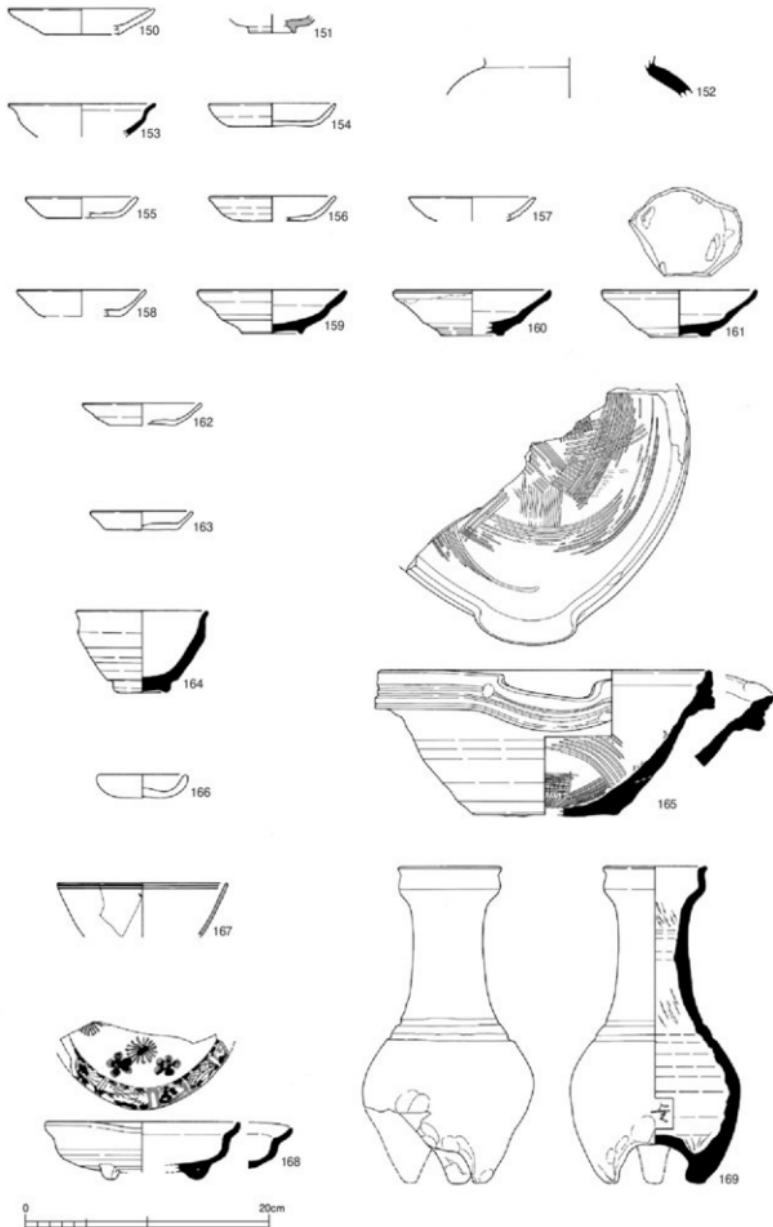
出土土器 (3)



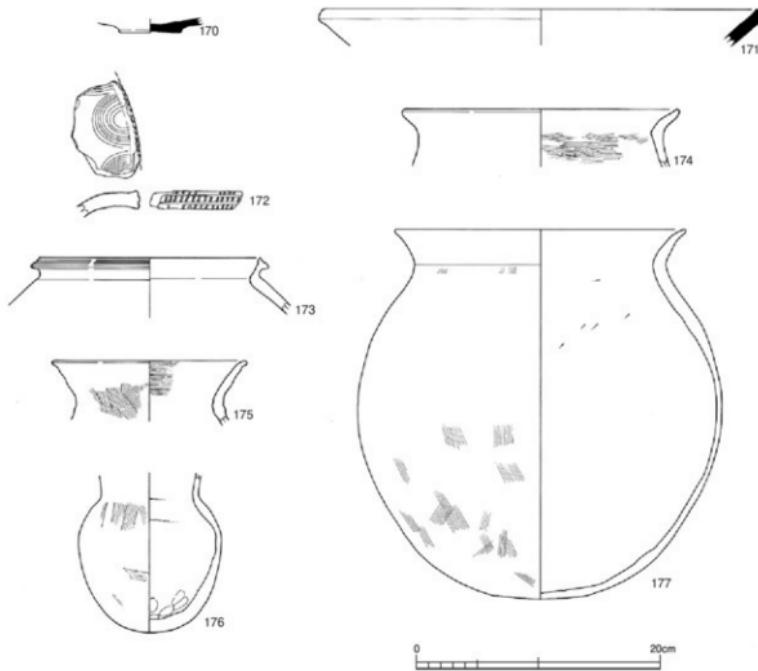
出土土器 (4)



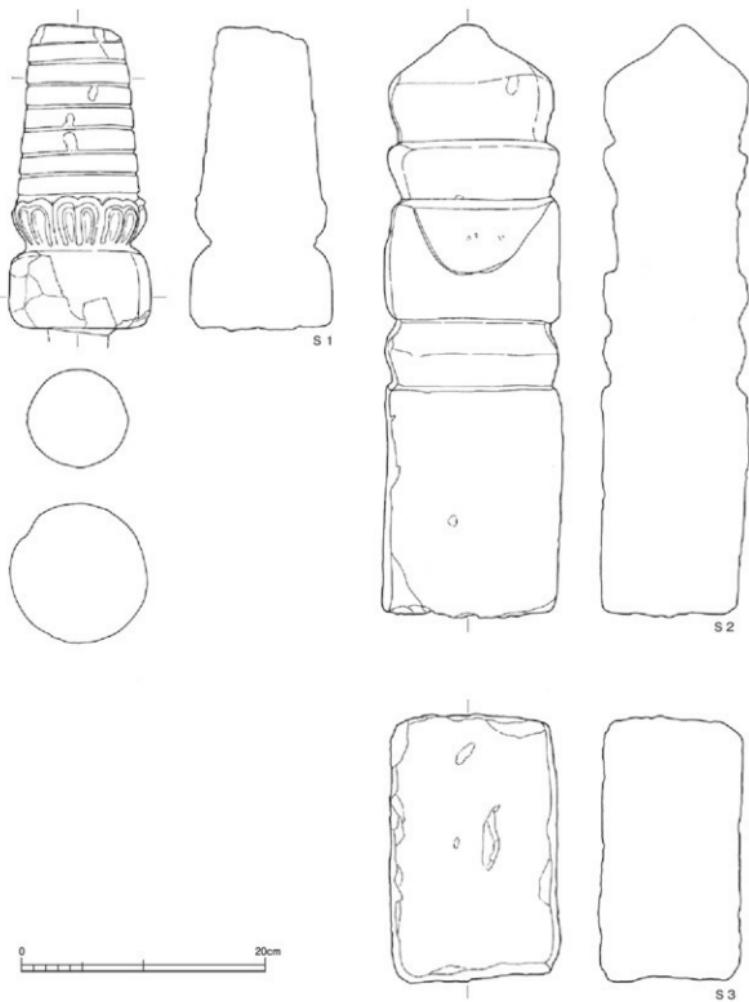
出土土器 (5)



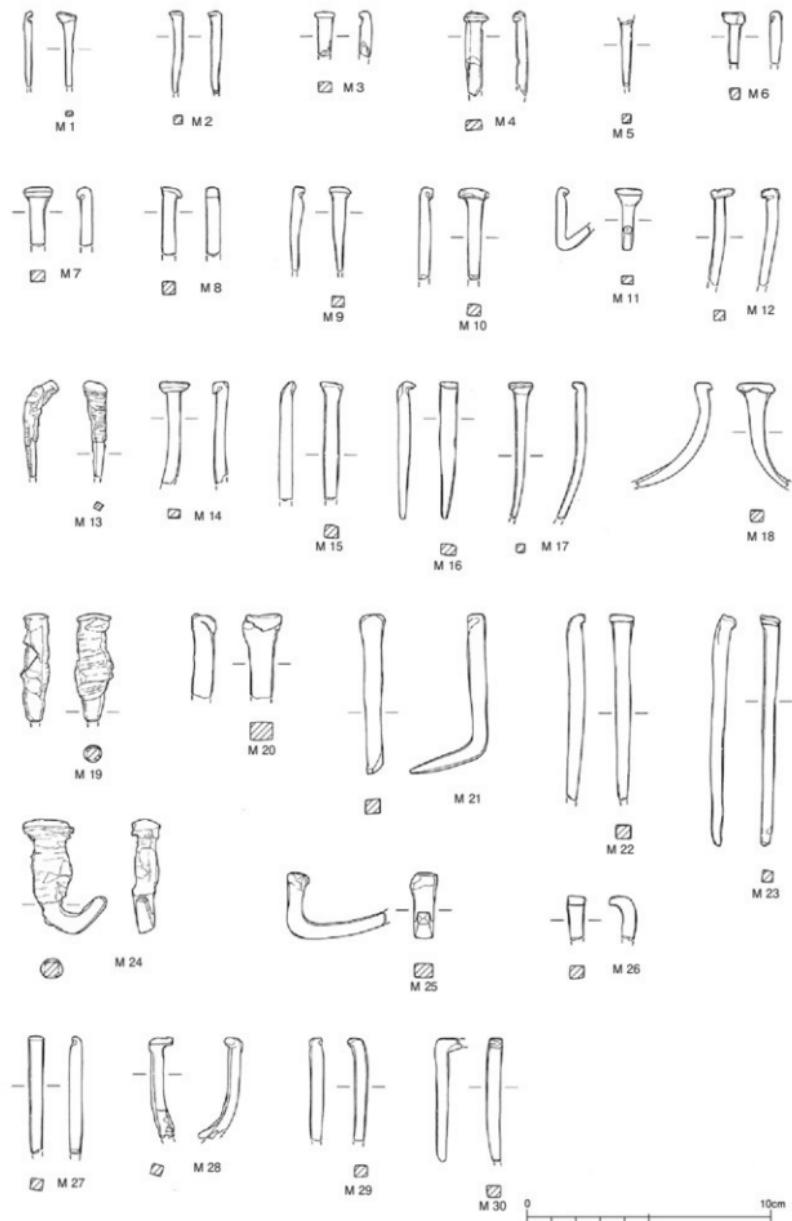
出土土器 (6)



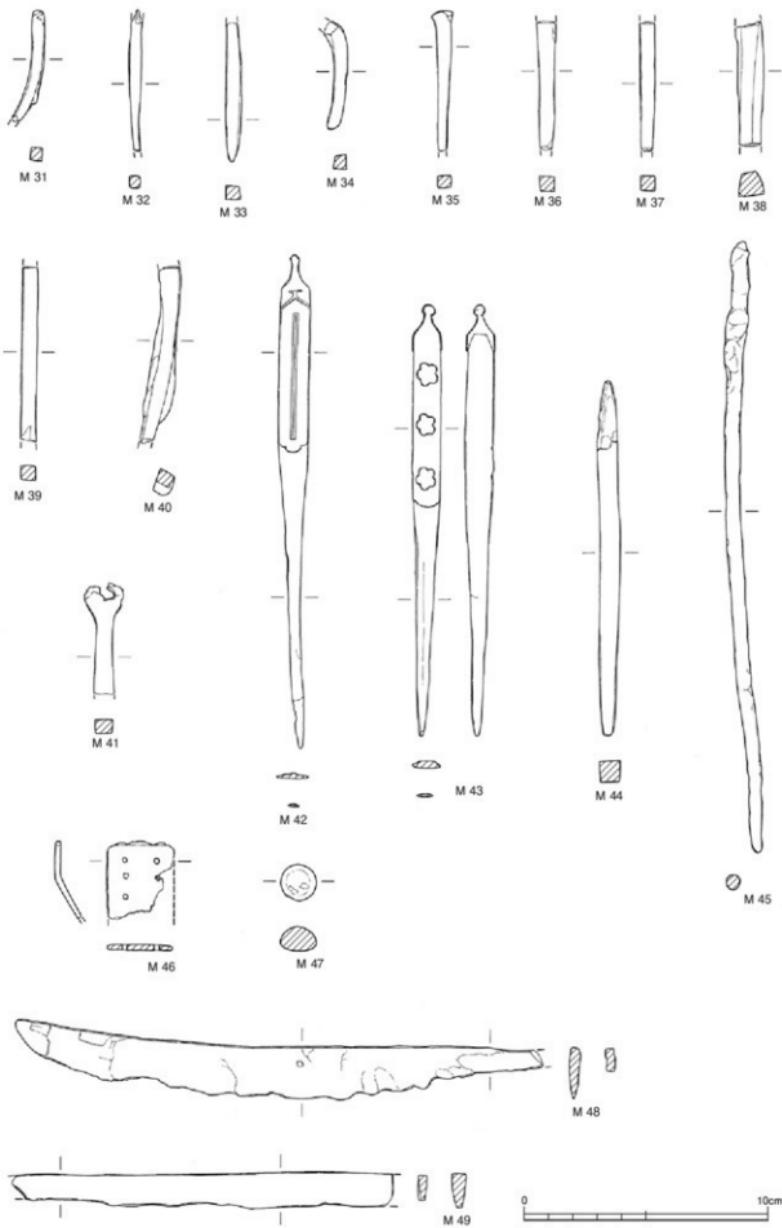
出土土器 (7)



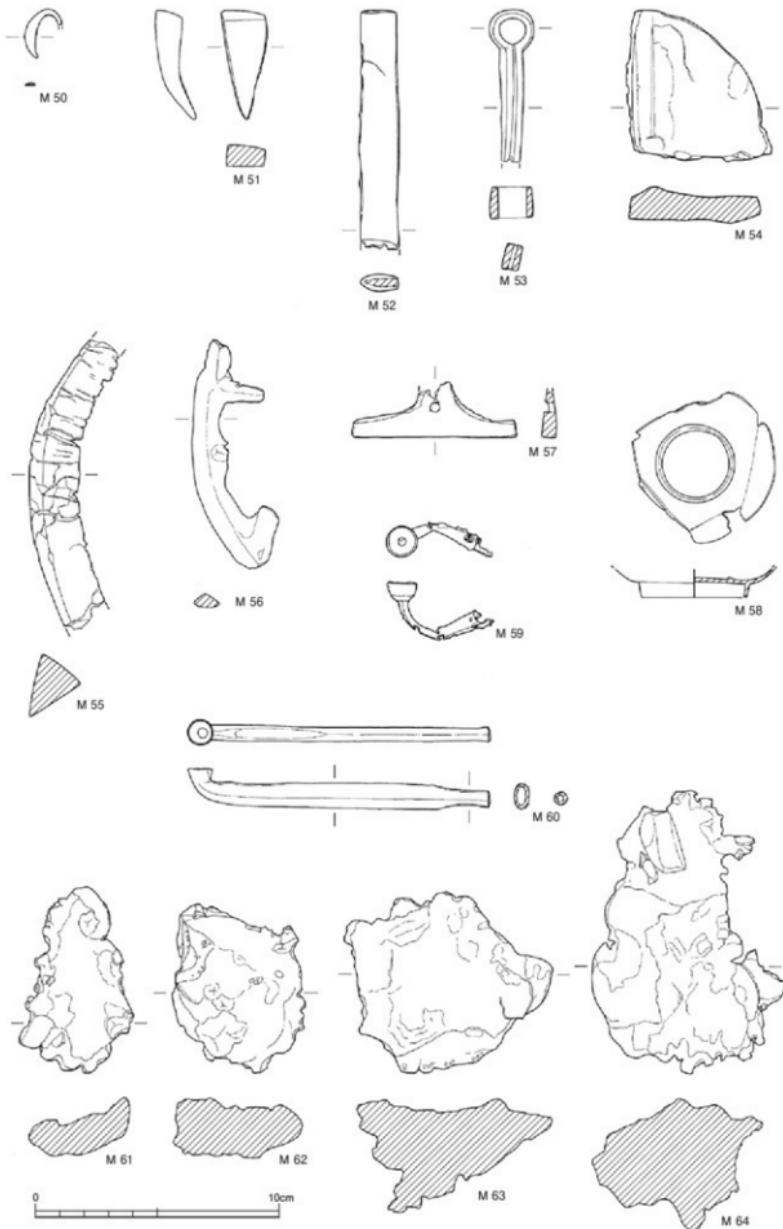
出土石製品



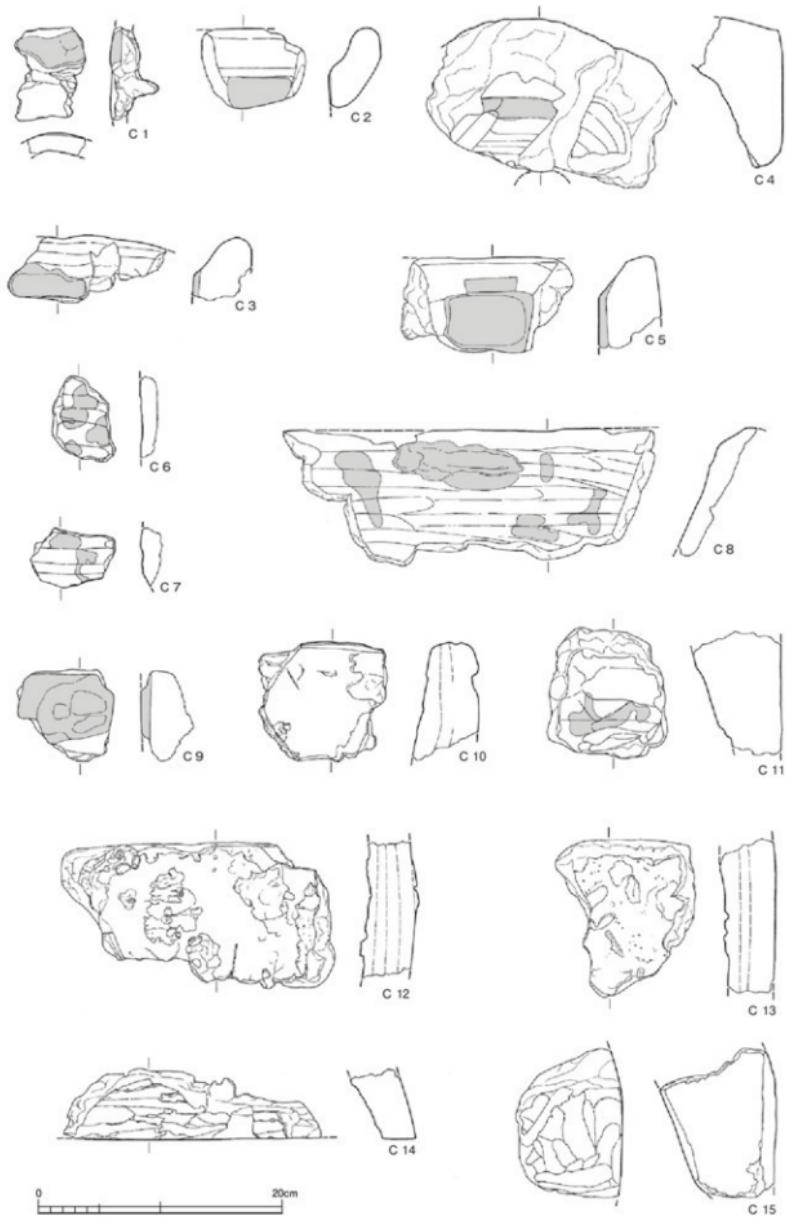
出土金属製品（1）



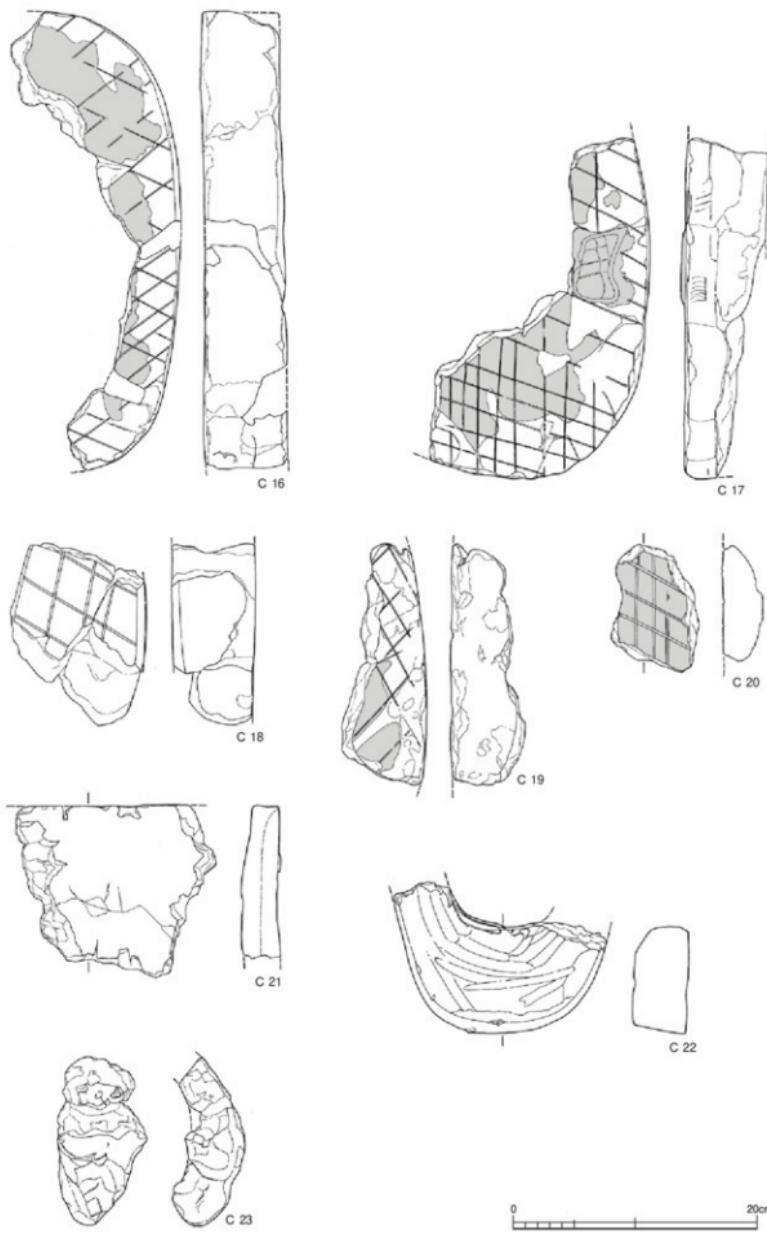
出土金属製品（2）



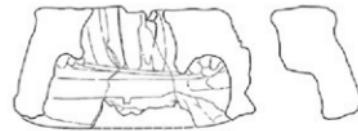
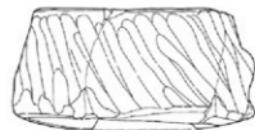
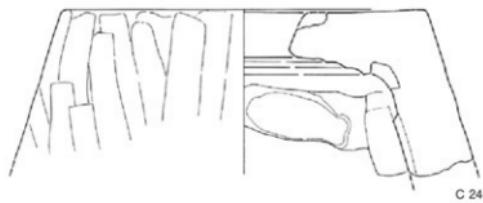
出土金属製品（3）



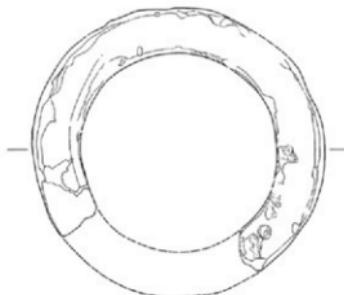
出土鋳型（1）



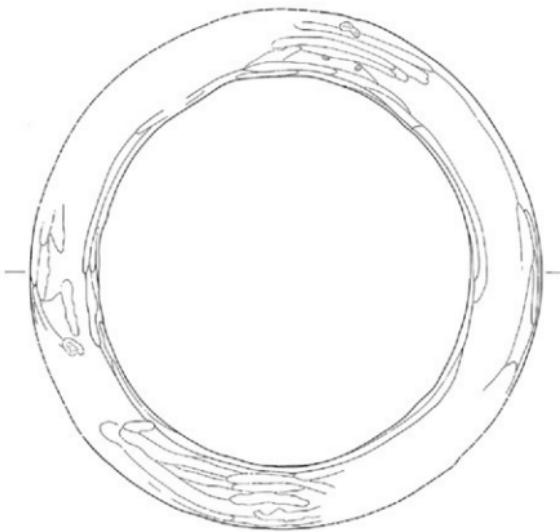
出土鋳型（2）



出土鉄型 (3)



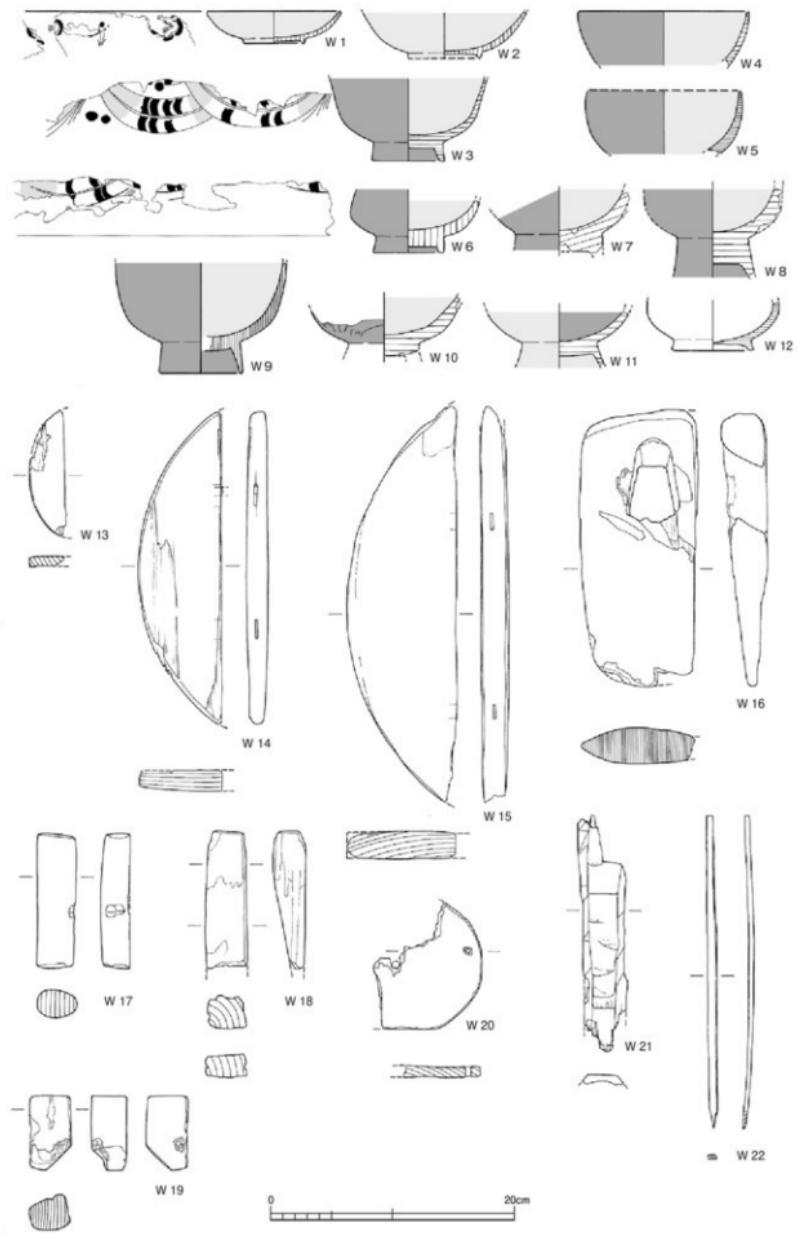
C 26



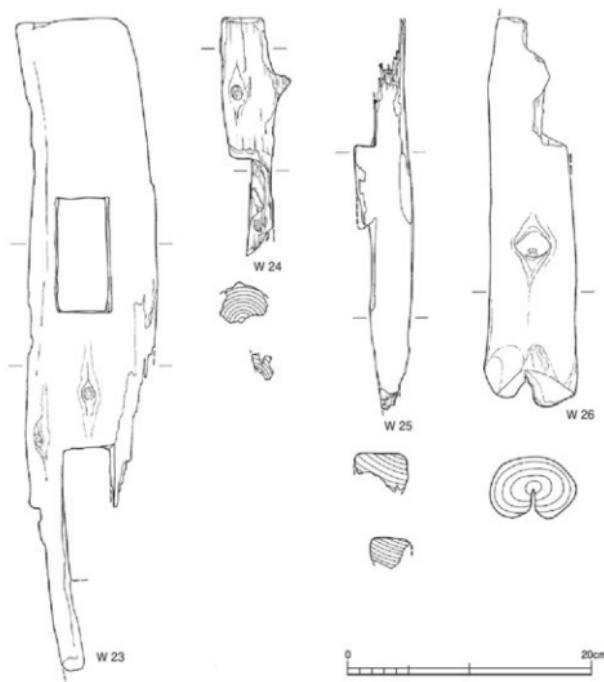
C 27



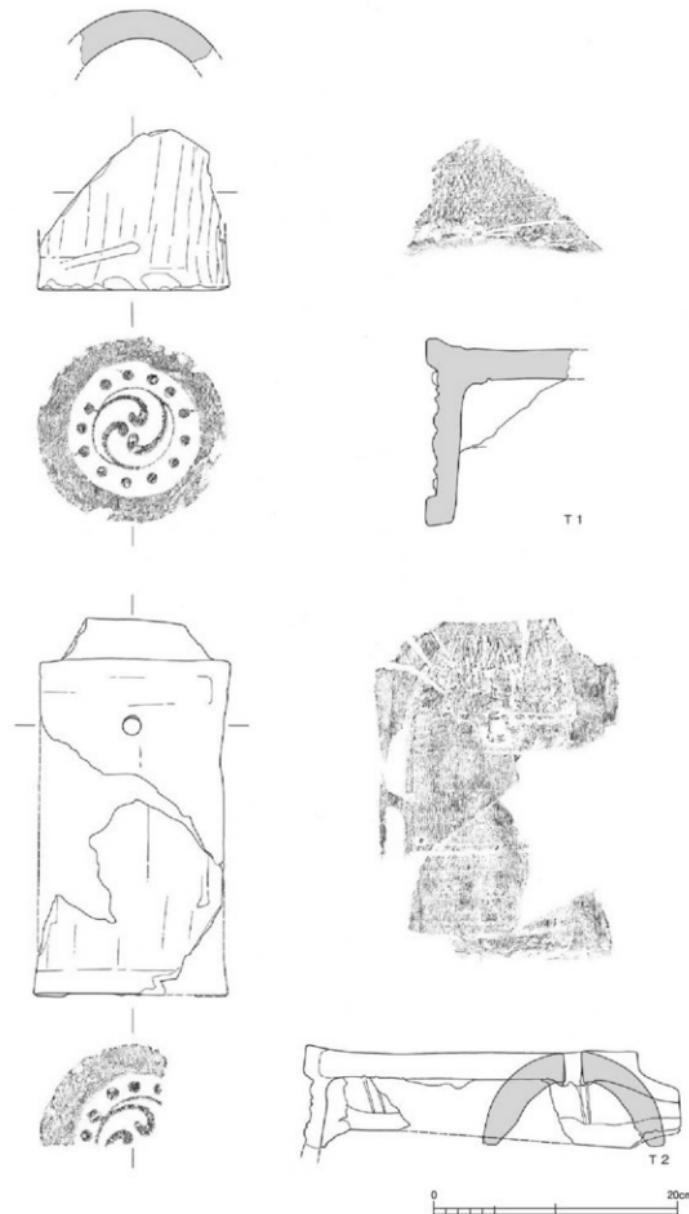
出土鋳型 (4)



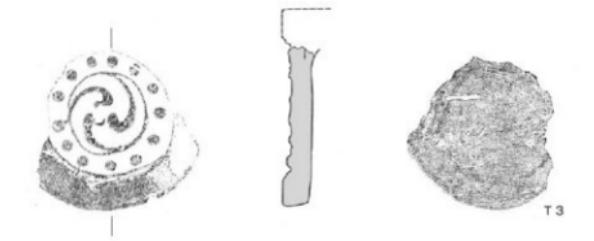
出土木製品（1）



出土木製品（2）



出土軒丸瓦 NM 1 (1)



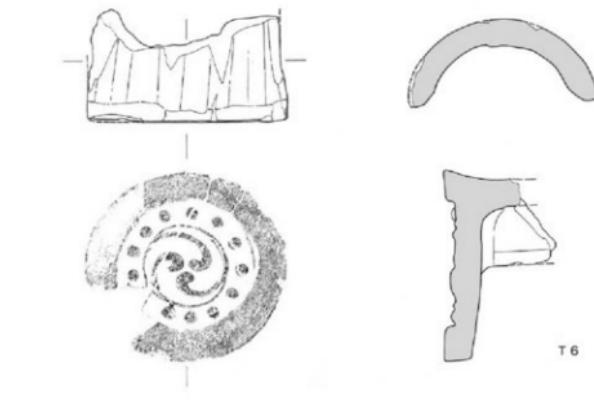
T 3

T 4

T 5

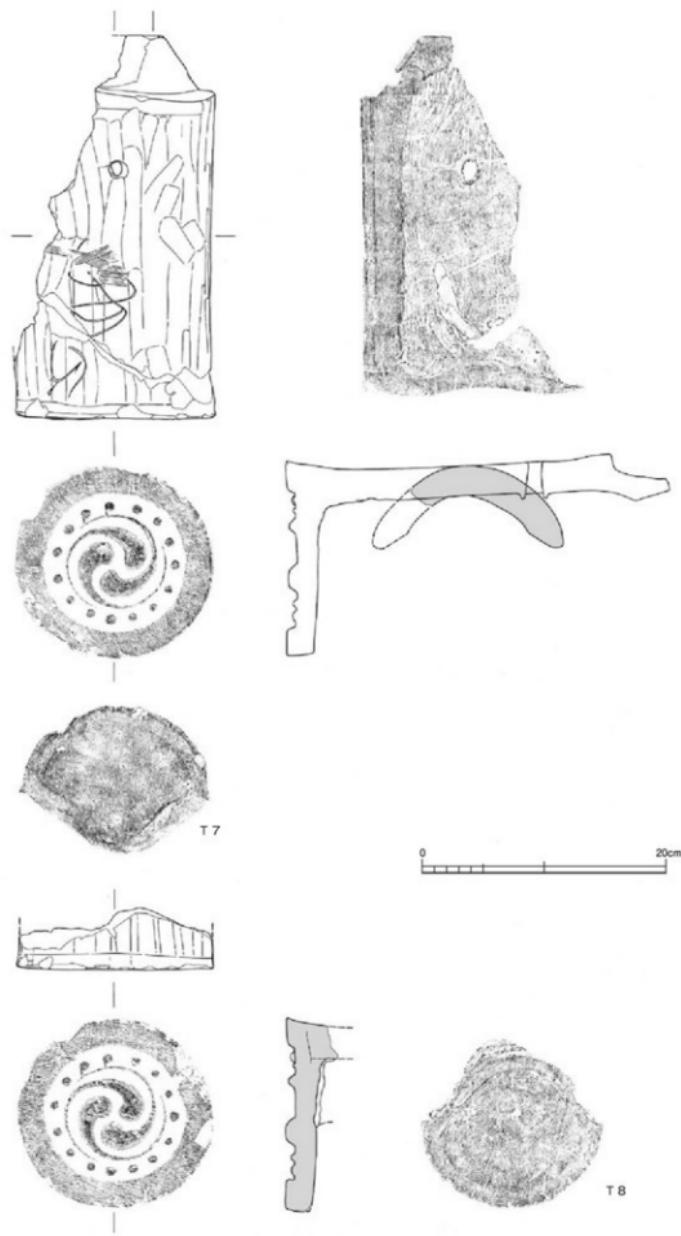
20cm

0

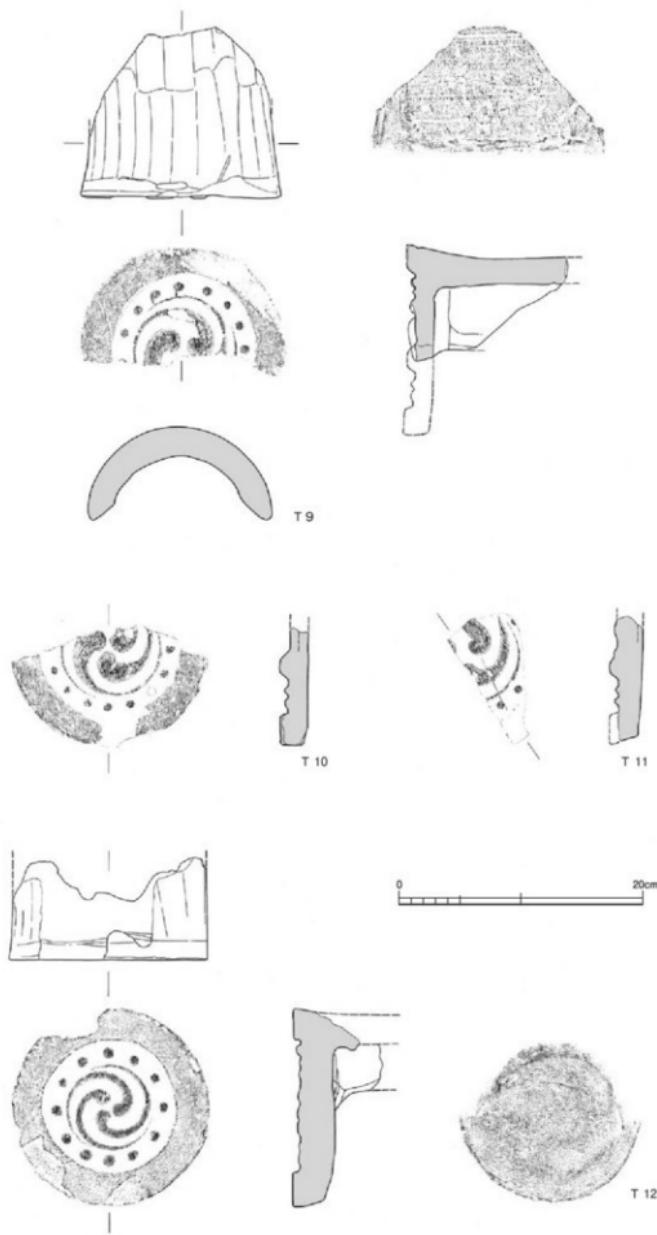


T 6

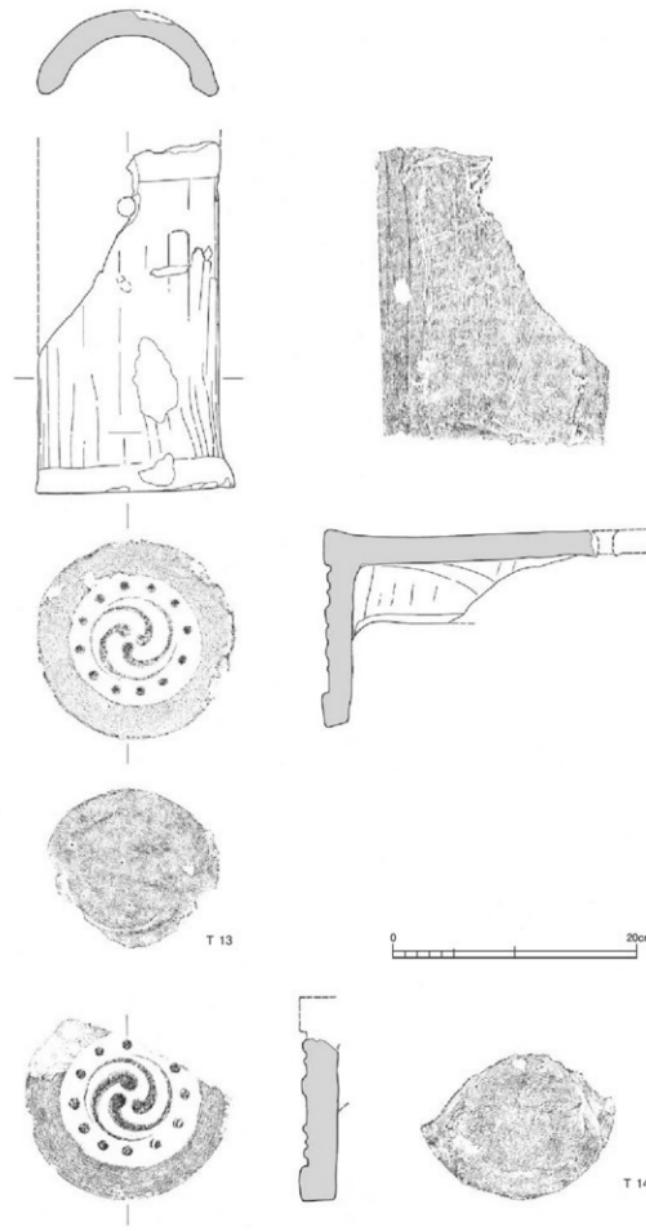
出土軒丸瓦 NM 1 (2)



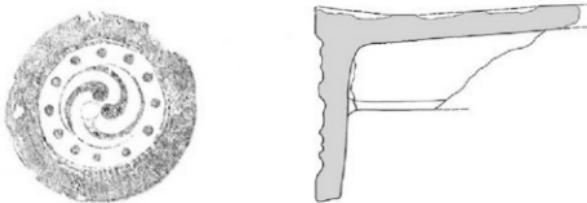
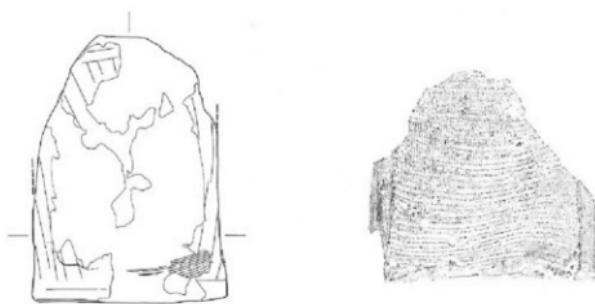
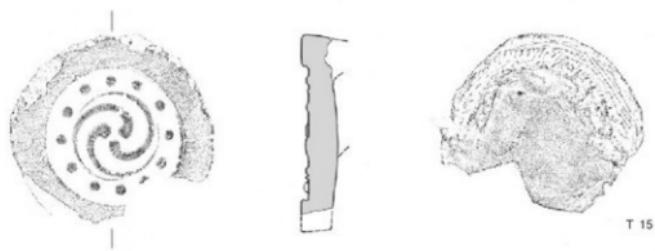
出土軒丸瓦 NM 2 (1)



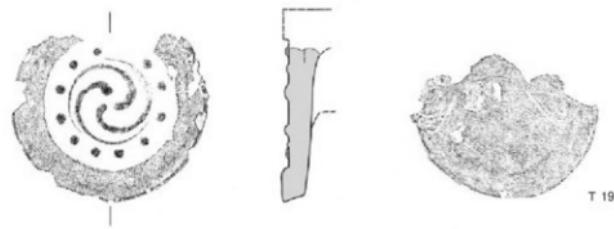
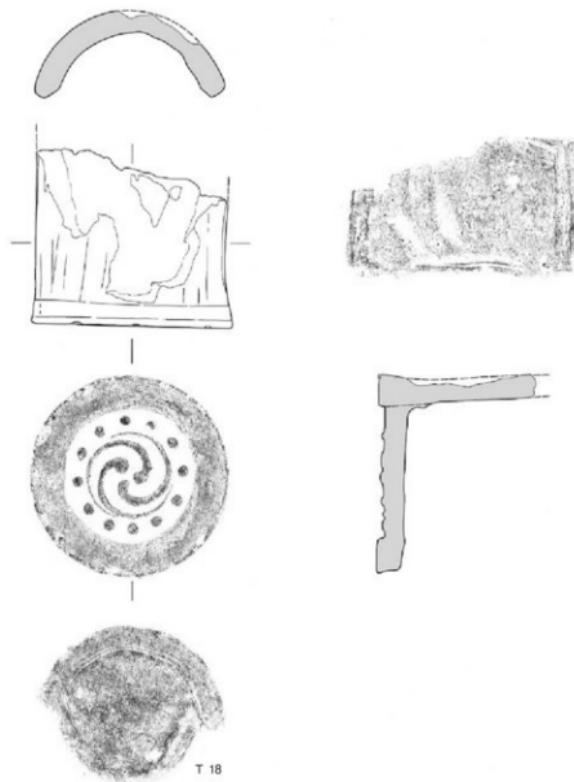
出土軒丸瓦 NM2 (2)・NM3 (1)



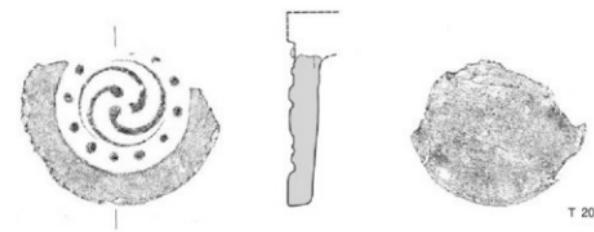
出土軒丸瓦 NM 3 (2)



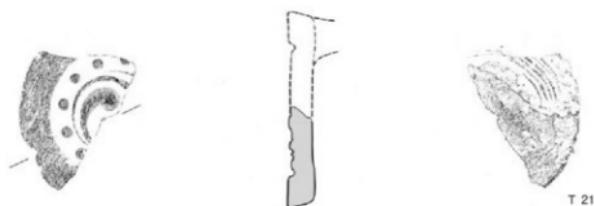
出土軒丸瓦 NM 3 (3)



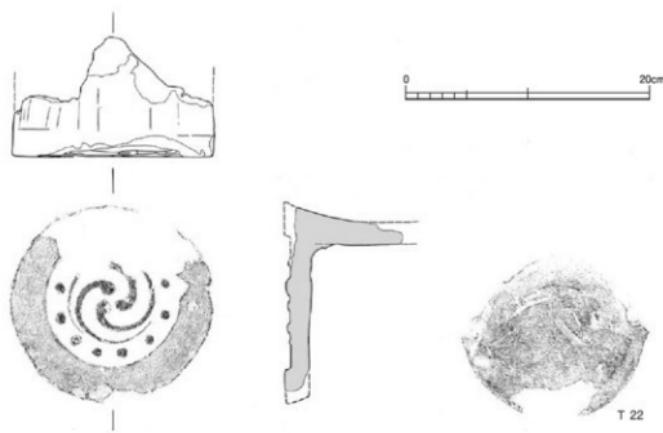
出土軒丸瓦 N M 3 (4)



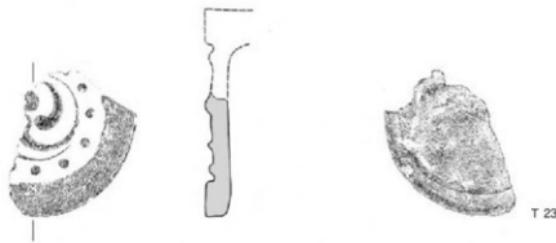
T 20



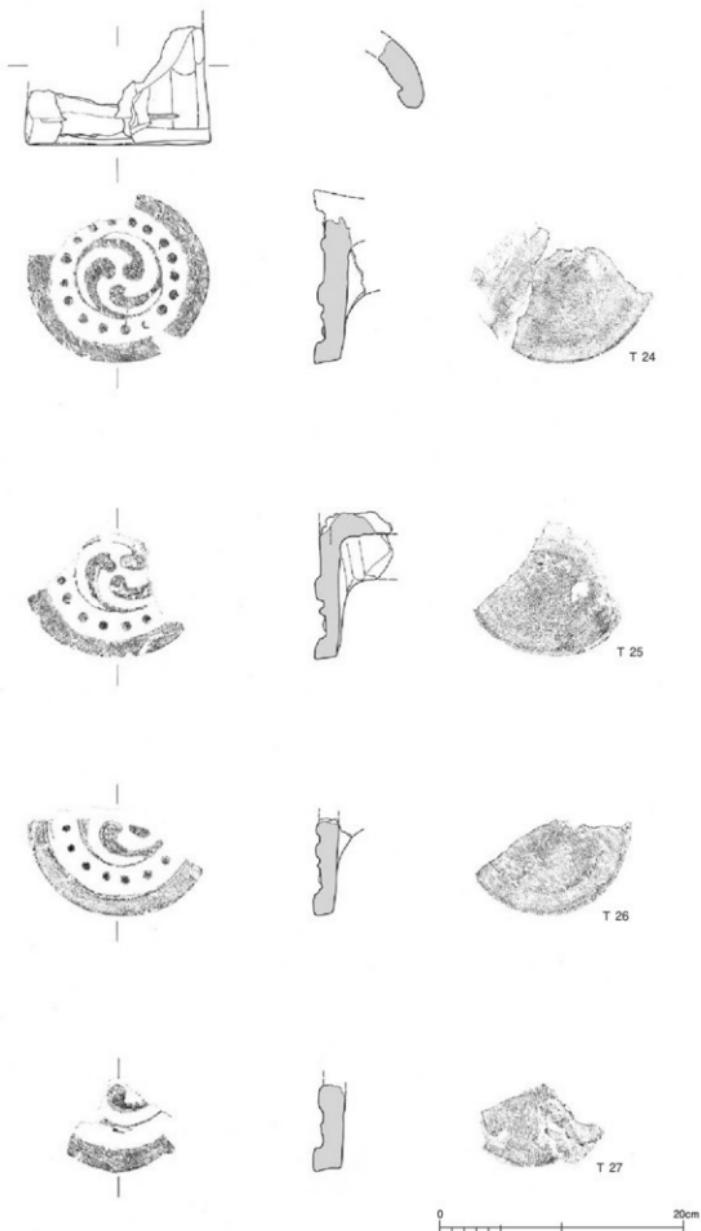
T 21



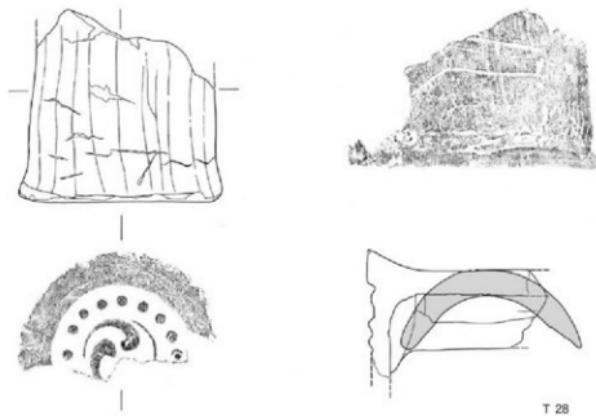
T 22



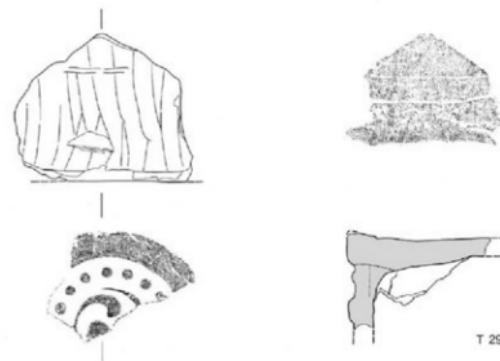
T 23



出土軒丸瓦 NM 4 a + 4 b



T 28

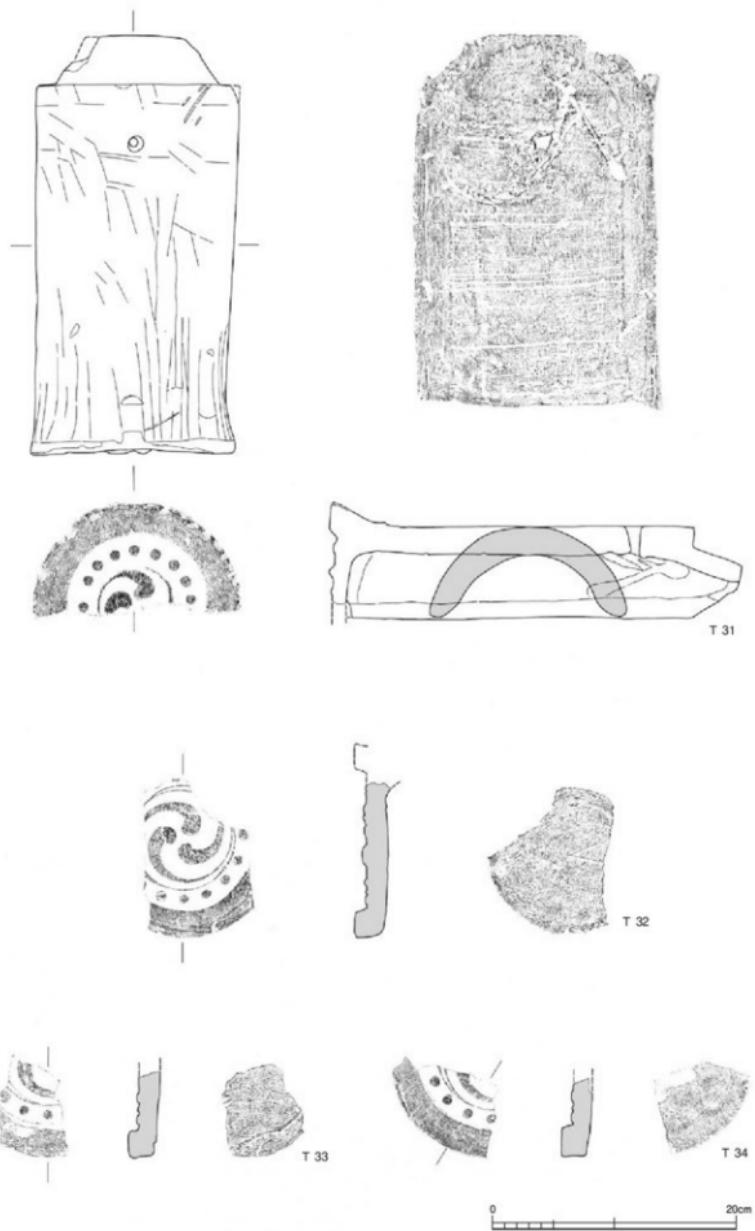


T 29

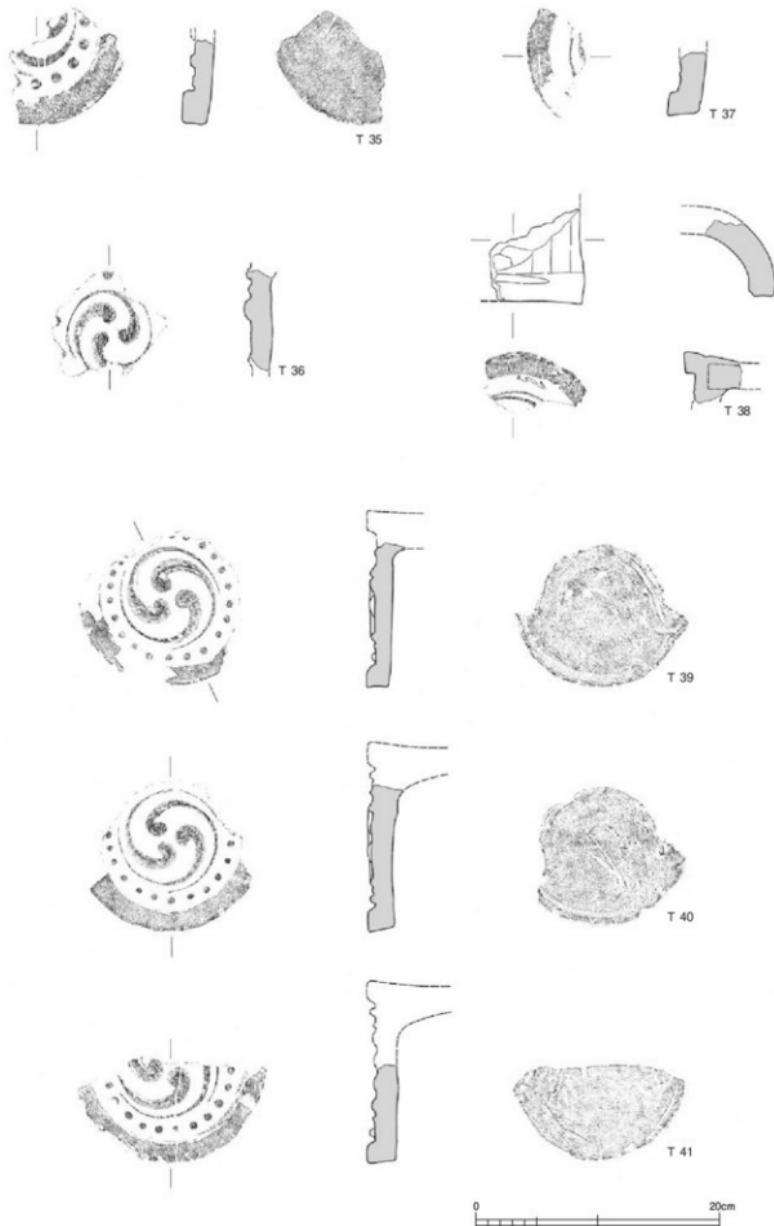


T 30





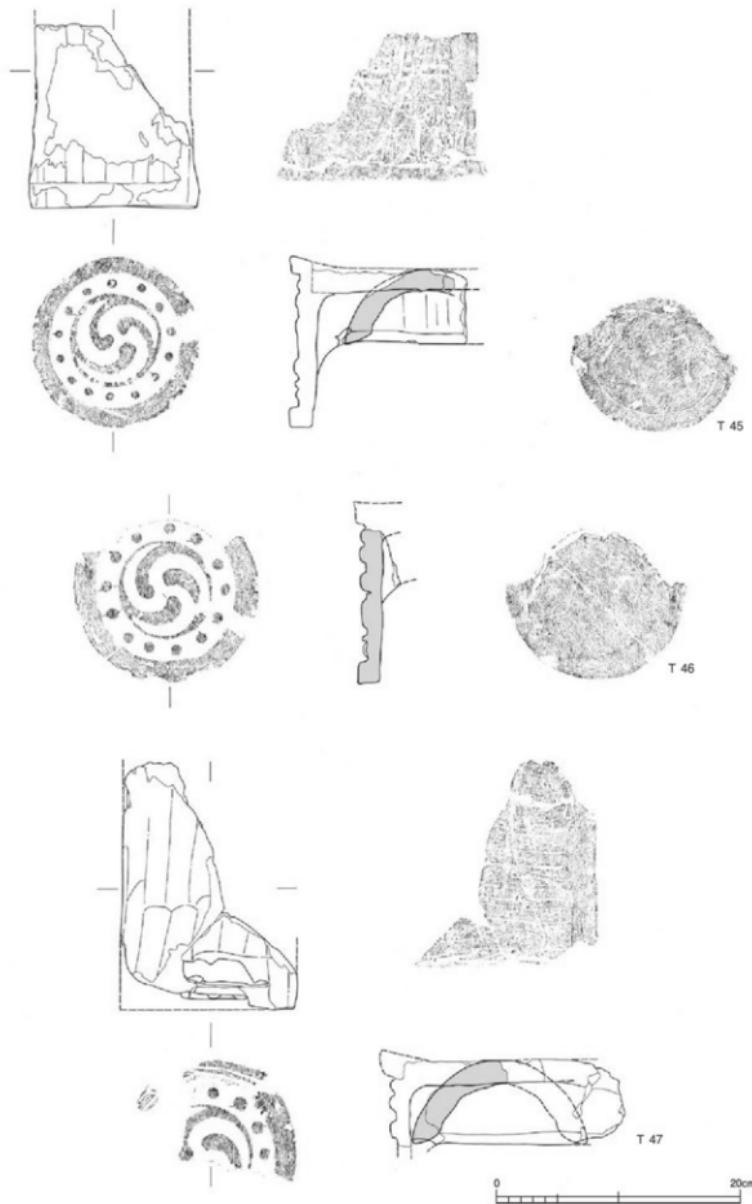
出土軒丸瓦 NM5 (2) · NM6



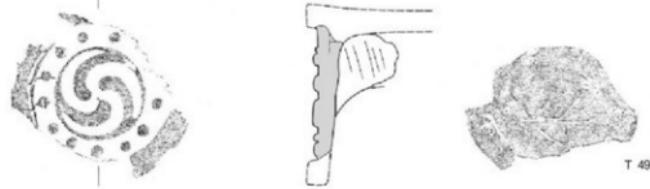
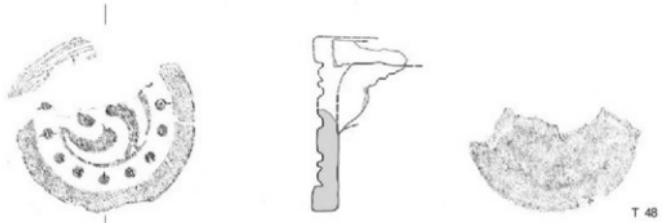
出土軒丸瓦 NM7・NM8・NM9・NM10 (1)



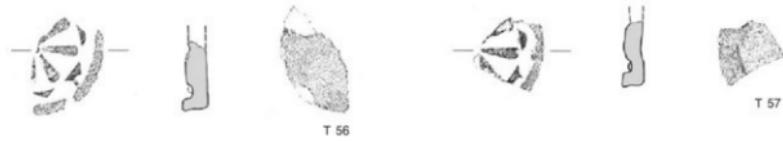
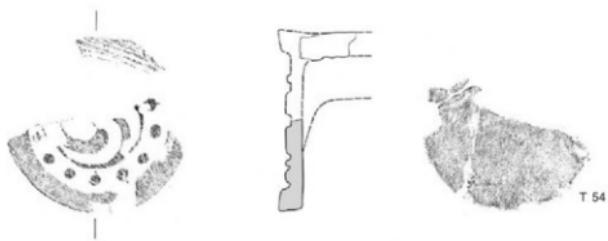
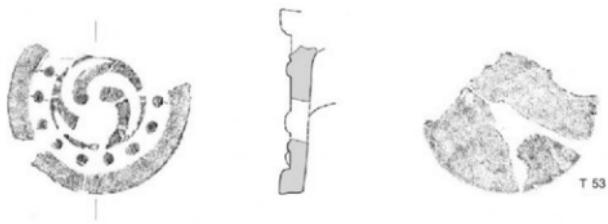
出土軒丸瓦 NM 10 (2)・NM 11 (1)



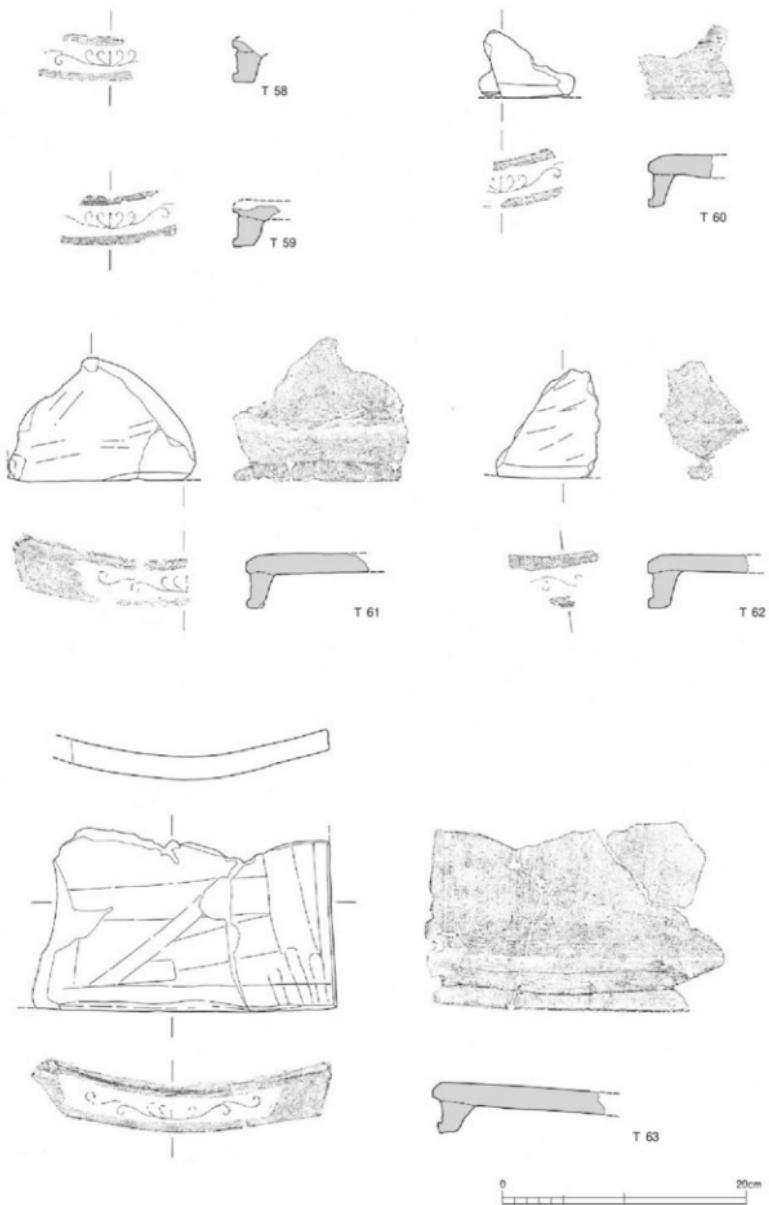
出土軒丸瓦 NM 11 (2)・NM 12 (1)



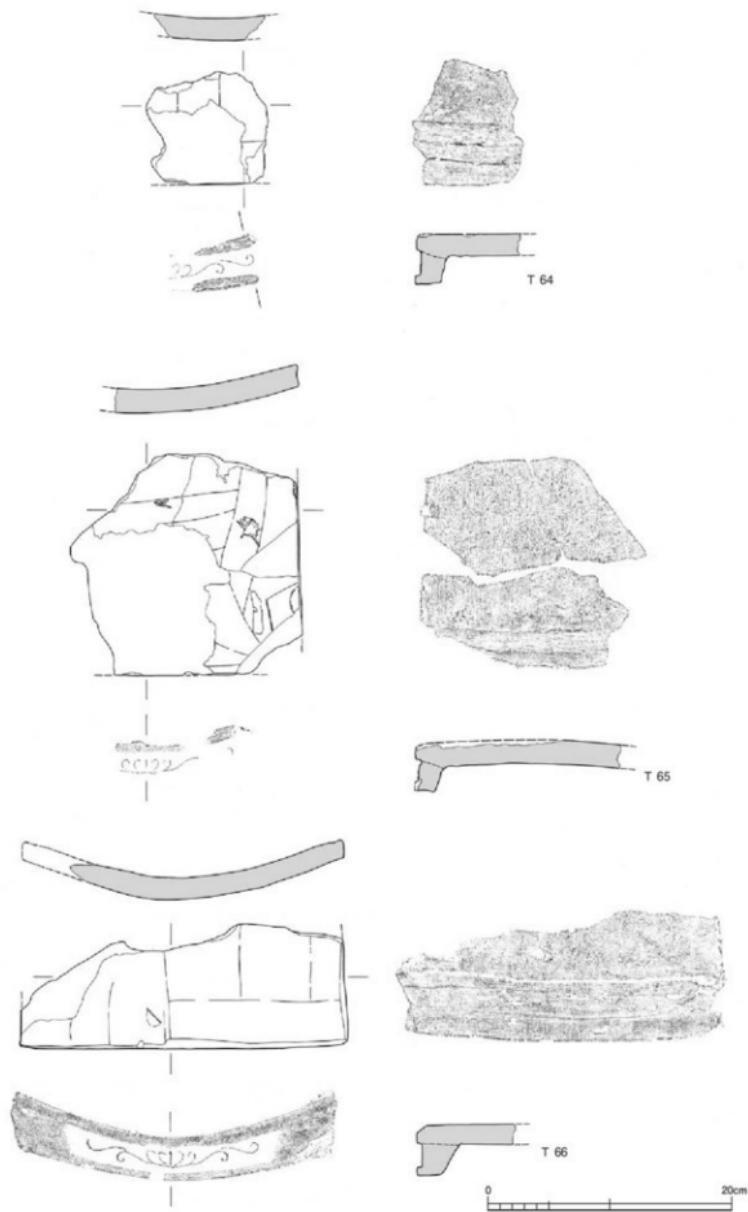
出土軒丸瓦 NM 12 (2)



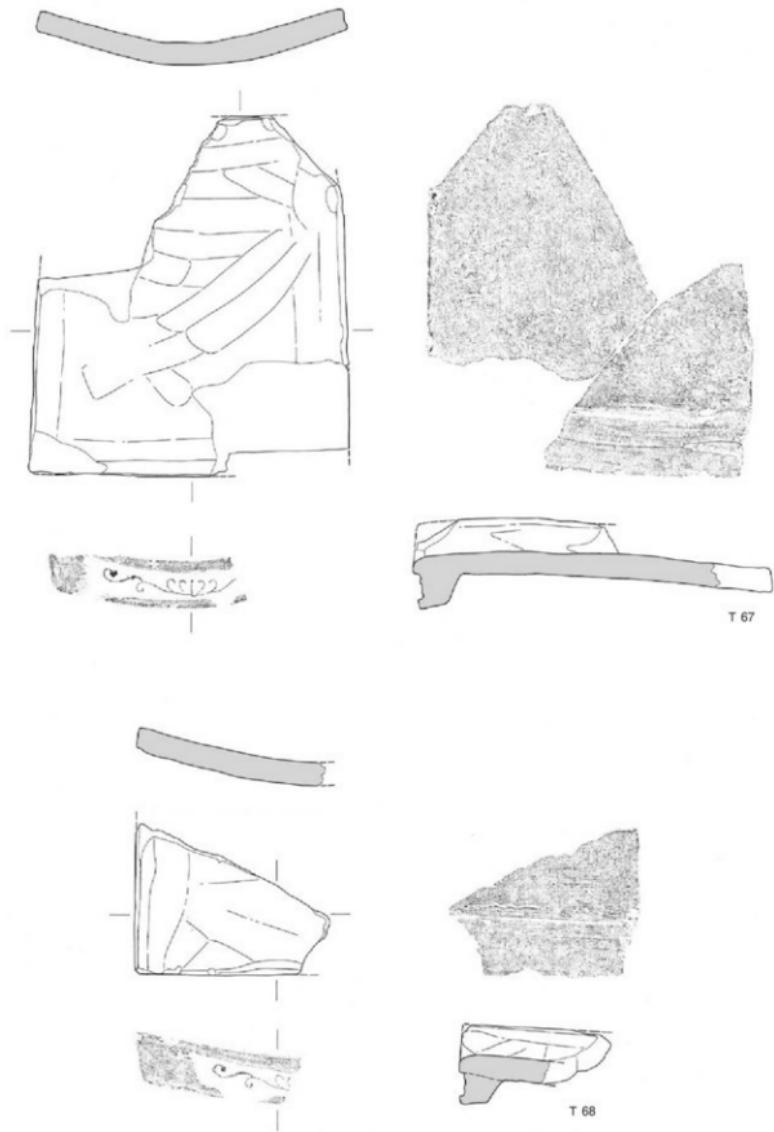
出土軒丸瓦 NM 12 (3)・NM 13・NM 14



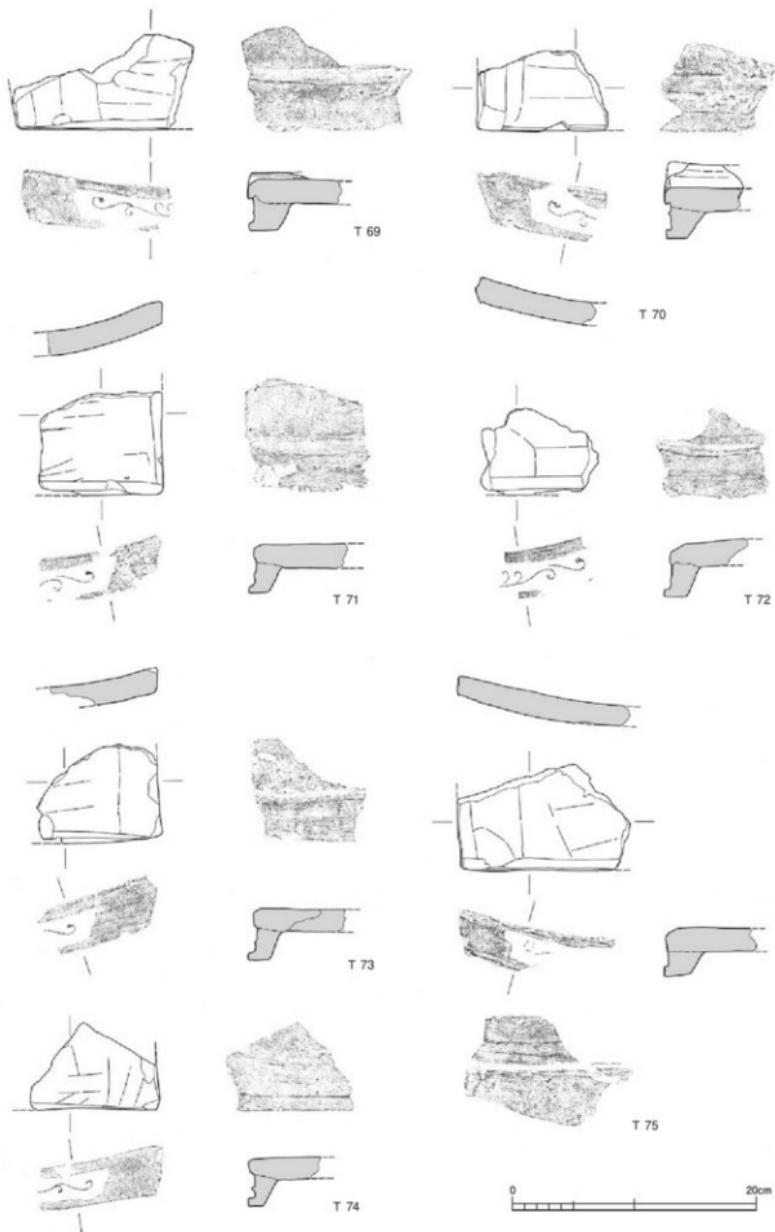
出土軒平瓦 NH 1 A (1)



出土軒平瓦 NH1A (2)・NH1B



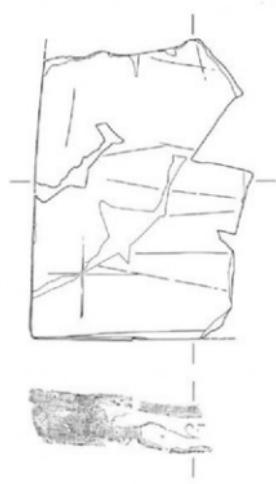
0 20cm



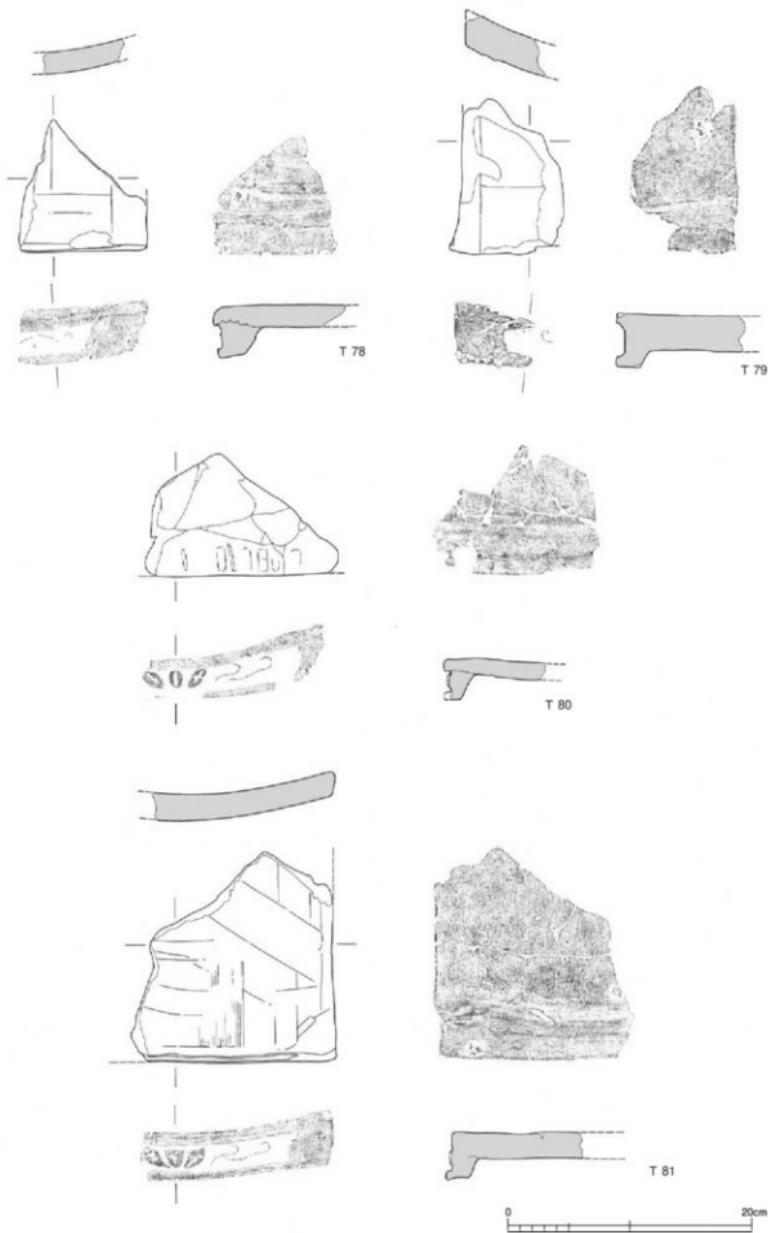
出土軒平瓦 NH1C (2)・NH1D・NH1E・NH1Z (1)



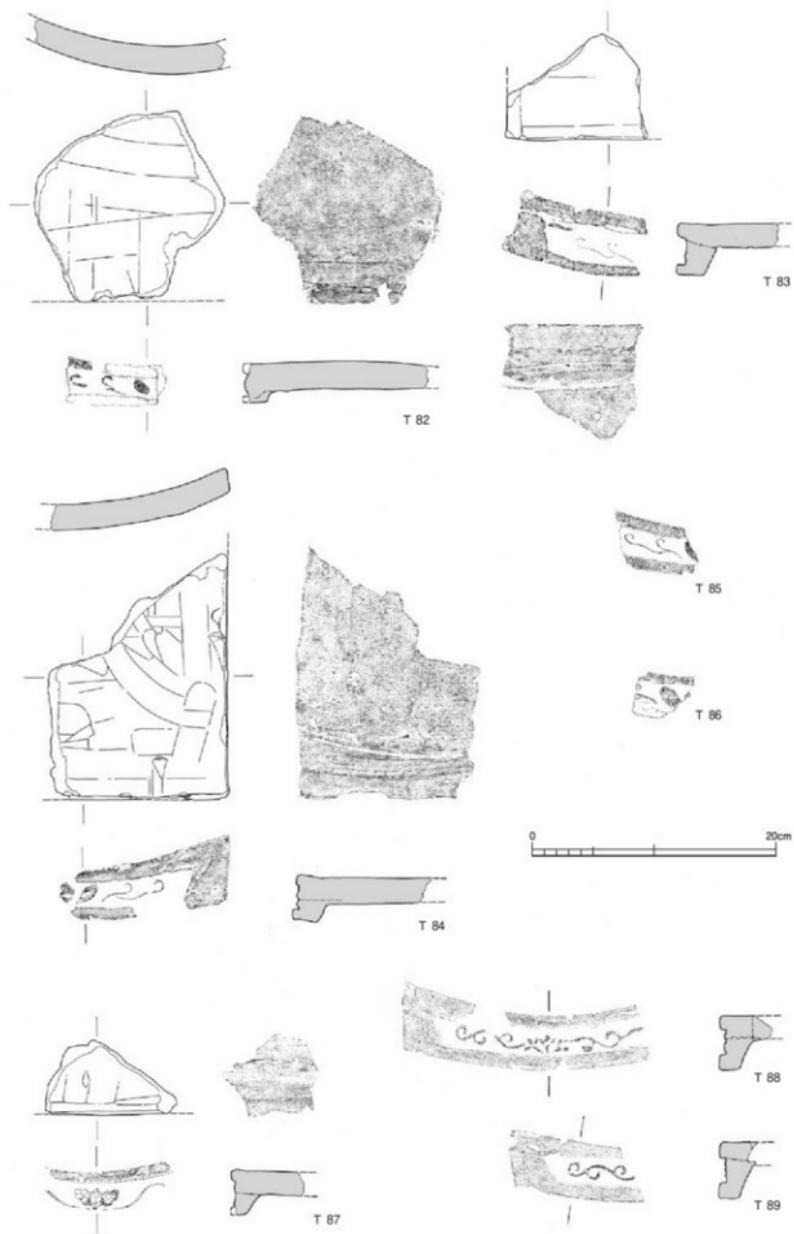
T 76



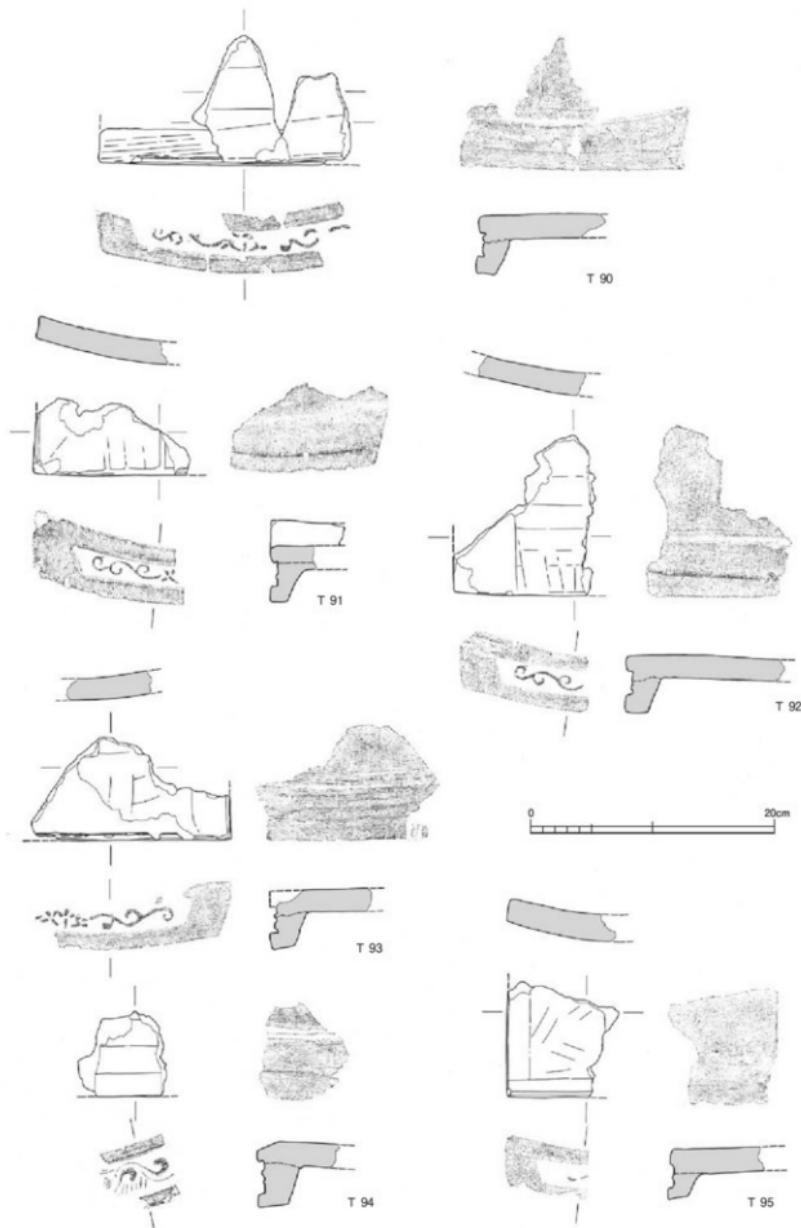
T 77



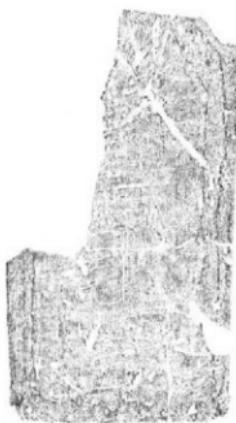
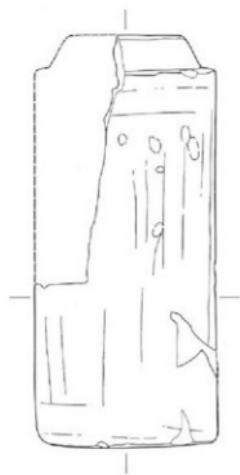
出土軒平瓦 NH1Z (3)・NH2 (1)



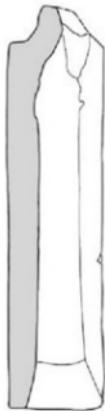
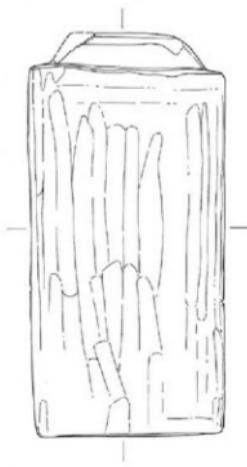
出土軒平瓦 NH2 (2)・NH3・NH4 (1)



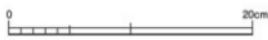
出土軒平瓦 NH 4 (2)・NH 5・不明軒平瓦



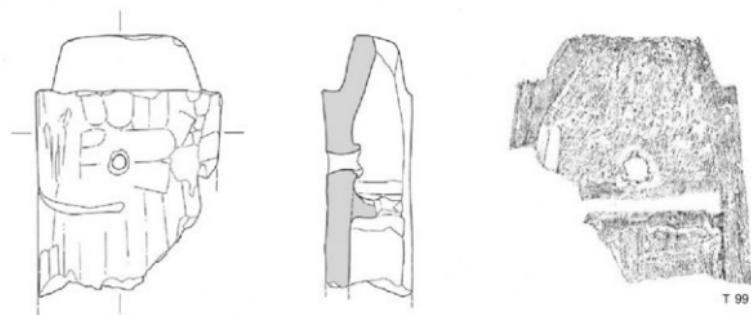
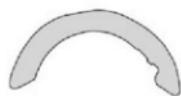
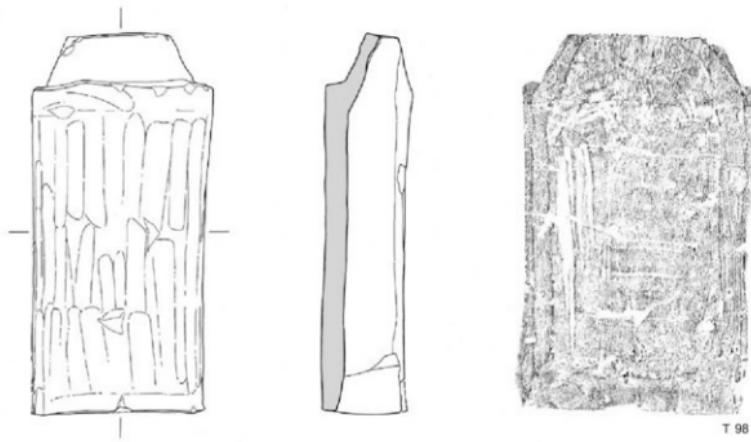
T 96



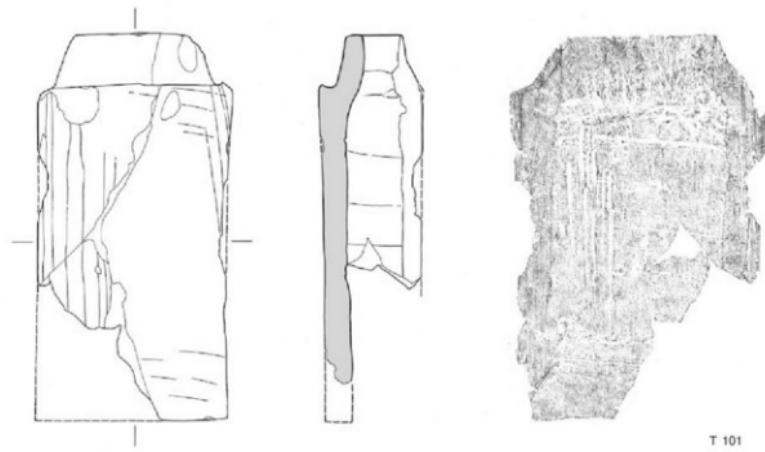
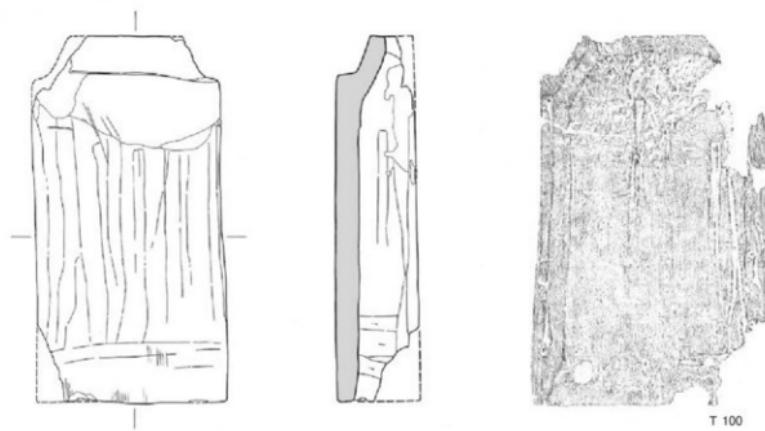
T 97



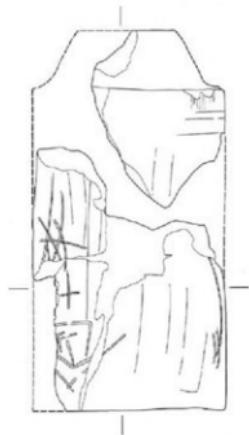
出土丸瓦 (1)



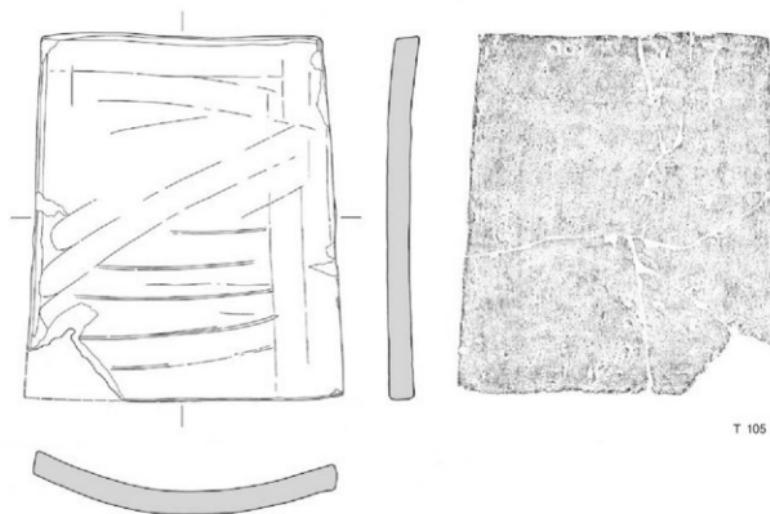
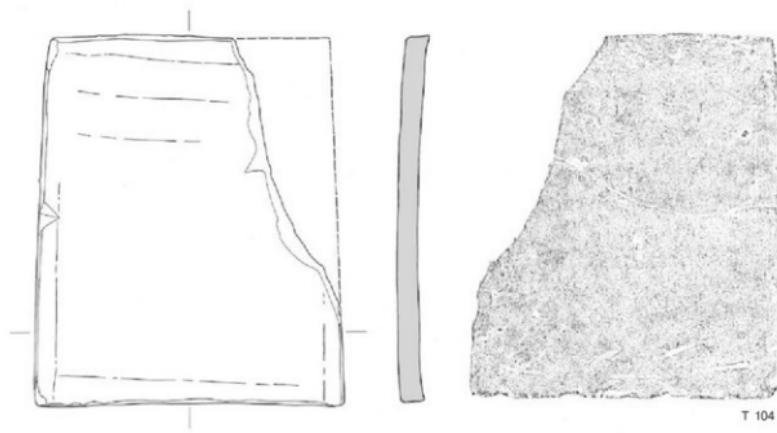
出土瓦 (2)



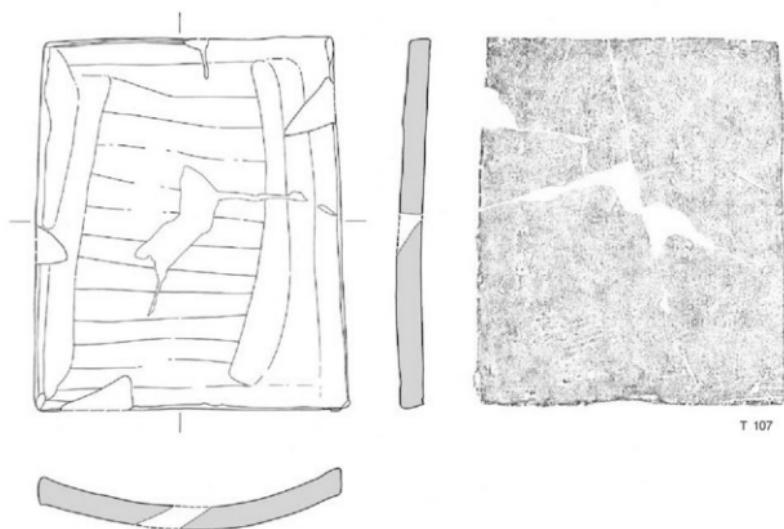
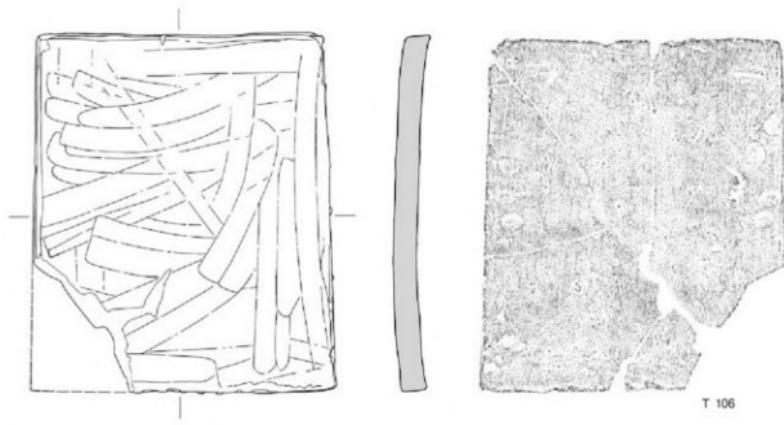
出土瓦 (3)



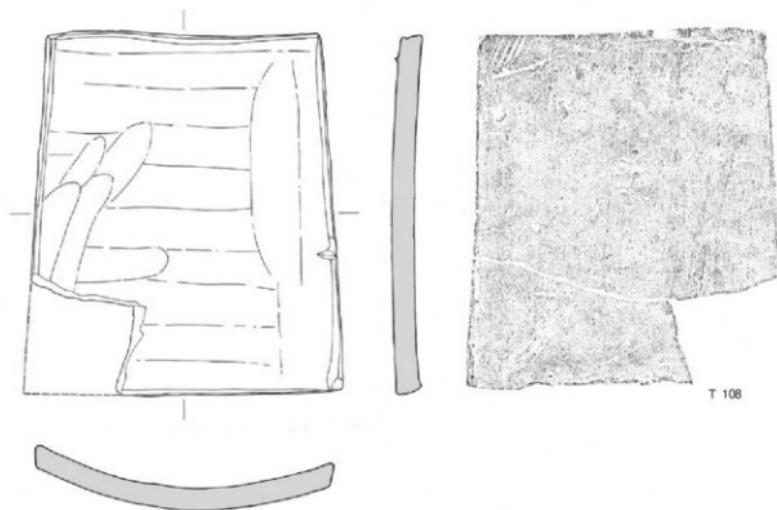
出土瓦 (4)・平瓦 (1)



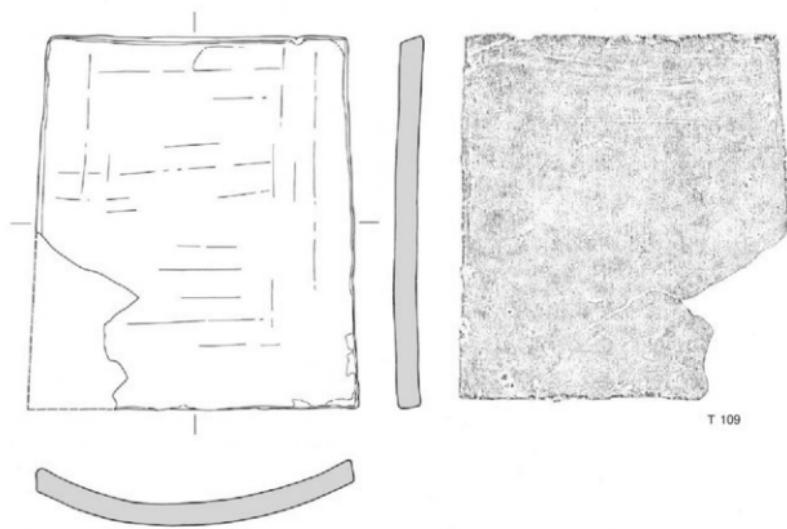
出土平瓦（2）



出土平瓦（3）



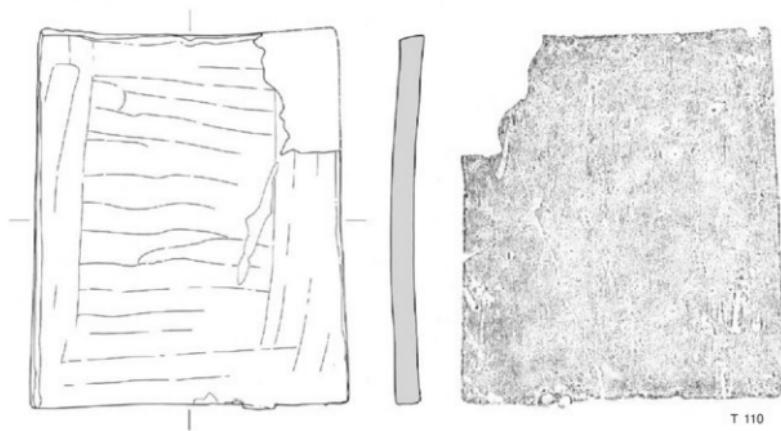
T 108



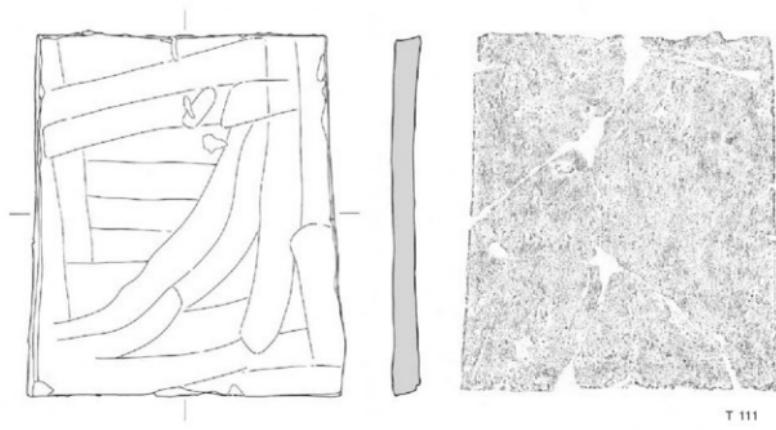
T 109



出土平瓦 (4)



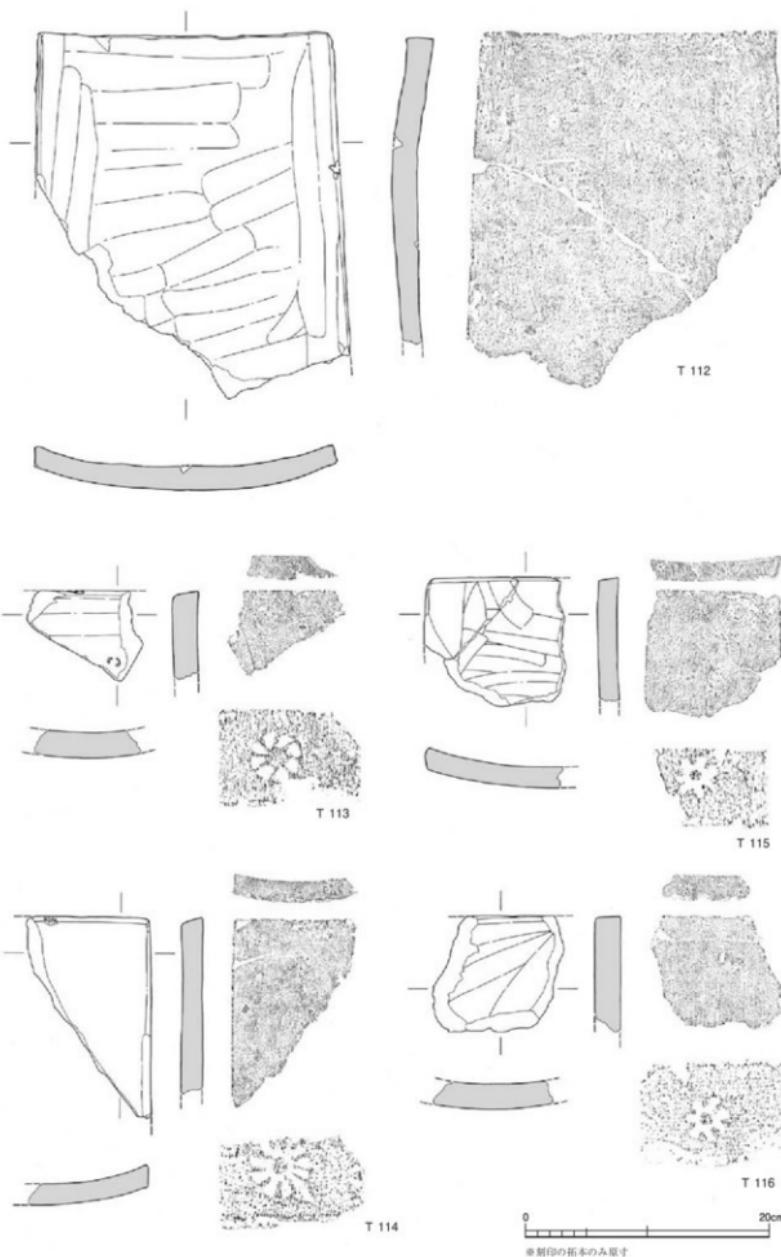
T 110



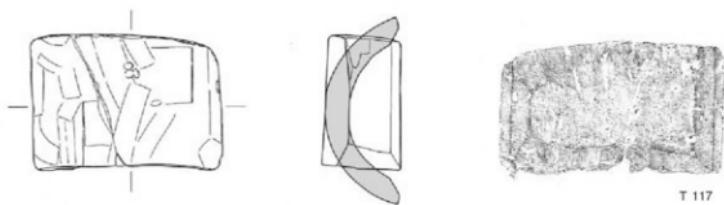
T 111



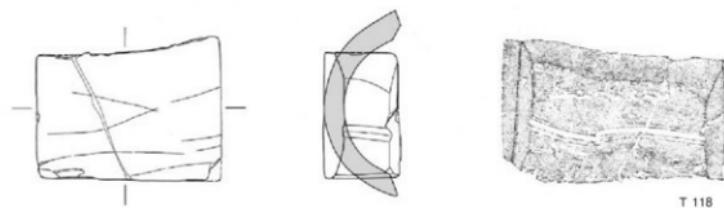
出土平瓦（5）



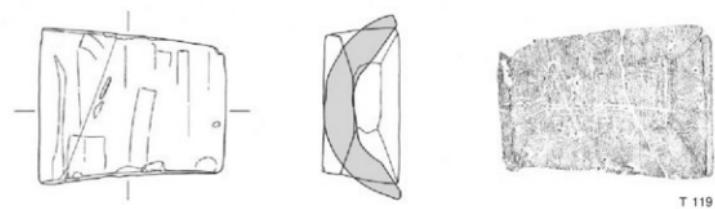
出土平瓦（6）・出土刻印平瓦



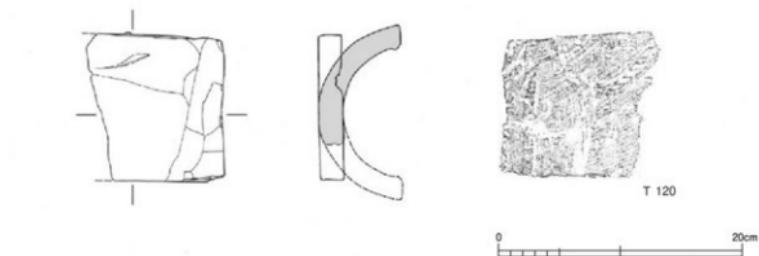
T 117



T 118



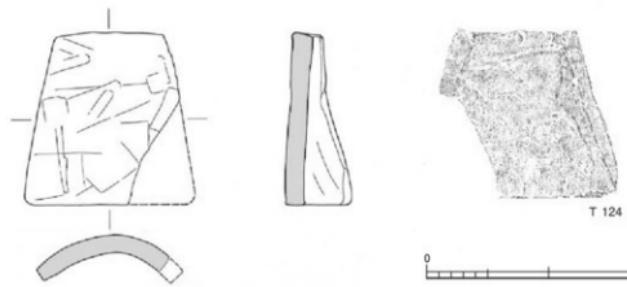
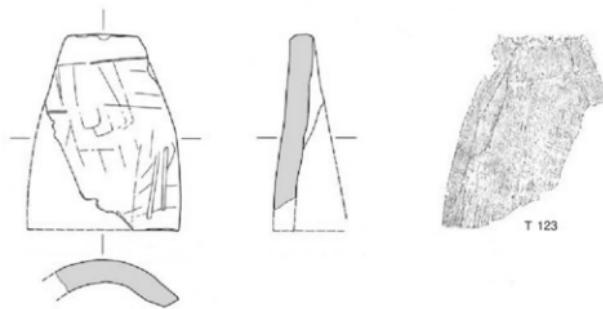
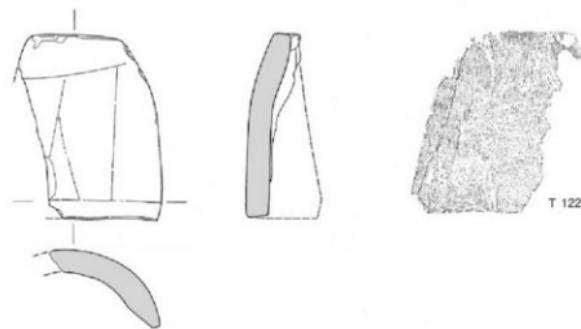
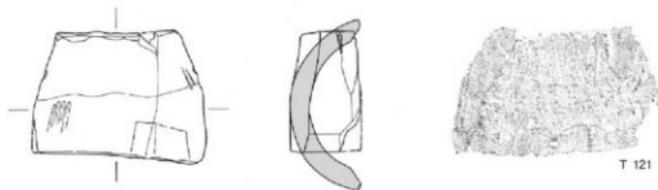
T 119



T 120

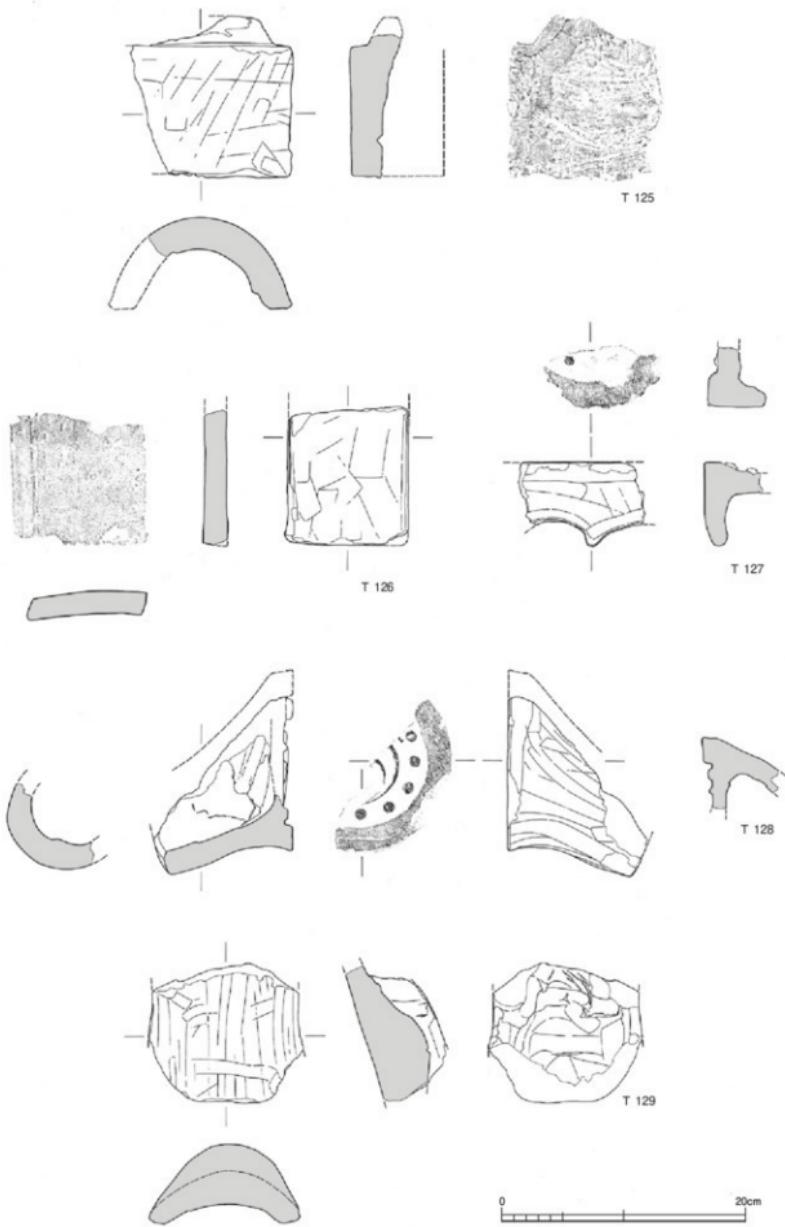


出土面戸瓦（1）



0 20cm

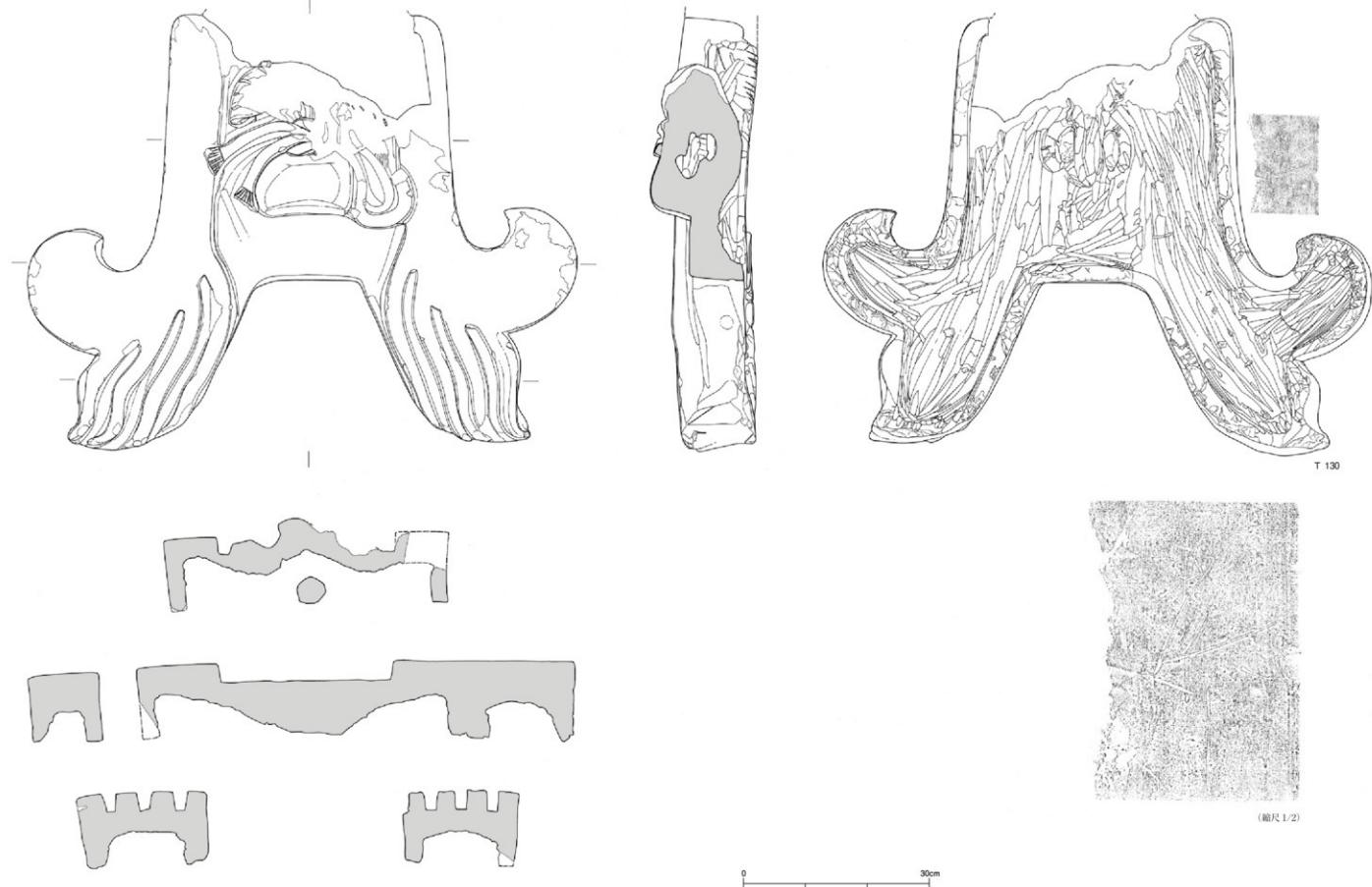
出土面戸瓦（2）



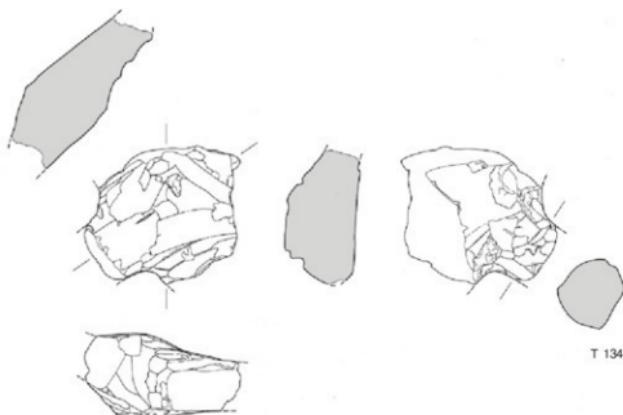
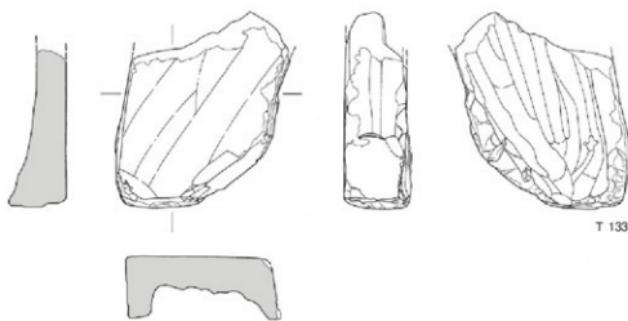
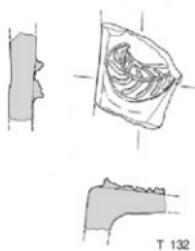
出土面戸瓦（3）・熨斗瓦・隅軒丸瓦・鳥衾



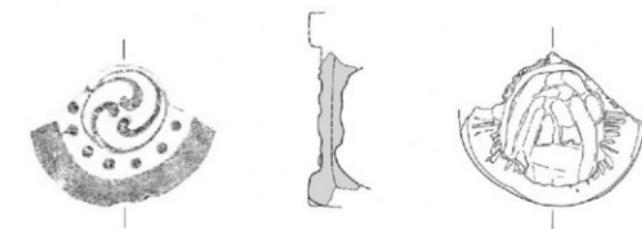
出土鬼瓦（1）



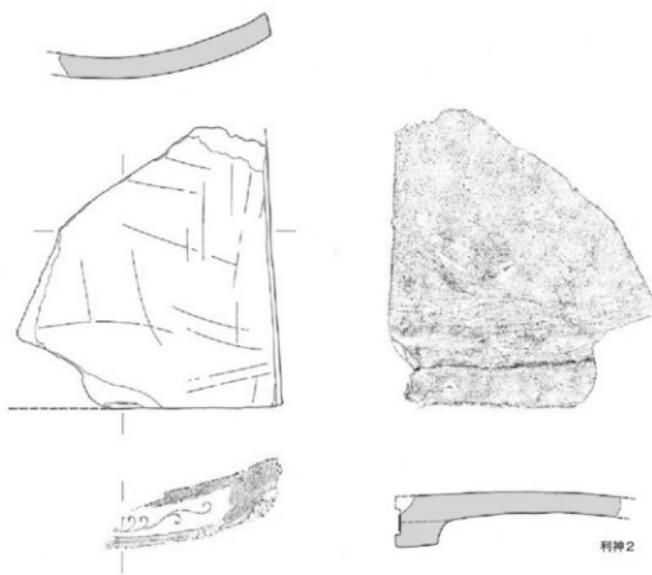
出土鬼瓦（2）



出土鬼瓦（3）



利神 1



利神 2



写 真 図 版

写真図版 1 遺跡遠景



南から



東から

写真図版 2 遺跡全景



北から



南から

写真図版3 全景



写真図版 4 2 A区 全景



北から



西から

写真図版 5 2B区・3区 全景



南東から



西から



南から

写真図版 6 2 A 区 土層断面



2 A 区東壁断面〈C-D間〉北側部分



2 A 区東壁断面〈E-F間〉現代水路南側部分



2 A 区東壁断面〈C-D間〉SD 68 北側部分



2 A 区東壁断面〈E-F間〉SD 68 北側部分



2 A 区東壁断面〈C-D間〉SD 68 部分



2 A 区東壁断面〈E-F間〉SD 68 部分



2 A 区東壁断面〈E-F間〉現代水路北側



2 A 区東壁断面〈E-F間〉南側部分

写真図版 7 2 A区 土層断面



2 A区東壁土層〈E-F間〉南側部分



2 A区東壁土層〈H-I間〉石垣1北側部分



2 A区東壁土層〈F-G間〉南端部分



2 A区東壁土層〈H-I間〉石垣1北側部分



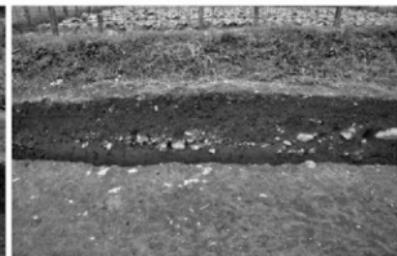
2 A区東壁土層〈F-G間〉南端部分



2 A区東壁土層〈H-I間〉堀内機能時堆積



2 A区東壁断面土層〈H-I間〉SD 101部分



2 A区東壁土層〈H-I間〉南側部分 石垣2南側盛土

写真図版 8 2B区・3区 土層断面



2B区東壁土層〈I-J間〉中央部分



3区東壁土層〈M-N間〉中央部分



2B区東壁土層〈J-K間〉北側部分



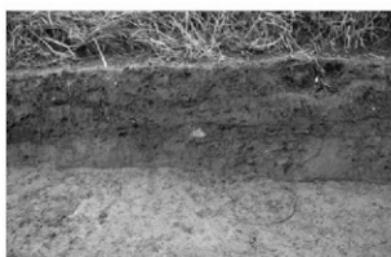
3区東壁土層〈N-O間〉南側部分



2B区東壁土層〈J-K間〉中央部分



3区東壁土層〈O-P間〉中央部分



2B区東壁土層〈K-L間〉南端部



3区東壁土層〈P-Q間〉南側部分

写真図版 9 1区・2A区a区画



1区全景



2A区a区画（北から）



S B 80 (北から)



S K 4 断面（西から）

写真図版 10 2 A 区 a 区画



石列 60



S K 65



SK 65 (西から)



SK 65 瓦出土状況 (西から)



SK 65 完掘 (西から)



石列 82 (東から)

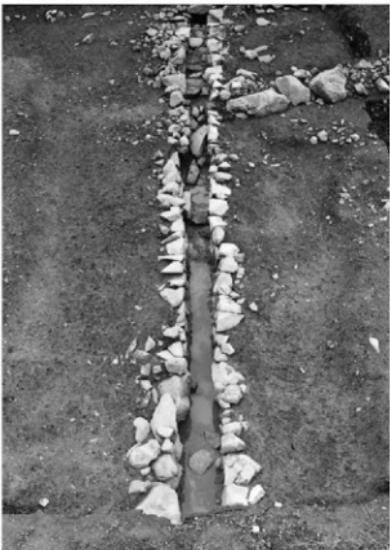


SK 83 (南から)

写真図版 12 2 A 区 a 区画 SD 68



西から



東から



南西から



南から



断面 a - a' (南西から)



西側細部



断面 b - b' (西から)



拡張区 (南東から)

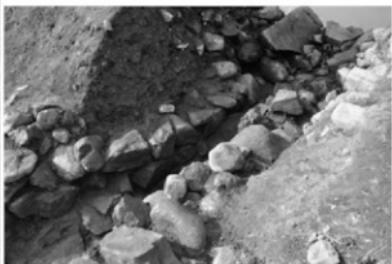
写真図版 14 2 A 区 c 区画 SD 69・SK 74



SD 69 (南から)



SD 69 (西から)



SD 69 拡張区 (北東から)



SK 74 (西から)



SK 74 瓦出土状況 (東から)

写真図版 15 2 A 区 d ~ f 区画 SD 79・畝状遺構



d + e 区画 全景 (南から)



e 区画 畝状遺構 (南から)



SD 79 東 (南から)



SD 79 南 (東から)



SD 79 南 拡張区 (西から)



SD 79 南 蓋部除去後 (東から)

写真図版 16 2 A 区 f 区画 SD 79



SD 79 東 鬼瓦



鬼瓦 取上げ状況



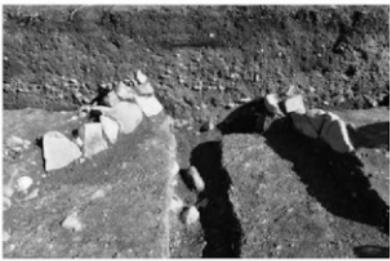
SD 79 東 鬼瓦



SD 79 南 一石五輪塔 S 2 (北から)



SD 79 南 断面 (北東から)



SK 101 (西から)

写真図版 17 2 A 区 h 区画 石垣 1 ~ 3 上面



全景（南から）



石垣 1（南から）



全景（北から）



全景（グリ石検出後 北から）

写真図版 18 2A区g・h区画 石垣背面



北から



石垣1背面（北から）



石垣1グリ石（北から）



石垣 1・堀 1 全景 (南東から)



石垣 3 断ち割り (東から)



石垣 3 によって埋没した石垣 1 (南から)

写真図版 20 2A区 h区画 石垣 1



全景（南から）



断面3（西から）



断面1（西から）



石垣 1 細部（南から）



石垣 1 保存範囲



矢穴 石 1-4 (西から)



グリ石 (西から)



基底石 (東から)



石 1-30 (南から)



石 1-44 (南から)



石 1-20 (南から)

石材細部

写真図版 22 2A区 h区画 石垣2



全景（北から）



北東から



拡張区（西北から）



断面2



断面3（西から）



断面4（西から）



西端積み直し部（北から）



グリ石（東から）



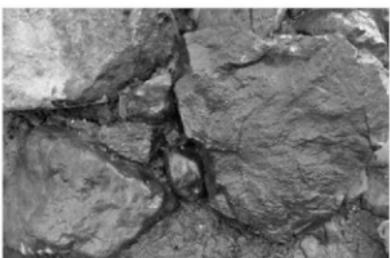
石垣前面（西から）



東端（北から）



矢穴 石2-3（北から）



矢穴 石2-35（北から）



石2-24（北から）



石2-16（西から）

写真図版 24 2 A 区 h 区画 石垣 3





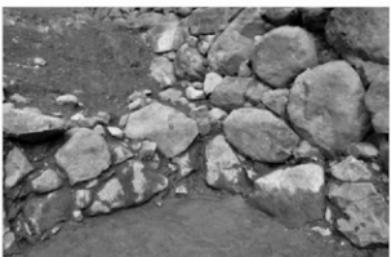
近景（東から）



近景（北東から）



グリ石（西から）



石垣 1-3 接合部（南東から）



石垣 1-3 接合部（東から）



石垣 1-3 接合部 断割り（東から）



矢穴 石3-2



矢穴 石3-18（南から）

写真図版 26 2 A 区 h 区画 石垣背面



北から



石垣 1 背面（東から）

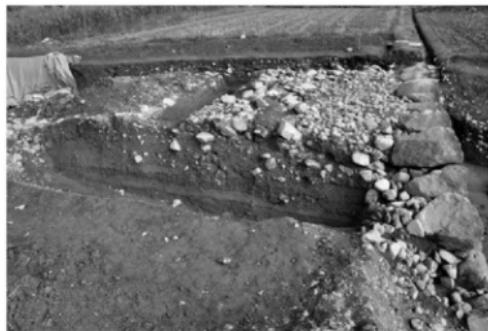


北から



北西から

写真図版 27 2 A 区 h 区画 石垣背面・断面



中央断面（西から）



中央断面（北西から）



東西断面（東から）



東西断面 1 西端（南から）



東西断面 1 西（南から）



中央断面 北側



東西断面 2（北西から）

写真図版 28 2B区 全景・遺構



2B区a・b区画 全景（南から）



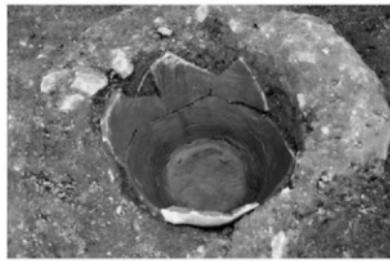
2B区a区画 全景（南から）



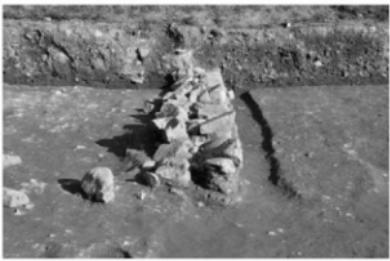
S D 24（東から）



S K 20（東から）



S K 16（北から）



S F 25（西から）

写真図版 29 2B区b～d区画 全景・遺構



北から



S F 8 (南から)



S K 7 (西から)

写真図版 30 2B区d区画 全景



北上空から



北から



北から



南から

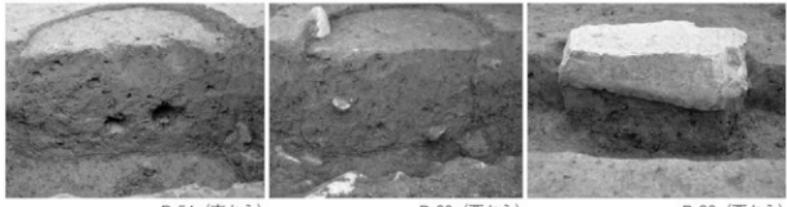


S F 29 (南から)

1

写真図版 32 2B区d区画 柱穴断面

S B 55

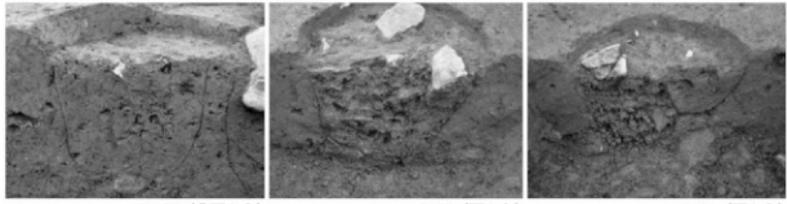


P 54 (南から)

P 60 (西から)

P 86 (西から)

S B 55

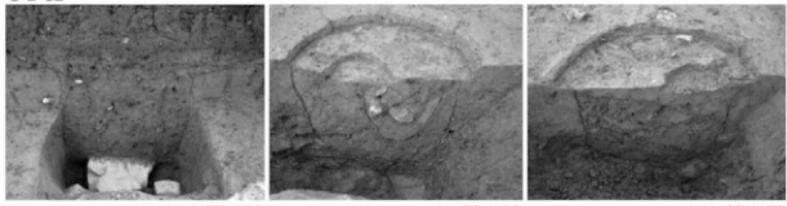


P 137 (北西から)

P 55 (西から)

P 61 (西から)

S B 82



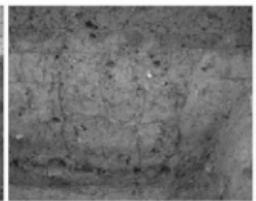
P 89 (西から)

P 92 (南から)

P 93 (南から)



P 94 (南から)



P 107 (西から)



P 109・110 (西から)

写真図版 33 2B区d区画 柱穴断面

S B 82



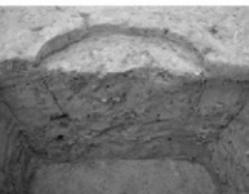
P 112 (西から)

P 113 (西から)

P 127 (南から)

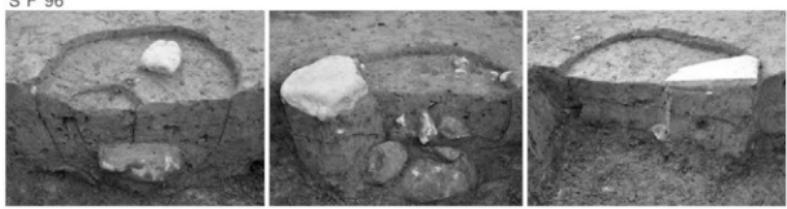


P 131 (南から)



P 138 (南から)

S F 96



P 98 (北から)

P 100 (東から)

P 101 (東から)



P 102 (東から)



P 103 (東から)



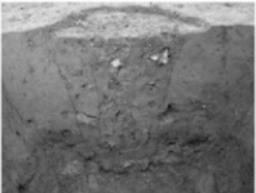
P 104 (南から)

写真図版 34 2B区d区画 柱穴断面

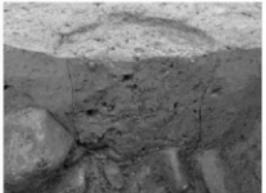
S F 8



P 8 (南から)



P 9 (南から)



P 10 (南から)

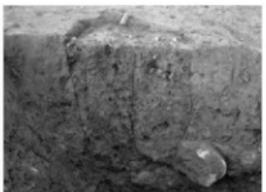
S F 29



P 15 (北から)



P 29 (南から)



P 30 (南から)



P 31 (南から)



P 32 (南から)



南から



北から



3区 a 区画 全景（北から）



S B 171・172・173（北から）



3区 a 区画北端部（南から）



S B 157 (南から)

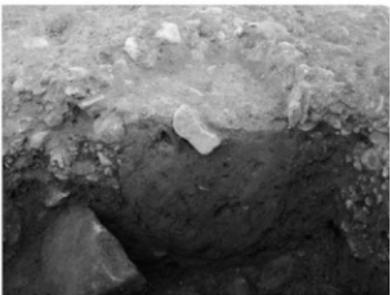


S B 163 (北から)

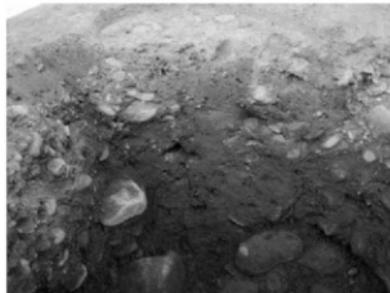
写真図版 38 3区 柱穴断面



S B 157 P 58 (東から)



S B 171 P 102 (西から)



S B 173 P 77 (南から)



S B 173 P 97 (北から)



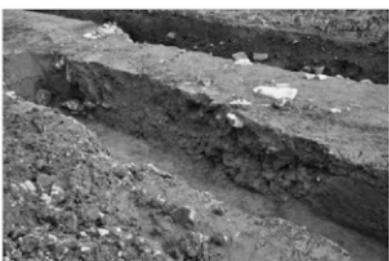
S B 173 P 83 (西から)



S B 173 P 124 (南から)



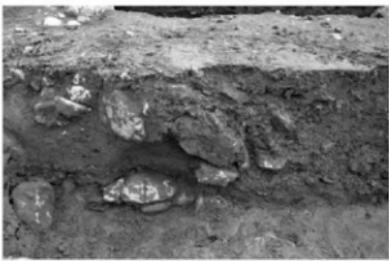
SK 4（西から）



SK 160（南西から）



SK 4断面（西から）



SK 160細部（西から）

写真図版 40



I 1・I 2区全景（北から）



I 1・I 2区全景（西から）



I 1区全景（北から）



I 1区全景（西から）



I 1区北隅付近（北から）



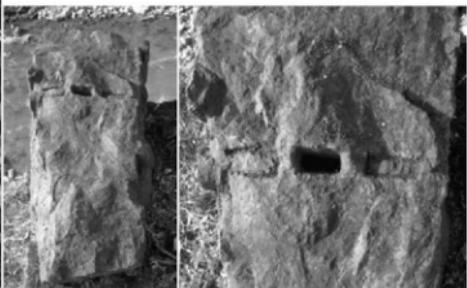
I 1区北隅付近（北西から）



I 1区西隅付近（西から）



I 1区西隅付近（南西から）



I 1区西隅石材の矢穴



I 2区石垣（南西から）



T 2断割断面



I 2区石垣（北西から）



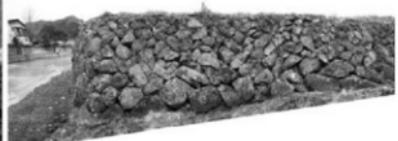
T 2断割断面



S 1 区



S 1 区北側



S 2 区（オルゾ写真）



S 1 区南側



S 3 区（オルゾ写真）



S 2 区・3区



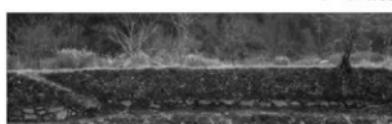
S 4 区張り出し部（オルゾ写真）



S 4 区北側



S 5 区（オルゾ写真）



S 4 区南側



S 6 区（オルゾ写真）



S 7区北側



S 7区南側



S 8区北端



S 8区南側



S 9区



S 10区



S 11区



S 12区



S 13区・14区遠景



S 13区

写真図版 44



S 1区 T 1断ち割り状況（西から）



S 1区 T 1断面（南から）



S 4区 T 2断ち割り状況（西から）



S 4区張り出し部 T 2断面（南から）



S 4区張り出し部 T 2根石据え付け状況（南から）



S 1区 T 3断ち割り状況（西から）



S 8区 T 3断面（南から）



S 8区 T 3根石据え付け状況（南から）

佐用川 護岸石垣断ち割り



機械掘削状況（西から）



遺構掘削状況（北西から）



石垣作業風景



石垣・堀清操作業（南から）



石垣解体作業（西から）



航空測量風景（西から）

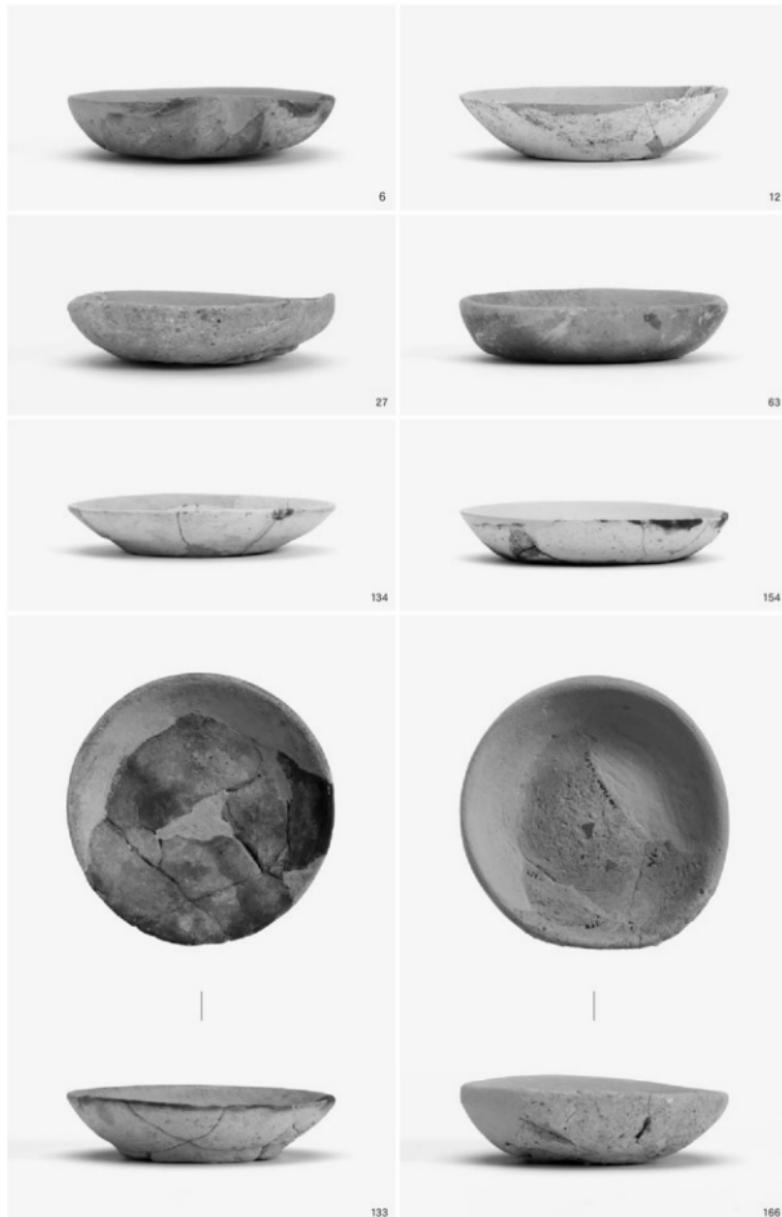


現地説明会風景

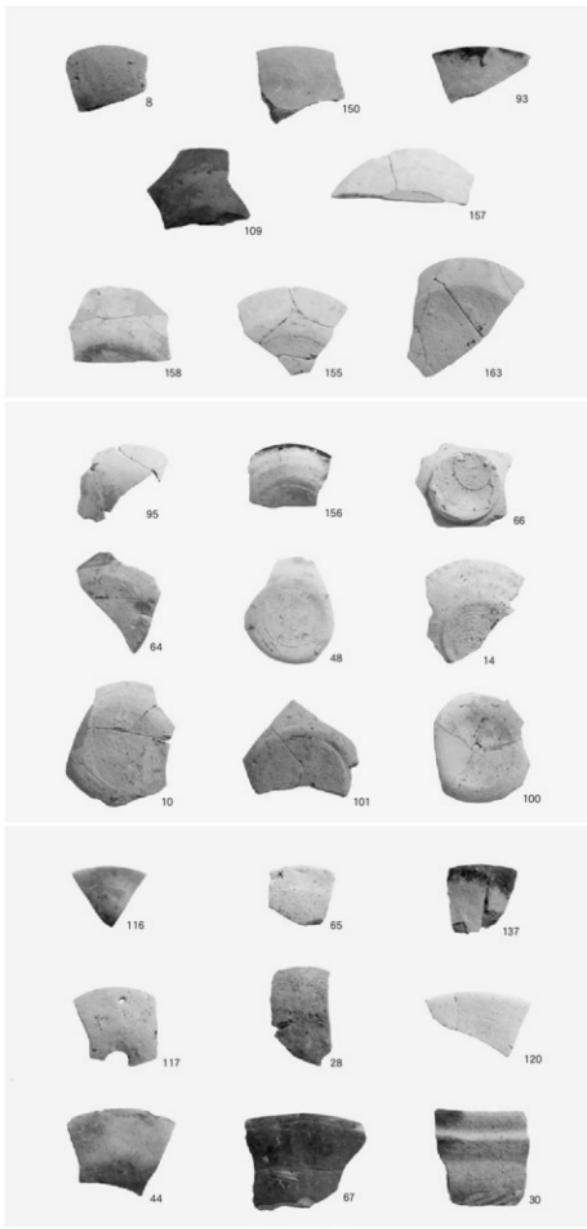


現地説明会風景

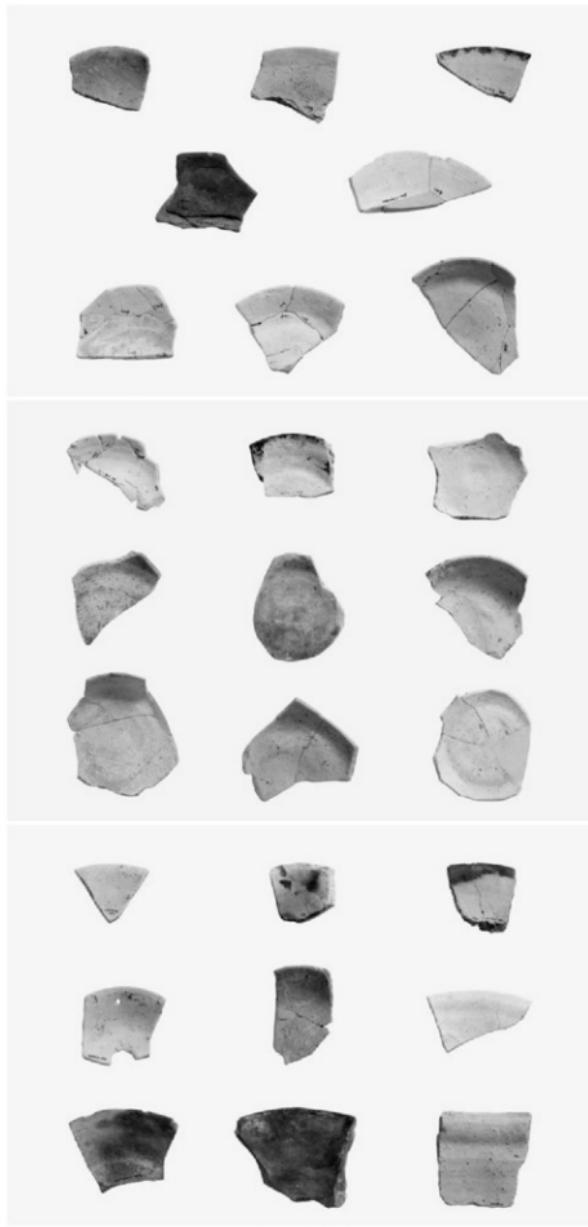
作業風景



出土土器（1）



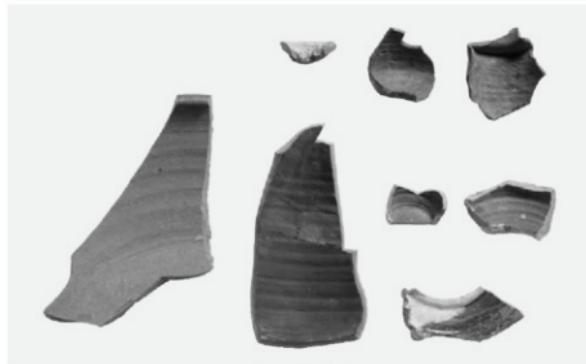
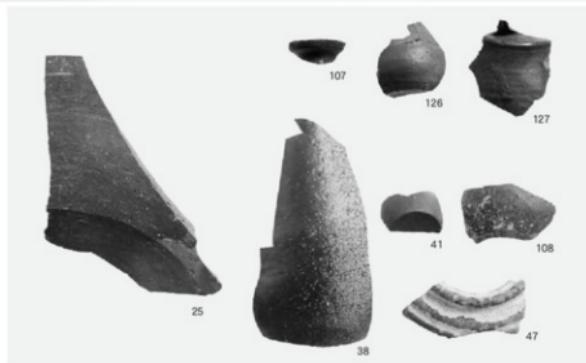
出土土器 (2)



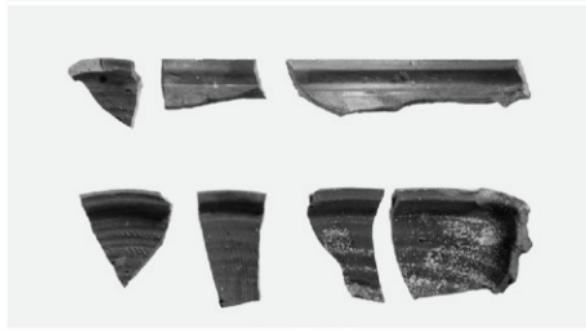
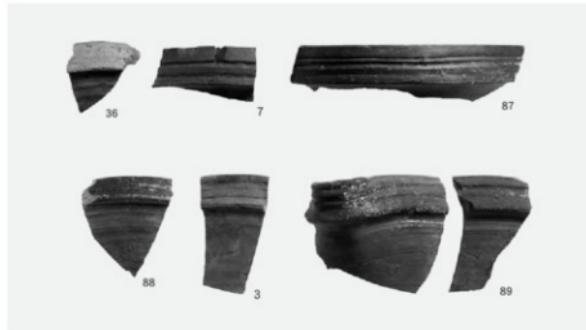
出土土器（3）



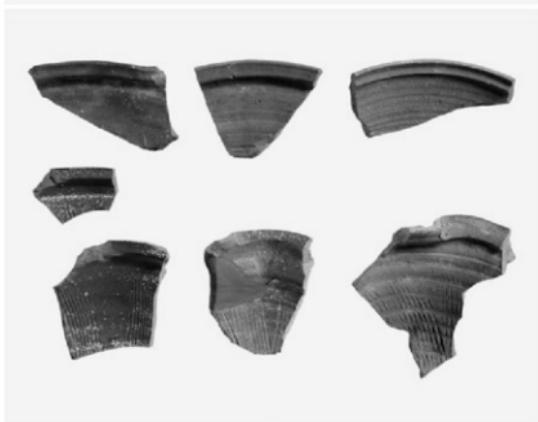
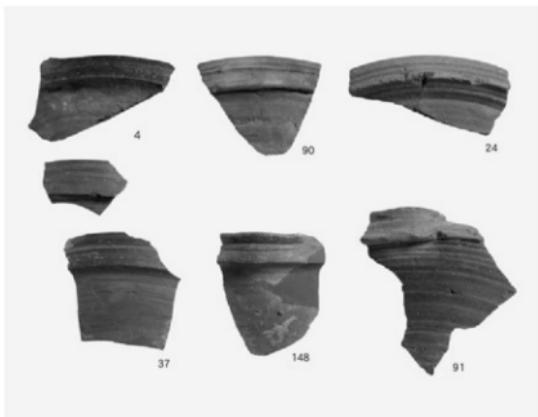
169



出土土器（4）



出土土器（5）



出土土器（6）



56



18



19



46



53



143

出土土器 (7)



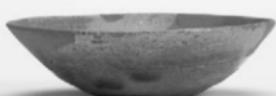
78



77



86

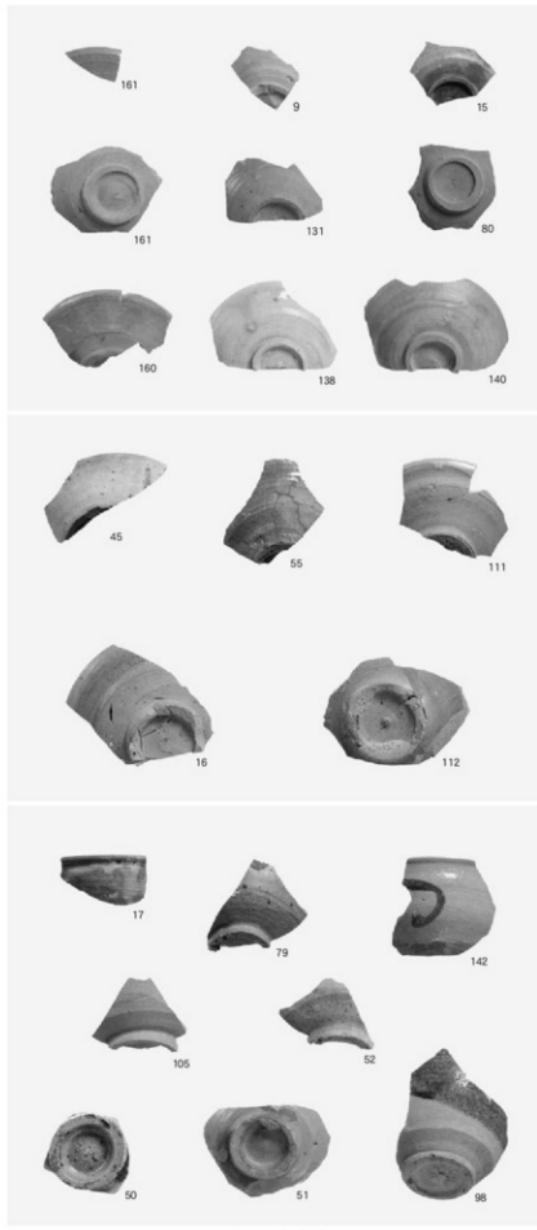


39

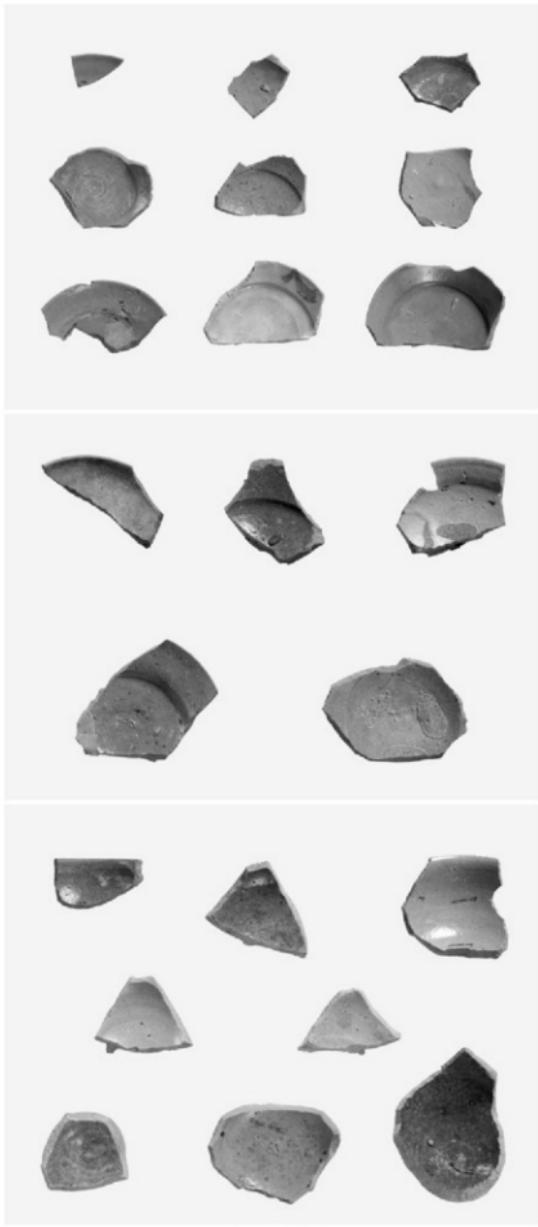


159

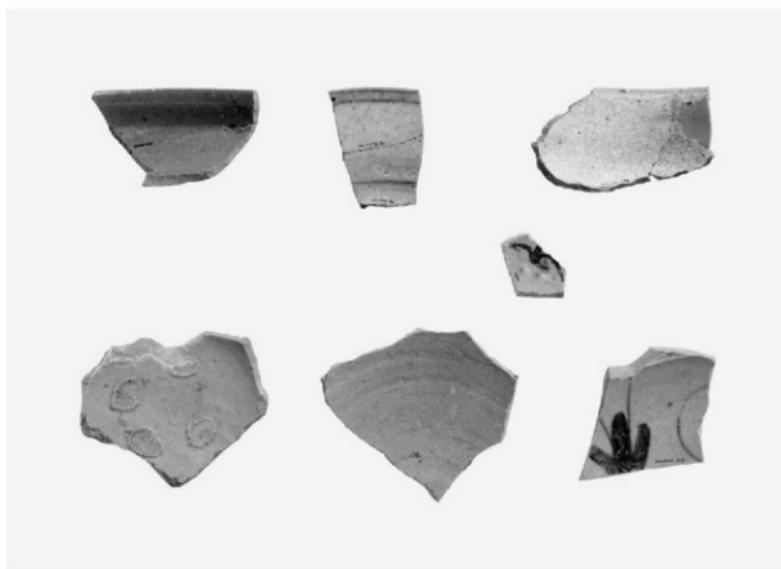
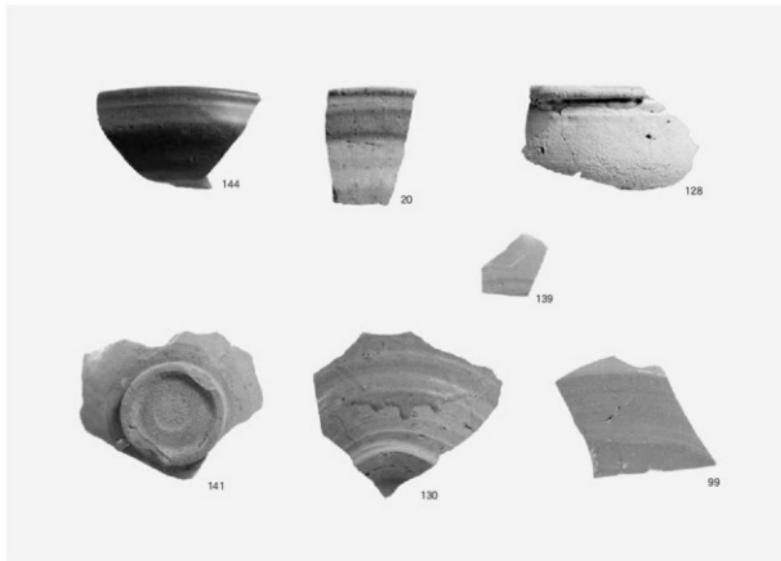
出土土器 (8)



出土土器 (9)



出土土器 (10)



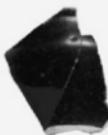
出土土器 (11)



168



125



104

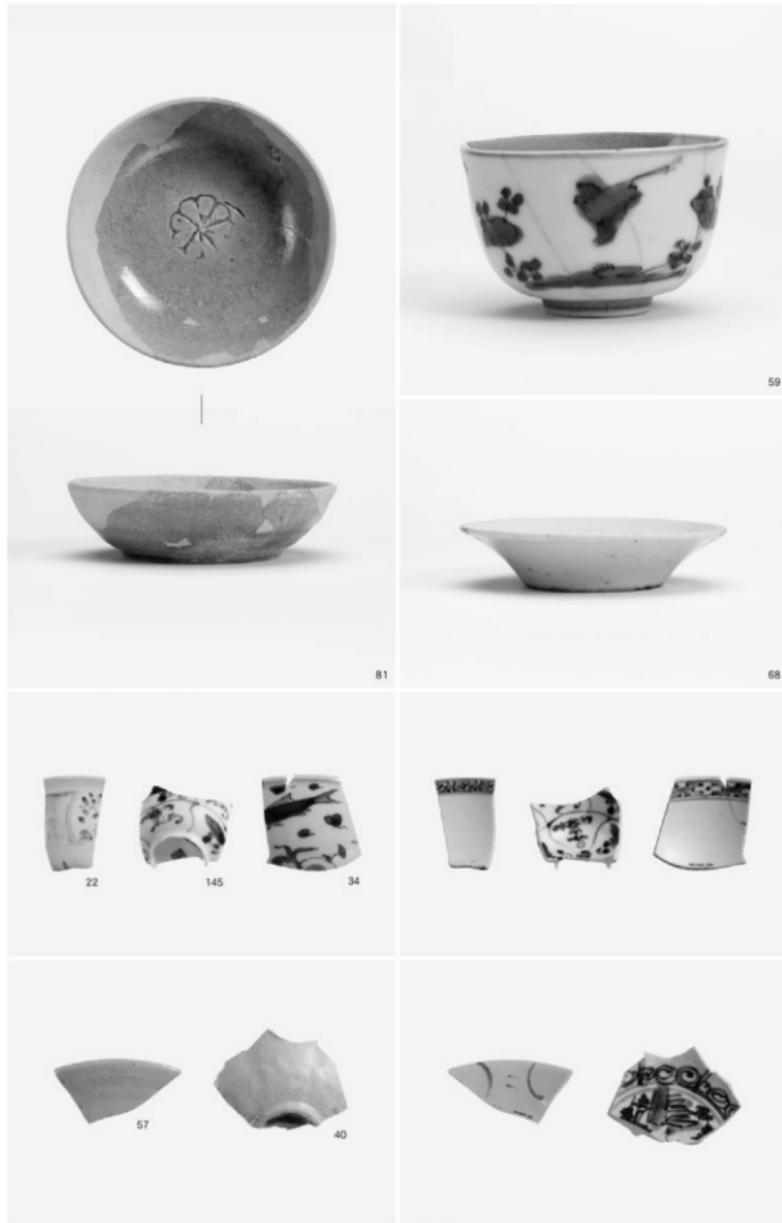


2

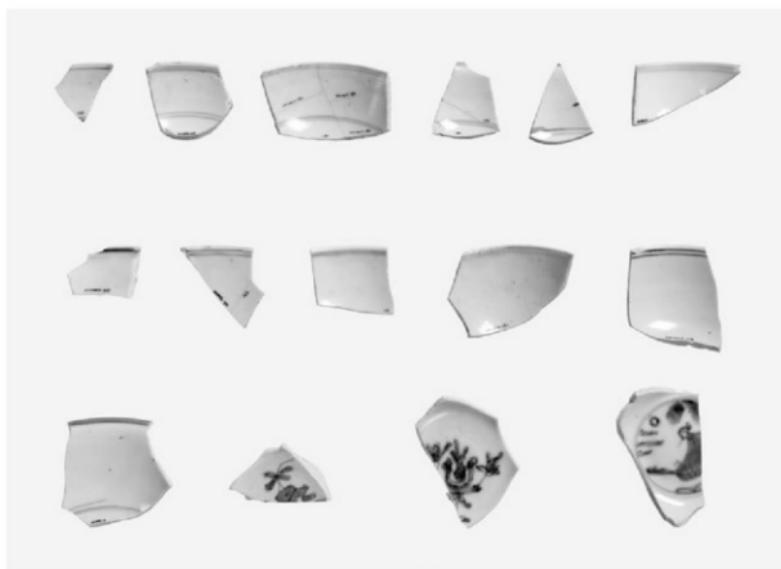
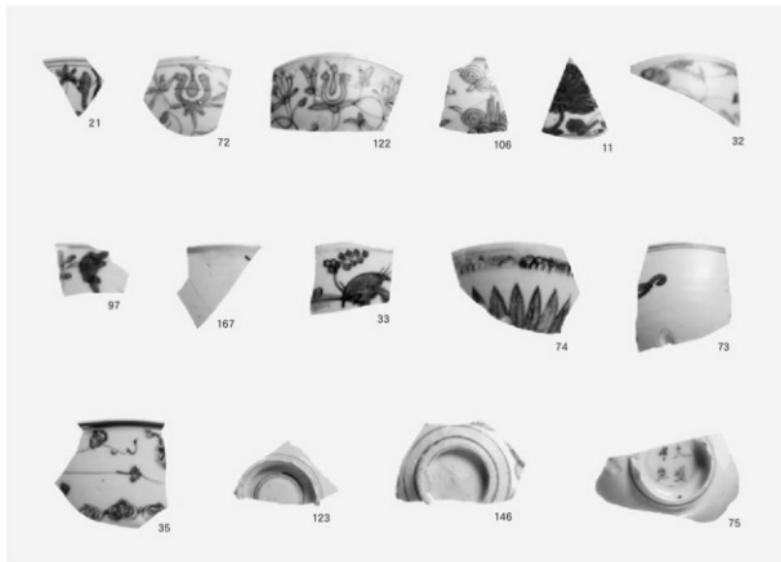


164

出土土器 (12)

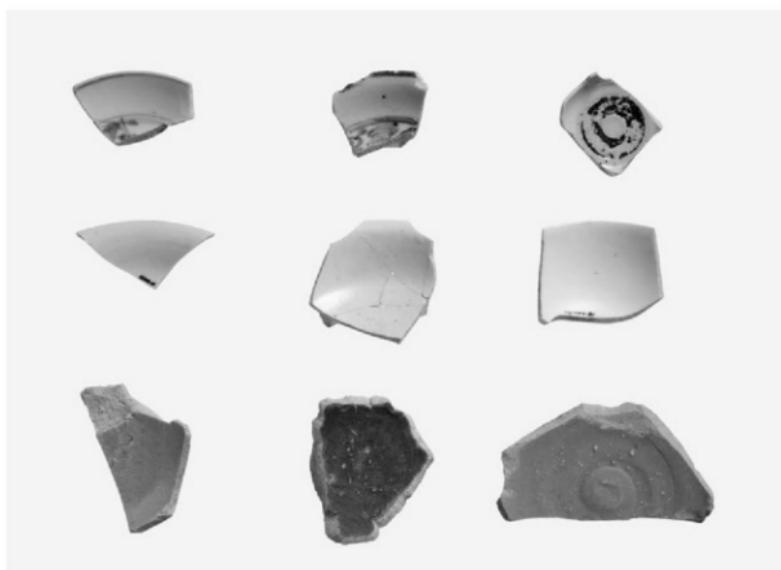
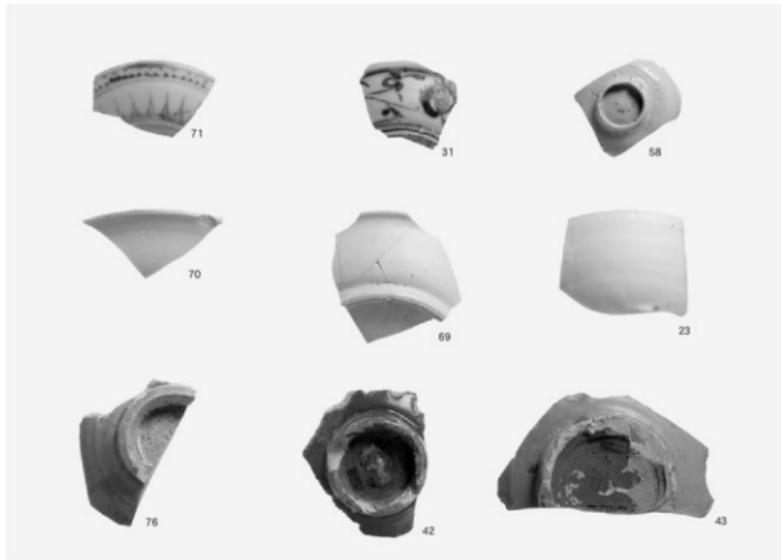


出土土器 (13)

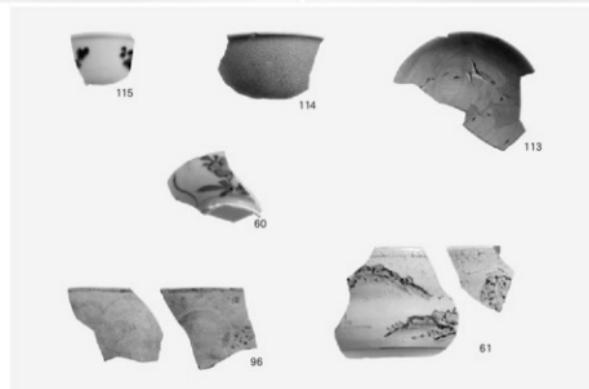


出土土器 (14)

写真図版 60

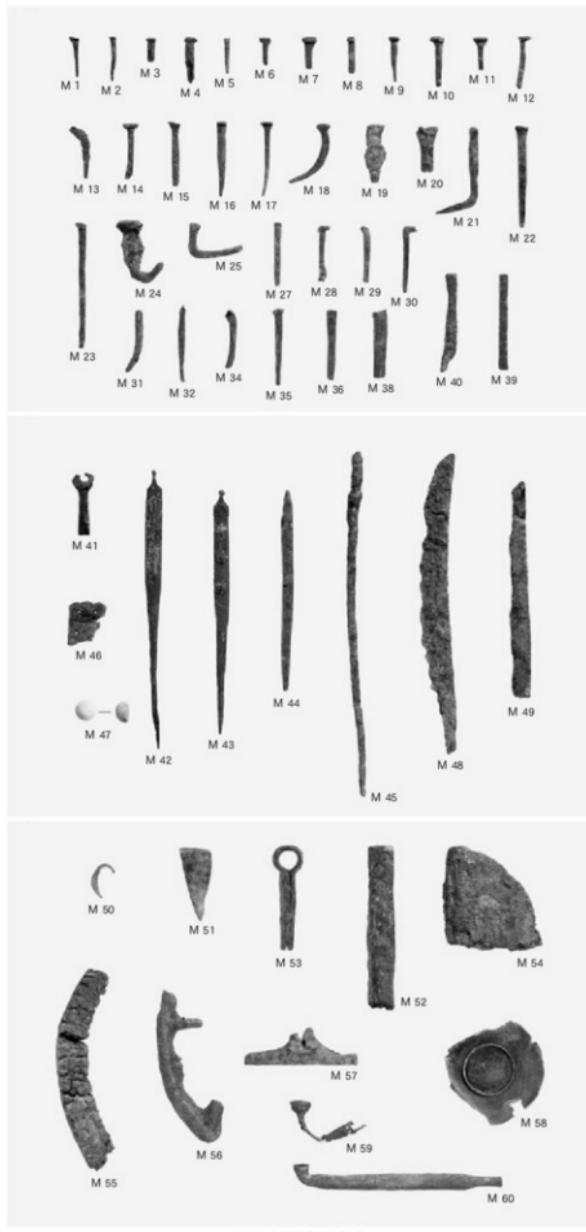


出土土器 (15)



出土土器 (16)・石製品

写真図版 62



出土金属製品（1）



M 65



M 66



M 67



M 68



M 69



M 70



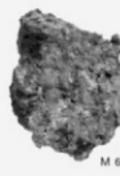
M 71



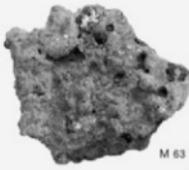
M 72



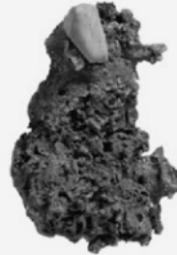
M 61



M 62



M 63



M 64

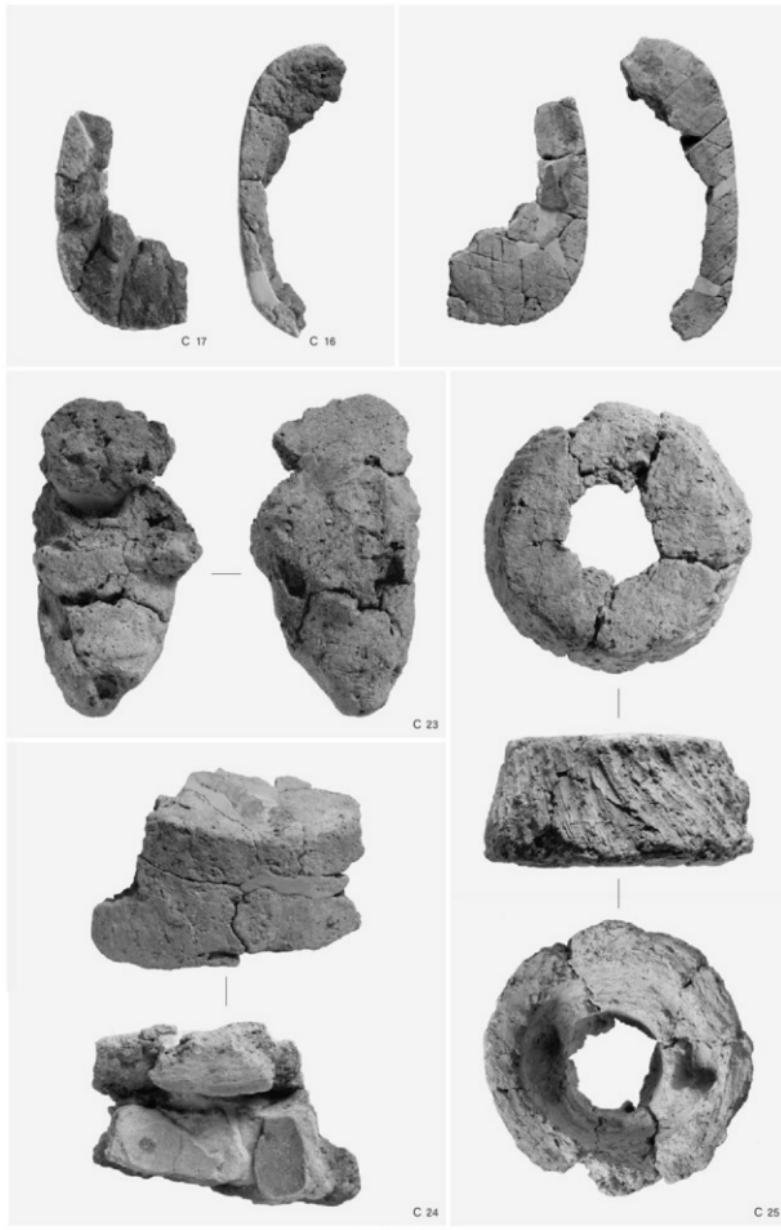


—



C 8

出土金属製品（2）・鋳型（1）



出土鉄型 (2)



C 26

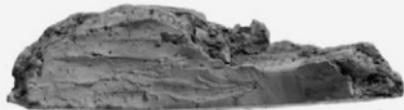
C 27



C 20

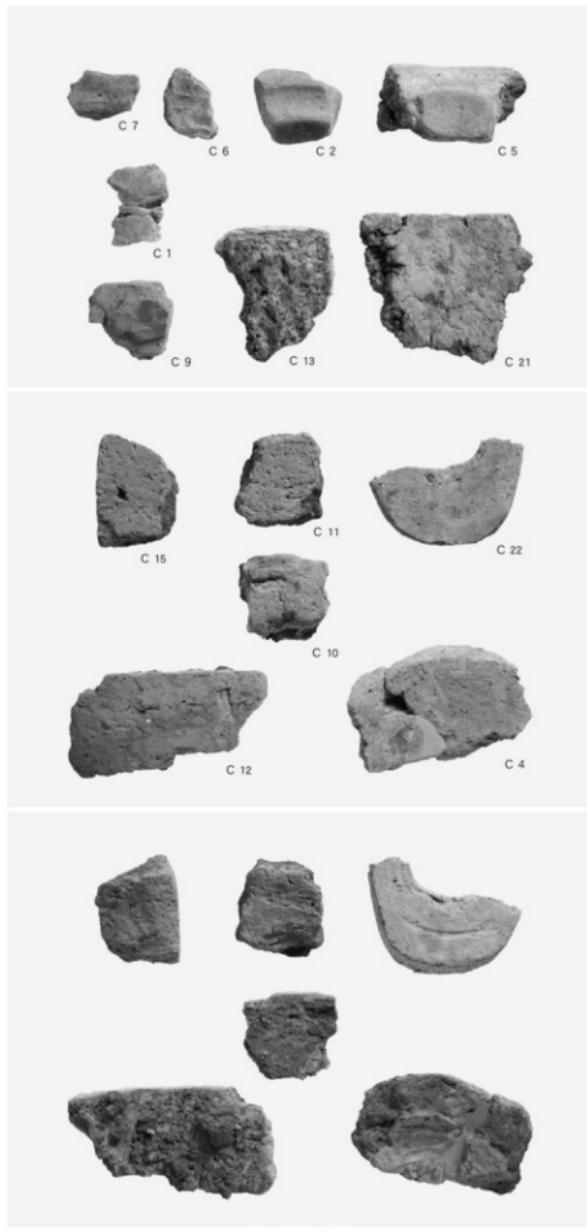


C 19

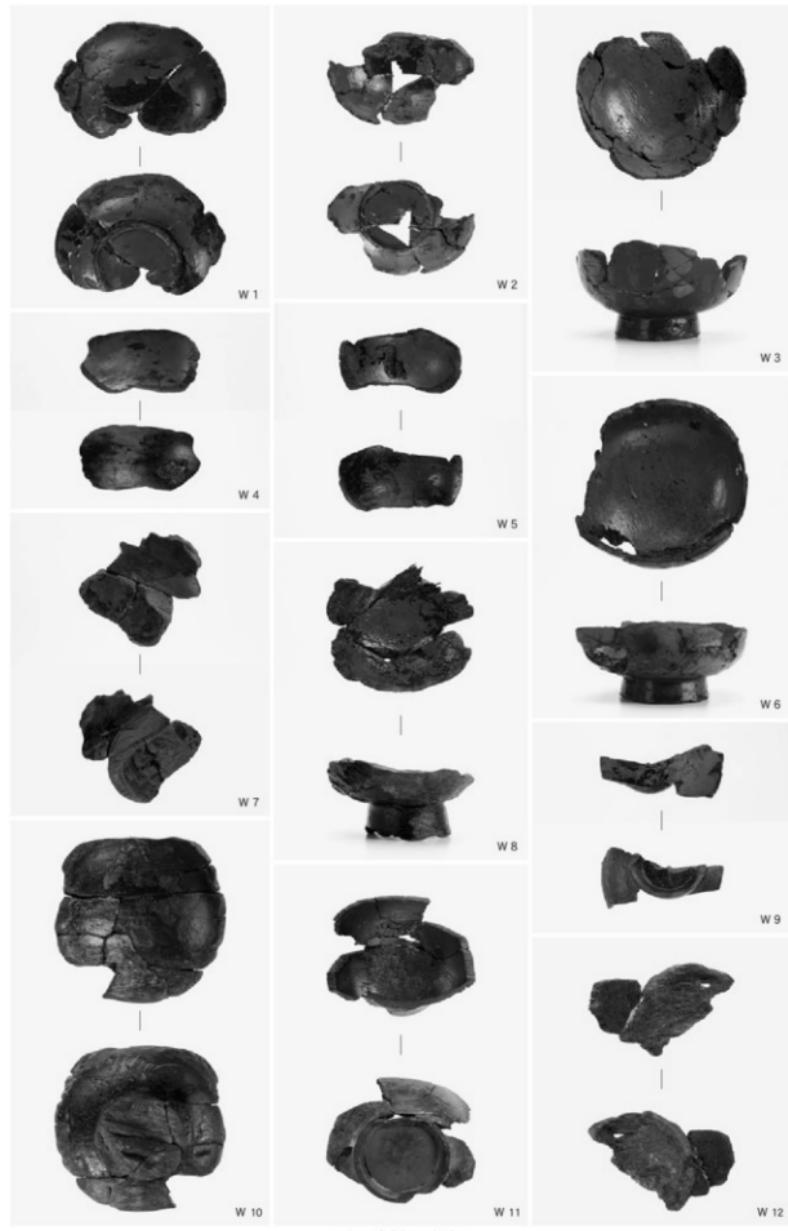


C 14

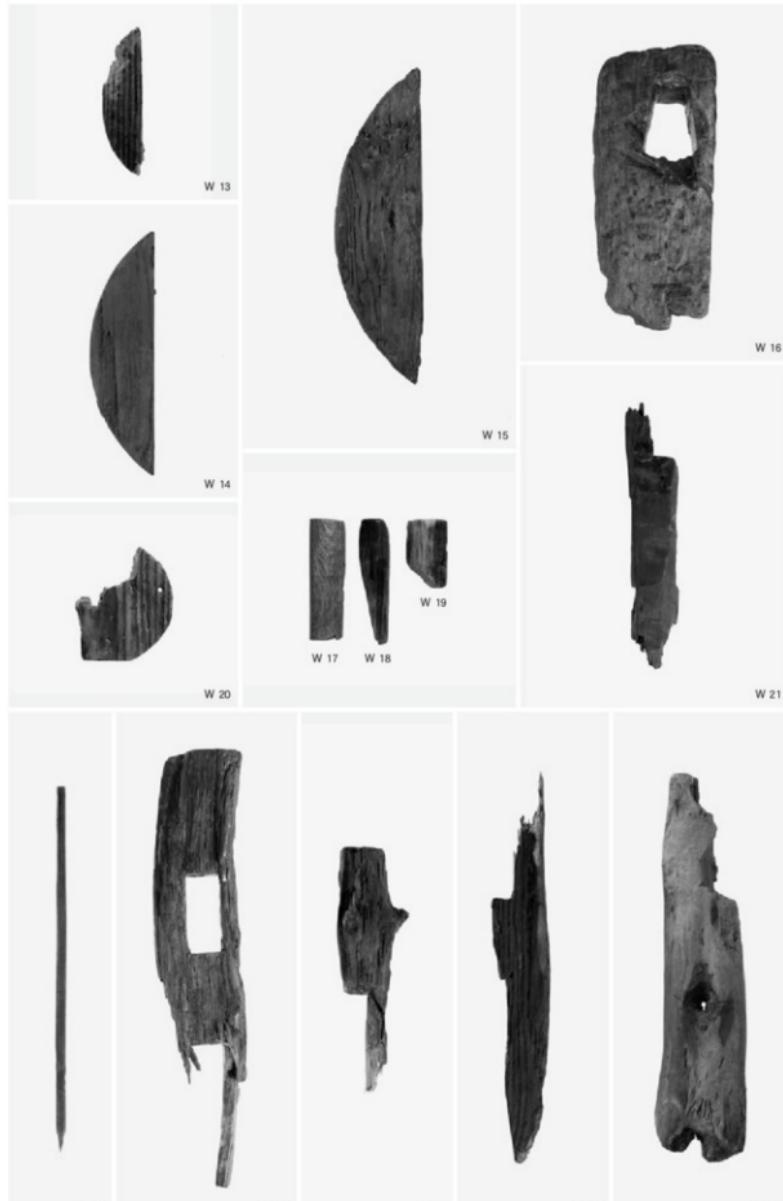
出土鋳型 (3)



出土鉄型 (4)



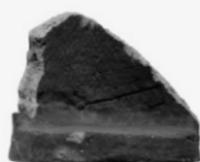
出土木製品（1）



出土木製品（2）



T 1



T 1



T 2



T 2



T 3



T 4

出土軒丸瓦（1）



出土軒瓦（2）



T 9



T 9



T 10



T 11

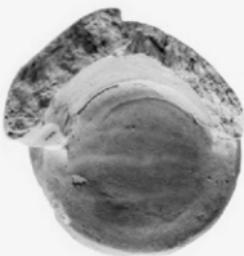


T 12

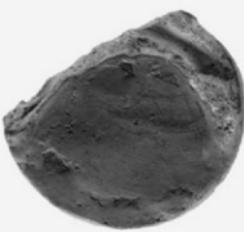
出土軒丸瓦（3）



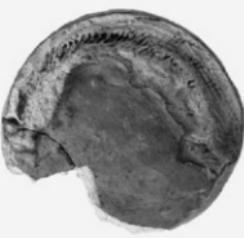
T 13



T 13



T 14



T 15

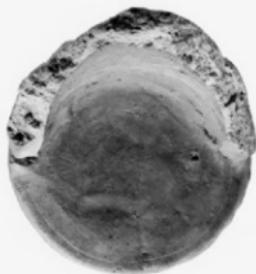
出土軒丸瓦 (4)



T 16



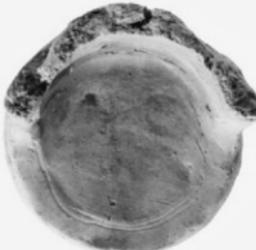
T 17



T 17



T 18

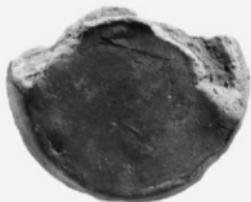


T 18

出土軒丸瓦（5）



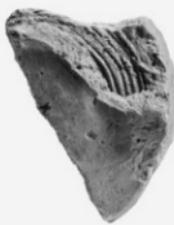
T 19



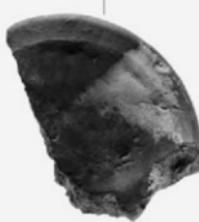
T 20



T 22

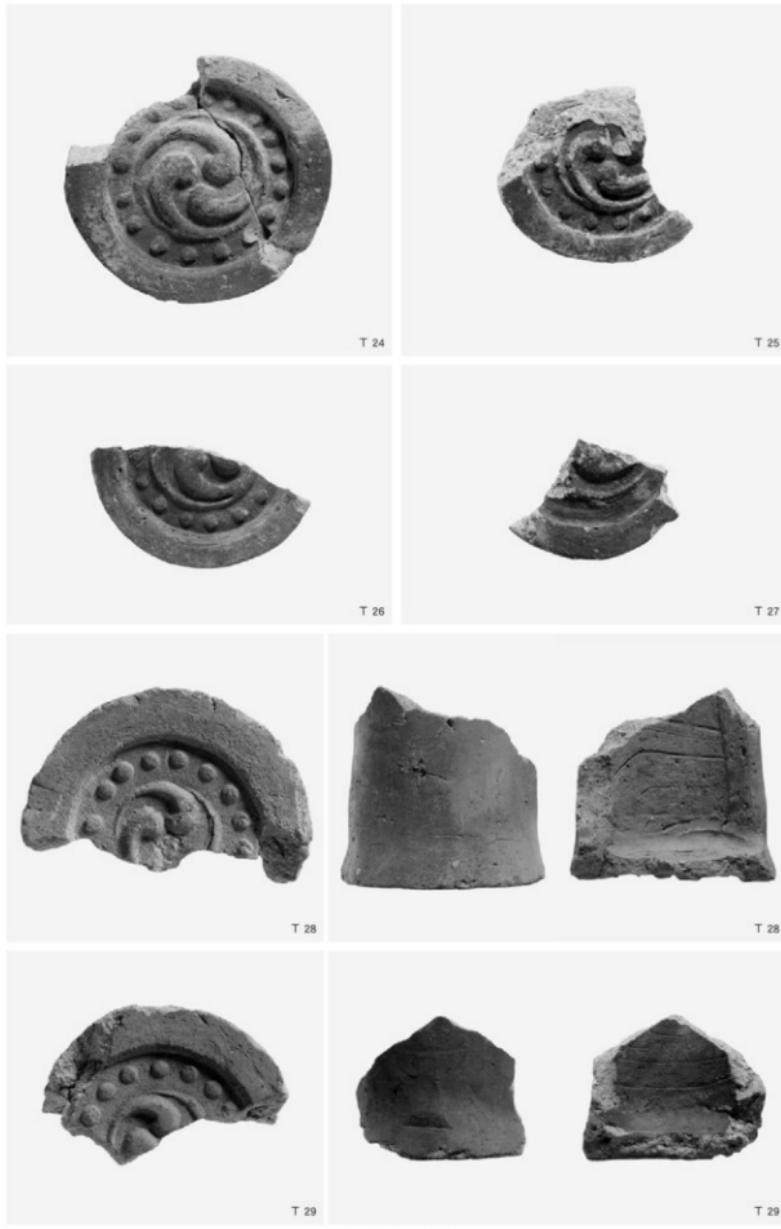


T 21



T 23

出土軒丸瓦 (6)





T 31



T 31

T 30



T 32



T 33

T 34

出土軒丸瓦 (8)



T 35



T 36



T 37



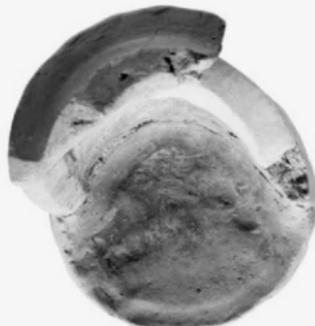
T 38



T 42

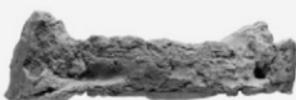


T 42 回面の技術底基



T 42

出土軒丸瓦（9）



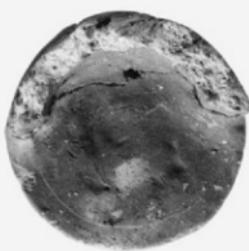
T 39



T 40



T 41



T 45

出土軒瓦 (10)



T 43



T 44



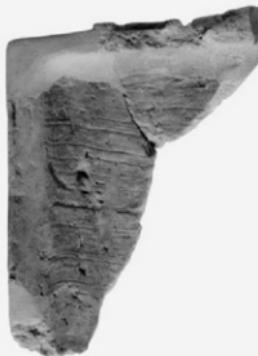
T 46



T 48



T 49



T 47

出土軒丸瓦 (11)





T 58



T 59



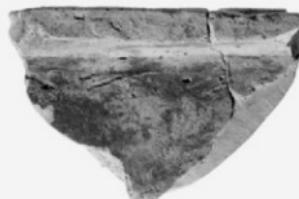
T 60



T 62



T 64



T 61



T 65

出土軒平瓦（1）



T 63

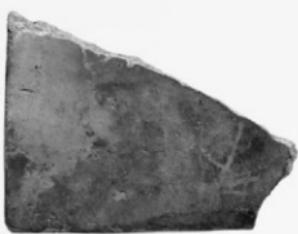


T 66

出土軒平瓦（2）



T 67



T 69

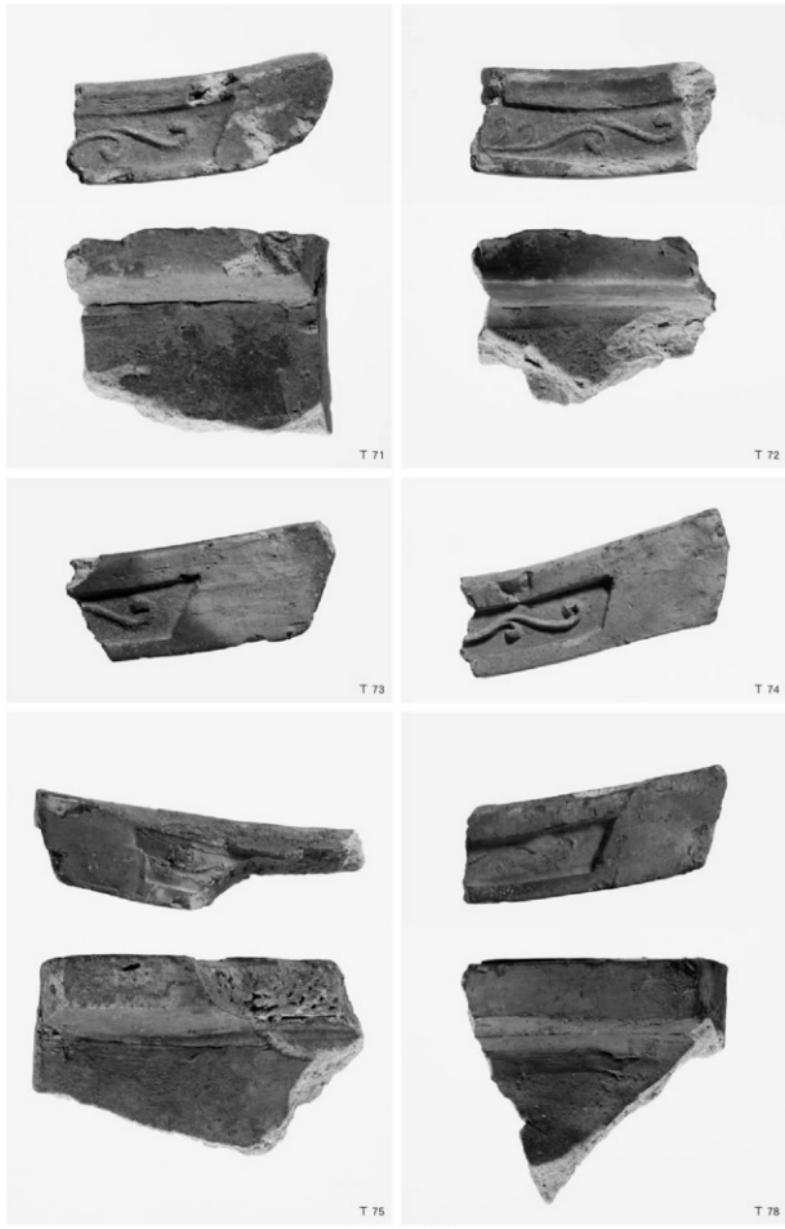


T 68

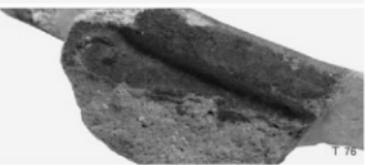


T 70

出土軒平瓦（3）



出土軒平瓦（4）



T 76

T 76



T 77

出土軒平瓦（5）



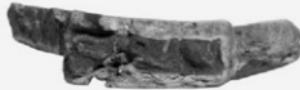
T 79



T 80



T 81

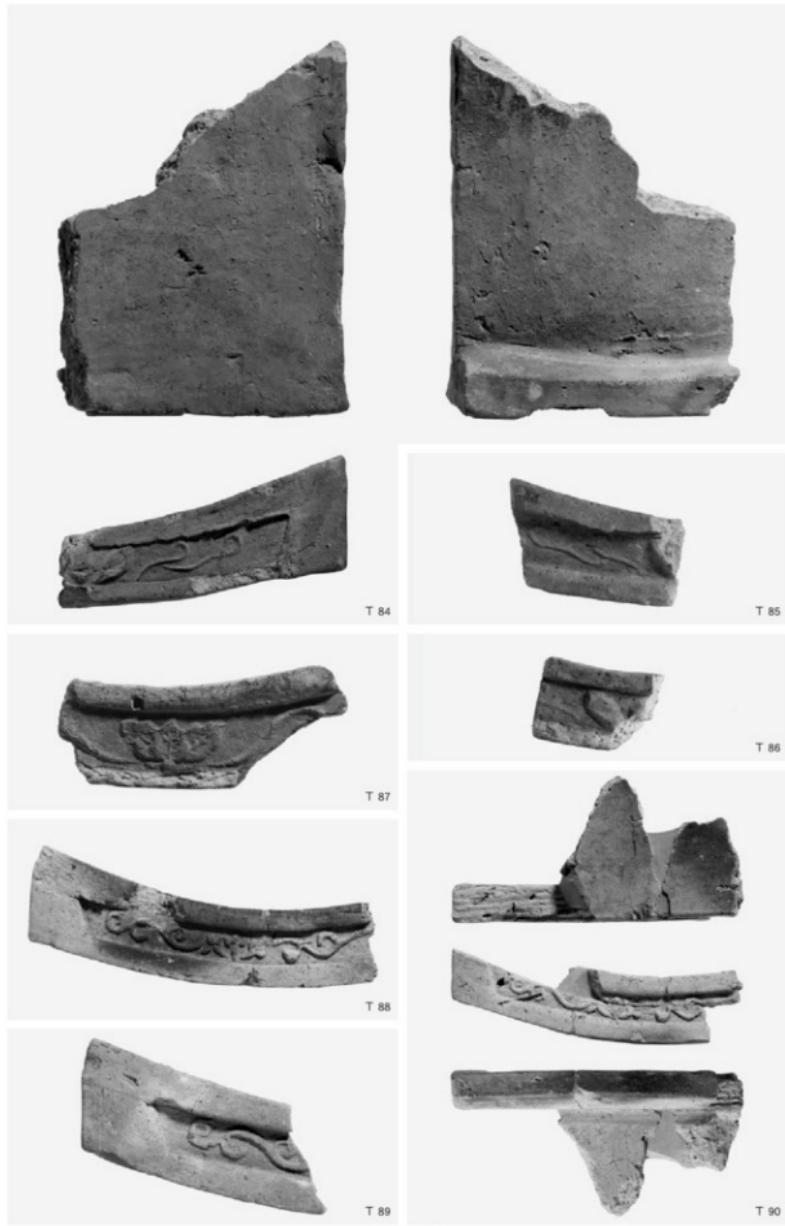


T 82



T 83

出土軒平瓦（6）



出土軒平瓦（7）



T 91



T 93



T 94



T 92



T 95

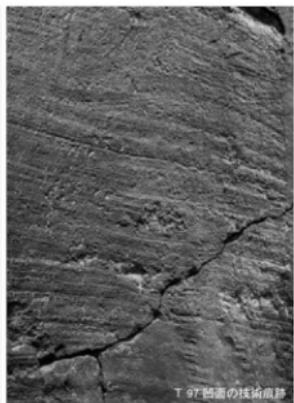


T 96

出土軒平瓦（8）・丸瓦（1）



T 96 舟底の波形模様



T 97

T 97 回面の技術痕跡



T 98

T 98 回面の技術痕跡

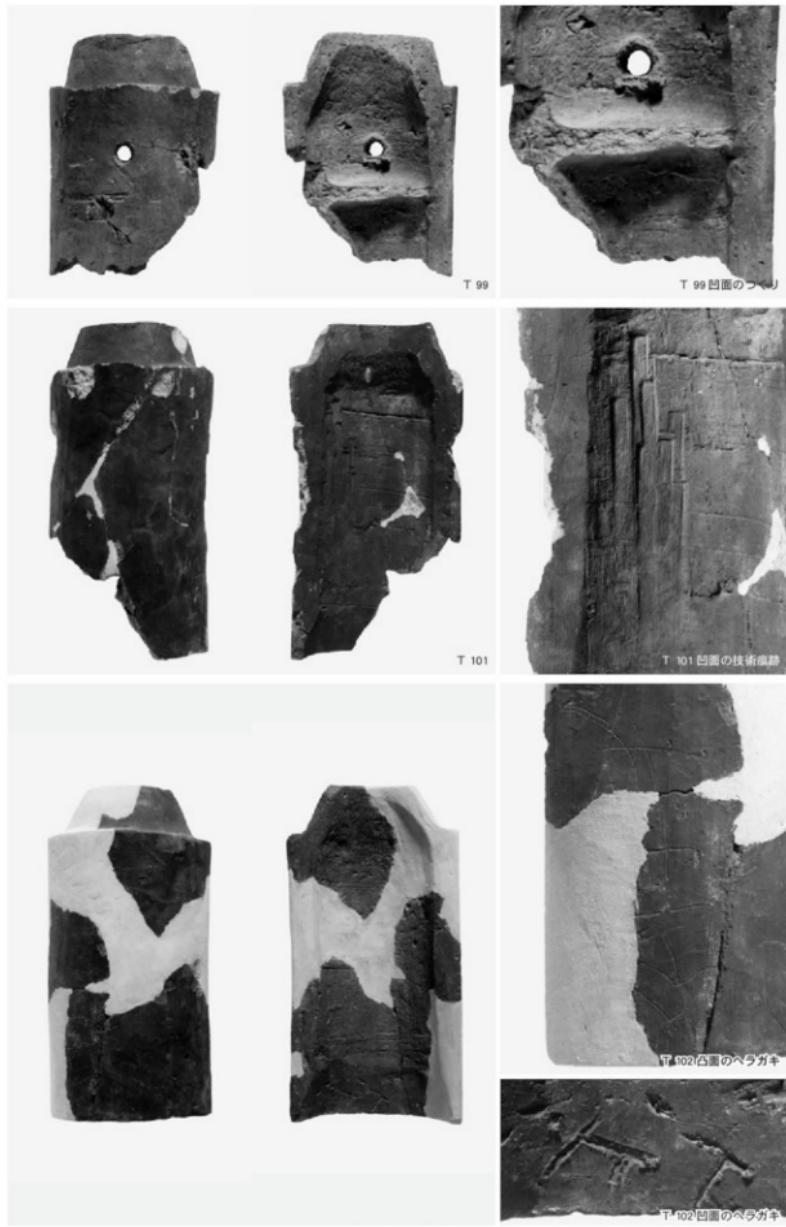


T 100

T 100 回面の技術痕跡

出土丸瓦（2）

写真図版 90





T 103



T 104



T 105



T 106

出土平瓦（1）



T 107

T 107



T 108



T 109



T 110

出土平瓦 (2)



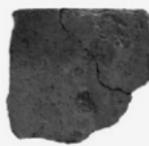
T 111



T 112



T 113



T 115



T 113



T 114



T 116



T 116

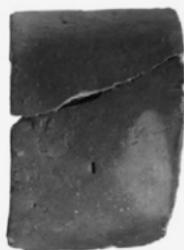


T 115



T 116

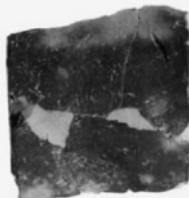
出土平瓦 (3)



T 117

T 118

T 119

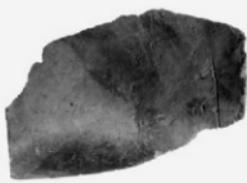


T 120

T 121

T 122

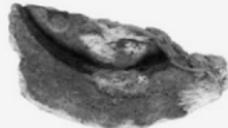
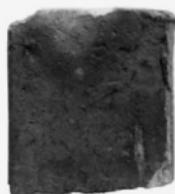
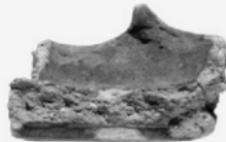
出土面戸瓦（1）



T 123

T 124

T 125



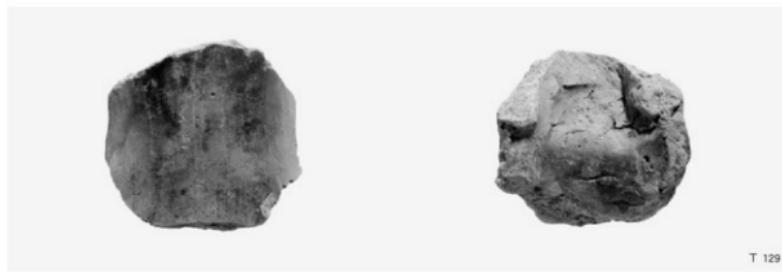
T 126

T 127

出土面戸瓦（2）・熨斗瓦・隅軒丸瓦



T 128



T 129



T 131

T 132

出土鳥衾・鬼瓦（1）

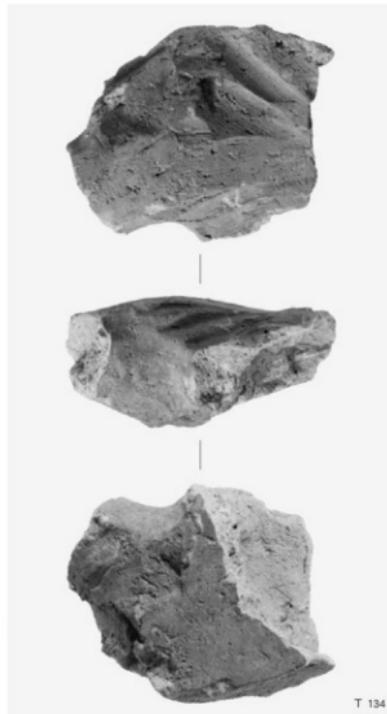


出土鬼瓦（2）

T 130



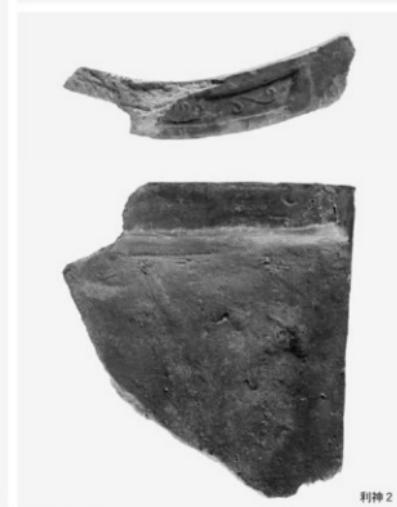
T 133



T 134



利神 1



利神 2

出土鬼瓦（3）・利神城跡表採瓦

報告書抄録

ふりがな	ひらふくごてんやしきあと
書名	平福御殿屋敷跡
副書名	(二) 千種川水系佐用川河川災害復旧助成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第463冊
編著者名	山上 雅弘・垣内 托郎
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
所在地	〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 (兵庫県立考古博物館内) TEL.079-437-5561
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒 650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL.078-362-3784
発行年月日	平成26(2014)年3月31日
資料保管機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒 675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL.079-437-5589

(ふりがな) 所収遺跡名	(ふりがな) 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平福御殿屋敷跡	佐用郡佐用町 平福	285013	490003	35度 2分 44秒	134度 22分 18秒	2010.6.17 (2010.6.16) 2010.6.21 (2010.7.0) 2011.2.23 (2010.2.26) 2011.10.26～2011.11.7 (2011.28) 2012.2.16～2012.3.1 (2011.29) 2012.7.27～2012.8.3 (2012.03) 2012.7.25～2012.12.13 (2012.03)	89.000m ² 800m ² 320m ² 40m ² 192m ² 78m ² 4,257m ²	分布調査 分布調査(庵川) 記録保存調査(庵川) 記録保存調査(庵川) 確認調査(佐用川) 確認調査(佐用川) 記録保存調査(佐用川)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平福御殿屋敷跡	城館	江戸時代	石垣・堀・掘立柱建物・溝	土師器・備前焼・染付・白磁・漆椀・小札・鉄砲玉・笄・瓦	姫路城の支城利持城の山麓御殿屋敷。慶長期の石垣・堀等を検出
要約	平福御殿屋敷跡の郭内と城下を調査した。南土塁の石垣・堀を検出し、郭内部の施設の様相をあきらかにした。この結果、御殿屋敷が利神城跡と同時に築城され、郭内では山城と同じ瓦が武家屋敷に葺かれたことが判明した。一方、城下では掘立柱建物を中心とする屋敷が展開し、外縁部に瓦葺き建物で高級陶磁器を所有する富裕層の居住が確認された。				

兵庫県文化財調査報告 第463冊
佐用郡佐用町

平福御殿屋敷跡

—(二)千種川水系佐用川河川災害復旧助成事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成26(2014)年3月31日 発行

編集 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発行 兵庫県教育委員会
〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印刷 野崎印刷紙業株式会社
〒606-8151 京都市北区小山下総町54-5
